

【スカルな野郎はナルシスト！】

めいでん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

知ってた？ スカル団にはリーダー格が三人いるんだって。

そのうちの一人がオボロ。最近カミソリ負けが気になってきた、自称ゴージャスに美しい人物（26歳・男性）。

けど奴が弟子をとったらしい。名前はリジー。

自己中ナルシスト野郎な師匠。マセていて銭ゲバな弟子二号。

ただこの二人、ワタシが見る限りちよつとこじらせてるみたいでさあ！

※アニメと原作ゲームという異なる世界観を扱っているため規約変更に伴いクロスオーバータグを追加いたしました。（2017／8／22）

目次

第一話	【くれないのミツ】	1
第二話	【いかがわしき屋敷】	18
第三話	【エーテルパラダイス】	33
第四話	【おまもりこぼん】	47
第五話	【メガやす跡地】	63
第六話	【ポロツクキット】	79
第七話	【カントイシテイ】	92
第八話	【ダイナミックフルフレーム】	107
第九話	【夢のはざま】	122
第十話	【ウツロイド】	136
第十一話	【カインアシテイ】	151
第十二話	【マルチバトル】	169
第十三話	【ふしぎなおくりもの】	185
第十四話	【きずなへんげ】	203
第十五話	【アローラ】	225
第十六話	【フラフラダンス】	240
第十七話	【がんばりーリエ】	265
第十八話	【ヤドン】	283
第十九話	【トリプルバトル】	302

## 第一話【くれないのミツ】

ここはアローラ。常夏の国。

年がら年中日差しが降り注ぐこの地方は、全てのものが活気付いている。人や自然はもちろん、ポケモン達もだ。

それはここハウオリシティでも同じことだった。

観光業が盛んなこの島は、どこもかしこもごった返している。

特にブティックともなれば尚更のこと。

平日の真つ昼間から、主婦達がこぞつて世間話をしながら買い物に來ていた。

そんな店内で、唯一ぽつかりと空いているスペースがあった。そこには長身長髪の男がただ一人佇んでいる。

「ああ、今日こそ上着を買わなくてはならない！ けれど、ボクの新しいカラダに見合う服なんてアローラなんかにはありやしない」

あれこれ服を見ながら、上半身裸の男が朗々と語っている。彼の話し相手。それは目の前にある鏡だ。

舞台にあがる役者かというくらい芝居じみた大きな声で。

「やっぱり何も着ない方がいいんじゃないかな。あのタンクトップってかなりダサくないかい？」

それにボクの細身ながら、程よく筋肉のついたマーベラスで美しいカラダを見ていた方が、みんなも気持ちがいいと思うし」

そう言うとは彼は鏡の前でポーズを取り始めた。

二つにまとめた赤色の髪をかきあげたり、自分の腹筋を強調してみたり、黒いズボンの腰部分に縫い付けている五つのリボンを見せつけるようにしたり。

ボクってなんて美しいんだろね、と呟きながら、自撮りを始める始末。今度はそれを彼の仲間にメールで送りつけました。しかも、一

斉送信で。

全くもって迷惑きわまりない男である。

そんな彼を店員はおっかなびつくり見守っていた。

お客様は神様だとは言うが、こんな変態をいつまでも店におきたくはない。

現に、彼は買い物に来た他の客に遠巻きにされていた。

この男が来るときはいつもそうだ。

——頼む。売上げが下がるから来ないでくれ！

そう店員は願うも、彼は何故か頻繁にこの店に現れていた。ちなみに彼が通うようになってから店の売上げは右肩下がりだ。完全に疫病神である。

一時間後、男はペンダントのチェーンを買った。

あれだけ言っていた上着は買わずに、なぜかレジ横のチェーンを即買いだ。

「銀色のチェーン欲しかったんだよねえ。ついこの間切れちゃったんだけどさ。やっぱりペンダントには、品のある銀色。そう思わないかい？」

会計をしながら鼻高々に語る彼は、はつきり言っただけでかなりウザい。付き合わされた店員もひきつり笑いが止まらないという有様だった。

鼻歌を歌いながら店を出た彼は、先ほど買ったチェーンを取り出した。

それを持っていたペンダントトップに通すとそのまま身につける。太陽に照らされた銀色のスカルペンダントは、きらきらと光り輝い

ていた。

また上着を買えなかつたなあ、と彼はひとりごちる。だが別にそれを後悔している様子は全くない。

「プルメリちゃんには怒られそうだけど、仕方がない。ボクが美しすぎるのがいけないんだからね」

すっかり開き直った彼は、再び前髪をかきあげてドヤ顔を浮かべた。

彼の名前はオボロ。泣く子も黙るヤンキー集団、スカル団の幹部の一人。そしてこの物語の主人公だ。

さらに言うと、自分が良いと思つたならば絶対にそれが良いものだと信じている、根っからの自己中ナルシスト野郎だった。

## 第一話 【くれないのミツ】

買い物を終えたオボロは海で自慢のポケモン達と戯れていた。もちろん自慢のポケモンのうちの一匹、手持ちのアズマオウに乗って。アローラ地方はライドポケモン以外 “なみのり” は禁止されてるだろ、と思つた方。あなたは正しい。

だが、そんなものオボロにとっては些細なことにすぎなかつた。なにせ恐れさせてなんぼのチンピラ集団こと、スカル団の幹部。加えて彼は極度の自己中だ。

『とつても美しいボクのポケモン達を、華麗に見せつけることができないう法律なんて。そんなの無意味だと思わないかい？』

そう断言し、パトロールをしていた警察とポケモンバトルを繰り広

げたのが数日前。

彼にとつては法律などあつてないようなものだった。

アズマオウと共にゆらゆらと。気がつけば、もうビーチサイドは遙か遠くだ。

地図を見て確認すると、どうやらメレメレ島の近くまで来たらしい。

オボロはすごいつりぎおを取り出すと、思いつ切り振りかぶってルアーを投げた。

ちなみに言うと、アローラ地方では決まった場所以外での釣りも禁じられている。

だがそれもオボロは知らぬ存ぜぬを突き通していた。

突然、ウキがびくびくと揺れたかと思うと一気に竿ごと引っ張られる。

——かかったな！

オボロが素早くリールを巻けば、浮かび上がったのはサニーゴだ。

「サニーゴか。懐かしい気分になるしボクは好きだよ君のこと。

可愛い可愛いサニーゴちゃん。一戦、ボクと付き合ってもらえるかい？」

そう言うとオボロは腰に手を伸ばす。ゴージャスボールを手に取ると、それにキスをしてから開閉スイッチを彼は押した。

「さあ出番だよ。マイ・スウィーティー、ミロカロス！」

派手なエフェクトと共に登場したのはミロカロス。

彼女の瞳はくりくりとしていて、毛並みはつやつやと。しなやかな

体軀はまるで天鷲絨が揺れているかのようだ。

美しいと評判のミロカロスだが、このミロカロスは少なくとも他のものより数段美しい。観る者に有無を言わせぬ気品を彼女は纏っていた。

両者にらみ合う中で先に動いたのはサニーゴだった。相手のサニーゴはぐぐつと体をそらすと、一気にツノを噴射させる。

“ミサイルばり” だ！

串刺にせんとばかりに凄まじいスピードで針の大群は襲いかかる。そんな状況にも関わず、彼女とトレーナーは優雅に佇んでいた。

「さあミロカロス、サニーゴちゃんに見せておいで。

疲れを知らぬ駿馬のように軽やかに。穢れを知らぬ乙女のように可憐に避ける、キミの姿を！」

瞬間、ミロカロスは目にも留まらぬ速さで針の数々を避けていく。針の穴を縫うような正確さで、大層なめらかに。

その動きを見てオボロはほほえむと、ひときわ大きな声をあげて彼女に言った。

「ミロカロス！ “うずしお” からの “れいとうビーム” で  
フィニッシュを決めてあげるんだ！」

オボロの声を聞いた彼女は海面に渦を創り出す。それはまるで竜巻のよう。

激しく回転する水の檻に閉じこめられたサニーゴは、なすすべもない。ただ黙ってミロカロスが打ち出す “れいとうビーム” を受けるのみだった。

“れいとうビーム” に当てられた水の塊は瞬時に凍っていく。たとえば対象が竜巻の形をしていようが、それは変わらない。

全ての水が時間を止めたかと思うと、崩壊。



砕け散った氷のカケラは太陽の光を浴びて乱反射し、なんとも美しい輝きを見せている。

それは、海上に佇むミロカロスの美しさを一層際立たせるものだった。

「ああ、美しい！ 美しいよ！ やっぱりキミは、バトルの最中が一番輝いている……！」

ミロカロスにうつとりと見惚れるオボロは、やっぱりボクのポケモン達は最高だね、とご満悦。戦闘不能に導いたサニーゴを放置して、自慢のポケモン達にポケリフレをし始めた。

手持ちは深く愛するが彼女達以外はどうでもいい。

そう考える彼にとって、傷だらけで無残な姿をさらすサニーゴはがらくたも同然だった。

——どうせヒドイデがやって来るんだ。このサニーゴは食べられてしまうだろうさ。数分もしないうちにね。

傷つき倒れるサニーゴから目をそらすと、オボロはアズマオウとミロカロスに笑いかけた。

彼の頭にサニーゴのことはもうどこにもない。とるに足らない出来事としてすっかり忘れ去っていた。

オボロがポケマメを与えると彼女達はとても喜んだ。

よっぼど好きなのだろう。もつと欲しいと言わんばかりに、二匹は体をくねらせている。

「これ以上食べるとコンディションが悪くなっちゃうからダメだよ」

そう呟くと、彼はあやすように二匹を撫でた。

オボロが空を見上げると、キャモメ達の群れが鳴きながら飛んでいる。太陽は西に傾き、赤く赤く全てを包み込んでいた。

「ねえアズマオウ、ミロカロス。キミ達は覚えているかい？ かつてボク達が立っていた、あのステージを」

二匹のポケモンに触れながら優しく語る彼の姿。それは、まるで寝付けない子供に童話でも語るかのようだ。

「観客の熱気を、立ちほだかるライバルを、ボク達に当たっていたスポットライトを」

二匹のポケモンは答えない。ただただ静かに、黙って彼に撫でられるばかりだった。

しばらく経ってオボロはウラウラ島に向かった。スカル団のボスから呼び出されたからだ。

あまり指示に従わず自由行動ばかりするオボロ。そんな彼にどうやらボスはおかんむりのようだ。

「やれやれ。エネココアばかり飲むからキレやすくなるのさ。鉄分だけじゃなくて、カルシウムも取ればいいのにね」

文句を言いながらも上の命令には従わなくてはならない。それが中間管理職の辛いところだ、とオボロは思った。

彼が言うことを聞く人間はアローラには二人だけ。同じくスカル団に属する、幹部のプルメリ。そして、ボスのグズマだけだった。

もつともオボロは自己中なのでたまにしか従わなかったが。

日差しが照る中、アズマオウとオボロはゆらゆらと波に揺られている。

ライドポケモンは使わない。アローラの民ではない彼の肌には合わないからだ。

彼の中では旅と言えばマツハ自転車だったし、〃なみのり〃 だったし、〃そらをとぶ〃 だった。

とは言え、彼はひこうタイプのポケモンを持ってはいない。

——多少どこかへ行くのが遅くなつたとしてもさ。しょうがないよね。だって、〃なみのり〃の方がおっとりとして優雅だし。やっぱりエレガントな美しいボクには、みずタイプの彼女達がよく似合う。

プルメリが知つたらめまいを起こし、グズマが知つたら即座にキレル。そんなようなことを考えていたが、オボロはいかんせん自由人。彼の中では全部が全部、美しさを中心に回っていた。

15番水道にたどり着いた彼はゆっくりと岸に降りた。どんな動作もゆつたりと。それこそが美しさの秘訣だと、彼は信じているからだ。

「ありがとう、マイ・スウィーティー」

そう言うと、彼はアズマオウをボールに戻した。

ウラウラの花園を通ってポータウンへ向かう。と見せかけて彼はある場所に立ち寄った。ウラウラの花園の手前にあるポケモンセンターだ。

彼はポケモンセンターでポケモンを回復しに来た、というわけではなかった。横にあるカフェスペースに並ぶと、カバンの中からポッドを取り出して一言。

「おじさん。これにいつもの入れておくれよ」

マスターは少し顔をしかめてから、またかよ、と呟いた。彼はポツドを受け取ると、黙ってエネココアを注ぎ始める。

エネココアはグズマの好物だ。つまり、オボロはアジトによる前にご機嫌取りに走ったのである。

ポツドいっぱいの本格エネココアを渡せばグズマの機嫌も良くなってくれるだろう。そういう算段だった。

「お客さん、相変わらずハダカで寒くないんですか？」

「寒さなんて！　ボクの溢れ出る美しさと寒さをはかりにかけたら、どっちが残ると思うかい？」

「寒さですね」

「もちろん美しさだろう？　なんてったって、ボクは月の神ルナアラのごとく美しいからね」

マスターの話も聞かずに一人朗々と語り始めるオボロ。

彼の口からは、今日はペンダントのチェーンを新調したのさ！　と聞いてもいない話まで飛び出してくる。

意気揚々と喋るオボロを見て、こりや当分解放されないな、とマスターはため息をついた。

こうなったら彼は止まらない。このナルシストは自分語りが大好きなのだ。

オボロはマシンガンのように口を回し続ける。熱がこもったその声は早くて流暢で、一度もつかえることはない。

ほんの少しマシンガンと違うところは、彼は弾切れを起こさないということだ。

マスターにとっては不幸なことに、弾づまりとも無縁だった。

ちなみに現時点でもオボロとグズマの待ち合わせ時間はとつくとつに過ぎている。

グズマが彼に怒るのは半ば確定した事実だった。

カフェスペースを出たオボロは、ゆっくりとウラウラの花園を進んでいた。

彼がカフェスペースを訪れてから早二時間が経過している。静かなこの花園で、たまに聞こえてくるのはアリアドスの鳴き声だろう。

辺りはすっかり日が暮れてもう真つ暗だ。

しかしオボロが急ぐ気配はない。先ほども言ったが、何ごとも急がずにやるというのが彼の信条だからだ。

紅い花が咲き乱れるこの場所はむしポケモンの聖地。燃えるような赤に、萌えるような緑のコントラストはオボロのお気に入りだ。

一面に広がる花畑はなんとも鮮やかだ。

空気を吸うとほのかに香るはくれないのミツ。ひんやりと冷たい闇夜の中、花の匂いは心地よく鼻腔をくすぐった。

残酷なまでに闇に閉ざされた花畑は、ボクの目を楽しませてくれる。

その匂いも、ボクの鼻を楽しませてくれる。

花につられてやって来るポケモン達の鳴き声も、ボクの耳を楽しませてくれる。

だがしかし。うるさく騒ぐ人間は、この場所にはちつともふさわしくない。

「キミたち一体何をやってるんだい？ こんなところでたむろしてさ」とオボロは声をかけた。

「このボクが通るんだ。邪魔だし、何よりうるさいよ」

「このスカル団のやつらに、あたしが集めたくないのミツをとられたのよ！」

少女が指差したのは、向かい合っていた男達。

彼らが身につけていたのは覆面に黒いバンダナ。ところどころ白模様があしらわれた、黒のタンクトップに黒いズボンを履いている。驚きからだろうか。彼らは、オボロを見て目をまん丸に見開いていた。

なるほど。確かにどこからどう見てもスカル団だ。

「ふうん。事情は分かったよ」とオボロは言う、スタスタとわきを通り過ぎようとした。

くれないのミツなんてどうでもよかつたし、何よりこれ以上グズマの機嫌を損ないたくなかつたからだ。

現在、待ち合わせ時間から三時間は経過していた。さすがの彼にも焦るものがある。

「ちよつとちよつとちよつと！ あんた、そこは助けるところでしようが！」

我関せずとばかりに歩き始めたオボロに向かって、少女はぎやんぎやんがなりたてる。高くて鋭い少女の声は耳がツんざきそうだった。

あまりに少女がうるさくするので、とうとう根負けしたようだ。しようがないなあ、とオボロは呟くと、吐いたのはため息。

「じゃあボクが助けてあげるよ」と言ってから、ゴージャスボールをオボロは構えた。

彼は味方についたのだ。

もちろん少女の方ではない。くれないのミツを奪い取ったスカル団の方に。

「つて、なんでスカル団の方につくのよ！ かよわい女の子の物がうばいとられてたら、フツ〜女の子を助けるでしょ！」

「キミは頭がかわいそうな子だね。ボクはこんななりでもスカル団の一員だよ」とあきれたようにオボロは言った。

「ほら、その証拠に背中にタトウーがあるだろ」

そう言うと、彼は少女に背中を向ける。そこには青色のタトウーがでかかど入っていた。

S字をもじった特徴的な印。

それは彼がスカル団において特別な地位にいることの証。

この印を入れるのを許されているのは、グズマの他にはプルメリとオボロだけだった。

「あ、キミたち。今回はボクがこの子の相手をしてあげるからポケモンしまつちやつて良いよ」

「オボロさんにそんな手間をかけさせるわけにはいかないですよ」

「ボクが懲らしめてあげたいのさ。くれないのミツごときでみつともなく騒ぐ、美しくないこの子をね」

オボロの言葉を聞いた少女はブチ切れている。「賞金ふんだくってやる！ おまもりこばん持たせてるんだから！」と息まきながら、モンスターボールを勢いよく少女は放り投げた。

出てきたのはオドリドリ。ぱちぱちスタイルだ。

「錢ゲバ根性すさまじい。なりふり構わぬその姿勢は、一周回ってボクも好きかな。」

さあ出ておいで。マイ・スウィーティー、ラグラージ！」

光り輝くエフェクトの中登場したラグラージは、とてもいかつかつた。たくましい筋肉ががちり付いていて、けれどもボディラインが

整っている。そんな彼女の姿は妙に艶かしい。

「オドリドリ、 “エアスラッシュ” よー！」

オドリドリは羽根をひと振り、ふた振りすると、真空の刃を創りだす。

ラグラージに向かって勢いよく振り注ぐ刃。

それを見ても慌てずに「ストーンエッジ」で迎え撃つんだ」とオボロは自分のポケモンに語りかけた。

ラグラージが一声唸ると、地面から噴き出したのは岩の盾。瞬時に風の刃を受け止めたかと思うと、一つ二つ、三つ四つ五つと、それは次々に飛び出してくる。

だが、相手はひこうタイプのポケモンだ。地面からの攻撃をたやすく避けると、オドリドリは空高く舞い上がった。

「そーんな攻撃へでもないわ！ あたしのオドリドリはね。こんな空高くまで飛べるんだもの。迎え撃つなんてできっこないわ」

「それはどうかな!? ラグラージ、 “メガトンキック” ー！」

ラグラージは少し助走をつけると、思いきり岩を蹴飛ばした！

次の瞬間。たちまち岩には亀裂が入り四方八方に砕け散る。地面から襲いかかる鋭くも素早い岩のつぶての数々は、オドリドリの羽根に突き刺さった。

オドリドリが悲鳴をあげると、よし来たとばかりにラグラージは次々と岩を蹴る、蹴る、蹴り上げる。

「ああラグラージ！ キミのしなやかな筋肉が縦横無尽に駆け巡る様！ 岩のつぶてと見事にマリアージュするキミはやっぱり美しい！」

絶望の表情を浮かべる少女とは対極的に、オボロはすっかり悦に



浸っていた。

無慈悲に浴びせかかる岩のつぶてに耐えられなかったのだろう。次の技を出すこともできずに、オドリドリは地面に落ちていった。

「そんな……！」

「さあ分かっただろ？　くれないのミツはおとなしく諦めるんだね」

「こんなの！　こんなのなにかの間違いよ！」と少女は言った。

「あたしは悪くないもん！　オドリドリが弱いのがいけないんだ！」

涙目になりながら癩癩を起こす少女。そんな彼女をオボロは冷めきった視線で見つめていた。

バトルで得た高揚も忘れ、すっかり冷めきった目で。

「キミさ。こんなに美しい場所で騒いだ拳句、バトルに負けたらポケモンのせい？　ポケモンが全て悪いのかい？　キミのせいじゃなくって？」

ゆつくりと少女に近づくと胸ぐらを掴む。少女を空中に浮かせると、そのまま地面に叩きつけた。

「醜いね。自分の不甲斐なさをポケモンに押し付けるなんて。醜い無様なトレーナーだ。」

「醜い醜いキミに、オドリドリはふさわしくないよ」

その言葉を聞いた少女は泣きじゃくる。そばにいたスカル団のしっぺも、オボロの態度にドン引いていた。

——そもそも悪いのは自分たちだし、年端のいかない女の子に正論をかますのは、さすがに大人気なさすぎる。

悪の組織のしっぺは案外常識的だった。

「オボロさん。小さな子相手にちよつとやりすぎなんじゃないですかね」

ぐずる少女の背中をさすりながら、したつぱ二人はオボロに言った。

くれないのミツは貰うけど今度会ったら別のあげるから泣かないで、と必死にあやす姿は悪の組織とは思えない。

そんな彼らの姿を見ても、醜い相手に醜いと言つてなにが悪いんだい？ と一切悪びれないのがこの男、オボロだった。

したつぱ達は奥の手を使うことにした。オボロに対して何よりも効く言葉を言うことにしたのだ。

姐さんすみません、と心の中で謝りながら、彼らがダシにしたのはプルメリだ。

「別のしたつぱが言っていましたよ。姐さんは優しい優しい人が好きだって」

「プルメリちゃんか？」

もちろん口から出まかせだ。

しかし、オボロの食いつきはコイキングよりも早かった。

先ほどまで見下していた少女には目もくれず、聴き漏らさぬようにじつとこちらを見つめている。

「姐さんはすつごく優しく、ミスをしても許してくれるようなオトコが好きなんだって」

「……」

「きつと、オボロさんがここで！ この子に！ 広い心を見せてあげたならば！」

「……………」

「姐さんもオボロさんのこと、見直すんじゃないかなあ！」

「……………」

「そうかもな！ 姐さん、案外夢見がちだもんな！」

「……………」

「この先オドリドリと仲を育んでいけば、きっと誰よりも美しいトレーナーになれるよ」

オボロの言葉はなんとも白々しかったが、少女が泣き止むには十分だったらしい。「ほんとに？」と呟くと、瞬きをぱちぱち。それから少女は顔を上げてオボロの方を見た。

「ああ本当さ。どんなに強いトレーナーだって、最初は醜くもがるところから始まるからね」

「ねえおにいちゃん」

「なんだい？」

「あたしのくれないのミツはあげる。だから、あたしにバトルのコツを教えて。いや、教えてください！」

「え、嫌だよ。面倒くさいじゃないか」

オボロがばつさり切り捨てると再び少女の瞳は潤み出す。したつぱ達は少女の背中をさすりながら、オボロさんひろいこころ！ とオボロに向かって口パクをした。

「しようがないなあ。たまになら良いよ。キミの名前は？」

「リジー。あたし、マリエシテイに住んでるの。おにいちゃんは？」

「ボクの名前はオボロ。元ホウエン地方のコーディネーターで、今はスカル団の幹部」

そうやって彼はリジーに手を差し出す。リジーは涙を拭くと、ゆっくり彼の手を取った。

「キミはボクの弟子第二号だ。よろしく頼むよ、リジー」

かくしてオボロは弟子を取った。ここに小さなスカル団員が誕生したのだ。

二人は握手を交わし合う。できる限り、ゆつくりと。月の光に照らされながら。

「そう言えば、オボロさんはなんでここにいますか？ アジトに用事でもあるんです？」

「あつ」

すっかり忘れていたが、彼がここにいるのはアジトのポータウンへ向かうためだ。全てはグズマに会うために。

マズイと思って時計を見ると、約束の時間から五時間が経っている。通信機にはグズマからの不在着信が山ほど。

ちなみに言うと、カフェスペースに入れてもらったエネココアはすっかりぬるくなっていた。

「あー、グズマくんさ。元気そうだったかい？」

「グズマさんですか？ 今日ヤバかったんですよ！ なんかずつと不機嫌そうに時計を見てて」

——今すぐここを離れたい。なんならマリエシテイまでリジーを送り届けても良い。さらに言うと、ハウエンに帰りたい。

オボロは冷や汗をかきながら現実グズマから逃れる計画を立てていた。無論、全ては机上の空論だ。

オボロにとっては不幸なことに現実グズマは命中率100%。ついでに言うと、彼にはこうかばつぐんだった。

## 第二話 【いかがわしき屋敷】

常に晴れ渡り、夜には星がきらめくアローラの空。だがしかし。どこにでも例外というのはあるものだ。雲に覆われ、しとしとと。どんよりとして、薄暗い。スカル団のアジト、ポータウンはそんな場所にあった。

「オボロさん。あたし、初めてポータウンに来たけどなんだかじめじめしてるわね」

「ここは曰く付きの場所だからね。かつてここはカプの村と同じように、ウラウラ島の土着神、カプ・ブルルに罰を受けたのさ」

まあボクもあまり知らないけどね、と彼はひとりごちる。彼がアローラを訪れた時には、すでにこの街は廃墟と化していたからだ。

「カプのせいでこんな風になっちゃったのね。なんだかわいそう」  
「だろ？ そんな哀れなゴーストタウンを、ボク達スカル団が再利用したってわけ」

白い壁で覆われた閉鎖的な街。そこには活気というものがまるでなかった。

人気はなく、遠くにぽつりぽつりとスカル団員が立っているだけだ。

家はおろか、ポケモンセンターでさえペンキの跡が残り、さらに言うところ々錆びている。道端にはゴミが転がり、雨水と汚れが混ざった道路は黒く黒く濁っていた。

アローラのどこかとは思えない。そんな有様だ。

「荒れてるし、きたないけど。あたしはここ好きだわ。落ちつくもの」  
「リジーもこの魅力に気がついたのか。なかなかキミ、素質があ

るね」

彼はリジーにウインクをして、「見直したよ」と明るく言った。本心からの言葉だ。スラム街のようなこの地を、オボロは好ましく思っていた。

カプから罰を受けた名残が色濃く残る街。まるで今も呪われているかのように、陰鬱な空気を放っている。

きつと昔は栄えていたであろうポータウン。それがスカル団という掃き溜めの溜まり場となり、滅んでいく姿にオボロの心はかきたえられた。

バリケードの前まで歩くと、オボロは中にいるしたっぱに手を振った。彼はオボロに気がつくかと慌ててバリケードをどかし始める。

人二人分通れるほどに通路をあけると、したっぱは敬礼をしてこう言った。

「お帰りなさいオボロさん。グズマさんが首を長くしてお待ちですよ！」

オボロはげんなりとした表情を隠さない。

待たなくてもいいのに。グズマくん、キリンリキになっちゃいそう。とぶつぶつと呟いている。

憂鬱な面持ちでバリケードを越えるオボロとは反対に、ウキウキとしたリジー。少女はすっかり遠足気分だ。

「ところでリジーは帰らなくていいのかい？　夜のポータウンなんて、親御さんは心配するだろ？」

「そこは全然だいじょうぶ！　今日は友だちの家に泊まるってママに電話したもの」

自慢げに笑うリジーを見て、オボロはなるほどね、と呟いた。この桜色の髪をした少女は案外しっかりしているらしい。

そういえば、この子はおまもりこぼんをポケモンに持たせているよな子だ。ちやつかりしていると、要領が良いのだろう。

オボロはリジーの評価を引き上げると、面白そうに周りをきよろきよろ見渡す少女の手をつないだ。

それからにつこり微笑むと、

「まあ、スカル団のアジトとは言ってもね。ボクの連れだって説明したら、何もされないだろうから安心しなよ」

とオボロ。

グズマくん以外にはね、と心の中で付け足すのも忘れない。

だが、グズマも少女には手出ししないだろうという確信がオボロにはあった。

彼は身内スカル団にはひたすら甘いのだ。

自分のことを『破壊という言葉が人の形をしている』と言ってやまないグズマだが、あれは虚勢。彼は絶対に認めないだろうが、性根は優しい人間だ。

そんなグズマがオボロは好きだった。人間の馬鹿げたところを、全て表しているような気がして。

「ところでキミはもうボクの弟子なんだから『オボロさん』はやめるんだ」とオボロは言った。

「これからはボクのことをお師匠様と呼びたまえ。それはもう、存分にね」

そう、オボロはナルシスト。なんでもかんでも形から入る人間だ。

「うん分かったわ。お師匠さま！」と答えるリジーに彼は大層満足げだった。わりとあっさり弟子入りを引き受けたのも、どうやら師匠と呼ばれたかったかららしい。

まっすぐに二人は街を進んでいく。廃墟と化した住宅地を通り過ぎると、目の前にあるのは大きな屋敷だ。

「立派な屋敷だろ？」

「そうなんだけど、ホラー映画にでも出てきそうだわ」

「ここも廃墟だったからね。けど、今じゃあ立派なボクらのホームさ」

門をくぐって大きなドアを開けると、顔を出したのはスカル団アジトの最深部。いかかわしき屋敷だ。

かつては権力者が住んでいたのだろう立派な屋敷は、アローラ中の人間の屑の吹き溜まりと化している。

ギイ、と音を立てる扉。スカル団のしたっぱ達は、オボロと小さな来客を迎えようと次々に近づいてくる。

午後十時。中にある電飾がぼうつと光る洋館は、雨がしたたり不気味な雰囲気醸し出していた。

## 第二話【いかかわしき屋敷】

「オボロさん、その女の子どうしたんです？　ウチらもワルだけど誘

拐はやっちゃダメですよ」

「まさか隠し子とかっスカ!？」

「ハイハイこの子はボクの弟子だからね。やましいのとかじゃないよ。名前はリジー、仲良くしてやって」

「オボロさん大変なんですよ！　アタシ達もなだめたんですけど、グズマさんってばチョー不機嫌で」

「本当かい？　それは会いたくないなあ」

やんやんやんと押しかけるしたっぱ達をあしらうと、オボロは自分の部屋に戻った。リジーを中に入れると、オボロはふかふかのベッドの中に倒れこむ。

リジーは布団を抱きしめる師匠を横目に、じつと部屋を観察してい



た。

ポロックケースにポロック作成機。手持ちのポケモンや何人かでピースをしている写真。履いている黒いズボンに付けきれなかった、コンテストリボンの数々がところ狭しと並べられている。

綺麗好きなのだろう。

街の壁や廊下にはあつたペンキの跡が、この部屋にはかけらも見当たらない。電灯もこまめに変えられているのか、ピカピカと明るく光っている。

「お師匠さまの部屋、この家じゃないみたい。このリボンってコンテストの?」

「そうだよ。これでもボクは、結構やり手のコーデイネーターだったからね。隣にあるのはボクと麗しきライバル達との写真さ」

そう言つてオボロは武勇伝を語り始めた。

独自の配合でポロックを作っていること。相手が卑怯な技を使つた時も鮮やかにかわしてみせたこと。ライバル達は皆強くて、それでいて美しいトレーナーだったこと。

それからオボロはそつと呟いた。

あの舞台にもう一度、彼らと立ちたいと。

「ふうん。ポケモンみたいな格好するの、流行つてたの?」

「それはこの人だけさ。他の人は普通の格好だろ?」

オボロはそう言つてベッドから立ち上がった。

カバンからポッドを取り出すと、「さあ行くよ」と再びリジーの手を握る。

やけに真剣な顔をして、ポッドとリジーを握りしめるオボロ。

今からグズマに会いに行くのだ。約束の時間を五時間もぶつちぎって、怒り心頭の彼に。

それはオボロにとって死地へ赴きに行くようなものだった。

ところでグズマの部屋に行くには合言葉を言わなければならない。それはスカル団の鉄の掟だ。部屋に続く道には一人、担当のしたつぱが立っているのだ。

幹部であつたとしても必ず守らなくてはいけない、絶対厳守のルールだつた。

「オボロさん。合言葉が違いますよ」

「カプを憎んでスカル憎まずと、だまし討ち。それとアマサダに、最後はNO！ ちゃんと全部言つたじゃないか」

「それは先月の合言葉です。NO！ しか合つてないですよ。昨日変わったじゃないですか」

知らない。

オボロは必死に頭の引き出しを開け閉めしたが、さっぱり思い出せなかつた。というより聞いた覚えすらない。

メールに書いてあるかと思ひチェックをするも、あるのはグズマからの恐怖メールだけ。

——こんなところで無駄に時間を使うと、余計にグズマくんがキレてしまう！

ポケットをひっくり返して合言葉の手がかりを探すオボロ。その姿は全く美しくなかつたが、なりふり構っている暇は彼にはなかつた。

「ヒント！ ヒントをくれないかい？」

「ないですよそんなの。ちゃんと合言葉、紙で配って伝えましたからね」

「そんなつれないこと言わずにさ。これ以上待たせるとマズイんだ。破壊という文字が人の形をしているのがグズマくんだろ？ 屋敷が

壊れたらどうするんだい」

「グズマさまが壁をブツ壊しても、オボロさんが修理費を出してくれ  
ますよ」

厳しく言い切ったしたっぱにオボロは口元を引きつらせた。横に  
いるリジーにも「お師匠さま、かつこ悪い……」と言われる始末。

どうやらここに彼の味方はいないらしい。

オボロがてきとうな言葉を投げつけるも、どれも答えにはカスリも  
しなかった。

「お師匠さま。いつになったら進めるの？」

「うるさいなあ。今そのために頑張ってるんじゃないか。キミも何か  
それっぽいのを考えておくれよ」

イラついているのを隠しもしないオボロは、舌打ちしながらリジー  
に言った。この男、全くとって大人気ない。

二人であれこれ相談しあっている最中だ。

階段を上る音がしたかと思うと、

「袋だたきとグソクムシヤ。それとエネココアに、最後はNO！　だ  
よ」

と呆れたような声が後ろから聞こえてきた。

「プルメリちゃんじゃないか！　プルメリちゃんがボクのピンチを  
救ってくれるなんて、なんたる幸運！

相変わらずキミは、しなやかな女性らしさと芯の強さを兼ね備え  
た、エムリツトのような女性だね」

つまりはそう、美しいってことさ、とウインクをするオボロ。そん  
な彼をスルーしてプルメリはリジーをじつと見る。

「さつきしたつぱから聞いたよ。アンタこのバカの弟子になったんだって？　物好きな子もいたもんだね」

「そうよ。あたしはリジー。あなたは？」

「アタイはプルメリ。こいつと同じスカル団の幹部。したつぱ達をまとめる、いわゆる姐御ってところ」

プルメリはしたつぱをどかすと、すたすたと先へ進む。それからくるりと振り返って、二人に向かってこう言った。

「グズマに呼ばれてるんだろ？　アタイも呼ばれててさ。二人とも一緒に来なよ」

「本当かい？　プルメリちゃんと一緒なら、どんなに憂鬱なことでも元気二百%さ！　喜んでお伴するよハニー。空に瞬く星よりも美しいキミのためならね」

格好つけて口説き始めたオボロを、リジーは冷めた目で見つめている。口説かれている本人も、「オボロと喋ると、どうにも頭が痛くなるねえ」と頭を抱えていた。

黙っていれば見た目は普通なのだ。むしろ、オボロは普通よりもはるかに整っている。

垂れ目で大きな青い瞳。二つにまとめられた、長くて赤い髪。

細く、けれどがっしりとした身体には、シールではあるが目立つ青色のタトゥーが彫られていてアンバランス極まりない。

それが、逆に彼の美貌をより一層引き立たせていた。

外見はただの優男。

いや、そういえば中身も昔はそうだった、とプルメリは思い直す。

彼がナルシストで自己中になってしまったのは、スカル団に入ってからだ。

初めて出会った時はオボロは謙虚な奴だった。そんな記憶が彼女にはある。

今では、謙虚のけの字も見当たらないが。

肩を組もうとするオボロの手をはたき落とすと、プルメリはため息をついて歩き出す。

彼女は昔のオボロを思い出そうとして、やめた。

まともだった頃の彼と、あまりにも違う今。比べてしまうと、頭痛がひどくなるのが目に見えていたからだ。

彼ら三人がグズマの部屋までたどり着くと、オボロは深呼吸をする。それから、エネココアがたつぷり入ったポッドをギュツと握りしめると、手のひらをリジীর頭にぽんと置いた。

「これからボク達のボス、グズマくんに会うけど、余計なことを言っちゃダメだよリジী。さもなければ、彼は屋敷中を破壊してしまうからね。」

けど、大丈夫。怖くない、怖くないよ。怖がらなくても大丈夫」

震える背中。緊張した顔。小さな声。そんな彼の言葉は全く説得力がない。

そもそもリジীは遠足気分。しかもオボロの弟子ということでしたっば達からお菓子をたくさん貰っていた。

散々スカル団から可愛がられた彼女は、むしろスカル団のボスに親しみさえも覚えている。

どう考えても怖がっているのはオボロだけだったが、切羽詰まっている彼は、そのことに全く気がついていなかった。

コンコンと二回、ノックをすると恐る恐る扉を開ける。「グズマくん、ボクだよ。このボク、オボロが華麗に参上したよ！」と彼が精一杯の虚勢を張った瞬間だ。

いきなりマグカップが飛んできてオボロの顔にぶつかかった！

中に入っていたのは熱々のグラブルマウンテン。全身コーヒーマミレで真っ黒になったオボロは、突然のことに目をぱちくりとマヌケ面をさらしていた。

「あらゆる物をブツ壊し、あらゆる者に嫌われる。そんな孤高の嫌われ者のスカル団ボス、グズマ様だがよお」

カップを投げた主はオボロを睨みつけながら、ぼきぼきと拳を鳴らす。血走った彼の目は薄暗い部屋の中で爛々と光っていた。

「このオレ様をこんなに待たすたあ、オボロ。お前、覚悟はできてるんだろうな。あ？」

大きな椅子に座るグズマは見るからにこめかみをヒクつかせている。普段と変わらずにうすら笑いを浮かべる彼が、オボロは逆に怖かった。

破壊という文字が人の形をしていると公言しているグズマが、自分にコーヒーをかけたくらいで終わるはずがない。

さらに言うと、彼の目は全く笑っていなかった。口調は普段と同じであるにも関わらず。

——ヤバい。ヤバすぎる。グズマくんってば、想像の十倍はブチギレてるよ。

オボロは顔を引きつらせる。彼は早々に奥の手を出すことにした。

対・グズマ用最終兵器。そう、エネココアを。

「ぐ、グズマくん。ほらこれあげる、エネココア」とオボロはいそいそとポッドを差し出した。

「キミが好きだから買ってきたんだよ。嬉しいかい？」

「お前こんなモンで誤魔化そうったってそうはいかねえからな」

ぎろりと睨むと、グズマはしたっぱにポツドを受け取らせる。それから温めて自分に出すように指示すると、ふんぞり返って彼は言った。

「今日お前がここに来るはずの時間は五時だった。そうだな？」

「うん。メールでそう言われたね」

「で、それを踏まえて考えてみろや。今は何時だ？」

「九時くらいかなあ」

「十時半だ！ 五時間以上経ってんじゃねえか！ テメエいい加減にしろや！」

どん、と椅子のひじかけをグズマが拳で殴る度に、オボロの背中は大クついていいる。

恐怖に震えるコーヒーまみれの男はなんともみつともなくて、横のプルメリトリジーは白い目で見つめていた。

「多少の遅刻はスカしてる、むしろ時間通りはクソ喰らえってのが信条のこのオレ様だがよ。何事にも限度つてもんがある。

お前のウリは自由なところだと思っていたがよ。年々ひどくなる一方だ」

そう言つてグズマはため息をついた。したっぱから差し出されたエネココアを受け取ると、ぐっと一気に彼は飲み干す。

グズマにとつてエネココアは、この場における唯一絶対の癒し。彼にとつてそれは気つけ薬のようなものだった。

「それになんだよ、このガキは。アジトにチビツ子連れてきてんじゃねえぞ」

「ああ、この子ね。ついさつきボクの弟子になったのさ」

「それは知ってるぜ。外のしたっぱが騒がしかったからよお。そうじゃねえ。ガキを連れてくんたつてんだよ」

お前バカだな、と吐き捨てる、グズマはエネココアのお代わりを催促した。

暖簾に腕押し。ぬかに釘。相手をするには、気つけ薬がいくつあっても足りやしない。

それがオボロという男だ。

「そうそうグズマくん。この子、リジーっていうんだけどね。スカル団に入れても構わないかい？」

「スカル団は幼稚園じゃねえぞ」

「もちろん知ってるさ！ グズマくん、キミってば面白いジョークを言うね」

場を和ませようと笑うオボロ。

だが、余計にグズマの癩に障ったらしい。先ほどよりも一層青筋を浮き立たせると、グズマは再びひじかけを殴りつけた。

お前は黙ってる、と縮こまるオボロをもうひと睨みすると、グズマはリジーに声をかける。

「おいガキ！ お前はなんでコイツの弟子になったんだよ？ このオレ様に教えてくれや」

「強くなりたくて。今のお師匠さまは、かなりかっこ悪いけど」とちらりとオボロを見てから、リジーはこう続けた。

「バトルをするお師匠さまはすごくかっこよかったのよ。あたしはお師匠さまみたいな、強くて美しいトレーナーになりたいんです」

それを聞いたグズマは少し黙ると、「強くなってお前は何かしたいんだよ」とリジーに問いかけた。



「キャプテンにでもなりたいのか？ 島巡りでもするのかよ？」

これはマズイとオボロは思った。

キャプテンと島巡りはグズマにとって二大禁句ワードだ。ただでさえグズマは今、ブチ切れている。下手なことをリジーが言うのと、何をされるかわからない。

横を見るとプルメリも同じことを考えていたらしい。

スカル団の幹部二人は、だらだらと汗を流しつつ、少女の回答を固唾を飲んで見守っていた。

「ううん。あたし、島めぐりには興味ないわ」とリジーは言った。

「お師匠さまにコテンパンに負かされて、醜いなんて言われたのよ！ だからあたしは強くなつて、お師匠さまをブツ倒してからぎやふんと言わせてやりたいんです！」

返ってきたのは予想のはるか斜め上。

グズマは思い切り笑い出した。「師匠をブツ倒すと来たか。下克上か、悪くねえ」と呟く彼はどこか嬉しそうだ。

ひとしきり笑うと、グズマはリジーに向かって何かを放り投げた。それは、スカルの形の白い白いペンダント。

「良いぜ。嬢ちゃんの入団を認めてやらあ。まあ、見習いとしてだがな」

白いペンダントを握る少女を彼は満足そうにじつと見ている。

それから未だに情けなく震えるオボロを一瞥すると、グズマは再度ため息を吐いてから口を開いた。

「オボロ。今回ばかりはお前の遅刻も許してやるぜ。二度目はないから覚悟しとけよ」

どうやら難を逃れたらしい。オボロは訳もわからず、ぽかんと口を開けている。

プルメリもそうだ。グズマの気の代わりように、彼らはひたすら驚いていた。

彼が突然機嫌が良くなった理由。それはいたって簡単なことだった。

グズマは自分と重ね合わせたのだ。

オボロを師匠と呼ぶ少女を、かつての自分に。師匠のことを尊敬し、そして同時に憎らしく思っていた自分に。

ただしオボロとグズマの師は人格面で月とスッポン程の差があったが。もちろん、この場合のスッポンは言わずもがなオボロのことである。

二杯目のエネココアを飲み終わると、グズマは少し落ち着いたようだった。それで本題だが、と彼はメールを開きながら言った。

「代表からのお呼び出しだ。プルメリ、オボロ。明日の朝、オレ様とお前ら二人はエーテルアイランドに行かなきゃならねえ」

「アタイらもかい？」

「そうだけ。なんでも、かなり重要な話があるらしいが」とグズマは言った。

「人目につかないところじゃないと、代表は嫌なんだとよ」

ほらよ、とメールを見せるグズマ。そこには仰々しく書かれた文章。真正銘ルザミーネからのメールだった。

『わたくし、あなた方に協力して貰いたいことがありますの』と書かれたメールを見て、オボロは背中に寒気が走った。

彼の頭は、明日どうやってあの女性と会話しないようにするかだ。いっぴいだ。

美しい物が大好きで、自らも美しくあろうとするオボロ。だが、同じく美しい物が大好きで、自らも美しくあろうとするルザミーネとは

どうにも反りが合わなかった。

考え方も、発想も。目的も手段も行動も。

人はそれを、同族嫌悪と呼ぶ。

あれこれ思考を巡らすオボロと、話についていけないリジー。それと代表に会うのが楽しみなのか、ニヤケが抑えられないグズマ。

三者三様の姿を見て、明日は一波乱起きそうだねえ、とプルメリは深くため息をついた。

時計の針は二つとも。ぴったり天を指している。

もう皆、夢の狭間へと潜り込む時間だ。

静まり返った屋敷の中でただ一つ。いつまでもこの部屋だけが喧噪を保っていた。

### 第三話 【エーテルパラダイス】

ジリリリリリ!

部屋中に鳴り響く目覚ましを止めると、リジーはひとつ伸びをした。カーテンを開けると外はもうすっかり日が昇っている。少女は慌てて着替えると、ぐうすか寝こけるオボロを必死で揺すった。

「お師匠さま! グズマさんから昨日言われたじゃない! どこかお出かけするのよね?」

いくら叩いても揺らしても、リジーの声は届かない。

オボロはよだれを垂らしながら抱き枕を抱きしめていた。そんな彼の姿は、ぜったいねむりで眠り続けるネッコアラのようだ。

しかも、ぐつすり寝るのが美しさの秘訣なのさ! と普段から言ってはばからないオボロ。耳栓とアイマスクを付けて、外の世界を完全にシャットアウトするのが彼流だ。

エーテルパラダイスに行く予定もすっかり忘れ、オボロはのんきに眠っていた。

どうしようかとリジーが困っていると、コンコンと二回ノックされる。

扉の奥から現れたのはプルメリだ。その後ろからマグカップを持ったグズマも。

「ねえアンタさ。まだオボロの奴は起きないのかい?」

「さつきから起こしてるんですけどさっぱり」

三人は一斉にオボロを見た。

プルメリちゃんコッチだよ、と笑いながら寝言を言う彼は正直かな

り気持ち悪い。

グズマは思い切り顔をしかめると、エネココアを煽った。甘くて濃厚なはずのエネココアは今日に限ってほろ苦い。

プルメリは少し嫌そうな顔を見ると、「アタイはオボロの朝飯を持ってこなくちゃいけないからね」とそそくさと立ち去った。

残されたのはグズマとリジー。それと、なんにも知らず眠り続けるこの男。

「オイ嬢ちゃん。リジーだったか？ 脇に退いとけ、一旦よお」

リジーが少し移動するとグズマはカップを置いて指を鳴らす。ばきばき、と音を立てるグズマの拳はすっかり温まり、臨戦態勢ばっちりだ。

抱き枕をオボロから引きはがした次の瞬間。グズマの拳は空を切ったかと思うと、オボロのお腹に吸い込まれた！

鮮やかに宙を舞う姿はまるでロケットのようだ。

飾られているリボンをなぎ倒していくと、壁に当たり墜落。

部屋の隅まで飛んで行ったオボロは、うずくまってプルプル震えていた。どうやらみぞおちにクリーンヒットしたようで、苦しそうにうめき声をあげている。

グズマはオボロを鼻で笑うと、「どうだオボロ。さぞかしい目覚めができただろうぜ」と彼を煽った。

「ひ、ヒドイじゃないかグズマくん。横暴だ、不公平だ、暴力反対。キミなんかキライだ」

「あいにくだがな。ブツ壊してもブツ壊しても手を緩めずに嫌われるのが、このオレ様。グズマ様だからよお」

衝撃で外れた耳栓を拾いながら、オボロはねちねち文句を言っている。「エネココアを飲む前にさ。モーモーミルクでも飲んだらいいのに」と言う彼に、グズマはさらに拳骨を落とした。

ちなみに現在出発予定時間の十五分前になろうとしている。

グズマの名誉のために言うと、彼の対応は至極真つ当であった。

### 第三話 【エーテルパラダイス】

目指すはエーテルパラダイス。

青い空。白い雲。潮風に吹かれながら船は進んでいく。

オートパイロットの船に乗っているのはグズマとプルメリ、オボロにリジーだけ。

彼ら四人はそれぞれ思い思いの時間を過ごしていた。

グズマは手持ちとポケリフレをしているし、プルメリはキャモメが飛び交う外を眺めている。

オボロとリジーはといえば二人で朝食をとっていた。

「ああ美味しい！ 素晴らしく美味しいね！ プルメリちゃんが作ってくれた料理を、朝から食べれるなんて。ボクはなんて贅沢をしているのだろう！」

屋敷でプルメリが作っていたホットサンドをオボロは褒めちぎる。

よっぽど美味しいのだろう。横のリジーも無言でがつがっ食べ進めていた。

贅辞の言葉を延々と続けるオボロに、「恥ずかしいからやめておくれよ。オボロ、アンタは黙って食べられないのかい」とプルメリは素っ気ない。

だが、彼女の耳は誰が見ても赤く染まっていた。シャイな彼女の精一杯の照れ隠しだ。

それを知ってか違うのか。彼女の言葉を聞くとオボロは微笑んだ。それからグランブルマウンテンをすすった後、「もちろん、このボクに

かかれば、なんだってできるさ」とオボロは得意げに言った。

「プルメリちゃんのご要望とあらば、ボクは声どころか物音ひとつ立てずに食べてみせるよー!」

「別にいいよ、しなくて。普通に食いな」

二人がわちゃわちゃ言い合っている間だ。グズマも甲板にやって来て、ずんずんこちらへ近づいてくる。

彼の目の前でぴたつと止まったかと思うと、いきなりオボロに拳骨を落とした。

「なんとという不条理! なんとという理不尽! いきなりなんだいグズマくん!」

「ウルセエよ。オレ様のポケモンが昼寝してんだよ。声落とせ」

そう言うとグズマは部屋の方を指差した。確かに彼の腰にあるモンスターボールはひとつ減っている。彼がここまで甘やかすということは、大方グソクムシャあたりが寝ているのだろう。

いきなり殴られて、納得がいかないとばかりに噛み付くオボロ。

せめてグーじゃなくパーでやってくれ! とぐちぐち言った後、「長年の付き合いのボクとキミのポケモン。どっちが大切だって言うんだい?」とオボロは尋ねた。

彼が浮かべるのは大粒の涙。もちろんのこと嘘泣きだ。

こういう時、彼は芝居に出てくる子役のようにすぐ泣いた。涙が似合う儂げな男は美しいと、彼は信じていたからだ。

「遠くの親戚より近くの他人。チンケなことしか言わないことわざにしては、スカしてると思うグズマ様だがよ。

近くの他人より、もっと付き合いが長くて近い手持ちに決まってるだろ。だいたいお前とは四、五年しか付き合いねえしな」

「ヒドイ! ヒドイよ! 年数で決めるなんて!」

あの時の友情を忘れたのかい？　ボクがあの時、どれだけグズマくんに感謝して、スカル団を支えようかと思っただことか！　それなのにキミは、すぐにそういうことを言う！」

オボロはハンカチを取り出すと、「ああ、報われないかわいそうなボク」と目頭を押さえている。

全てがわざとらしい彼の姿を見て、「一度も忘れたことはねえよ」とグズマはため息をついた。

目の前で涙を流すこの非常に面倒くさい男は、最初からスカル団に入っていたわけではない。スカル団に入りたがっていたというわけでもない。

彼はグズマがスカウトして、半ば強引に入れたのだ。

グズマとオボロの出会いが強烈だった。

彼がスカル団を結成して間もない頃だ。

ポータウンを乗っ取ったばかりのグズマは、実地調査とばかりに辺りをうろついていた。

——草むらに何かが倒れている。

ポケモンかと思って近寄ると、黒い何かはびくびくと指を動かし、声にならない声を上げていた。

それは泥と垢にまみれて異臭を放ち、骨と皮だけの衰弱しきった人間。

慌ててグズマはしたっぱ達を呼ぶと彼を世話することに決めた。

スカル団のボスとはいえ、グズマはごくごく普通の青年だ。死にかけの男を放置するほど彼は非道を極めていなかった。

プルメリやしたっぱ達と代わる代わる世話をしていくと、男は次第に元気を取り戻していく。垢は綺麗さっぱりなくなり、ガリガリだった



た身体に少し肉が付いて、意識を保てる時間も増えていった。

彼は感謝の言葉を口にする、自分のことをぼつり、ぼつりと語り始めた。

名前はオボロ。なぜ倒れていたかは言いたくない。自分はハウエン地方から来たコーディネーターなのだ。

外の世界に興味があったグズマは、見返りに彼の話を聞きたがった。男の話はどれも面白く、まるで夢や幻のようだ。

きらびやかなコンテストの世界は島巡りとは全く違う。

グズマは彼にねだった。もつともつと教えてくれと。

その度にオボロは語った。彼のこれまでの半生を。

月日は流れ、やがて二人は気が置けない仲になった。

アローラの生活にも慣れたオボロは、グズマがやっていることを手伝うようになる。コンテストで鍛えた彼のポケモン達は、スカル団と敵対する相手を鮮やかに翻弄してみせた。

それがすべての始まりだ。この男と、自分の。

グズマが昔のことを思い出している間も、未だにオボロは嘘泣きをやめない。

いい加減静かにしろだとか、これから重要な話をされるって時に弟子を連れてくるなとか、グズマには言いたいことが山ほどあったが、口を開くのをやめた。

軽いノリで生きるオボロのことだ。口先八丁で乗り切られるのは、火を見るよりも明らかだ。

「プルメリ。オレ様も一眠りしてくるからよお。船が着いたら教えてくれや」

「別にいいけど、オボロを黙らせなくてもいいのかい？」

「どうせ無駄だ。たとえばアローラが減んだとしても、コイツは黙りやしねえよ」

「二人ともボクをなんだと思ってるのさ！」

あんまりだ！ 訴えてやる！ とオボロはハンカチを握りしめた。あまりにも強く握るものなので、すっかりシワが寄っている。

彼のハンカチはキャタピーの糸をふんだんに使った高級品。だが、涙にまみれシワの寄ったハンカチは、百均のものより貧相に見えた。

「お前の声は本当によお。頭に響くよな。少しは黙って食ってる弟子を見習えや」

オボロが騒いでいる間、リジーはホットサンドにもう夢中。大量にあったはずの食べ物がどんどん口の中に消えていく。横の騒ぎもなかったかのように、延々と少女は頬張っていた。

その姿はお世辞にも美しいとは言えないが、泣きながらぎやんぎやん吠えるオボロよりは百倍マシ。

覆ることのないグズマとプルメリの共通認識だった。

グズマが寝に行った後、甲板にいるのはオボロとリジーだけになった。どうやらプルメリも船内でくつろぐことにしたようだ。

朝食をたらふく食べたリジーは、モンスターボールからオドリドリを出した。

今度はポケモンが食べる番だ。

少女はリュックからポケモンフーズを出すと、ザラザラと皿に出す。ひと粒ひと粒ご飯をついばむオドリドリを、少女は優しく見守っていた。

「せっかくだからさリジー。キミのオドリドリにさ。これをあげてみなよ」

「これなあに？」

「ポロツクさ。ポケマメのハウエン地方版ってところかな」

「ふうん。変わってるわね」

「この小さく固められたフォルムが可愛いだろ？」

オボロが何個か差し出したのは色とりどりのポロックだ。

初めて見るからだろう。まじまじと見つめるリジーに、オボロは分かりやすいように説明をした。

「ポロックはね。ポケモンの外見の美しさを高めてくれるのさ。カラダの中から調子を整えることだね」

だからトレーナーとしてのバトルでも役に立つはずさ。とりジーに言うと、彼が渡したのはポロックキットとポロックケース。

「今回はボクのをあげるけど。今度からはリジー、キミがきのみから作るんだ」

「お師匠さまの分が減っちゃうから？」

「それもあるけど、味の好みは十匹十色だからね。オドリドリが一番気に入るように作るよ」とオボロは言った。

「ボクはポロック作りも天才的だから、オドリドリもある程度は気に入るはずさ」

ポロックをついばむオドリドリは気持ちよさげに体を揺らしている。その度にぱちぱちと音を立ててこすれる羽根は、いつもより少し、つややかに見えた気がした。

その様子を見てオボロは満足げ。

ある程度なんて謙遜する必要は全くなかったね！ やっぱりボクのポロックは最高だろ!! と高らかに叫んでいる。

どれくらい高らかかと言うと、甲板どころか船室中に響き渡るほどである。もちろん、部屋にいるグズマとプルメリにもぼつちり聞こえていた。

オボロの声に起こされたグズマは、やっぱり黙らなかつたかと呆れている。彼が大声で何かを言う様子は、もはやスカル団名物と化してい

た。

ポロツクをやり終えた二人が次にするのはブラッシングだ。オドリドリの羽根の向きに沿って、泥やほこりを落としていた。

羽根のもつれを解くように。それでいて、羽根が抜けないような。そんな力加減の塩梅は非常に難しい。リジーは一回だって上手くできた試しはなかった。

だが、師匠のオボロはなんてことはないようにブラシを操っている。それはまるで、魔法をかけているかのようだ。

オボロが手本を見せ終わると、リジーは手つきを真似てとかしている。そつとゆっくり慎重に、震える手で少女はブラシを動かしている。

その道のプロだったオボロと比べるとリジーの動作はぎこちない。だが、一生懸命手を動かす少女をオボロは微笑ましく見守っていた。しかし、それは彼が弟子思いだからというわけでは決していない。

——そうそう、コレだよコレ！ 弟子を持つ醍醐味っていうのはさ！

彼にあるのは優越感。そして承認欲求が満たされていく快感だった。

いつの世もナルシストは途方もない承認欲求を抱えているものだが、ここまでブレないのは彼くらいのもだった。

ブラシですつかりとかし終わってオドリドリを撫でていると、ボーツと聞こえてくるのは汽笛の音。

不自然なほどに清潔感のある、白い白い人工島が間近に迫っていた。エーテルパラダイスはすぐそこだ。

島の裏口に船を停めると、四人は島の最深部へ向かった。

エーテル財団の職員でもなかなか入れないシークレットラボ。そこは秘密の会談にはうってつけだ。

「けれど、あたしびっくりだわ。ポケモンを守るエーテル財団と、ポケモンをいじめることもあるスカル団が話し合いだなんて」

「何事にも光と陰はある。そして、それは大体くっついて離れやしないのさ。彼らは正義の味方で、ボクたちは悪役。プロレスみたいなものだよ」

「つまりはグルってこと」と嫌そうに言うオボロに、「子供になんでも教えるんじゃないよ」とプルメリは咎めた。

慌ててオボロは、これ他言無用で頼むよ、とリジーに口止めをする。スカル団のしたつばも、エーテル財団の職員も。

彼らの上が繋がっているのは、限られた者しか知らない超トップシークレットだった。

「けど、これだけは言わせてもらおうよ。そもそもボクはエーテル財団が好きじゃないんだ」

苦虫を噛み潰したような表情を見せる師匠に、リジーは「どうして？」と首をかしげた。彼女にとって、エーテル財団は当たり前前に存在するもの。特別嫌いというわけではなかったからだ。

「決まってるだろう！ ポケモンはありのまま生き生きと過ごす姿が美しいのに。それを、こんな機械まみれの人工島で！」

きよとんとする弟子とは対象的に、オボロはどんどん声を荒げている。どうやら相当嫌いらしい。

その様子を見たグズマは眉間にしわを一層寄せ、プルメリは「へえ。意外だね」と呟いた。

「アンタはここを美しいって褒めるのかと思ってたよ」

「まさか！ 保護されなきゃ生きられないポケモンなんて、美しさとは対極にあるよ。それにこんな歪な美しさ。ヘドが出る」

吐き捨てるように言うオボロをグズマは睨みつけた。オボロは、そういうえばキミはここ大好きだったね、と呟くと、先ほどよりトーンを抑えてこう言った。

「それにルザミーネ女史が何を考えてるのか、ボクにはさっぱり。グズマくんは仲良しだから、知ってるのかもしれないけど」

「ルザミーネじよし？」

「エーテル財団の代表さ。これからボク達が会う人だよ」

「ふうん。お師匠さま達も大変なのね」

「まあね。大事なパトロンだから従うけどさ」

奥にあるエレベーターに乗ると地下二階のスイッチを押す。音を立てずに潜っていくエレベーターは、この島の姿を象徴するかのようでオボロは嫌いだった。

四人がラボに入るともう代表がお待ちかねだった。

部屋の中に、金髪の美しい女性が佇んでいる。スカル団の用心棒グラジオとよく似た彼女は、どこか神秘的で絵に描かれた人物のようだ。

大きなファイルを手に持ちながら彼女は立っていた。

「よお代表。遅刻しない奴はスカしてない。その信条も代表のためなら曲げてみせる、グズマ様がここに来たぜ」

「あらみなさん。遠いところからわざわざ来て頂いて、わたくしとっても嬉しいわ」

ルザミーネは薄い笑みを浮かべている。それからリジーをじつと

見ると、その子どもは誰かの隠し子かしら、と彼女は言った。

コイツはオボロの弟子なんだとよ、とグズマが教える。

彼女は少し驚いたようで少し目を見開いた。けれどもまたすぐ笑みを浮かべて、ふうんそうなの、と呟くとオボロの方をちらりと見る。

「そう言えばオボロ。あなた、いつまでもハダカなのね。みつともないです」

「みつともないだって!? このボクの美しいカラダのどこがみつともないって言うんだい！ 対極にあるだろう、みつともなさど！」

ぎゃーぎゃー騒ぐオボロに「まあ、みつともなさが増しましたわ」と火に油を注ぐルザミーネはもはや確信犯だ。彼女は思ったままのことを言っているだけだが、着々とオボロの地雷を踏んでいく。

荒れ狂うオボロに「お師匠さまみつともないからやめて」とリジーがなだめると、「お弟子さんの方がわたくしと仲良くなれそうね」とルザミーネ。それを聞いて余計に荒れるオボロ。

プルメリは頭が痛くなるのを感じながら、ルザミーネに本題を切り出した。

「で、代表はさ。どうしてアタイ達まで呼びつけたんだい？ いつもはグズマだけじゃないか」

ルザミーネはにつこり微笑むと、持っていたファイルをパラパラとめくる。それから机の上に置いてファイルに挟まれた写真を指差した。

写真の中にいるのはおそらくポケモンだ。ただ、プルメリはこんなポケモンがいるなんて、見たことも聞いたこともなかった。グズマもそうだ。そしてリジーも。

エスパークタイプかゴーストタイプのどちらかだろう。

青くて小さなポケモンはぶかぶかと宙に浮いている。その体はキラキラと輝いていて、どこか宇宙を連想させた。

「さすがはエーテル財団だね。こんなのも保護してるのかい」

「このポケモン見たことないわ！ とってもキュートね代表さん。なんて名前なんですか？」

「名前はコスモッグ。アローラに二匹とこない、貴重なポケモンです」

ルザミーネはそう言うのと四人に動画を見せ始める。

エーテルパラダイスの監視カメラの映像だ。

映っているのは小さな少女。金髪の彼女はルザミーネやグラジオとよく似ている。

必死に走る少女と追いかけるエーテル財団。場所はこの島の二階、ポケモン保護区のようなだ。

少女を追い詰めたかと思うと、彼女の鞆から沸き起こったのはまばゆい光。たちまち少女は消えてしまい、影も形もなくなってしまったところで映像は終わっている。

「ご覧の通りよ。三ヶ月前に、恥ずかしながらドロボウに盗まれてしまいましたの」

「エスパータイプのポケモンなんだね。ルザミーネ女史、今のはテレポートだろ？」

「ええそうよ。あなた方にはコスモッグを取り戻して頂きたいの」

そう言うと、彼女は黒いケージを渡した。どうやら捕獲したらここに閉じ込めておけということらしい。

特別なポケモンだから逃げないようにするにはこれが必要なの、とルザミーネは言った。

「手段は問いません。コスモッグが生きて帰って来ればなんでも良いわ。なんとしても、コスモッグをドロボウから取り戻すのです！」



顔を歪めるルザミーネに、計画に必要なのか？ とグズマは尋ねた。ルザミーネは頷くと面白そうにグズマは笑う。

「イイぜ代表。スカル団はこいつを捕まえてみせる。オレ達にできないことはない。オボロ、プルメリ。なあそうだろ？」

にやりと笑みを浮かべながらグズマは二人に問いかけた。

とは言っても、純粹に反応が気になったから尋ねたというわけではない。

彼が心の底から信頼する仲間達の答え。それがどんなものになるかをグズマは知っていた。

「そりゃあ大体のことはねえ」

「グズマくんがそう言うのであれば、ボクは精いっぱい頑張らせてもらうよ！」

かくして物語は動き始める。

それは、東から昇る太陽のように劇的に。静かに光る月のように厳かに。

エーテルパラダイスの地下二階。全てはそこで始まったのだ。

## 第四話 【おまもりこぼん】

コスモツグの話聞いた四人はそれぞれ別行動を取り始めた。

プルメリは屋敷に戻って、団員達にそれとなく指示をすることにしたらしい。詳しいことは説明せず、珍しいポケモンを見つけたらグズマか幹部に言うようにと。

全ては用心棒のグラジオに気付かせないため。

彼はルザミーネの息子だ。彼女に反発して家出をした彼に、エーテル財団との繋がりがバレると、面倒くさくなることは目に見えている。

グズマはルザミーネと話があるからと言い、エーテルパラダイスに一人残った。大方、彼女の家に上がり込んでいるのだろう。

「お師匠さま。今頃、グズマさんは代表さんと何を話しているのかしらね」

「さあね。さつきグズマくんが言った、ルザミーネ女史の計画の話なんじゃないかい？」

「どんな計画なの？」

「ボクが知るわけないだろう。そんなのがあって今日初めて知ったくらいだし」

グズマとルザミーネが彼女の家で何をしていて、彼らがどういう関係なのか。

普通の人ならヨダレを垂らすゴシップに、オボロは全く興味なかった。どうにもこうにも彼はルザミーネが気に食わなかったからだ。

若さにしがみついて、美しさに固執し、趣味の悪い髪型をしたルザミーネ。ポケモンの美しさに対する考えも真逆で、会う度にオボロを煽ってくる。

さらに言うと、美しいモノを絶対とする彼女の考え方は――

「ボクとキャラがカブってるじゃないか！」

「どうしたのお師匠さま。急にさげんで」

「ああいや、考え事をしていただけさ。声に出しちゃったみたいだね」

そう、オボロがルザミーネのことを嫌いなのはポケモンへの考え方が違うからなどではない。

元々、手持ち以外はどうでもいいと考えている男だ。

野生ポケモンの保護だの美しさだのは、彼にとっては些細なことだった。あくまでもそれは体裁的な理由にすぎない。

キャラ被り。

承認欲求という文字が人の形をしていて、独自性を発揮しようと日夜研究しているオボロ。

それは彼にとっては断じて許せないことだった。

「それにしても、コスモッグってどこにいるのかしら」

「ルザミーネ女史の話だと、あの女の子が持ち出したんだろ？ じきに見つかるよ」

じきに見つかる。これは間違いない。

アローラは狭いし、少女の力では行動範囲に限界がある。もし海外に出ようとしたら、出航記録を調べられて取り押さえられるのがオチだ。

となると、少女がそう遠くに行っていないのは明らかだった。本来ならば、スカル団の力なんか借りなくても、エーテル財団だけで処理できたはずの案件だ。

少女には協力者がいる。それも、とびきり厄介な。

見つかるのが早くても、コスモッグを捕獲するには100%骨を折る。

それに、どうせドロボウはルザミーネの娘とかいうオチだろう。

あの服。あの髪型。彼女のセンス以外の何もでもない。

親子ゲンカでもしたのだろうか。  
スカル団に転がり込んできた、グラジオのように。

——頼むから身内の恥は身内で処理してほしかった。けれども、我らがボスが引き受けちゃったんだからしようがない。グズマくんつてバルザミーネ女史のこと好きすぎなんじゃないかなあ。

面倒な仕事を回してくれたよホントに、と彼はため息をついた。

「そんなことよりリジーにスカル団のタンクトップを買わなきゃね。見習いとは言え、もうスカル団の一員なんだから」

「お師匠さまは着てないの？」

「ボクは幹部だからだよ。したつぱ達とは違うのさ」

不思議そうにするリジーに、「プルメリちゃんもアレンジしたやつを着てるだろ？」とオボロは付け足した。

プルメリの腹出しタンクトップは特注品。セクシーに着こなす彼女を思い出して、リジーは納得したようだ。

「お師匠さま、あたし着るの楽しみ！ あのタンクトップってスカしてて、けっこう好きなの」

「えっ。あれダサ、いや、キミのセンスはグズマくん似みたいだね」

苦笑いしながらオボロは船に乗りこんだ。その後を、早足で歩くりジーが続く。

次に向かうはメレメレ島。

スカル団のタンクトップを買うために、彼らが目指していたのはハウオリシティのブティックだった。

「……いらつしやいませ」

「やあ昨日ぶりだね。また来たよー」

ドヤ顔で来店したオボロに、店員は引きつり笑いを浮かべていた。案の定、今回も彼の周りからさざ波のように人が消えていく。彼はこの店の負の名物と化していた。

早く帰れと願えども願えども店に来るオボロに、カップ・コケコの罰がくだりますようにと店員は大真面目に祈っていた。

残念ながら、今日もなかなか帰る気配はない。

「昨日買った銀色のチェーソンの調子は最高さ！ このペンダントも喜んでいるよ！ それはそうと、今回はタンクトップが欲しいんだ。スカル団が着ているやつ。それも子ども用のをね」

この子のをさ、と彼はリジーを指差した。

幼いながらもスカル団のペンダントをぶら下げる少女に、世も未だなと店員は思う。

こんな小さな子までスカル団だなんて。と棚からタンクトップを引っ張り出しながら、店員はぶつくさ言っていた。

自分の子どもがグレて、家出をしたかのような気分になったからだ。

まだ九歳のリジーのために、できる限り小さいものを店員は探す。だが、スカル団の人間と一部の変わり者にしか需要がないタンクトップだ。

サイズの小さなものなどあるわけがない。ましてや子供用のは。

「一番小さいのがこれなんですけど。この子には大きすぎますね」

「ううん。新しく発注することはできないのかい？」

「規格がないので無理ですね。Sより小さいのはちよつと」

うんうんうなる彼を見て、諦めて帰ってくれよと店員は念を込めている。ついでにこの子のスカル団入りも取りやめてくれ、と願うのも忘れない。

師匠が頭をひねる中、タンクトップを体に当てて「これってワンピースみたいに着たらいいんじゃないのかな」とリジーは言った。

「ワンピース！ 思いつきもなかったよ」

「でしよでしょ？ お師匠さま、試着してもいい？」

試着室に行つて着替えた少女は、鏡の前でくるりと回る。

普段よりかなり大きいサイズのものを着たりリジー。彼女の姿は不格好だったが、それが逆にスカル団らしい。

ぶかぶかの服を着る彼女は気だるげに見え、グズマ風に言うときかしていた。

「ねえお師匠さま、似合うかしら。どう思う？」

「ダサ……ええと、そうだね。スカル団っぽくていいと思うよ」

胸を張るリジーに苦笑いを浮かべるオボロ。

自己中ナルシストの彼は、いつもは思ったことを何でも言うてしまふ。

そんなオボロが柄にもなく、言いたいことを曲げて苦笑いを浮かべる理由。

それは、弟子に美的センスがないという現実からの逃避と、そもそもリジーは弟子に向いているのかという今更すぎる疑問からだった。

タンクトップならぬワンピースの値段は案外高い。

オボロは一万円をぽんつと払うと、ワンピースをリジーのリユックに入れさせた。もちろんつけていたペンダントもだ。

「ずっと着てちゃいけないの？」

「だってダサ、えつとき。リジーがスカル団に入ったなんて知ったら、キミのお母さんは悲しむだろ？ スカル団の格好は、みんなでスカル団の仕事をする時だけ着るんだ。いいね？」

すっかりぶすけたリジーに「明日アジトに来たら、帽子と顔を隠す用のバンダナをあげるよ」と彼女の頭を撫でながらオボロは言った。帽子とバンダナは屋敷に大量に余っている。加えて、男女兼用で全て同じデザインだからか、誰がどれを使っているのかわからなくなっていた。一つくらいかっぱらってもバレやしないだろう。

そんなオボロの魂胆も知らずに、この男にもマトモなところはあるじゃないかと店員は感動していた。

二つにまとめた男の髪は赤色で、これまた輪っかのように、二つにまとめた少女の髪は桜色だ。

もしかしたら、少女はこの男の妹なのかもしれない。いや、歳が離れすぎているから娘だろうか。

泣く子も黙るスカル団の幹部で変人奇人で有名な男も、実の娘にはちゃんと接する。

彼らの親子愛は本物なのだろう。それなら、少女がスカル団に入っているとしても不思議ではない。

先ほどまでとは打って変わってにこにここと笑みを浮かべると、また来てくださいね、と店員は二人に声をかける。

店員の言葉に気をよくすると、もちろんさ！ ボクはこの常連だからね！ とオボロは言った。

なんにも知らずに、オボロは機嫌よく店を出て行った。

服を買ってもらったからか、同じく機嫌よさげなりジーを連れて。もし彼が店員が考えていたことを知ったら。

まだボクは若いよ！ 子持ちなわけないだろ！ と怒り狂って暴れただろうが、全ては知らぬが仏だった。

さっそく仕事を始めたプルメリとは違い、ブティックで買い物をしてきたオボロ。

だが、彼はふらふら遊んでばかりいるというわけではない。

オボロは自己中だが、スカル団の仕事は案外ちゃんとする。

それにルザミーネのことが好きでないとはいえ、彼女の指示に従わないというわけでもなかった。

次にオボロがしたことはコスモッグについての聞き込み調査だ。もちろん、ただ話を聞くだけで終わる彼ではない。

「だから、青い珍しいポケモンなんて知らないってば。もういいだろ」

「なんだ。キミも知らないのか。」

けど、キミはボク達の前に敗れ去った。ちゃんと賞金、耳を揃えてキツチリおくれよ」

「おまもりこぼん持たせてるから二倍！　「ネコにこぼん」　できらにちよい足しなんだから！」

島巡りを始めたばかりのトレーナー達相手にダブルバトルで賞金を巻き上げていた。

師匠と弟子はよく似る。ついさつきリジーが捕まえたニャースで、一円でも多く金を取ろうと二人は必死だった。

パトロンがいるとはいえ、島中のチンピラを取り仕切るスカル団だ。大所帯の彼らは何かと金がかかる。

身もふたもない話、スカル団は万年金欠だった。

「ひー、ふー、みー、よー。けっこうお金かせいだわね、お師匠さま」

1番道路でバトルを終えたりジーはお札を数えていた。



さすがは銭ゲバ。ぱらぱらと諭吉をめくる彼女の手つきは見事なものだ。

「そこでニヤースをゲットして良かったよ。ここら辺のトレーナーは弱いから、存分に稼げる」

「あたしニヤースほしかったの。ちょうどよかった」

「ああ。リジーはお金が大好きだからね」

額の小判がキラリと光るニヤースは金運の象徴だ。ネコにこぼん〴〵も使えるし、小金稼ぎにはちょうどいい。

それにアローラのニヤースは、昔は王族が可愛がっていたとされている。縁起面でもぼつちりだ。

確かにリジーにピツタリだとオボロが頷くと、「それだけじゃないわ。ケチなだけとか思わないでよお師匠さま」とリジーはほおを膨らませた。

「アローラのペルシアンってとってもキュートじゃない？ オドリドリと一緒に可愛がりたかったの！」

「……へえ。アローラ人の感性は、ボクにはよくわからないよ」

どう考えてもあの丸顔はキュートではない。

どちらかと言わなくても、アローラ以外のペルシアンの方がオボロは好きだった。

シユツとしていてカツコよく。凜としていて美しい。

アローラのペルシアンには、それらの要素が全て失われている。

「まあ、ペルシアンの特性にはファーコートがあるからね。ニヤースが進化したら、バトルでもたくさん活躍するさ」

「楽しみだなあ進化するの」

二人は1番道路を歩きながら、ハウオリシティのビーチサイドエリ

アへ向かっていた。1番道路にいる見かけた限りのトレーナーと戦って、稼げるお金は稼ぎきったからだ。

もう夕方になろうとしているし、いい加減にリジーを家に帰さなければならぬ。なんだかんだ言って彼女はまだ九才だ。

ちなみにコスモッグの情報は未だゼロ。ハウオリシテイ周辺にはいないのかもしれないと、オボロは考えていた。

そろそろハウオリシテイに着くかどうかという頃だ。

道はずれに、島巡りの証をバッグに付けた少女が一人。ぽつんと寂しく立っていた。

リジーより少し年上の女の子だ。草むらで笑いながら泣く彼女の姿は、かなり怖い。

「ねえ、そこの子。キミだよキミ。どうしてそんなところで突っ立って泣いているんだい？」

「私、道に迷ったんです。ハウオリシテイに行こうと思ってたんですけど」

きつと安心したのだろう。オボロを見た少女は大粒の涙をぼろぼろとこぼし始めた。その間も、彼女は笑みを絶やさぬ。

ハウオリシテイはすぐそこだ。

なぜこんなところで迷うのか、オボロは不思議でならなかった。

冷やかしかとも思ったがすぐにその可能性は打ち消される。

人に会えて良かったよお、と泣きながら言う少女。その姿は切羽詰まり方が半端ではなかったからだ。

「じゃあボク達について来るといいよ。今からハウオリシテイに向かうところだから」

「ううう。人の思いやりが温かいです」

鼻をかむ少女の顔はすっかりぐしゃぐしゃだ。それでも彼女は口角を上げるのをやめなかった。

ここまで徹底して笑顔を崩さないと、いつそ清々しい。笑顔は元気の源だと言うが、人を元気にするどころかホラー映画にでも出てきそうだ。

そんな彼女に「なに、気にすることはないよ。情けは人の為ならずって言うじゃないか」とオボロは優しく声をかける。

続けて少女の手を取りながら、「旅はみちづれ世はなさけともね！」とリジーも励ました。

「その代わりと言ってはなんだけど、お願いがあるんだ」とオボロは言った。

「ハウオリシテイに着いたら、ボク達とポケモンバトルに付き合ってくれないかい？」

笑うのをやめない不気味な少女に、彼ら二人が優しくした理由は一つ。

新たにネギを背負ってきたカモ。

二人が少女を見逃すはずがない。オボロとリジーは、いかに少女から金をふんだくるかしか考えていなかった。

少女は涙をごしごし拭くと、にこにこ笑って話し始める。

あらまはこうだ。

トレーナーズスクールを出た少女は、街へ行く前にポケモンをゲットしようと思つてうろついていた。

だが、ポケモンを追ってウロウロしているうちに、見たこともない場所に来てしまったらしい。なんとも単純明快だ。

「私、ついこの間カントーから来たから道がよく分からなくて」と少女は言った。

「恥ずかしながら、迷っちゃいました」

照れながら笑う少女に、「キミもすぐになれるよ」とオボロは頭を撫

でる。それから「アローラは狭いからね。ボクもハウエンから来たんだよ」と言うと、彼はど派手にウインクをきめた。

三人はびよんぴよん段差を飛び越えながら、坂を下っていく。しばらくすると、前に見えるのは曲がり角。

右に曲がるとトレーナーズスクール、その先は目的のハウオリシテイだ。

「さあ着いたよ。じゃあ早速バトルをしようか！ ボクとリジーが相手のダブルバトルでいいかい？」

「それなんですけど、元気なポケモンがあと一匹しかいなくて」と少女は言った。

「使用ポケモンは一匹のシングルバトルじゃダメですか？」

オボロはあごに手を当てて、考えてますよ！ というポーズを取った。その仕草はどこかキザったらしい。

実のところ彼は一瞬で思考を終えていた。だが、考えているフリをなかなかやめようとはしない。

オーバーなりアクションを自然にするのはキャラを濃くするため必要だと、彼は信じていたからだ。

実際はアホっぽさが際立つただけだったが。

「ううん、しょうがない。今回はリジーが相手をするんだ」

「お師匠さまじゃなくて？」

「この強くて美しいボクがやったら結果は分かりきってるだろう？」とオボロは言った。

「それに、ボクはリジーの実力を知りたいのさ。これも経験のうちだよ。期待してるからね」

嘘である。

オボロの目当てはただ一つ。お金だ。

彼がリジーに託した理由。それはオドリドリが持つおまもりこぼ

んの賞金倍額効果を狙ったことだった。

それに彼女のオドリドリは比較的強い。島巡りの序盤も序盤のトレーナーが、叶うわけがないのは明らかだ。

そんな師匠の思いも知らず、「お師匠さまがそう思ってたなんて！ あたし、がんばる！」とリジーはやる気に満ちている。

じゃあいきますよ。と少女が言うと、二つのモンスターボールが宙に浮いた。

相手が出したのはニャビー。ほのおタイプのパートナーポケモンだ。

そして、もう一匹場に出たりジীরポケモン。

ふかふかと柔らかい体。気だるげな瞳。青い肌。そして額に輝くこぼんがキラリ。

ニャースだった。

いや、空気読めよ。

オボロは素でつつこんだ。師匠親の心の心弟子知らず知らずとはまさにこのことだ。

おまもりこぼんを持っていないニャースなんて、シングルでは何の役にも立ちやしない。『ネコにこぼん』だけで拾える金は、たかが知れているからだ。

それになぜゲットしたてのポケモンを使って、相手と同じ条件にしたのか。

オボロには全く理解できなかった。そこはオドリドリを使って、完膚なきまでにレベル差で殴るところだろう。

長年スカル団にいたからか。

グズマ譲りのスカした考え方を、すっかりオボロは身につけていた。

オボロがイラついている間にバトルは動き出す。

「ニャビー、ひのこ！」

少女がニャビーに指示すると、彼はほおを膨らませた。体内の炎を集めて作り出した、紅く輝く球がちらちらと浮かび上がる。

それを見てにやりとリジーは笑うと「させないわ」と呟いた。

ぬつとニャビーに近寄ると、ニャースがしたのは「ねこだまし」。

ばん！

弾ける音がした瞬間ニャビーはひるんでしまったようだ。光球が突然揺らいだかと思うと、空一面に溶けていく。

「イイわよニャース。そのまま　〴〵みだれひつかき　からの　〴〵かみつく　〴〵きめちやいなさい！」

たじろぐニャビーへ流れるように、ニャースは爪を振りかざす。ひとかき、ふたかき、三、四の五かき。

そのまま　〴〵かみつく　〴〵をしようとしたが、ニャビーも元の調子を取り戻したようだ。

大きく口を開け突進してくるニャースを、ひらり。

すんでのところですすまわすと、ニャビーは後方へ逃げた。

「まだまだなんだから。もう一回　〴〵みだれひつかき　よ！」

ニャースは跳び上がったかと思うとニャビーの方へ一目散。

尖った爪を振りかざし、ニャビーの急所を狙いかざす。

だが、相手の少女は落ち着き払っていた。

次に攻撃が決まったら負けてしまう。そんな時でも彼女は微笑むのをやめなかった。

ニャースの爪がニャビーの体に食い込むかといううちようどその時

だ。

「今だよ。かわして　〃ほのおのキバ〃　！」

少女が叫ぶと、待つてましたとばかりにニャビーは体をひねる。そのままニャースのふところに潜り込むと、無防備な腹にかぶりついた！

じゆうう、と肉が焦げる音。悲鳴をあげるニャース。

ニャースに歯を食い込ませたまま再びニャビーは地を蹴った。

——　〃たいあたり〃　だ。

オボロは自分の弟子の負けを確信した。

ほのおのキバは急所に当たったようだ。苦しみにあえぐニャースの体力は、残り少ない。

その上やけどを負ってしまったら、もうどうしようもないだろう。

ニャース、頑張つて！　とポケモンに声をかける弟子を尻目に、オボロはカバンから財布を出した。つつがなく賞金を払うためだ。

この場にグズマがいたら、弟子を信じてやれよと一発殴っているだろう。だがオボロはこう見えて現実主義者だった。

「アナタすごいわね。ニャースをずっと引きつけてからこうげきだなんて、フツー思いついてもやらないわ」

「そうなの？」

「ええ。だって、しっばいすることの方が多いもの」

勝負に負けたりジューは相手の少女を褒め称えていた。

少女は気恥ずかしいのか、照れたように笑っている。ニャビーのおかげだよ、と言って、戦い終えたポケモンを少女は撫でた。

「二人ともお疲れ様。キミすごいね。島巡りを始めたばかりとは思えないよ。リジーも悪くなかったし、捕まえたばかりのニャースで、よくやったと思うよ」

そう、リジーは別に下手な戦いをしたというわけではない。むしろ最善を尽くしたというべきだろう。

ただそれ以上に相手が見事だったのだ。

自分達の実力を正確に理解し、ポケモンを信じた相手の少女の胆力が。

「そういえばだけど。迷子だった時も、バトル中の時も、ずっと笑ってたのはどうしてなの？」

「おまじないみたいな感じかな」

「笑顔でいるとね、安心するんだ。なんでも大丈夫って気になってくるの」

「ふうん。今度あたしもマネしてみようかしら」

ガールズトークに花を咲かす二人はすっかり仲良しだ。

スカル団とは思えないな、と思いながら、オボロは少女に賞金を手渡す。少女が礼を言う、「当然のことだよ」とオボロはウインクをして言った。

「そうそう。キミは青い珍しいポケモンを見なかったかい？ カントーにもアローラにもいない、見たこともないようなポケモンだ」  
「宙に浮いてるエスパークタイプのポケモンなの。さがしてるんだけど、知らないかしら」

少女はにこにこ笑いながら、けれど、どこか申し訳なきように「ごめんなさい。知らないです」と二人に言った。

いや、申し訳なきようにではない。ほんの、ほんの少しだけ。少女の笑みが引きつったのだ。



「それは残念だ。ドロボウに盗まれたって、知り合いが探しているね」

「キラキラ光って、とつてもキュートなポケモンなのよ」

「ううう、役に立てなくてごめんなさい」と少女は言った。

「早く見つかるといいですね！ 青くて光ってて綿菓子みたいなポケモンなんて、私も一回見てみたいなあ」

ふいにオボロはカバンの中を漁った。取り出したのは紙と羽根ペンだ。さらさらと何かを書いたかと思うと、オボロは少女に差し出した。

それは、ルザミーネもグラジオも知らないもの。

正真正銘のスカル団員しか知らない、彼の連絡先。

「これ、ボクのメアドなんだ。もし何か分かったらさ。教える気があつたらでいいから、ボクに連絡してくれよ」

半ば強引に紙を握らせながら「先にアローラに訪れた先輩として、島巡りのアドバイスができるかもしれないしね」と言った後、さらに彼はこうも続けた。

「ボクの名前はオボロ。こっちは弟子のリジーだ。ボクらの出会いを記念して、キミの名前を覚えてくれるかい？」

「私、ミツキって言います。こちらこそ、よろしくお願いしますね！」

## 第五話 【メガやす跡地】

じりじりと肌を照りつける太陽は、アローラでは見ない日がない。日差しはさんと降り注ぎ、大きな池はこんこんと水をたたえている。その恩恵を木や花はたっぷり受けているからか、どれも生の喜びにあふれていた。

そんな中、オボロとリジーがしていたのはポケモンバトルだ。

初めて二人が出会った日には、たまになら指導をすと言っていたオボロ。だが彼は完璧主義者のナルシストだ。

いざ弟子を育ててみると意外なことに彼はきちんと指導した。

どれくらい意外かというと、意外すぎてスカル団全員がざわめき、天変地異が起こるのではと明日の天気を心配したほどだ。

てるてる坊主をしたつぱ達は屋敷中に吊るし、大好きなエネココアをグズマがこぼし、風邪を引いたのかとプルメリが心配する。そんな有様だった。

弟子を取って数日経った今では、二人の修行風景はすっかりスカル団に馴染んだようだったが。

リジーの手持ちにニヤースを加え、装い新たにするのは二対二のシングルバトル。そこで繰り広げられるのは互角の勝負だ。

オボロが手加減しているとはいえ、リジーはめきめきと強くなっていく。それにもうポケモンをないがしろにすることも彼女はない。

ニヤースも十分懐いているし、そろそろペルシアンに進化する頃かもしれないな、と彼は思った。

——ホントにイイよね、若さつてのはさ。スカル団のみんなや弟子達を見る度に、ボクは思い知らされるよ。

そうはまったく見えないがオボロはスカル団最年長。十代が多いしたつぱ達よりはもちろんのこと、グズマやプルメリよりも二つか三つは上だった。

若さゆえの成長の早さを羨ましく思いながら、彼はアズマオウに指しを出す。

磨き上げられた自慢のツノで繰り出したのは「メガホーン」。白く回転するツノを喉元に突きつけ、彼女はオドリドリにトドメを刺した。

「お疲れさまオドリドリ」とリジー。ポケモンをボールに戻す彼女に、「ちよつと休憩にでもしようか」とオボロは声をかけた。

手に汗握る白熱バトルを終え、リジーが無性に恋しくなったもの。ひんやりと冷たく、甘くてのどに消えていく夏場の必需品。アイスクリームだ。

マリエシテイにあるマリエ庭園。その茶屋で二人はひと時の休憩と洒落込むことにした。

リジーが頼んだのはアイスクリームとサイコソーダ。オボロはだんごとほうじ茶だ。

ジョウトの人間が開いたこの店は自然と故郷が思い出される。アローラでは他に飲めないほうじ茶が、オボロは時たま無性に恋しくなるのだ。

それはホウエンの人間としてのさがなのだろう。

二人は甘味が出るのを待つ間自由に時を過ごす。

リジーはアローラのマップを広げ、オボロはほうじ茶をすすりながら通信機をいじっていた。

「ねえお師匠さま。あたし、あそこに行きたいわ。ほらメガやすが前にあったとこ」

「えっ。あんな廃墟に何の用なんだい？ あそこは美しくもないし、廃墟はポータウンだけで十分だよ」

心底嫌そうな顔をするオボロに、「だってポータウンにミミツキユはいないもの」とリジーは口を尖らせる。

「前に小耳にはさんだの。あそこにミミツキユが住んでるって」

三匹目のポケモンはミミツキユがいいらしい。だだをこねる少女に、「いずれ行く必要があったし、しょうがない」とオボロ。彼はため息をつきながら、なおも通信機をいじるのをやめない。

「お師匠さまは、さっきからなにをしているの？ メール？」

その後小さく、相手はあねさんかしら。と彼女は呟く。あねさんというのは言わずもがな、スカル団の幹部プルメリのことだ。

「メールを返してるのさ。ほら、この間会った、ずっと笑ってた女の子だよ」

「ミツキ？」

「そうそう。彼女、メレメレ島の大試練を終えたらしいよ」

「それってすごいなの？」と言うリジーに、「かなり良いペースだね」とオボロは言った。島巡りに興味がない彼女はふうん、と呟くと、「なんでお師匠さまはミツキとメールしてるの？」とオボロに言った。

「あの時、他にたたかった人にはメアド教えなかったのに。ミツキにだけ教えるなんて」

「ああそれね。彼女がコスモッグについて知ってるからだよ」

そう言うと、オボロはだんごを一口食べた。ようやく出されたお菓子は甘く優しい味がする。舌鼓を打った後、不思議そうにしているリジーに彼は答えを教えることにした。

「コスモッグのことを尋ねた時、彼女は知らないって言っただろ？」

「うん、そうね。そうだったわ」

「けれど、彼女は綿菓子みたいなポケモンだと言ったね。ボク達は

形まで説明してないのに」

「あ！ たしかに！」

そういえば青いとか小さいとか、浮いてるとか光ってるとか。あたし達そんなことしか言わなかったわ！ とリジーは目を丸くしている。

「彼女はコスモッグを見たことがある。それは間違いない」

ちなみに今も彼女は知らないって言うてるけどね、とオボロは付け足した。

「けどお師匠さま。なんでミツキはウソなんかついたのでかしら。コスモッグを見たからって、ウソをつく必要なんかないわ」

「普通はそうだ。けど、彼女がドロボウと友達だったらどうだい。リジーだったら言う？」

「……ぜつたいに言わないわ」

「庇うだろ？ 彼女はドロボウと繋がっているのさ」

そう言うと、オボロはだんごをさらにかじった。それから、「ミツキのことはスカル団の誰にも言っちゃいけないよ。じゃなきや、メガヤすには連れて行かないからね」と彼は言う。

「なんで？ コスモッグ、早くつかまえた方が代表さんもよろこぶわ」

「急いては事を仕損じるって言うだろ？ 勘付かれて逃げられたら元も子もないよ。」

泳がせておくのが大事なのさ。その間にドロボウの友達と友好を深めて、ね」

ほら返信が来たよ、と彼はメールをリジーに見せた。

『アーカラ島に着きました！』と書かれたメールには、写真が一枚添付されている。

友人達と撮ったのだろう。ピースをしている三人組は、どの子もこの先の冒険を楽しみにしているようだ。

「右の子がリーリエで、左の子がハウって言うんだってさ」

「もしかしてこの子って」

「例のドロボウだね。顔が割れてると思ってなかったんだらうけど、ミツキの詰めが甘くてよかったよ」

オボロは再びメールを打ち始めた。

『一つ目の島お疲れ様！☆\*:.:.。o(≡▽≡)o:.:.:\*☆

アーカラ島のキャプテンは三人いて、それぞれみず・ほのお・くさタイプのエキスパートだから、ミツキもハウくんも気をつけてね(・

▽・・)笑』

と顔文字を除けば当たり障りのないアドバイスを送る。

オボロは通信機を閉じると再びだんごをかじり始めた。食べ終わった後に向かうのは、かつてメガやすがあった場所。

そこでオボロは掴まなくてはならない手がかりがあった。

それはコスモッグとは別の、彼自身のためのことだ。

## 第五話【メガやす跡地】

二人が訪れたのは14番道路の奥の奥。かつて、ポータウンと同じようにカプ・ブルルの罰を受けた場所。栄えていた跡の残るスーパーの残骸。

その入り口の前にあるバリケードを、リジーはげしげしと蹴っていた。

「お師匠さまあ。ここ、島めぐりのトレーナーしか入れないのかなあ。変なバリケードがあつて、通れないし」

「なにごとにも活路はある。スカしたボク達は正義の味方みたいに、真っ正面から行くのが良いってわけじゃないよ」

そうオボロは言いながら、横にある坂道を登っていく。くるりと振り向いてから弟子を見下ろすと、ばちんとウインクをして彼は言った。

「つまりキミには、観察眼がないってことさ」

坂道の上にあるのは金網だ。その奥には、スーパーメガやすだった建物がひっそりと佇んでいる。

オボロはゴージャスボールを取り出すと、にやりと笑って開閉スイッチを押した。

「さあおいで。マイ・スウィーティー、トドゼルガ！」

現れたのはトドゼルガ。アローラ地方には存在しない、こおりタイプとみずタイプのポケモンだ。

「あたしこのポケモン見たことないわ」とぼうつと見つめてリジーは言った。それに気を良くしたオボロは「ふふふ、どうだい。彼女はクールビューティだろう？」とどこか得意げに話している。

「さあトドゼルガ、はかいこうせん」でこの美しくない金網をブツ壊しておくれよ！」

オボロが命令すると、トドゼルガの二本のキバの狭間から白い白い

光が集められていく。いつの間にか大きな球を形作っていたかと思うと、いきなりきゅつと縮んで、それは突然解き放たれた。

轟音が響き渡り、土煙が巻き起こる。

反射的に耳を塞ぎ、目を閉じてから、リジーはあたりが静かになるのを待った。

もう大丈夫だよ。とオボロに声をかけられてから、おそろるおそろる目を開く。するとそこにはリジーが想像していなかった光景が広がっていた。

まず、目の前にあった金網は跡形もなく消し飛んでいる。

それだけではない。向こう側にあった遠く離れた金網まで貫通したようで、毛糸のような金網だったものはぶすぶすとくすぶつていた。

さらにいうと建物の入り口にも焦げ付いた後がバツチリ残されている。

「お師匠さま、やりすぎだよお」

「まあ結果オーライさ。邪魔なものとはなくなったわけだし、建物の中に入ろうか！」

金網だったものを飛び越えると、リジーは意気揚々とステップを踏んだ。その後ろをオボロはゆったりと歩いていく。

ところどころ風化し、苔むしている建物は見るも無残だ。

メガやす跡地。それはギイツと音を立てて彼らを暗闇に迎え入れた。

「ううう。噂に違わずここは嫌なところだね。真っ暗で、じめじめしててさ。オマケにゴーストタイプの巣窟だ」

「お師匠さまは暗いところがにがてなの？」

「苦手なんてもんじゃないよ！ 大っ嫌いさ、こんなところ！」

ついでに言うなら埃っぽいし。とオボロはぶつくさ言いながら、商



品棚の中を漁り始めた。

乱雑に積まれているスナック菓子や飲み物は、何年も前に賞味期限切れのものばかりだ。

しかも、どれも袋が破れていたりベコベコに潰れていたりにしている。カプの罰を受けた名残だろうか。

棚を調べ終わった彼は、今度はポロックケースからポロックを取りだした。それを棚に並べると、少し離れて様子を見る。

「お師匠さま何やってるのよ」

「ここは廃墟だけど、たまに島巡りの試練の間として使われてるだろ？」

「そうみたいね。バリケードがあつたくらいなもの」

「試練の間には特別なポケモン、主ポケモンがいるんだ。ボクはそいつを呼び出したいのさ」

オボロは急いで物陰に隠れた。

それから彼はカバンを漁るとボールを手取る。いつバトルになっても構わないようにだ。

しゃがみ込むオボロに、「ゲットするの？」とリジーは聞いたが、「いや。バトルをした後はどうでも」とそっけなく彼は答えた。

「知りたいことを確認できたらそれでいい。ボクは主ポケモン自体には興味がないからね」

「コスモッグにも関係あるの？」

「ううんと、そうだね。一応あるよ」

オボロは「主ポケモンはミミッキユらしいから、バトルを終えたら譲ってあげるよ」とリジーに言うと、彼女の瞳はきらきら光る宝石のよう。

「特別なミミッキユなんてがぜんやる気が出たわ！ あたしも頑張

る！」

「ポケモンがビックリするから、騒がないでくれよ頼むからさ！」

その時、ぼんやりと部屋を照らしていた電球がふっと消えた。

黒い影が目の前をよぎったかと思うと、音を立てて棚は激しく揺れる。

ぐあん。ぐあん。ぐわあん。

気がつけばオボロが置いたポロツクはいくつか消えていた。耳をすませば、聞こえるのはぼりぼりと何かをかじる音。

オボロはゆっくり、本当にゆっくりと目を開ける。彼が見たのは、薄汚れた黄色い麻袋に、くれよんで描かれた不気味な顔。

暗闇の中で爛々と光る妖しい目。

大きな体躯。

そして、袋から伸びているのは禍々しいほどに漆黒の爪。

「ミミツキュだ！ カツワイイー！」

「あれのどこが可愛いんだい!? さてはキミ、目ん玉腐ってるんじゃないだろうね！」

いつもの決めゼリフを叫ぶのも忘れて、オボロはゴージャスボールを放り投げる。

トドゼルガが現れると、オボロは「とにかく　〴〵おりのキバ〴〵

！」と無我夢中で指示を出した。

あついしぼうで覆われた、大きな大きなトドゼルガ。その外見からは予想もできないほど彼女は俊敏だ。

地を蹴った彼女はミミツキュの首にかぶりつくと、相手の**ばけのかわ**を剥ごうとした。

この場合の**ばけのかわ**はミミツキュの特性のことではない。文字通りの意味である。

ミミツキュと戦ったことのないトドゼルガは、相手が被っている麻袋を剥ごうとしたのだ。

「やめろトドゼルガ！ 戻れ！」

ミミツキユの正体が晒される直前。オボロはトドゼルガを強制的にボールへ戻す。

中身を見ることなく済んだからか、オボロはほっとひと息ついた。その一瞬の隙にミミツキユはゴーストとゲンガーを呼び寄せると、どんよりと妖しい雰囲気醸し始める。

ぴりぴりと張り詰める空気。禍々しいほどに不気味に光り始めるミミツキユ。

——やはり似ている。主ポケモンは、あのポケモン達に。

オボロは口角を上げると、別のボールを取り出した。飛び出したのはマリルリだ。

先ほどまでの焦りはどこへやら。オボロは不敵な笑みを浮かべると、ミミツキユに向かって人差し指を突き刺した！

「マリルリ、*ぶぶき*で全員なぎ倒すのさー！」

店の中に吹き荒れる吹雪は三匹を凍てつかせていった。

そうはさせるかとミミツキユは、真っ黒い爪を一気に伸ばしてマリルリにぐいぐい迫っていく。

すっかり凍りついてしまった、仲間ごとなぎ倒して。

オボロは「やれやれ *シャドークロー* とは無粋な子だね」と苦笑いを浮かべている。

けれども彼は、これ以上マリルリに指示を出す気はカケラもなかった。

もう一匹味方側の場に出ていたのはオドリドリ。

彼の弟子が、戦いたくてうずうずしていたことに気がついていたら

らだ。

「オドリドリ、あたし達も ぼうふう”” でお師匠さまを手伝うのよー！」

瞬間、床に落ちていた物という物が巻き上がる。

オドリドリが羽ばたくと、ミミツキユに襲いかかるは風の渦。麻布をはためかせ浮かび上がると、ぐるぐる猛回転をし始めた。

「まったく。仲間までこうげきするなんて、ぜったいぜったいダメなんだから！」

ゲットしたらおしおきしてあげる！ と息巻くと、リジーはこおりなおしを取り出した。

彼女はそれを慣れた手つきでゲンガーやゴーストにかけていく。みるみるうちに溶けていく氷。つかの間の眠りから目覚めた、重いまぶたをゆつくりと開く二匹をリジーは撫でた。

立て続けに強力な攻撃を受けたミミツキユの体力はほとんどない。ふらふらと歩く姿はもう虫の息だ。

その様子を見てリジーはほくそ笑む。待ちに待った時が訪れたのだ。

空のこおりなおしをリュックに入れると、手に取ったのはモンスターボール。

じつくり狙いを定めると、勢いよく右手を振りかぶった。

リジーは モンスターボールを なげた！

トレーナーに はねかえされた！

ひとの ポケモン とつたら だろぼう！

「だめなの。アセロラのミミックユをゲットしようとしたら。そんな不屈き者は誰かと思ったら、スカル団のヤツらだったんだね！」

「デケエ音がしたから何かと思っただけだよ。まさかオボロ。お前さんだったとは、おじさんちよいと予想外だったよ」

かつかつと音を響かせながら、こちらへ歩いてくる二人組。にこにこ笑う紫色の髪をした少女と、仏頂面の中年はスカル団のオボロにも因縁深い。

同じ街にも住んでいるのもあって、後者の方は毎日顔を合わせているほどだ。

ぴりぴりした空気を放つ彼ら二人に驚いたのか、リジーはオボロの背中に隠れた。ちらりちらりとのぞきながら、彼女は様子をうかがっている。

そんな彼女を安心させようと、軽く頭をぼんぼんと彼は叩いた。

「やあ！ ウラウラのキャプテンと島キング殿じゃないか！ キミのポケモンだつて知らなかったんだ。悪いね」

「どうだか！ スカル団の連中の言うことなんか、アセロラ信じてやらないの！」

ぶんぷんと怒るアセロラに、オボロは面倒そうに頭をかいた。ボク達もう何もしないし、ポロツク分けてあげるからそこをどいてくれないかなあ、と彼はブツブツ呟いている。

そんなオボロにクチナシは「どういうつもりだ」と睨みつけた。

「お前さんは最近、あちこちの試練の間を荒らし回ってるらしいじゃないか。それも、グズマの奴の指示じゃない。お前さんの独断で」

「よく調べたね。さすがは島キング殿だ！」

警察っていうのはダテじゃないね、と拍手をするオボロ。わざとら

しく驚きながら手を叩く彼の考えは、読めない。

まんまるく目を開きながら笑うオボロを見て、クチナシは眉間のシワを深めた。

「お前さんの目的は一体なんだ？ 何をしようとしているんだ？」

「スカル団としては知らないけど、ボク個人としてはね。キミ達に危害を加える気はないよ」

スカル団にも、島巡りに関わる者達にも、エーテル財団にも、アローラにもね。とオボロは微笑んだ。

それから彼は得意のウイंकを決めると、クチナシに向かってこう言った。

「ボクは故郷に帰りたいんだ。故郷に帰るためだけに、ボクは動いている」

「ハウエンだろ？ 飛行機に乗ったらすぐつてもんだ」

「それがそうもいなくてさ」

オボロはやれやれとため息をついた。彼はリジーの手を握り、もう片方の手で指をぱちんと鳴らす。

するとマリルリがぷうつとほおを膨らませて、吹き出したのは泡、泡、泡の数々だ。

泡の大群が視界を埋め尽くすと、そそくさとオボロとリジーは走り去る。

なにせ相手は島キング。それにキャプテンのオマケ付きだ。

自分達のポケモンは傷を負っていないとはいえ、彼ら二人を相手にするのは厄介なことこの上ない。

三十六計逃げるに如かず。

逃げるのは恥でもないし役に立つ。むしろ見栄を張って逃げない方が恥だし、間違いなく美しくない。

そして今回も正しい判断を下したボクはやっぱり美しい。

メガやす跡地を後にしながらオボロは悦に浸る。彼はリジーと走る最中も、前髪をかきあげドヤ顔を浮かべていた。

カプの村まで逃げて来たオボロとリジーは、カフェスペースでお茶をしていた。

メガやす探索の疲れを癒しながら、リジーはハートスイーツを食べている。オボロはというとミツキへのメールを打っていた。

『今日も一日お疲れ様ヨシヨシ、(ー)』

オハナタウンで休むのかい？ 良いところだねボクは好きだよ  
(?ー?) 笑

明日の試練、みずポケ対策忘れずに頑張つてね! (\*∨\*)

p. s. アーカラ島の試練が全部終わったら、大試練の前にボク達ともう一回バトルしないかい?』

メールを打ち終わったオボロはカフェの飲み物を堪能することにした。二人が飲むのは、グランブルマウンテンにエネココアだ。

熱々のエネココアを美味しく飲むリジー。「キミは本当グズマくんに似てるよね」とオボロが呟くと、リジーはオボロの方へ向いてぱちぱちと瞬きをした。

「お師匠さまには?」

「ん?」

「あだし、お師匠さまには似てるかしら」

「そりゃあ師弟だからね。少しは似てるんじゃないかい?」

それを聞いたリジーは嬉しそうに笑う。オボロはグランブルマウンテンを一口すすると、彼女の後ろの方を指差した。

「ところで、リジীর後ろにさっきのゴーストがいるみたいだけど」

リジীর振り向くと、そこには傷だらけのゴーストがいた。

とどこどころ凍傷の跡が残るポケモンは、さっきこおりなおしを使った個体に違いない。

ゴーストはリジীরすり寄ると、彼女のカバンを漁り始めた。

彼が取り出したのはモンスターボール。それをリジীর握らすと、こちらをじつと見つめている。

「アナタ、あたしのポケモンになりたいの？」

こくりと頷くゴーストは、彼女がトレーナーになる瞬間を今か今かと待ちわびているようだ。「そこまで言われちゃ仕方ないわね」とリジীর言うと、モンスターボールをゴーストの体に当てた。

ゴーストの体はボールに吸い込まれ、ボールはカチツと音を立てる。手の中で光るモンスターボールは嬉しそうに笑った気がした。

「ポケモンの方から選ばれるなんて、さすがボクの弟子！ 心からの祝福を贈りたいね！ そんなスペシャルなりジীরにはこれをあげるよ！」

オボロがポケットから出したのは何の変哲もなさそうな石ころだ。役に立つかもよ、と彼は言つてそつと机の上に置いた。まるで小さな石はつやつやと光っている。

「かわらずのいしき。ポケモンに持たせておくと、進化しなくなるんだよ」

「お師匠さま、いらぬから押しつけないだけでしょ」

白い目で見るとリジীর気がつかないふりをして、彼はグランブルマ



ウンテンを煽った。知らんぷりをする師匠に、この人は本当に自由人だと彼女は一周回って感心する。

リジーは机の上に置かれた石をそつとオボロの方へやった。それから「けどあたしはいらわないわ。お師匠さまが持つてるのね」と言うと、再びエネココアを飲み始める。

「場所を取るから嫌なんだけどなあ。売ってもお金にならないし、捨てるのも少しもったいないし」

ネチネチ文句を言いながら、かわらざるのいしをポケットにオボロは戻す。そんな師匠に「ごめんねお師匠さま」とリジー。だが、「けどね」と彼女はさらに続けた。

「あたしはポケモンの進化を止めたくないの」

「なんでだい？ 進化前の方が美しいポケモンだっているじゃないか」

「ずっと昔のすがたにとらわれているのは、よくないと思うの。やっぱり人間もポケモンも、今を生きるのが大切なのよ」

## 第六話 【ポロツクキット】

薄暗い屋敷の奥の奥。場違いにきらびやかな一室で、オボロとりジーが並べているのはきのみだった。

オレンの実。チーゴの実。クラボの実。フィラの実。ヒメリの実。モモンの実。……とにかくたくさん！

床一面に置かれたきのみの数々。それを見たりジーはめまいがしそうだった。

今から下ごしらえが始まるのだ。茹でたり、刻んだり、すりつぶしたり。

デリケートなきのみに合わせて、調理法を変えながら。

反対に、師匠のオボロはというと楽しみで楽しみでしようがないらしい。

「したつぱ達に集めさせて良かったよ！ ポロツクマスターの腕になるねえ！」と包丁やぎるを持つと、彼はスキップをしてキッチンへ向かった。

持てるだけのきのみを抱えるとリジーも急いでついていく。痛まないようにそつと運ぼうと、けれども早く走ろうともする彼女はどこか滑稽だ。

すれ違うスカル団の面々はそんな師弟の姿を微笑ましく思っていた。

できたらあたしにも食べさせてよだとか、味見係に自信はありますからだとか、彼らは好きなように声をかけていく。

そんな仲間達に、もちろんよ！ と笑い返すリジー。それからきのみをこぼさないように気をつけて、リジーは階段を駆け出した。

全ては美味しいポロツクを作るため。面倒くさいポロツク作りも彼と彼女の修行の一環だった。

きのみを水にさらしてふきんで水気をきる。それからヘタをくり抜くと、くるくると包丁を回すのだ。

手際よく皮をむく師匠はカロス料理のコツクみたいだ、とりジーは

思った。

固くて、でこぼこしたきのみ達の皮をすするとむいていく様。それはまるで恋人のドレスでも脱がすかのように、なめらかで手慣れていた。

皮をむいたら今度はきのみを切っていく。

あつちはざく切り、こつちは輪切り。そのきのみは種をくり抜いた後、すりおろし。

したっぱ達がかき集めたアローラ中のきのみ達。そのあまりの多さ、種類の多さにキッチンではんやわんやだった。

さすがのオボロもうんざりしたようで、きのみ少量に文句を言っている。ここまで集めろとは言っていない、と呟きながら、鮮やかな包丁さばきを見せていた。

蝶が舞うように刃をすべらすオボロの横で、慣れない刃物にリジ―は悪戦苦闘している。体重をかけて切っていく様は危なっかしいと、彼はひやひやしながら見守っていた。

下ごしらえをようやく終えたオボロとリジ―は、思わず二人で抱きしめ合う。

最後に下ゆでをして軽くアク抜きした時には、もう日はすっかり傾いていた。

「やっとこさ終わったわ。お師匠さま。あたし、もうくたくた」

「まだまだよ。きのみが新鮮なうちに、ポロツクにしなくちゃ」

オボロは下ごしらえしたきのみを、手際よくポロツクキットに入れていく。「近ごろは便利だねえ。ブレンダーじゃなくても作れるしさ」と言って、彼は蓋を閉めた。

スイッチを押すと、まるで改造バイクかというほどにポロツクキットは大きな音を立て始める。きのみを攪拌していく箱を押さえながら、オボロは鼻歌を歌っていた。

とはいえ、別に暇だったというわけではない。

どろどろのきのみを四角く形作り、オーブンで焼くタイミングを彼

は注意深く図っていた。

ある程度経つと、オボロはポロックキットからペースト状のきのみを取り出した。

「ポロックキットで焼かないの？　きのみをいれた後は全部やってくれるのに」

「オーブンで焼いた方が細かくカスタマイズできるのさ。

キットは失敗しないけど、オーブンの方が美味しくできる。だってら自分で焼くよね」

生地を伸ばして型を抜くとオーブンに入れて十五分。

焼きたてほやほやのポロック、名付けてオボロスペシャルのできあがりだ。

彼独自のレシピで作り上げられたポロックは、あっさりとしつつも甘塩っぱい。しつこつなく軽くてさくさくしているポロックは、ポケモンだろうと人間だろうと、手が止まることはない美味しさだ。

味見を終えて満足したオボロは「次はリジーだけでやってごらん」と言うと、弟子にポロックキットを差し出した。

リジーはそれを受け取るときのみをぼんぼん入れていく。

彼女が目指すのは、ほのかに甘くてほろ苦いものだ。

ポケモンフーズに合うように、手持ちの三匹が喜ぶように。

気合い十分。リジーはきのみを詰め込むと、祈るようにしてスイッチを押しした。

## 第六話 【ポロックキット】

「それで、できあがったのがコレかよ」

「そうだよ！　グズマくんにも差し入れさ！」

どうやら今日はこのナルシストも合言葉を覚えていたらしい。

部屋にやってきたオボロは「他のしたっぱ達にはもう配ったからね。まだなのはプルメリちゃんとかグズマくんだけさ！」と言うと、グズマとプルメリに恩着せがましく小瓶をよこした。

中に入っているのはポロックだ。少し不恰好で茶色い塊は、オボロの横にいる少女が作ったものだとすぐに分かる。

「ポロックつてのは、確か人間が食べても大丈夫なんだったか」  
「もちろんさ！ そりゃあ原材料はきのみだけだからね」

グズマは小瓶を開けるとポロックを一つ、つまんだ。あんぐりと口を開けると、それを放り込んでポリポリと噛み砕く。

ぎゅうぎゅうに押しつぶされたポロックは、砂糖を鍋で煮詰めている時に電話がかかってきて、よそ見をしてしまったような味がするな、とグズマは思った。

つまり何が言いたいかって、焦げ臭くて苦いってことだ。

「失敗しちゃったの。すみませんグズマさん」と申し訳なさそうにする少女。グズマは黙ってマグカップに口をつけると、一息ついた。

「食事で肝心なのは糖分で、それ以外の味覚はスカしてないと考えているグズマ様だが。

この苦さ、エネココアのみつまみとしては悪くないってよお。オレ様は思うぜ」

彼は小瓶を振って何個かポロックを出すと、またまた口に放り込む。

強い苦味の中にある、かすかな甘み。

単体ならば微妙であることは間違いない。

だが、焦げ付いたポロックは甘くて濃厚な飲み物とは絶妙に合う。苦いから甘い、甘いから苦いの無限スパイラル。それはグズマを惹き

つけて止まなかった。

横にいるプルメリもひと口食べると、「初めてにしちや上出来なんじゃないかい？」と評価する。

「特段マズいつてわけじゃないし普通に美味しいよ。それにポロツクってのは、作るのが難しいんだろ？ あそこまで完璧に作れるオボロの奴が異常なのさ」

元々オボロはコーディネーターだったからねえ、と言いながらプルメリはポロツクを食べ進める。

クッキーよりは固くて栄養が詰まったこの食べ物は、小腹が空いた時に良いなど彼女は考えた。ダイエットにはちようどいいかもしれない。

彼女の派手な腹だしファッションは、日課の腹筋とカロリーコントロールという涙ぐましい地味な努力のもとに成り立っていた。

プルメリはズボンのポケットに小瓶をしまうと、残りは仕事の合間にも食べるよと礼を言う。

「そんな落ち込むことないつてば。そりゃ、オボロのと比べたらアレだけどき」

「その通り！ ボクを作るポロツクがあまりにもラグジュアリーだったからさ。ボクは故郷でポロツクマスターとして名を馳せたくらいだからね！」

いやあ、プルメリちゃんにも分かって貰えるなんて嬉しいなあ！とオボロがしたのは高笑い。それからしよぼくれる弟子に向かって、励ますように彼は言った。

「リジー、キミは上手い方だよ。ボクの知り合いなんかポロツク作りがいつまで経っても下手でね。炭みたいな味のやつ作ってたから」  
「けど、あたし女子なのにな」

「その子女の子だよ。しかもキミより歳上」

目を丸くするリジーに、ボクが凄すぎるだけだから安心しなよとオボロは続けた。

弟子を慰めるオボロを見て、案外まともな部分もあるんだよねとブルメリは彼の評価を上方修正する。

勝手気ままに、なにかとやらかすオボロ。軽薄な彼の普段の行いを見ていると、ついそのことを忘れてしまう。

根は優しい奴なんだけどき、とブルメリが思った時だ。

彼女はオボロのことを何ひとつ知らないことに気がついた。ずっと一緒にやってきた、スカル団の仲間であるにも関わらず。

自己中で、ナルシストで、美しいものをこよなく愛すこの男。

彼の美しさの基準は謎だが、どこか一本筋の通ったものを感じさせる。手持ちポケモンとスカル団には優身内しいが、興味のないものにはとことん非情。

ハウエンのコンテストで鍛えたという彼は、グズマには劣るものの、自分と同じくらい強くあつという間に幹部になった。

自分が知っているのはそれだけだ。後はコンテストでの武勇伝くらいだろうか。

彼はコンテスト以外の故郷ホウエンの話をしたがらない。家族のことも、どこで育ったのかも、どんな友人がいるのかも、大好きなコンテストをなぜ辞めてしまったのかも、何もかも全て。

なぜアローラに来て、なぜあんな状態で倒れていたのかも、初めて会った時からだんまりだ。

大げさに振る舞う彼は、分かりやすいように見えて全てのことを隠している。

そもそもコンテストで鍛えた？

コーディネーターというのは、ポケモンさえ美しければそれでいい。バトルの腕はいらぬはずだ。

プルメリは途端にオボロが恐ろしくなった。彼が得体の知れないなにかのように思えた。

なんだかんだ言つて気が置けない仲間だと思つていたオボロが、遠い遠いところにいるような気がしたからだ。

もしかしてオボロは自分達を裏切るのではないだろうか。スカル団を、見捨てて。

「どうしたんだいプルメリちゃん。いきなり百面相してさ」

深く、深く沈んでいた想像の海から浮き上がって、真つ先に目に入ったのは当の本人。

プルメリは何かの間違いだと思ふことにした。

心配そうにこちらを見るオボロ。仲間思いの彼に、そんな疑いをかけるのはバカバカしいと思つたからだ。

オボロは仲間で友人で、行動を共にする大切な同志だ。それは、この先も変わらない。

「ああ。いや、考えごとをしてたのさ。そんな大したことじゃないよ」

怪訝そうな顔をするオボロに、なんでもないつてば、と言うプルメリ。そんな二人のやり取りを弟子はまじまじと見つめていた。

「グズマ、そう言えばさ。最近、したつぱ達を痛めつけに回つてるといふ子供がいるのは知つてるだろ？」

「ああ。黒髪の赤い帽子をかぶつたガキだったか」

オボロトリジーの頭に浮かんだのは一人の少女の姿。1番道路で出会つた、常に笑顔を崩さない島巡りの参加者ミツキ。



コスモツグ絡みじゃなくミツキのことを聞くとはね、とオボロは内心かなり驚いていた。しかも、スカル団に仇なす者として。

「その子がね。グラジオとバトルをして、勝っちゃったらしいのさ」  
「へえ。あのボンボンくんにかい？」

それは結構やるなあ、とオボロは口笛を吹いた。スカル団の全員と会っていたとばかり思っていたリジーは「お師匠さま、だれそれ。スカル団なの？」と首をかしげる。

「スカル団が雇ってる用心棒だよ。ビジネスパートナーってところかな」

「ふうん。強いのか？」

「それなりにはね」

二人が喋っている横でグズマはしたっぱを一人呼んだ。マグカツプの中身のお代わりを注がせるためだ。

それから残りのポロツクを食べ尽くし、彼はエネココアを一気に煽る。

飲み終わった彼は思いきりひじ掛けを殴りつけると、にやり。プルメリに向かって「お前が相手してやれや」とあごで指図をした。

「スカル団がそんなガキになめられっぱなしでいいのかよ。いいわけねえよなあ？ プルメリ。そのガキ見つけたら、ブツ壊れるまでオシオキしとけや」

「言われなくともさ。可愛い可愛いしたっぱ達の鬱憤を晴らすつても、アタイの役目だからね！」

自分達の居場所であるスカル団を心から愛す、グズマとプルメリ。不敵な笑みを浮かべる彼らはスカル団の名に恥じず、スカしたワルのようだった。

「ぎつすがプルメリちゃん！ したっぱ達のために頑張るなんてかっこいい！」とのんきに横で拍手をしている、オボロとその弟子を除いてはだが。

グズマは空っぽの小瓶をオボロに投げつけた。

軽く投げられた小瓶は彼の頭にダイレクトアタック！

かなりいい音が部屋に響き、ころころと瓶は床に落ちる。

頭を押さえる師匠を尻目に、弟子は小瓶を拾うとグズマに手渡した。「おう、サンキューな」と受け取ると、グズマはもう一度投げようとする。

三度目の正直とはいうが二度も当たってやる気は毛頭ない。

そうはさせるかと飛んできた小瓶を受け止めると、オボロは拳を突き上げ叫び出す。

「ソウルフレンドのボクに対してあんまりだよグズマくん！ ああ、ボクってば、なんてかわいそうなんだろう！」

ポケットから青いハンカチを取り出すと、オボロは目頭を押さえ出した。その滑らかな手つきは、このやり取りが普段いかに多いかを如実に表している。

「キミをボクは心の友と書いて心友だと思っているのにさ。いつまで経ってもグズマくんには伝わらない！」

いつものようにオボロは嘘泣きを始めるオボロ。ただそんな彼の様子にグズマの心は何も動かされなかったようで、あきれたように彼は言った。

「お前もちつとは仕事しろよ。コスモツグの件で、お前が働いた覚えがオレ様にはないんだがよ」

「もちろんバッチリ仕事してるよ。ボクの働きぶりには馬車馬もビックリさ！」

「テメエが試練の間をうろついてんのは関係あんのか？」  
「島キング殿から聞いたのかい？　けど、それとは違うよ」

まあこのボクに任せておいてくれよ、と言うとオボロは通信機をいじり始めた。

噂をすればなんとやら。渦中の人間、ミツキからちようどメールが来たからだ。

どうやらミツキはアーカラ島二個目の試練を終えたらしい。

『オボロさんお待ちせしました／＼???（、ω、）?　／／／／／

明日アーカラ島で最後の試練が終わると思います〜！　順調に行けばですけど笑

オボロさんとリジーちゃんとのダブルバトル、すごく楽しみ！』

そう書かれたメールを見て、ふふつと彼は笑みをこぼす。

スカル団のリーダー達は不思議そうにオボロを見た。

彼とメールをするような仲の人間はスカル団以外にはいない。さらに、その中でもグズマとプルメリしか主に連絡は取らないこと有名だ。

「アンタが人とメールなんて、珍しいじゃないか」

「メル友だよ。最近できたんだ」

もしかしてプルメリちゃん、嫉妬してるのかい？　とウインクをするオボロに、そんなわけないだろとプルメリはため息をついた。

オボロは鼻歌を歌いながら、ぽちぽちと文を打ち始める。

『すごく順調だね！　さすがミツキだ（\*。▽。）ノ

じゃあ明日の夜六時頃、カンタイシティのアーカラ乗船所の近くでまってるね（≡▽≡）笑

良い報告が聞けるのを楽しみにしてるよファイト！（（o（・▽・）

ほら、仕事してる。とリジーに小さな声で言うと、彼は笑った。それにつられてリジーも笑う。

彼は通信機をポケットにしまうと、顔を上げて仲間に行った。

「明日、ボク達はボンボンくん会って来るよ。スカル団にちよっかいかけてる子の話、彼から詳しく聞いといた方がいいだろ？」

「いいのかい？ 別にアタイが行ってもイイけど」

「もちろんさ！ グズマくんの仕事してないなんて言われちゃったし、これぐらいはね」

ちようどアーカラ島に用事もあるし、とオボロ。

そのスカル団にちよっかいかけてる本人に会いに行くことは、無論口に出す気はなかった。

じゃあボクはそろそろ寝に行くよ、と師弟コンビは部屋から出ようとする。

「ごちそうさま。ポロツクまた作ったらアタイにおくれよ」とプルメリが笑うと、リジーは嬉しそうに手を振りながら、パタンとドアを閉めた。

オボロの部屋に戻った二人がすぐに取り掛かったのは寝る準備だ。

寝巻きに着替えると、まくらや毛布を一人分多めに出してアロマキャンドルを焚く。

手元の灯りだけを残して電気を消すと、きらびやかなオボロの部屋もこの洋館にふさわしい雰囲気を漂わせた。

暗闇の中で、部屋中に飾られたリボンがぼーっと光る様子はなんとも幻想的だ。たたまれたズボンに付いている五つのリボンも、ちらちらと瞬く星のようだった。

「あのリボン達はボクが特別な大会に出るきっかけになったんだ」

と彼はベッドに潜りながら言った。

「だからズボンに付けているのさ。初心を忘れないようにね」

リジーも師匠と同じベッドに入ると、買ってもらったばかりの彼女専用の毛布をかぶった。

二人寄り添って寝るベッドはぬくぬくと暖かい。

「屋敷に泊まることが多いけど良いのかい？ マリエシテイに帰らなくて」

「ママもパパもスカル団に入ったって、気がついてないから大丈夫よ。お師匠さま」

そう言う彼女は、あたしスカル団のみんなとずっと一緒にいたいわ、と呟いた。

だれかひとりでも欠けたらだめよ。もちろん、お師匠さまもね、とリジーがオボロにすり寄ると、彼は黙って頭を撫でる。彼女がまぶたを閉じるまで。

すやすやと寝息を立て始めたリジー。彼女の長いまつげに付いたゴミをそつと払ってから、オボロはアイマスクと耳栓をつけた。

「おやすみリジー。また明日」

小さな、ほんの小さな声でぽつりと呟くと、彼もまた夢のはざまへ落ちて行った。

明日行くのはアーカラ島。8番道路のモーターだ。

そこで寝泊まりしているグラジオに、オボロは聞きたいことが山ほどあった。

ミヅキの戦いぶりはどうだったのか。彼の家族で彼女の友人、リリーエは一体どんな子なのか。

彼女達はスカル団をどうするつもりなのか。スカル団に刃向かう

ばかりでなく、潰そうとしているのだろうか。

コスモッグと彼女達の関わりは何なのか。なぜエーテル財団がコスモッグを持っていたのだろうか。彼らはコスモッグをどうやって手に入れたのか。

そして彼のパートナーのポケモン、タイプ：ヌルとは何なのか。

夢のはざままでぐるぐると、彼の思考は回っていく。

それはどこまでも暗く、狭く、どんよりとしてじめじめとしたものだった。

## 第七話 【カンタイシテイ】

スカル団の用心棒、グラジオの日課は朝のトレーニングだ。

ルザミーネ  
母親と袂を分かち、家を出た彼。

だが、強くならなければならぬという強迫観念にも似たなにかに、グラジオは取り憑かれていた。

相棒のタイプ：ヌルと共に草むらに赴き、いつものように野生ポケモンやトレーナーを相手に蹂躪を始める。

それは彼の妹とは真逆の姿だったが、追い詰められた彼らの表情は写し鏡のようだ。

血は争えない。母親から離れた今も、彼は彼女の呪縛から逃れられてはいなかった。

グラジオが出歩いていることも知らず、オボロとリジーがやって来たのは8番道路。

いつものようにアズマオウに乗って、朝日がきらきら輝く海をゆらゆら揺られて二人は渡って来た。

砂浜に降りるとリジーはぺたぺたと走り出す。白い白いまっさらな砂に足跡が付いていく様子は小気味よい。

オボロはアズマオウをボールに戻すと、リジーに手を振った。

「あまりそっちに行かない方がいいよ。ほら、踏みそうだ」

師匠の声を聞いてリジーがくるりと振り向いた時だ。

足もとに何かがぶつかったかと思うと、それは砂埃を上げて猛スピードで走り去っていく。転びそうになったリジーが怒って追いかけるも、あまりの速さに追いつけない。

小さな小さなポケモンは、すぐさま奥のほら穴に潜ると、それっきり姿を現さなかった。

穴の中をのぞき込んでも影も形も見当たらない。リジーが手を伸

ばしても空をつかむばかりだった。

「お師匠さま。あのポケモン一体なんだったのかしら」

「ああ、あれはコソクムシだよ。グズマくんも持ってる、グソクムシヤの進化前さ。臆病なポケモンだからね。人間が近くにいるって分かったら、すぐに逃げちやうんだよ」

師匠の話聞いて、彼女はグソクムシヤのことを思い出す。

大きくてがっちりとしたグソクムシヤ。鎧のように頑丈な甲殻は並大抵の攻撃を通さないし、彼の鋭い眼光は全てを射抜く。

きつと小さなコソクムシは様々なことを乗り越えて、なんにも恐れない、むしろ恐れさせてなんぼのグソクムシヤへと進化していくのだろう。

それはコイキングからギャラドスへと進化するように。

ヒンバスからミロカロスへと進化するように。

「成長したら、あんなに立派な頼れるポケモンに進化するなんて。すごいわ！今はこんなに弱そうなポケモンなのに」

大層驚いてリジーが言うと、オボロは面白そうに笑っている。彼はひとしきり笑った後、不思議そうにする彼女に、「そうかな？別に進化してもしなくても、臆病なままのポケモンだよ」と言った。

「見た目がいかつくなっただけさ。現に、ピンチになったらすぐに逃げるし」

オボロはほら穴の方を見る。

コソクムシは相当奥深くまで逃げたようだ。小さな穴からは音も聞こえず、ポケモンの姿など見えもしない。

「逆に臆病だからさ。それで、いかつくなったのかもね」



ほら、スカル団が良い例だろ？ と彼は首に下げたドクロのペンダントを指差した。

落ちこぼれた者たちが徒党を組んでオラつくスカル団は、確かにそう言えるかもしれない。

スカル団にいる者はバトルも弱く、立場も弱く、気も弱い者がほとんどだ。それこそ一人では何もできないほどに。

「臆病だから分不相応に見た目を飾り、臆病だから分不相応に口を叩くのさ。それは、人もポケモンも変わらないよ」

たまには良いこと言うなあ、とリジーは素直に感心した。だが直後に「ちなみにボクは完璧な人間だからね！ 多少目立つとしても、何も分不相応じゃないのさ！」と響き渡るオボロの声は、色々と台無しにしてくれる。

高笑いをする師匠を白い目で見ながら、リジーはポケモンセンターの方へと向かった。

話によると、ラジオが泊まるモーターはポケモンセンターの隣にあるらしい。どれだけゆっくり行っても、ここから一分もかからずにとどり着ける距離だ。

リジーは走った。それからモーターに着くと目的の部屋を探す。

一つ目の部屋、違う。二つ目も、違う。三つ目……これだ！

がちやり。がちや。どんどんどん。

鍵が開かない。いくら呼んでも叩いても、物音一つ立ちやしない。郵便受けからのぞいても、部屋の中には誰もいない。

「おかしいなあ。プルメリちゃんによると、彼はここに住んでいるらしいんだけど」

「入れ違いになったのかしらね」

「あーあ。わざわざ朝早くからアーカラ島まで来たつのに、とんだ骨折り損だよ」

グラジオの留守は予想外だったようでオボロは頭を抱えている。「ねえ、お師匠さま。メールすればいいじゃない」とリジーが言うも、「ボクは彼のメアドなんか持ってないよ」と肩を落としながらオボロは言った。

「しょうがない。また後で戻って来ようか」

「それまであたし達、どうするの？ カフェスペースでお茶かしら」

「こんな辛気くさいところのカフェスペースより、街に行つた方が楽しいわ」

そう言うと、彼はモーターに背を向けて歩き出した。きよとんとする弟子に向かって手招きすると、5番道路の方に指を差す。

「ほら、リジー行くよ。カンタイシティにね」

## 第七話 【カンタイシティ】

わざわざ街に出るのだからショッピングにでも行くのだと思つていた。

限定販売のウエリントングラスでも買つて我らがボス、グズマのよくなスカした格好を目指すのも良い。

いや、8番道路よりスカしている、街のカフェスペースでお茶と決めこむのも悪くないかもしれない。

ホテルしおさいでリッチな気分を味わいながら、ゆつたり過ごすのもまた良いものだ。

……それなのに！

「お師匠さま。あたし達なんでこんなことやってるのかしら」

「そんなの、ボク達がスカル団だからさ。正面から入れてくれるわけがないからに決まってるじゃないか！」

ゴージャスなボクに知名度がありすぎるってのも困りものだよね、と悩ましげな顔をオボロは作ろうとする。

だが、承認欲求という文字が人の形をしているのがこの男。中途半端ににやけた顔は、喜んでいるのがバレバレだ。

リジーは足元を見ようとしてやめた。はるか下の地面を見ると、動く気力も無くなってしまうことは分かりきっている。

ライNSTOONで飾り付けられたオボロ特製のフックロープ。それをしっかりと握り締めて、二人は足を動かしていく。

びゅーびゅーと潮風が吹きすさぶ中、彼らは空間研究所の壁をよじ登っていた。

そこそこ大きな窓までたどり着くと、オボロはゴージャスボールを取り出した。

警備員にバレないように今日は決めゼリフも省略。黙って開閉スイッチを押すと、現れたのはトドゼルガだ。

トドゼルガは大きく口を開けると、これまた大きな二つのキバを窓に押し当てた。彼女は首を回しながら、小刻みにキバを揺らしている。

どうやらオボロはトドゼルガに穴を開けさせようという腹づもりらしかった。もちろん窓の鍵を開けるためだ。

作戦成功。

上手いこと部屋の中に忍び込んだ二人は、研究所の職員に見つからないように、こそそと動き回る。

ちようどご飯時だからか人は少ない。探索にはうってつけだった。

オボロのおめあては秘密の研究資料。

バーネット博士の最新資料は、オボロにとって喉から手が出るほど

欲しいもの。彼は本棚を漁りながら、「雨とかはどうでもいいからさ。ドータクンについてじゃなくて、ちゃんと空間を研究しなよ」と資料にケチをつけていた。

「お師匠さま。ここへはなんのために来たの？」

「別にいいじゃないか、なんでも。修行にもなるし」

「ふうん。そうは見えないけれど」

「誰にも気づかれずにひっそり入り、誰かに見つかったらコテンパンに打ちのめす。スカル団にはピッタリな修行さ。多分ね」

そう言うと、彼は再び本棚を漁り始めた。「今度はパルキアとギラティナか。だからシンオウの話はいいんだって」と文句を言いながら、次から次へと本を手に取っていく。

オボロトリジーが片っ端から本を読んでいた時だ。

エレベーターのベルが鳴ると、部屋に響いたのは男の声。

「アローラー！ あれ、ハニーは今いないのかな」と軽い口調で言う男はアローラ中の人気者だ。裸の上に白衣を着た彼は、爽やかな白い歯を見せて笑っている。

「ククイ博士じゃないですか！」

職員が駆け寄ると、彼らはエレベーターの前で談笑を始めた。上司の夫は気さくで優しいと空間研究所ではもっぱらの評判なのだ。

盛り上がる一同とは反対に、息をひそめるオボロ達。彼らがいるのはちょうど向かい側。

幸いにも今は気づかれていないようだが、二人が見つかるのは時間の問題だった。

「……よし。窓から降りてボンボンくんのところに行こうか」

「コテンパンに打ちのめさないの？」

「負けると分かりきってる相手には、勝負を挑まない主義なんだよ

ね」とオボロは言った。

「グズマくんならともかく、ボクじゃすぐ負けちゃうよ。これは華麗なる戦略的撤退さ」

ドヤ顔を浮かべながら、もつともそうなことを言うオボロ。だがやっていることは今朝のコソクムシと全く変わらない。

そそくさと窓へ向かうと、師弟二人はロープを伝って降りていく。はるか下の地面までたどり着いてから、オボロはあたりをキョロキョロ見渡した。誰もいないことを確認すると、ほっと胸をなでおろす。

オボロは相当、ククイ博士とは戦いたくなかったらしい。美しさを命とするオボロ。

手加減抜きの実剣勝負で無様に負ける醜態をさらすことを、彼はひどく嫌っていた。昔はそうでもなかったのだが、近頃は特にそうだった。

今は昼時。太陽はてっぺん近くでさんさんと輝いている。

珍しく朝から動き回ったのもあって、そろそろお腹も空いてきた。ついでに言うと、喉もすっかり渴いている。

腹ごしらえをしようと話しながら、二人が目指したのはカフェスペースだ。8番道路まで何も食べずに戻ったら、お腹と背中がくっついてしまいそうだ。

ポケモンセンターの中に入ると、カフェスペースの前に黒ずくめの少年が一人、立っている。オボロは彼に手を振ると、にこやかに笑いかけて言った。

「ボンボンくんじゃないか！ 探してたんだよ、キミのこと。ちよつと聞きたい話があつてね」

「フツ。オマエか、久しいな」とグラジオは言った。

「それにしても、子供がいたのか。しかも大きいな」

「ボクはまだ子持ちなんて歳じゃないよ！ 弟子だよ弟子！」

キミにカフェ代おごってあげようかと思ってたのに！ と騒ぐオボロを、横にいる弟子が必死になだめている。

マリエシテイに住んでるリジーよ、と彼女が言うと、「フツ。何してやがる、オレ」と左手をかざしながら、グラジオは薄い笑みを浮かべた。

どうやら彼の厨二病はしばらく会っていなかった今も健在らしい。オボロはため息をつくと彼の隣に座った。

グラジオと話していると自分の黒歴史を思い出すし、彼のどこか気取った姿は、もう一人の弟子を彷彿とさせる。

自分でやってて恥ずかしくならないのだろうか、とオボロは思った。その思考は完全に自分を棚に上げていた。

「プルメリちゃんから聞いたよ。キミ、スカル団に突っかかってくる子相手に負けたんだってね」

フンツと鼻を鳴らすと、グラジオは黙ってグランブルマウンテンを煽る。どうやらYesと言いたいらしい。

それから頭を押さえると、「あのオンナ、ミツキはオレに勝ってみせた」とささやくような低い声で言った。

「アイツは強い。オレとヌルのコンビネーションを打ち破るとはな。それも二度も」

「えっ。二回も？ それ、プルメリちゃんから聞いてないんだけど」「言っていないからな」

そう言うと、グラジオは眉間のシワを深め頭を揺らした。

特徴的な彼の髪がびしょとオボロの体に当たる。

ハリセンで叩かれているみたいだからやめてほしい。そう思いながら、オボロは両手で彼の髪を止めた。

ルザミーネといい、グラジオといい、彼らの家族の少女といい、エー

テル財団では変な髪型がブームなのだろうか。

少年はムツとした顔を見ると、自分の髪型を整え直した。小さくしを取り出すと、右側にまとめた髪をとかしていく。

それからオボロを睨みつけると、「それで要件はなんだ。オマエが聞きたいことはまだあるだろう」とうなるようにしてグラジオは言った。

「さすがにその子、このまま放っておけないだろ？　したつばならともかく、用心棒のキミまでやられちゃうとね」

「フン。確かにスカル団にとってはそうかもしれない」

スカした顔して髪をかきあげるグラジオに、オボロは少しイラついた。

全く、グズマくんのお気に入りだからってさ。ルザミーネ女史の息子だからって、特別扱いされちゃって。

ウチで雇ってる用心棒なんだから、ちゃんと仕事をしてほしいなあ。彼がミヅキをやっつけていたら、プルメリちゃんが仕事をわざわざすることもないんだし。

——それに、ボクも睡眠時間を削って、朝早く起きずに済んだじゃないか！

実のところ、言いたいことは最後だけである。この男、本当にしようもない。

最近カミソリ負けが気になってきたナルシスト、オボロにとって、睡眠時間は神聖不可侵のものだった。

オボロが顔を引きつらせていると、ふいにズボンを軽く引っ張られる。「お師匠さま、話を進めなきゃ」と青い目の少女は耳打ちした。

彼は軽く咳払いをすると、カバンから紙と羽根ペンを取り出した。彼のいつもの愛用品だ。

「今度、その子をプルメリちゃんが懲らしめにいくんだよ」とオボロは言った。

「だから、手持ちの種類とか、戦い方の特徴とかさ。そういうのを知りたいのさ」

「オマエがオレに会いに来る時は、大体プルメリが絡んでいる」

グラジオは軽く笑うとマグカップを揺らした。

ゆわん、ゆわんと波を立てるグランブルマウンテン。漆黒のそれがどこか神々しく光る様は、全てを見守るカロスの神、ジガルデのようだ。グラジオは思った。

彼の厨二病はとどまるところを知らない。

「名前はミヅキ。黒髪で赤い帽子をかぶっている。島巡り中のトレーナーだな。手持ちは四匹。そのうち二匹はニヤヒートとドデカバシだ」

「他の二匹は分らないのかい？」

「バトルが終わってしまったから、な」

つまるところ、他の二匹を出される前にグラジオは負けてしまったらしい。

一番道路でベソかいてた子とは思えないくらいミヅキは強くなったなあ、とオボロは感心しながらメモを取った。

いや、その片鱗は前からあった、と彼は思い直す。

貰ったばかりだったニヤビーをあそこまで信じ、的確に指示を出せるのは並大抵ではできやしない。

オボロは紙に花マルを描いた。

自分の弟子もこの子のようになるといい。今日ミヅキとバトルをする時は、自分は弟子のサポートに努めよう。

そう考えながら、気分良さげに鼻歌を歌うオボロ。そんな彼をグラ



ジオは不思議そうに見つめていた。

どこか掴めないこの男の考えは実の母親ルザミーネよりも分からない。横でエネココアをすすっている弟子も弟子で、よく分からない。

このナルシストはなぜスカル団にいるのかが謎だし、この垂れ目の少女はそもそもなぜこんな男の弟子になろうとしたのかが謎だ。

今度二人のことを調べてみようかとグラジオが思っていると、「そういうばさ」とオボロが口を開いた。

「したっぱ達が言ってた、その子の友達の女の子。ほら、金髪でこちら辺に三つ編みしてる」と顔の横あたりを指差して、オボロは言った。

「あの子、キミの隠し子かい？」

「このオレに子供がいるように見えるか？」

にやにやと笑うオボロに、呆れた声で少年は言った。少し嫌そうに眉間のあたりを押さえるグラジオを見て、彼は今日一番の笑みを浮かべる。オボロは「いやあ。ほんのジョークだよ、ジョーク！」と笑い飛ばすと、

「フツ。何してるんだろ、ボク」

と言ってから、にやりと笑って左手をかざした。どうやらグラジオの真似をしているらしい。そんな彼の様子を見て、お師匠さま達仲がいいわね、トリジーは呟いた。

グラジオはより一層嫌そうな顔をする、「それは多分妹だ」とオボロに言った。苦虫を噛み潰したような彼の表情に、オボロはもつと笑みを深める。

それは、彼に子持ちだと誤解されたオボロのささやかな仕返しだった。

「妹さんとはなんでいつしよに動いてないの？ それに、兄の方はスカル団の味方なのに敵になるなんて」

兄妹仲が冷めてるのかしら、とりじり。

ぬるくなつたエネココアを飲み干すと、店主にもう一杯注文をする。それから足をばたつかせる彼女に、「どちらかと言えば仲は良い方だ」とグラジオは言った。

「オレが用心棒をやっている間、ずっと実家に居たんだ。オレが今何をしているのか、アイツは知らなかったんだろう」

「ふうん。じゃあ今はミツキといつしよに島めぐりでもしてるのかしらね」

「なぜ家を出たのかは、大方想像がつくが。」

オマエ達、スカル団に言う気はない。これはオレ達の問題だ」

左手をかざしながら鋭い目つきでこちらを見る少年に、おお怖いねえ、とオボロは口笛を吹いた。ただ、彼が怖がっているそぶりは力ケラもない。

羽根ペンをくるりくるりと回す彼の口元は、面白そうに弧を描いている。

「その子、何かを大事そうに運んでるって聞いたけどさ。それとは関係あるのかい？」

「さつき言っただろう。オレはオマエ達に言う気はない」

冷たく言い放つグラジオ。だが、先ほどよりも細められた彼の瞳は、オボロの言うとおりであることを雄弁に語っていた。

分かった、もう聞かないよ。と両手を上げるオボロに、少年はフンツと鼻を鳴らした。彼の笑顔があまりにもうさんくさかったからだ。

「あ、それとキミのタイプ：ヌルなだけどき。ボクもゲットしたいんだよね。どこで手に入れたんだい？」

リジーにプレゼントしたいんだ、とオボロはにこやかに言った。瞳を輝かせるリジーに、本当は内緒にしたかったんだけどね、とウインクをした。

もちろん嘘だ。グラジオの警戒を解くために、自分の弟子をダシにしたのだ。

だが、彼には罪悪感がカケラもない。自分さえ良ければ良いと信じている、自己中ナルシストの真髓がそこにあった。

「三秒前だ」

「何がだい？」

『『分かった、もう聞かないよ』とオマエの口から聞いたのが、三秒前。どうやらヤドンより物忘れが激しいようだな』

そう言つて少年はあざ笑うと、グランブルマウンテンを飲み干した。再び口元を引きつらせるオボロを尻目に、グラジオはマスターに挨拶すると席を立った。

「オレとヌルは一心同体。だからこそ言える。オマエらにヌルを持つ資格があるとは、オレには思えない」とグラジオは言った。

「そもそも、オマエらにヌルを捕まえることはできない。エーテル財団の奴らならともかく、な」

颯爽と去っていくグラジオを見て、あの人変わってるわね、とり  
ジーは口をぽかんと開けている。

何をとは言わないけど、拗らせてるだろ？　と言うと、オボロは頭をわしやわしやとかいた。

タイプ：ヌル。兜のようなものを頭にかぶったポケモン。タイ

プはノーマルタイプだが、その存在がありふれているわけでは決してない。

少なくともオボロはグラジオに会うまで見たこともなかったし、そもそも存在を知らなかった。

きっと彼も、エーテル財団からヌルを持ち出したのだろう。コスモツグを持ち出した妹と同じように。

エーテル財団との接触をとにかく嫌うグラジオだ。そうでなければ話に触れるわけがない。

だとしたら、ルザミーネはなぜヌルを取り戻せと言わないのだろうか。

グラジオとスカル団が繋がっていることを、彼女はよく知っているはずだ。

なにせ彼女はグズマと仲が良い。頻繁に彼女の家にグズマが訪ねるのもあって、スカル団の内部事情はだだ漏れだ。

グラジオは歳の割には強いが所詮はボンボン。グズマにはもちろんのこと、オボロやプルメリにも、バトルで勝てるかはあやしい。

スカル団がタイプ：ヌルを奪おうと思えば、今すぐにでもできる。それなのになぜ？

いくら首をひねっても、頭はこんがらがるばかり。考えても考えても出ない結論に、彼はしびれを切らしたようだ。

あーもう！ と大きな声で叫んだかと思うと、いきなりカウンターに突っ伏す男。なんだなんだと周りの客は彼を見たが、そんなことはオボロの知ったことではなかった。

「考えてもラチがあかないや。さあ、リジー。ここを出ようか」と顔を上げて彼は言った。

「約束の時間まで、ホテルでのんびりしてようよ」

ホテルで優雅に。気分はそう、シャンゼリゼだね、とオボロはウインクをする。

彼は荷物をまとめると、立派な長財布を取り出した。それからマスタ―を呼ぶと、小銭と領収書を握り締めた手をひらひらと振った。三百九十八円。オボロのグランプルマウンテンとリジーのエネココア、ぴつたり二杯分の料金だ。

「お客さん。申し訳ないですが、お金が少し足りませんよ」

「あれ、マスター。いつから値上げしたんだい？ それは知らなかったなあ」

「そうじゃなくて。お連れさんの分がないんですよ。ほら、グランプルマウンテンを頼んだ男の子の」

だから正しくは五百九十四円です。と言う店主の声を聞いて、オボロの脳裏によぎったのは、さっさと帰っていったグラジオの姿。

——おごつてあげようかと思つてたとは言つたけど、ちゃんとおごるとは言つてないだろ！

オボロはこめかみをひくつかせた。万年金欠のスカル団だ。

たえワンコインだとしても、出費は痛い。

お師匠さま。いいじゃないの。おちついて。というリジーを無視するほどに、彼は怒つていた。何かとお金をかけがちな者のお金の恨みは怖いのだ。オボロの心はリザードンが放つ　　かえんほうしや  
“　より燃えていた。

——今度会つた時は、何が何でも嫌がらせをしてやる。それも、とびっきりの。

厨二病患者と歳が一回り離れていても、精神年齢は同じかそれ以下。それがこの男、オボロだった。

## 第八話 【ダイナミックフルフレイム】

カンタイシティにはホテルが二つある。

ひとつは、様々な地方から観光客が押し寄せるハノハリゾート。豪華絢爛・風光明媚という文字が建物の形をしているそれは、アローラ有数の観光地だ。

もうひとつはどこにあるのかというと、ポケモンセンターの奥にひっそりと佇んでいる。

ホテルしおさい。

派手すぎず、控えめすぎないホテルは庶民の味方。

壁にはチョンチーの形をしたランプがぴかぴかと明るく光っていて、白い白い爽やかな空間を演出していた。

誰もがまつたりと過ごすロビーの一角。そこには、顔を突き合わせて睨み合う大人四人と子供が一人いた。

ソファアーに座ってテーブル越しに向かい合う集団は、ホテルからは少し浮いている。

不機嫌そうないかつい男達は、ぷかぷかと葉巻を吸ったり、サンダラスをいじったり。完全に蚊帳の外のリジーもハラハラしながら見守っていた。

そんな中、自信ありげな表情を浮かべる男が一人。

白い小さな四角い何かを手を持って、ニヤリと笑うオボロ。それは対照的に、絶望の表情を浮かべる男達。

彼らには分かっていたからだ。このナルシストが一体何を言う気なのかを。

「ツモー！」

「また負けた！ ニイちゃん強すぎじゃねえの!？」

ふふふ、今回もボクの総取りさ。と言って、山と積まれたチップを、オボロは自分の方へと引き寄せていく。そんな彼にリジーは心からの拍手を贈った。

これで八連勝目だ。

イカサマしているのかと思うほど、彼は鮮やかな牌捌きを見せている。

というより多分しているのだろう。スカル団にいるだけあって、師匠は案外スカしたワルなのだ。

これ以上やってられないとばかりに男達は財布を開く。奪われたチップの分だけ金を置くと去っていく背中には、どこか哀愁が漂っていた。

彼らが先ほどまでやっていたこと。それは、賭けポケモンポンジャんだ。

「お師匠さまに、こんなとくぎがあつたなんて！ あたしびっくりだわ」

「スマートなメンズの嗜みとしてギャンブルは必須なのさ！ スカしたギャングの一員として、リジーも覚えておくといいよ」

ちなみに言うと、アローラでも賭け事はバリバリアウトである。

札束を数えながら師匠と弟子はにやにや笑う。これでナマコブシ投げのバイトをしないで済むと、二人は万歳三唱だ。

宿代を無事に稼いだ彼らは飛び跳ねてハイタッチをしている。その様は、仲のよい親子のように微笑ましい。

二人のポケットからはみ出している札束さえなければ、だが。

今日はこの後バトルがある。

終わった時には夜遅いだろうし、いかがわしき屋敷に戻るには相当時間がかかるだろう。深夜になってしまいかもしれない。

それは幼いリジーによくないし、愛しのアズマオウを酷使させるのはとってもよくない。

さらに言うと、自分の睡眠時間が削られてしまうのは非常によく不

いことだ、とオボロは考えた。

それだつたらホテルしおさいに泊まった方が百倍いい。多少の出費より、自分の身体の方が大切だ。

そう思いながら彼はフロントでチェックイン。

渡された帳簿に、いつもの羽根ペンでオボロはすらすらと書いていく。

### 『Harley & Solidad』

「お師匠さま。オボロって本名じゃないの？ それにあたし、こんな名前じゃないわ」

「もちろん本名さ！」とオボロは言った。

「これは偽名だよ、偽名。ほら、ボク一応スカル団の幹部として有名だし。キミも一応変えといたよ」

有名すぎるのも本当に困ったものだよね！ とオボロ。

悩ましげなポーズを取ってはいるが、白い歯を見せながら言う彼は、どこまでも困っているようには見えない。

これはボクの兄さんの名前なんだ、とオボロがウインクすると、二人はアーカラ乗船所へと向かった。

どうやらミツキは、ドロボウリーリエ含むお仲間二人と一緒に来るらしい。

時刻は五時半。約束の時間までもうすぐだった。

### 第八話 【ダイナミックフルフレ임】

気持ち良い潮風が吹く、海を一望できる広い場所。アーカラ乗船所の隣で二人はミツキを待ち構えていた。

ちらちら時計を見るともう六時。ふいに、「オボロさーん！ リ



「ジーちゃん！」という声が聞こえてきた。

少し遠くに見えるのは間違いない。ミツキだ。相変わらず鉄の笑顔  
を浮かべて、こちらに向かって走ってくる。

後ろからついてくる少女はグラジオの妹だろうか。

「お久しぶりです！　いつもアドバイス、ありがとうございます」

息を切らしながら笑う少女に、「いやいや別に構わないさ。それに、  
ボクもミツキとのやり取りは楽しみにしてるしね」とオボロは言っ  
た。彼女はにかつと笑うと、リジーちゃん今日も負けないからね！  
と弟子と絆を深め出す。

アオハルだなあ。青春だなあ。とオボロが呟く間に、金髪の少女も  
やってきたようだ。

彼女が持つシヨルダーバッグは、やけに膨らんでいて見るからに怪  
しい。

「その子がメールで言ってたリーリエちゃんかな？」

「そうです。わたし、リーリエと申します。オボロさんとリジーさ  
んのことは、ミツキさんからかねがね！」

拳を握りしめるリーリエを彼はじろじろと観察した。

金色の髪。翠色の瞳。そして顔の横に垂れ下がる、触手のような三  
つ編み。

まごうことなきルザミーネの娘だ。

ここまで似ている家族も珍しいな、と思いながら、オボロは少女に  
笑いかけた。

「へえ。ミツキはボクのこと、なんて言ってるんだい？」

「いろいろ教えてくださる、ステキなトレーナーさんなのだ。わ  
たしもお二人のことをそう思います」

「キミも？」

「ポケモンさんにも、見知らぬわたし達にも優しいお二人のことを、わたしは以前から勝手に尊敬しているのです」

よろしくお願いしますね！ とリーリエは微笑む。そんな彼女に、なんていい子なんだとオボロは感動した。

それと同時に、どこぞの代表とどこぞの用心棒は彼女の爪の垢でも煎じて飲んで欲しいと彼は思った。

——今日はコスモッグ、見逃してあげようかな。

承認欲求という文字が人の形をしているオボロにとって、他人に認められることは、他に得難い快樂のひとつ。

一度その欲がくすぐられると、スカル団の仕事をも放棄してしまう。それがオボロという男だった。

こちらこそよろしく、と彼は少女と握手を交わす。にこにこと笑う彼は誰がどう見ても上機嫌だ。

「あたし達、あなたとミツキを相手にマルチバトルをするのね！」

「いえ、わたしはポケモントレーナーではありませんので。ハウさんが来て、ミツキさんとバトルをするはずなのですが」

そう言ってちらりと後ろを見るリーリエ。だが、そこには誰もいない。あるのはただ、歩道と街路樹のヤシの木ばかりだ。

「ううう、すみませんオボロさん。ハウったらなかなか来なくって」

「別にいいさ。ボク達この後、なんの予定もないし」

「けど、リジーちゃんは早く寝たかったよね」

「ぜんぜんそんなことないわ。それに、今日はあたし達あそこに泊まるの」

だからへっっちゃらよ！ とリジーは師匠譲りのウインクをした。

それを聞いて、ミヅキは良かったと胸をなでおろす。

四人はハウを待つことにした。

どうせミヅキもリーリエもこの街で夜を過ごすのだ。いくら待とうが、全く問題はない。

もつとも、師弟とは違ってお金に余裕がある二人はハノハリゾートに泊まるようだったが。

海風薫るカンタイで四人はたわいもない話を繰り広げる。

キャプテンが手強かったとか、この島は大試練を終えるのみだとか、そんな話だ。

これまでのことを熱く語ったミヅキは、火照った頬を冷ますように少し黙る。それから彼女はぽつりと呟いた。

「この街、結構好きかもしれないです。なんだか懐かしい気がして」

「そうだね。ここはキミの故郷と近いのかもしれない」

「ミヅキって、カントーから来たんでしょ？ だったら当然ね」

リジーはフフンと鼻を鳴らした。それから、重要だとばかりに人差し指を上立てると、

「カンタイシティはね、カントーやジョウトで旅したトレーナー達が作ったまちなのよ」

と言って彼女は胸を張った。ミヅキは合点がいったようで、なるほどと感心している。

まあアローラではジョーシキよね。と謙遜しつつも、小さな弟子は鼻高々だ。

横にいるリーリエも知らなかったようで、「そんな経緯があったのですか！ 奥深いです」とメモを取っていた。

どうやら彼女も、アローラを出歩いたことが最近までなかったらしい。

「カンタイシテイが気にいったんなら、マリエシテイも気にいるかもね。あそこはジョウトの連中がつくった街だから」

「マリエシテイのマリエ庭園には、お茶屋さんもあるんだから！」  
「さすが地元民だねりジーちゃん」

茶屋という言葉に瞳を輝かせるミヅキに、あそこはほうじ茶と団子が美味しいんだ、とオボロは言った。

それから、大試練が終わったら是非行ってみるといいよ。なんならおごつてあげようか。と彼は続ける。

その姿は、たった百九十八円のおごりでブチ切れていた者と同一人物とは思えない。

賭博に勝つと財布が緩む。散財をする。そして承認欲求が満たされる。

「ダメな大人の典型例である。」

和やかな雰囲気喋っていると、向こうから手を大きく振る子供が一人。

緑色の髪に褐色の肌をした彼は、見るもの全てを癒す笑顔を浮かべていた。それは、オボロとは対極に位置するものだった。

「ハウ！ 遅いってばー！」

「ミヅキもリーリエもごめんねー。おれってばさー、道迷っちゃったー！」

笑いながら頭をかくハウはどこまでもマイペースだ。

悪気ない彼の姿を見ると、アローラの民は大体のことを許してしまう。

それは、自己中を極めたオボロも例外ではなかった。

少し文句を言ってやろうかと思っていたのに、あつという間にその気は失せてしまった。邪気の塊のようなオボロも、彼の純真さに当てられたのだ。

「ハウさん。オボロさんもリジーさんも、ハウさんをずっと待っていたのですよ」

「ほんとにごめんなさい。後ろにいるのがオボロさんって人なの？」

挨拶をしようと少年はオボロに近寄った。あたりは真っ暗で、あまりよく見えなかったからだ。

すると彼はオボロを目にした途端。

今まで浮かべていた笑みを引っ込めて、目をぱちくり。数秒オボロを凝視すると、少年は不審そうな目で彼を見た。

「あのさー。その人、スカル団じゃないのー？ おれ知ってるよー？」とハウは言った。

「スカル団の幹部で、みずタイプの使い手なんですよー？」

少女二人はぎよっとした顔でハウを見る。彼の表情が真剣そのものなことに気がついた彼女達は、慌ててオボロの方を向いた。

その時の姿は五者五様だ。

ハウは珍しく人を睨みつけ、ミツキの笑顔は引きつり、リーリエに至っては反射的にシオルダーバッグを庇い、リジーは冷や汗を流しながら師匠を見つめている。

そんな中でただ一人、オボロだけが何事もないように笑っていた。グズマ風に言わせると、ブツ壊してやりたくなるようなスカした笑顔で。

「よく知ってたねハウくん！ まさしくその通り！ 改めて自己紹介しようか。ボクの名前はオボロ。普段はスカル団の幹部をやっているよ」

メレメレの方でも有名だったなんて、さすがボクだね。と彼は嬉し

そうに髪をかきあげる。

一気に警戒を強めた三人組に、まあまあ聞いてくれよ、と彼は続けた。

「とは言ってもね。今はキミ達に何かをしようって気はないよ。ボクはここにスカル団としてじゃなくて、トレーナーとして来たんだ。ミヅキの友人としてね」

プルメリのためにバトルをして、一つでも多く情報を掴もう。そしてコスモツグを奪う算段を立てよう。

あわよくば、隙を見てコスモツグを奪いこのままトンズラしよう。リーリエと会うまで、そう考えていた者が言えるセリフでは決しない。

だが、オボロの瞳は澄み渡っていた。それはなぜか。決まっている。この男に嘘をつくことの罪悪感など、一切存在しないからだ。

「ほんとなのー？　なんか信じられないけどー」

「本当さ！　スカル団だとバレないように、偽名を使ってホテルに泊まるくらいだからね」

それに、スカル団としてキミらにちよつかいをかける予定なのはボクじゃないよ！　と彼がしたのは高笑い。

ひとしきり笑った後、彼はゴージャスボールを手にすると「そんなことより予定通りバトルをしようよ。勝てたらイイものあげるからさ」とハウに言った。

「使用ポケモンはそれぞれ二匹のマルチバトル。さあ、始めようか！」

結局、悩んだ末に三人組は彼の言葉に従った。

美しい者足るもの、話術に長けていなければ。

その想いから一心不乱に磨かれた彼の舌尖三寸に、かなうものはそうそういなかった。

四人は一斉にボールを投げる。宙に舞い、光を放つ四つの球は闇夜に映えた。

ハウが場に出したのはアローラの姿のライチユウ。ミヅキはニヤヒート。

師弟二人はオドリドリとナマズンだ。

相手はやる気満々のようだった。

空に浮かんだライチユウはその場をくるくる回り、ニヤヒートの方はといえば、喉についた鈴のような炎袋を真つ赤に燃えたぎらせている。

だがオドリドリも負けてはいない。

どんななナマズンはぼうつとしていますが、オドリドリは羽根を震わせると、ぱちぱちと電気を走らせる。それは、まるで彼の自信のほどを二匹に見せつけているかのようだ。

「ニヤヒート　　なぎぎこえ」　で相手を弱体化させちゃうよ！」

「そんなの別にかまわないわ。オドリドリ、あのネコちゃん達に

ふらふらダンス”　よ」

ゆらり、ゆらりと揺れる彼の体は見ているうちにぐらぐらとしてくる。

いや違う。オドリドリを見る者の頭が、脳みそが揺れているのだ。それはさながら、夢を見ているかのようだ。

ニヤヒートの足取りは歪む。もつれる。目が回る。

ナマズンはラムの実を持っていたようで、むしやむしやときのみを食べていた。弟子は　　ふらふらダンス”を使うだろうと、オボロには予想がついていたからだ。

誤算だったのはライチユウも持っていたこと。

まるっこい電気ネズミは、すました顔してぶかぶか宙に浮いていた。

「じゃあさー、ライチュウいくよー。 〴〵でんこうせっか〴〵 でナマズンにこうげきー！」

軽い口調で指示を出すトレーナーとは逆に、目にも留まらぬ速さで迫ってくる。尻尾で地面を蹴りながら、上手く方向を変え、方向を変え。

リージョンフォームのライチュウの特性はサーフテール。

四方八方どころか、空中からも攻撃できる。どこから突っ込んでくるのかもトレーナーのハウ以外には想像もつかない。

〴〵でんこうせっか〴〵 との相性は抜群だ。

「ナマズン、キミの色っぽいカラダで耐えておくれ。そしたら思いつきり遊んであげるんだよ」

ライチュウの攻撃はナマズンに突き刺さる。上空から飛んで来たライチュウはナマズンを地面に叩きつけた。

響く衝撃音。上がる土煙。それから舞い散るのは、泥。

泥。泥。泥。泥のシャワーだ。

「〴〵どろあそび〴〵 ? けど、あつちは二匹とも電気が通らないのにー？」

ハウはこてんと首をかしげた。

〴〵どろあそび〴〵 はでんきタイプの攻撃のダメージを半減させる技。でんきタイプと相性が良いオドリドリとナマズンには、受ける恩恵など何もない。

だが、「ただの 〴〵どろあそび〴〵 と侮っちゃあいけないよ」とオボロは笑っている。





オボロは弟子に文句を叫ぶと例の青いハンカチを取り出した。慣れた仕草で目元を押さえながら、彼は一言。

「ああ、かわいそうなナマズン。『だくりゅう』で一掃すれば、もうこんな目にあわなくて済むからね」

彼女がヒゲを立たせると、どこからともなく水の塊がやって来た。水、と言うよりは泥の方が近いかもしれない。茶色く濁ったそれは、ライチュウとニヤヒートを飲み込んでいく。

カフエスペースでバトルは弟子の補佐に努めようと思った。そのことも忘れ、高火力の技を使ったオボロ。

リジーの反応を見るためにあまり指示をしなかった。そのせいで、ナマズンは負わなくてもいい傷を負っている。

それも、あと少しで戦闘不能となってしまうほど。

自己中でナルシストのオボロだが、手持ちへの愛は深い。

早い話、彼は少しキレていたのだ。

エキシビション<sup>手抜</sup>マツチ<sup>試合</sup>とはいえ、愛するポケモンをわざと傷つけるような真似をした自分に。

ニヤヒートはふらふらと立ち上がる。満身創痍の有様だったが、ぎろりと睨みつける彼の目は死んでいない。

弱点を突かれた攻撃を運良く耐えきった、こんらんが解けたポケモン。

さらに言えば、彼の特性はもうかだった。

ミヅキが沈黙を守っていたのはこの時を待っていたからなのかもしれない。

ミヅキは自らの手を上へ、上へ、ゆらゆらと。それから手のひらを突き出すと、光り輝くカプ<sup>Z</sup>に認め<sup>リ</sup>られた証<sup>グ</sup>。

熱い。熱い。喉が焼けてしまいそうだ、とオボロは思った。

急速に集められた熱はニヤヒートの周りを渦巻く炎となる。炎は光となり、光となった炎は、球になる。

ダイナミックフルフレイム。

炎を纏ったニヤヒートは走る、走る、回る。

その様をハウも、リジーも、オボロも、指示をしたミツキでさえも、呆けて見つめていた。

途方もない大きさの、途方もない威力があるだろうそれは、四人にとって、あまりに現実味がなかったからだ。

「――守れ！　　まもる」　　んだー！」

我に帰ったオボロは無我夢中でナマズンに叫んだ。

すんでのところで薄いシールドを張ったナマズンは、光の奔流に飲み込まれる。彼の味方のライチュウも、その例外ではない。膨れ上がった炎は上空のオドリドリをも飲み込んだ。

ぎゃあ。ぎゃあ。ぎゃあ。と叫ぶポケモン達の悲鳴を四人は青ざめた顔をして聞いていた。彼らは全員恐れていたのだ。

リジーは見知らぬZ技に。ハウは彼らの断末魔に。ミツキはその威力に。そして、オボロはミツキの才能に。

Zリングを誰一人持たないスカル団の一員とはいえ、オボロがZ技を見るのは初めてではない。受けたのもそうだ。ホノオZも。

だが、ここまでの威力を持つZ技を放ったポケモンは他にいなかった。

もうかを加味してもこれは異常だ。ましてや、進化前で。

今ならまだ彼女に勝てる。とオボロは思った。

マルチバトルとはいえ、初手に　　“なきごえ”　　を入れてくる子だ。経験も、知識も、まだまだ足りていない。

それに先ほどのZ技はともかく、ニヤヒート自体の強さは攻撃・防御・スピードどこを取っても大したものではなかった。

だが、この子はまだまだ発展途上だ。

島巡りを始めたばかりの、新米トレーナー。伸び代は果てしなく見

えないほど、ある。

もし彼女が経験を積んだら？　もし島巡りを終えたら？

いや、島巡りを終えていなかったとしても、彼女が本気でスカル団を潰そうとしたならば？

この子に、自分は。いや、スカル団の誰しもが勝てないかもしれない、とオボロは恐怖した。

——アローラの神に見捨てられたグズマくとプルメリちゃん。世界に見捨てられたボク。それと、神に愛された少女では、かなうわけがないじゃないか。

結局、ナマズンの　「まもる」　は貫通されたようだ。

ひんしの重傷を負った手持ちを戻すと、オボロはミロカロスを場に出した。

ハウも味方にトドメを刺されたことの文句を言いながら、フクスローを出す。リジーはこの間進化したペルシアンを。

「ひかりのかべ」を張った後、「じならし」でミロカロスは相手を翻弄する。あっけなくニヤヒートは倒れ、彼女はキテルグマを出した。

場は移り変わっていく。

味方の攻撃を　「まもる」　で防いだペルシアンは　「だましうち」　からの　「パワージェム」　でフクスローを追い詰める。ミヅキもキテルグマの怪力で、ポケモン達を殴っていく。

オボロは　「だくりゆう」　を指示した時とは思えないほど、後手に回っていた。当初の予定通り弟子のサポートに徹することにしたのだ。

戦うミヅキ達を、じっくり観察しながら。

だが、そんなオボロの指示はどこか精彩を欠いていた。

あの熱が、あの炎が、網膜に焼き付いて離れなかったからだ。

## 第九話 【夢のはざま】

相手の攻撃をかわす。急所を避けて受ける。

ミロカロスは相手を弄びながら、街灯に照らされてらと光る体をくねらせている。彼女の姿は風にたなびくシルクのスカーフのようだ。

師匠とミロカロスは相手を攻める気はないらしい。

“ひかりのかべ” を張ったり、 “れいとうビーム” を撃つて氷の壁を作ったり。彼ら二人が受け身の姿勢から脱する気配はさっぱりなかった。

となると頼りになるのは自分だけ。それと相棒のペルシアンだけだ。

まあ、銭ゲバとあくタイプの一人と一匹に狡猾さでかなうものはいやしない。

自慢の素早さで相手の攻撃をひらりと避ける。それか補助技でやり過ぎし、じわりじわりと体力を削っていく。

それがリジー達の十八番だった。

得意なことは相手のミスを誘うこと。好きな言葉はなぶり殺し。

簡単にバトルを終わらす気は、毛頭ない。

長期戦にもつれ込んだマルチバトル。すでにハウのフクスローは戦線を離脱し、残るはキテルグマだけだ。

特性のもふもふで耐えに耐えているキテルグマ。

だが、ペルシアンの攻撃もミロカロスの攻撃も一身に受けている彼の体力は、もう限界だった。

例えるならば九回裏。点差もついた二死二塁。

そんな泥沼試合も、少し意外な展開で決着がついた。

『偶然』二匹を巻き込んだキテルグマの “じたばた” で、見事ミヅキが逆転サヨナラホームランを決めたのだ。

傷ついたポケモンをいたわりながら、師弟は彼らをボールに戻す。それからくると振り向くと、二人は勝者に拍手を贈った。

オボロは存外スポーツマンシップを大切にした。

たとえば、それがスカル団の仕事であつたとしても。

ポケモンバトルは正々堂々と。時には華麗に圧倒し、時には潔く。もちろん、無様に負ける姿は一ミクロンも美しくはない。

だが勝者を讃えず、いつまでも吠える負け犬ほど醜いものはないだろう。

スカル団よりも優先する彼の美学のひとつだ。

もつとも、彼が格上相手にバトルを挑むことは今ではほとんどない。

それが披露される機会はこうしたお遊びくらいのもの。真剣勝負の場では、埃をかぶっているのが現状だ。

「華麗なる技の応酬に、ポケモンと人のキズナ！ 二人とも、見せつけてくれちゃってさあ。今日は楽しかったよ少年少女！」

大きさに褒めるオボロに、照れたようにミヅキは笑っている。ハウも「おれも一抜けしちやっただけどー、楽しかったー！」と笑う。

お互いの健闘を讃えて四人は固く握手を交わした。

トレーナー同士、バトルをすれば分かり合える。そう少女と少年は信じていた。

バトルの中でこの二人のスカル団員に、島巡りをする自分達と通じるものを見た気がしたのだ。

それは夢とか、希望とか、目標とかいう類によく似たものだった。

## 第九話 【夢のはざま】

少し離れた場所で、ぴゅいと音が聞こえた。祭りの時に売っているおもちゃの笛のような音だ。

四人は音がした方を向いた。金髪の少女がショルダーバッグを押しさえながら、こちらへ走ってくる。

リーリエだ。

息を切らす彼女は、手にしっかりと小さな袋を握り締めていた。

「みなさん、バトル、お疲れ様です。とつても、すごかった、です！わたし、少しでも、お疲れのみなさんのお役に立ちたくて。差し入りにミアレガレット、買ってまいりました！」

時刻はちょうど夕飯時。リーリエが手に持つ買い物袋に、目を輝かせる一同。

カンタイシティのミアレガレットはオカズ仕様だ。

焼きたてほやほやのミアレガレットは、さくさくとして肉汁がじんわり。

ジューシーな肉と、とろけるチーズ。それに目玉焼きがたつぷり詰まっている。

少し甘辛い味付けは砂糖醤油。カンタイ流のアレンジだ。  
バトル終わりの疲れた身体に、骨の髄まで染み渡る幸福感。

——今日のところは、やっぱりコスモッグのことを追求しないであげよう。

そう思いながら、オボロはぺろりと食べ終えた。

食いしん坊な弟子の手のひらにも何も無い。飲み込んだのかと思うほど、カケラもガレットは残っていないなかった。

オボロは口笛を吹きながら「そごそとカバンを漁った。取り出したのは長財布。それと、三つの何かを手にとった。」

「グレイトなキミ達には賞金をプレゼントするよ！ オマケに、さつき言ってたイイものもね」

そう言って、オボロは三人組に賞金と何かを握らせる。

ハウには淡く海のように色づいた石。ミヅキにはひよろつとした

縄。リーリエには細長い缶。

「オボロさん。これってもしかしてさー、みずのいしー？」

「その通り！ ボクには必要ないからあげるよ。きつとハウくんの役に立つさ」

わりと希少な進化の石をもらったハウは小躍りしている。バトルをする前、オボロを睨みつけていたのが嘘のようだ。

「あれ、お師匠さま。今日はかわらさずのいしじゃないのね」

「かわらさずのいしだと返品されるって分かったからね！ アレは今もポケットに眠っているよ」

アレこそ邪魔なただけどなあ、と呟きながら彼はかわらさずのいしを取り出した。

つやつや丸い小さな石は、相変わらずそこら中に落ちている石と見分けがつかない。

彼がミヅキにあげたのは、あなぬけのひも。リーリエにはゴールドスプレー。

どちらもこの先のデイグダトンネルを抜けるにはあつて困らないものだ。

三人組にとつてはどれも大当たりだったらしい。

特にハウの喜びようだったらなかった。「この間つかまえたポケモンに使うつとー！」と言って、その場をぴよんぴよん飛び跳ねている。彼らは嬉しそうにカバンにしまおうと、二人に感謝の言葉を次々に言った。

「やあやあ、そこまで言われると照れるなあ。ボクはね、元々謙虚な人間だから」

「あたし、ケンキョと正反対にあるのがお師匠さまだと思ってたわ」

「まさか！ そんな、キミやグズマくんじゃあるまいし！」



オボロは腹を抱えて笑った。自分を柵にあげて人にあれこれ言うのは彼の得意技である。

彼のボスにバレたら間違いなくブツ壊されそうなものだ。しかし運のいいことに、それをグズマが知る手段はなかった。

「オボロさん、『グズマくん』ってどなたですか？ リジーちゃんのパパ？」

「パパ！ あのグズマくんがパパだって！」

何気ないミツキの一言が彼のツボにはまったらしい。

ゲラゲラと笑い転げる彼をミツキは不思議そうな顔で、リジーは複雑そうな顔で見つめている。

ヒイヒイと呼吸を整えようとするも、彼の腹筋は未だぶるぶると震えている。笑いが収まる気配はなさそうだ。

「カレ、絶対ちゃんと子育てしなさそうだ！ ……くくく、面白いジョークだったよ、ミツキ。グズマくんはね、我らがスカル団のボスなのさ」

「それでは、オボロさんとリジーさんの上司さんなのですね！ その方は一体どんな方なのですか？」

「上司さんか、そうだねリーリエちゃん。グズマくんは『破壊という言葉が人の形をしている』ような人だよ」

どういふことなのかミツキが尋ねると、「つまりはキレやすいってことさ」と身もふたもない答えをオボロはよこした。

それから彼は語り始めた。グズマについて、彼らがもつと聞きたそうにしていたからだ。

スカル団は腹いせに近所の連中をいびり、たまに慈善事業まがいのことを勝手にする。

最近の主な仕事。それは野生ポケモンを捕まえるか、ポケモンを盗み、パトロンに売ることだ。

スカル団には幹部が二人いるが、事実上のワンマン体制。大体のことはボスの一声で決まってしまう。

理不尽な命令をされることもある。時には首をかしげるようなことも。

だがそれが許される。むしろもつとやってくれとばかりに、団員達を引きつけてやまないカリスマ性の持ち主。それがグズマという男だ。

「へえ。じゃあグズマって人は、やっぱり悪い人なんですネ」

「そりゃあ、いい人だったらスカル団なんかいないよ」

「前にスカル団がきのみを奪おうとして。人のものを盗もうなんて、ほんつとーに私、許せなかったんです！」

浮かべた笑みを薄めて憤慨するミヅキに、それは多分ボクのせいだな、とオボロは思った。

この間作ったポロツクのために、アローラ中からかき集められたきのみ達。その残りは天日干しにされ、三時のおやつとして今も屋敷で食べられている。

だが、自分に都合がよければそれでいいのがこの男。

グズマくんってば、きのみなんか集めてどうするんだろうね！ と

オボロはしらばっくれている。

突き刺さるリジーの視線も、彼は全く意に介していなかった。

ミヅキが今まで出くわしたスカル団への愚痴。それは溜まりに溜まっているようだ。

口を開いた少女の舌は、止まる気配がさっぱりない。

ボク達もスカル団なんだけどなあ、と思いつながら、オボロはテキトーに頷いている。道中大変だったんだね、と幹部であるにも関わらず、どこか他人事のように相槌をうつっていた。

「あ、そうだ。ボクもスカル団として、これだけは言いたいなだけだよ」

思い出したとばかりに、オボロは手のひらをぽんと叩く。

話を遮られたミツキは「ううう。まだまだ言い足りないんだけどな」とくちびるを尖らせた。どうも彼女はお喋り好きらしい。

けれどもそこはスマイル0円を信条にする少女。

すぐにいつもの笑顔に戻って「オボロさん、言いたいことつてなんですか？」と彼女は尋ねた。

「したっぱ達にちよっかい出すだけならいいんだけどね。もしキミ達が、グズマくんの敵になるんならさあ」

いつも通りへらへらと話すオボロ。だが、その目は全く笑っていない。

それから彼はスツと笑みを消すと、じつと三人の方を見た。

「スカル団の幹部として、本気でキミ達を潰す。それは、絶対だ」

凄んでいるわけではない。脅しているわけでもない。

ただただ淡々と、彼はそう言った。

静かに話す彼の姿。きつと、これが本来のオボロなのだろう。

青い瞳は夜のように真っ暗で、中には何も映っていない。がらんどうだ。

彼らは息を飲んだ。彼の雰囲気にも飲まれたのだ。

はつとする彼らを見て、オボロはプツと噴き出した。それから「そんなビビらなくてもいいよ。普通に島巡りをしていけば大丈夫さ！」と彼はひょうきんに言った。

そこにあつたのは腹立たしいほどに自信ありげな笑み。もうすっかり、いつもの彼に元通りだ。

「だからさ、グズマくんに向かうのはやめておくれよ？ ボクはキミ達とトモダチのまままでいたいし、それに面倒くさいしね！」

そう茶化しながら、オボロは地面に置いたカバンを持った。

時間は九時を回っている。そろそろ寝に行かなければ、翌日の肌のツヤにさし障る。それにホテル備え付けの温泉にも入りたい、とオボロは考えた。

彼にとって何よりも大切なもの。あえて言うまでもなく自分自身だ。

おそらくそれは、並大抵のことでは揺らがない。

「ボク達はホテルに戻るけど、これからキミ達はどうするんだい？」  
「私達もハノハリゾートに行つて、ご飯を食べようかなって思つてます！」

ホテルのご飯楽しみだねえ！ と少年少女は盛り上がる。

一同が夕飯の妄想を胸に膨らませていた時、「あああー！」と突然リーリエは叫び声をあげた。控えめな彼女には珍しく、目を見開いて、だらだら汗を流している。

「そういえばわたし達、空間研究所へ行くようにククイ博士に呼ばれていたのです！」

慌てるリーリエ。驚くミツキ。

そんな中、ハウだけは「うーんと。そういえばさー、そうだったかもー？」と首をかしげている。

さすがに博士をこれ以上待たすわけにはいかない。しばらく晩ご飯はお預けかあ、とミツキは肩をがっくり落とした。

「ククイはかせ？ バーネットはかせじゃないの？」

「はい。わたしは何もできない身ではありますが、一応クイ博士の助手をさせて頂いているのです」

「助手！ あたしよりもちよつと上なだけで、もう働いているのね」  
すごいわね、と呟くりじー。その横で、オボロもぴゅうと口笛を吹きながら手を叩いている。

なるほど。どうりでコスモッグが見つからなかったわけだ、と彼は納得したのだ。

少女のバックに、あのクイ博士が付いていたならば。

「空間研究所ってことは、ウルトラホールのことでも尋ねに行くのかい？」

「ううんと、恐らくはそうでしょう。バーネット博士は空間研究の第一人者ですから」

詳細はリーリエも聞いていないらしい。彼女はハの字に眉を下げて答えている。

あの軽薄な男、クイ博士のことだ。

サプライズとしてウルトラホールの話を聞かせ、彼らを驚かせたかったのか。それとも愛妻家で有名な彼は、バーネット博士のことを惚気たかったのか。

どちらなのは知らないが浅はかな考えだな、とオボロはぼんやりと思った。

相変わらず自分のことを棚にあげる男である。

リーリエちゃんはバーネット女史とも知り合いなんだね、とオボロ。彼はここぞとばかりに質問を重ねた。

ウルトラホールのこと。バーネット博士のこと。夢のはざまのこと。

軽い口調でリーリエに尋ねるも、その表情は必死さを隠せてはい

ない。

少しでも少女から情報を引き出そうと彼が躍起になっていると、「あのお。盛り上がりつつあるところ悪いんですけど」と気まずそうに、おずおずとミヅキが手をあげた。

「ウルトラホールって何ですか？ 私、なにも知らなくて」

「アローラに伝わる昔話さ。アローラには異世界と繋がる穴があつて、そこから変わったポケモン達がやって来る……ってね」

ロマンあふれる話だろう？ とオボロは少女にウインクをした。

眉唾物にもほどがある。そう嘲笑されそうな話だ。

学会でも物議を醸していて、ウルトラホールなど嘘っぱちだと言う者もいるとかいないとか。

もし自分もアローラの民だったら、単なる言い伝えだと思うだろうな、と彼は思った。

だが、ウルトラホールにはきちんとしたデータがある。それを裏付ける証拠がある。証人もいる。

それを彼は、嫌という程知っていた。

「なるほど！ ちょっとシンオウ神話に似てますね」

頭の上に浮かぶハテナが消えて、すんと憑き物が落ちた顔をするミヅキ。

どこにも同じような話があるんだなあ、と感心する少女に彼はこうも続ける。

「さらにその穴はね。バーネット女史が研究していた別の空間、夢のはざまにも繋がってるんじゃないかって話だよ」

「夢のはざまかあ。なんだかステキだなあ、ネーミングに夢があつて！ 一回行ってみたいなあ……！」

妄想が膨らんだのか、ミツキは自分の世界へ旅立っていく。  
だらしない笑みを浮かべる彼女に、オボロの弟子は眉根を寄せた。普段から釣り上げている眉をさらに釣り上げて、少女は嫌そうな顔を隠しそうともしなかつた。

「そう？　あたしは好きじゃないわ。なんだか気味が悪いもの」  
「なんで？　私は夢が好きだよリジーちゃん！　夢の中なら美味しいもの食べ放題！　好きなことし放題だもん！」

よだれをじゅるりと垂らしながら力説する少女は、何を考えていたのかバレバレだ。

腹に手を当てて瞳を輝かせる少女に、食い意地の張ったリジーも呆れ顔を浮かべている。

どうやらミツキは夜ご飯のオアズケが相当堪えているようだ。

そんなミツキを見て、やれやれとため息をつきながら「ボクもリジーと同じ意見かな」とオボロは言った。

「なにも夢ってのは何もいい夢ばかりじゃないだろ？　夢のはざまには、恐ろしい悪夢もいっぱいあるんだからね」

「ううう、確かにそうなんですけど。二人ともロマンが足りないですよお」

ぶすけたミツキの顔を見て、オボロは再び嘖き出した。

ミツキの言葉はどうにも彼のツボにハマるらしい。口元に手を押さえながら、ひたすら笑いを堪えている。

頬を膨らませる少女の頭をぐしゃぐしゃと撫でると、「まあボクも専門家じゃないし、よく分からないからさ。バーネット女史に色々聞くといいんじゃないかな」とオボロはあやすように言った。

「明日はキミ達大試練だろ？　アーカラの島クイーンはいわタイプ  
の使い手だから、気をつけるといいよ」

「今日はありがとー。みずのいしも貰えてさー、おれすつごく嬉しいー！」

「私も二人と戦えて楽しかったです！」

彼ら五人は目を閉じて、歯を見せ笑う。にこやかに。

お互い手を振り別れを惜しむ。そんな中、リジーはぽつりと呟いた。

「あたし達、こんど会うときはテキなのかしらね」

「さあね。それを決めるのはボク達じゃない。ミツキやハウくん、それにリーリエちゃんとグズマくんだ」

「ううう。『スカル団のオボロさん達』と戦うことにならなきゃいいんだけどなあ」

「まあ、また困ったらボクに連絡するといいさ。敵になっても、アドバイスくらいならいつでもあげるよ」

オボロが浮かべているのはスカした笑顔。

たとえミツキがスカル団の敵になったとしても。

いや、コスモツグを連れた少女という限り、確実に敵となるミツキであつたとしても。

スカル団に影響がなければ手助けしても問題ない。自由気ままな彼らしい発想だ。

敵に塩を送る。

敵であつたとしても最後まで義を通し抜くヒールの姿。

それは、アローラの関心を惹きつける夢のはざまよりロマンが詰まっているはずだ。

そう彼は常々考えていた。

——そして義理堅いところを魅せるボクの様は、言うまでもなく美しい！



スカした笑みを一層深めるオボロ。腹立たしいほどのドヤ顔は悦に浸っていることがよく分かる。

弟子になってから早数週間。

師匠の考えがすっかり読めるようになったリジーはひとつ、ため息を吐いた。

思う存分陶醉したオボロはどこかスッキリした顔をしている。

それから金髪の少女の方を向くと、「一つ言い忘れてただけだよ」とくすくす笑いながら彼は言った。

「あのさりーリエちゃん。可愛い可愛いキミに免じて、今回は見なかつたことにしてあげるけど」

首をかしげる三人にオボロは笑いかける。

彼の耳に残っているのは、おもちゃの笛の音のような音。話している最中も、ぴゅい、ぴゅいとかすかに聞こえてきたそれ。

彼には既視感があったのだ。それは、彼にとって非常に耐え難いものだった。

「悪いことは言わないから、そのシオルダーバッグの中身を持ち主に返した方がいいよ。でなきやひどい目にあっちゃうかも、ね！」

凍りつく少年少女を尻目に、大試練頑張つてね、と師弟は軽く手を振り去っていく。

これは善意の忠告だ。自分はなんて優しいのだろう、とオボロは思った。

だが、この三人は忠告通りに従うような子達ではない。そのことも彼は知っていた。

彼は通信機を取り出すと、プルメリのためにミツキのことをぼちぼ

ちと打ち始めた。

容姿。性格。手持ち。カントーから来た島巡り中のトレーナーだということも。仲間のハウという少年のことも。

ただリーリエのことだけは伏せながら。

オボロは指がボタンを滑るたびに、自分の胸をちらちらとおにびで焼かれているような思いに襲われた。

その青白く不気味な炎はゆつくりとにじり寄ってくる。

真綿で首を絞めるかのような焦りは、彼の心に深く深く根を張った。

ククイ博士を敵に回さぬように。ミツキが成長しきる前に。

いつ、どこで、どうやってコスモツグを奪うのか。

後者はともかく前者はネツクだ。

迂闊に動けば返り討ちに遭うあげく、リーリエごと逃げられてしまう。そしたら全てが台無しだ。

目立ちたがりのロイヤルマスクはしやしやってくるに違いない。自分の助手のこととなればなおさらだ。

オボロは青白く光る端末を見つめながら、弟子の声も聞こえないほど考え込んでいた。

コスモツグの情報を握っていることを彼がエーテル財団に言う気は全くない。

それどころか彼は自らの唯一の居場所、スカル団の面々にも明かす気はなかった。

それは全てグズマのため。全ては命の恩人のためだった。

## 第十話 【ウツロイド】

まず朝早くに起きたら歯を磨く。運ばれてきたご飯を食べて服を着る。

それからお次は準備運動。

膝を折り曲げいちにいさんし。腱を伸ばしてにいにいさんし。その場を飛び跳ねさんにいさんし。

ぐるぐると肩を回して伸びをすると、勢いよくミヅキはロビーを駆け抜ける。チエックアウトをするのも忘れ、ハウヤリーリエが待つ外へ全力疾走。

無事合流した三人は今日の使い道を話し合っていた。

リーリエはひとまず空間研究所に行き、バーネット博士とご歓談。二人は先にデイグダトンネルを通ってコニコシティへと。

仲間と別れた後、暗くてじめじめした洞穴を少年少女はずんずん進む。

そこら中を這い回るデイグダをぱしやり。ポケファインダーに収めながら、道具を拾い集めていく。彼らの気分はさながら探検隊だ。

9番道路を抜け赤い門をくぐると、そこには異国情緒あふれる街並みが広がっていた。

ミヅキは思い切り空気を吸い込んだ。

たちまちどこか懐かしい香りが胸いっぱい広がっていく。

ふんわりと優しく、嗅いだ人間もポケモンも一瞬で落ち着かせるような。

見ると、出店から一筋の煙が立ち上っていた。淡く光るそれは空に溶けて消えていく。

お香だ。お香が焚かれていたのだ。

「ねえハウ。自由行動しちゃだめ？ この街、すつごく面白そうだから探索したいんだよね！」

「ええー、なんでー？」

「うとうダメかな。大試練が終わるまでだから」

疑問を投げかける少年に眉を下げる少女。

そんな状況でも双方笑顔の囃は、側から見ると相当シニールだ。

ミヅキは言葉を続ける。小さな声でごによごによと。

こてんとハウが首をかしげても彼女の口は回り続ける。

よほど少女はこの街を好きに歩きたいらしい。

コニコシテイに故郷と近いものを感じたからなのか。彼女は奥底から沸き起る衝動に突き動かされていた。

涙目になりながら手を合わせるミヅキ。あまりに必死なその姿をハウは不思議に思っていた。

そこまでミヅキがねだる理由が、彼には全く分からなかったからだ。

郷愁の念。それは、本人にしか分からない。

どんなに故郷が大切で、狂おしいほど求めているても、他者にとっては単なる過去にすぎないからだ。

けれども彼はいわゆるイイ奴だった。

マイペースではあるものの友達思い。自分のことよりも人のことを優先する。お年寄りには席を譲り、迷子がいれば道案内を欠かさない。

それがハウという少年だ。

「うーん。けどミヅキがしたいならさー、いいよー！ おれもお腹すいたからー、好きなだけご飯食べたいしー！」

そう言つて、ハウは食堂に消えていった。

さすがは商売の街、コニコシテイ。

がつつり食べたい男向けの肉定食。海の幸を堪能できる魚定食。ダイエツトにぴったり、ヘルシーな野菜定食。そしてよくばりな人用に盛り合わせスペシャル。

飲食にも力を入れているようで多種多様な定食がここの名物だ。

ハウがスペシャル定食を頼んでいる最中、ミヅキは街を見て回っていた。

漢方薬を試食してえづいたり、お香を何個か買ったり、ブティックを見て回ったり。それから少女は髪飾りを買おうとジュエリーショップへ。

ミヅキが扉を開くとぬつとなにかが飛び出した。

ダイノーズだ。

大きな体と大きな手の間から、するすると手紙を取り出すと少女によこす。

ミヅキは手紙をまじまじと見つめた。流暢なアローラ文字で裏にライチと書かれている。

少女は封を切ると、アーカラ島の島クイーンからの果たし状を読み始めた……。

さてさて場所は戻ってカンタイシティ。

ただいまの時刻は十一時。街は歩く人で活気付き、ホテルしおさいもばたばたと人が走り回っていた。

当然だ。チエックアウトの時間は人が混むし、清掃作業にも追われるからだ。

よほど切羽詰まっているのか、どんどんと容赦なくノックされる扉。だがしかし部屋の主はうんともすんとも言いはしない。

ちらりちらりと時計を見ながらバトラーは舌打ちを重ねるばかりだ。

そんな中、この物語の主人公であるオボロとその弟子がなにをしていたのかというと、

寝ていた。

チエックアウトの時間もすっかり忘れ、ホテルで買ったお揃いの耳栓とアイマスクを付けぐうすか眠る二人の姿。その光景はデジャヴ

だった。

## 第十話【ウツロイド】

カンタイシティに佇む青い屋根。それをじっと眺めながら、オボロトリジューは太陽の元に照らされていた。

近くにいたフロントマンはぎゅっと眉根を寄せている。このお騒がせコンビがさっさと去ることを彼は心の底から願っていた。

客とはいえマナーを守らない者はお断り。

天使か悪魔か。彼らの名前を呼ばずとも、しおさいの従業員はすっかり震える魅惑のバッドテイストだ。

彼は帳簿に書かれた名前を手帳に写すと真つ赤なマーカーで目立たせた。ブラックリスト入りを決めるのもフロントマンの仕事である。

もつとも、オボロもリジューも偽名を使っていたので意味がないことではあったが。

少女はホテルに興味を失ったようで、時計を眺めて今日の日を確か確認。それから売店で買ったハートスイーツを取り出すと、ぽいっと口に放り込んだ。

一方オボロはといえば、相も変わらず青い屋根を睨みつけている。延々と舌打ちをし続ける彼の姿は美しさとは程遠い。

「ああもう観光業ってやつはすぐに客の足元を見るんだからさ。困っちゃうよね！」

「お師匠さま、ホテルの人すつごく怒ってたけどよかったのかしら」「怒ってたって？　はんっ！　さぞかし奴らはいいい気分だろうさ！」

鼻息荒く、声をうわずらせるオボロ。

右手をホテルに突きつけると、歯をむき出しにして彼はうなる。その姿はまるでルガルガンだ。

「このボクから追加料金をせしめたんだからね！　しかも宿代の五十%も！」

彼はいつもの青いハンカチを取り出すと、ギリギリとそれを噛みしめる。全くもって高級品の無駄遣い。キャタピーの糸が泣いている。ねこにこぼん。いや、ニヤースに小判といった有様だ。

そんな師匠の姿とは反対に守銭奴の弟子は落ち着き払っていた。普段だったらオボロと共にホテルへ噛みつきそうなものであるにも関わらず。

もしかしたら落ち着いた状態とは少し違うのかもしれない。リジーはどこか緊張しているようにも見えた。

ちらり、ちらりと時計を見るのを、少女はやめない。おやつ時間もとうに過ぎていく。アイマスクと耳栓のせいか、一心不乱に寝てしまったリジー。

少女は普段、あまり遅くに起きなかった。それどころか早寝もしなかった。

それはいわゆる『リジーのお家の事情』とやらのせいなのだが、ここでは割愛することにする。

「しようがないわよ、お師匠さま。ぜんぜん起きなかったものね。あたし達」

「だとしてもさ！　いくらなんでもぼりすぎじゃないかい？　まったく、昨日の稼ぎが全部パアだよ」

そう言うと、オボロは地団駄を踏み出した。相当はらわたが煮えくり返っているらしい。

何度も言うが、スカル団の懐事情はオニスズメの涙ほどの厳しいものだ。

それゆえに金を稼ぐ必要があるのだが、スカル団における一番の稼ぎ頭。それがオボロだった。

1番道路で巻き上げた金だけでは今月のノルマに届かない。するとスカル団を養うことはできない。ルザミーネバトロネからの援助にも限界があるからだ。

それは困る。非常に困るな、とオボロは思った。

自己中な彼だがスカル団への情は深い。

彼らはオボロにとっては命の恩人であり、かけがえのない仲間であり、故郷に残してきた二人きりの家族と同じくらい大切だった。

とはいえホテルは先ほど追い出されてしまった。これからロビーに戻ってポンジャンで稼ごうとするのは無理がある。

場所を変えるにしても、高級ホテルのハノハリゾートは監視が厳しい。

どうしたものかとオボロが頭を悩ませていると、リジーは誇らしげに腕を叩いた。

「お師匠さま、ここはあたしの出番ね！ ちよつとつかれるけど、手っ取り早くかせぐ方法があるんだから！」

「まさかだけどさ。ナマコブシ投げとか言わないだろうね」

嫌そうな顔をする師匠に、「あら。よくわかったわね」とリジーは目を丸くする。きよんとした少女を見てオボロはがっくりうなだれた。

二つにまとめた赤い髪がだらんと垂れる。地面についてしまいうだ。

「えええ。ナマコブシ、ボク触るのもイヤなんだけどなあ。ぬめぬめしてるし」

「もうお師匠さまってば。昨日もねる前にナマコブシのパックしてたじゃない」

「それはそれ、これはこれだろ？ 美容のためなら何にでも耐えて



みせる。それがファツシヨナブルなメンズつてもものさ」

オボロは顔を上げるとため息をついた。憂鬱そうな彼の顔は表情に反してつやつやとして見える。

ニガサダでも食べたかのようなリアクションを繰り返すオボロ。あまりに嫌そうな彼の姿に、じゃあお師匠さまは見てるだけでいいわ、トリジーは頭を抱えた。

「あたし、こう見えてもナマコブシ投げのプロなのよ。大船にのつたつもりで、どーんとかまえてるといいわ!」

師匠に向かってウインクをすると少女はハノハビーチに走っていく。その後ろをゆつくりとついていくオボロの後ろ姿は、嫌に重く、しい雰囲気を負っていた。

ナマコブシ投げのバイトは出来高制だ。

陸へ陸へと大量にやってくる黒いぬめついたポケモン。それを人があまりいない時に海へ戻すのがこのバイト。

愉快的なナマコブシ達をちぎっては海へ投げ、ちぎっては投げ。そうして観光客の皆々様に陽が当たる時間を快適に過ごしてもらう。

地味な仕事ではあるが、アローラの観光業を支える大事な仕事だ。リジーはゴーストを出すと、ナマコブシ達の場所を探るように指示した。

空中からはゴーストが。地上からはリジーが。

ナマコブシを見つけたら　　「くろいまなざし」　　でじつと見つめ、トレーナーに知らせる。

すかさず少女は下から黒いポケモンをすくうと、白い中身が飛び出す前に海の彼方へ放り投げる。

その動きはとてもスムーズで手馴れている。

自称・ナマコブシ投げのプロは伊達じゃあないな、とミックスオレ

を飲みながらオボロは思った。

弟子が働いている間、暇を持って余していた彼は砂の城を作って遊んでいる。シロデスナの形をしたそれはやけにリアルで、オボロは満足そうに微笑んでいた。

「あ、オボロさんにリジーちゃん！」

ナマコブシ投げは一旦中断。

声が聞こえてきた方を向くと、案の定やってきたのはミヅキだった。

走りながら手を振る彼女の腕にはZリング。

夕日に照らされ、黄褐色のクリスタルが走るたびにチカチカと瞬いている。

「やあ！ 昨日ぶりだね。大試練達成おめでとう、ミヅキ」

「ありがとうございます！ まだ言っていないのに、どうしてわかったんですか？」

「そのZクリスタルを見れば誰だって分かるさ。イワZだろ？ それ」

なるほどなあ、とミヅキはうなずいている。

リジーはぬるついた手を拭きながら、「じゃあミヅキは今からウラウラ島に行くのね」と訳知り顔で呟いた。

「ううん。私、今からハウと一緒にエーテルパラダイスに連れてって貰うんだ！ 楽しみだなあ」

「そうなの？」

「そうそう。本当はすぐに行かなきゃいけないんだけど、二人が見えたから話しかけに来たの！」

そう言うと、につこり歯を見せ笑う少女の姿はまるで太陽のように

暖かい。

ボク達とは全然違うな、と思わずオボロはひとりごちた。

自他共に認める社会の掃き溜めにはこんなに明るく、未来への希望に満ちた者はいない。

今と向き合い努力しているのは、はみ出し者の自分とその弟子くらいだ。

ミツキが真昼を照らす天高く輝く太陽だとしたら、ボク達は一体なんなのだろう。とオボロは思った。

夜を照らす月というのもどこか違う気がする。

オボロがぼうつと考えていると、ミツキは「そう言えば」と口を開いた。

「私、大試練の前にスカル団の幹部と戦ったんです。ええと、プルメリって女の人。坊主頭の、エクステ付けてる」

「プルメリちゃんとかい？ 勝敗は……って、クリスタルを見れば分かることだったね」

試練の前に戦ったのだから、無事ミツキが試練を受けることができたとするのはそういうことである。

「二応勝ちました！ けど、あの人全然本気じゃなかったんです。手加減されてて、なんか気分は警察に注意されたみたいな感じで」

「そうなのかい？ ころしめに行くとかなんとか、グズマくんと言ってたのになあ」

「あねさんはやさしいものね。だからかしら」

首をひねる二人とは対照的に、ミツキは拳を握り締めた。相変わらず笑顔のままの彼女はどこかちぐはぐで面白い。

おーい。ミツキってばー、はやくー！ と遠くから呼ぶ声が聞こえ

てきた。きつとハウだろう。

今すぐ行く！ と返事をする、ミヅキは二人の方へ向き直る。それから、

「だから、オボロさん。あの人に伝えておいて欲しいんです。次会ったら、ゼンリヨクで戦いましょう！ つて」

と言うと、元来た方へ走り去っていった。

ばたばたと砂が舞い上がり、白い砂には足跡が残される。

みるみるうちに小さくなっていく少女。

オボロは手を口元に当てると、「分かった！ このボクがプルメリちゃんにばつちり伝えておくよ！」と声を飛ばした。

「ミヅキったら、スカル団のテキになる気は満々なのね……」

うへえ、と嫌そうな顔をする弟子を尻目に、師匠は通信機を取り出した。今日初めてのメールチェックだ。

スクロールをしてメールを読んでいくと彼はにやにやと笑い出す。その顔は少し気持ちが悪い。

「リジー、夕食はプルメリちゃんと三人でご飯を食べに行こう。コニコシテイの食堂でさ」

「あねさん、コニコシテイにいるの？」

「ああ。だからナマコブシ投げを終えたらコニコシテイに行くよ！」

通信機をポケットに突っ込むと、オボロは意気揚々とステップを踏み出した。両手を広げてくるりくるりとその場を回り始めた彼に、周りの観光客はドン引きだ。

リジーはかちかちと爪を噛んだ。眉間にしわを寄せた少女は、いつも釣り上げている眉も下げて、目の玉をきよろきよろと動かしてい

る。

だが、そんな弟子の様子をオボロが気にかける気配はない。

コブ付きとはいえお気に入りの子からデートのお誘いを受けた彼。

脳内には花が咲き乱れ、天使のラッパが鳴っている。

まさしく今の彼は有頂天という文字が人の形をしていた。

「あたし、この方がいいわ。コニコシティじゃないとダメかしら」

「ここはホテルとポケモンセンターしか食べるところがないじゃないかー！」

「だけど、そうだけとお師匠さま」

「あつちの方がご飯は圧倒的に美味しいよ！ 美味しさと美を追求した、野菜定食で決まりだね！」

なぜ野菜定食かという減量のためである。

間食は原則NG。炭水化物も極力食べない。その上毎日筋トレは欠かさない。

常に上裸のこの男、オボロにはひと時の油断も許されないのだ。

鼻歌を歌いながらオボロはゴージャスボールを取り出した。

彼には弟子の言葉を聞く気が全くない。

なぜかって？ それは彼が自分さえよければ良いと信じている、自己中ナルシスト野郎だからだ。

「そうと決まればさっさとこのバイトを終わらしちゃうよ、リジー。ボクも手伝ってあげるからさ」

不敵な笑みを浮かべる彼はゴージャスボールをひと撫でした。彼の相棒は共に並び立つのが待ち遠しいようで、ボールはかたかたと揺れている。

開閉スイッチに手をかける時の昂り。

それは何事にもたとえられないほど気高く、胸の奥底から湧き起こ

るものだ。少なくともオボロはそう考えていた。

「さあ出ておいで。マイ・スウィーティー、ラグラージ！」

日が暮れかける空に星を散りばめ現れたラグラージ。その姿はさながら夜をも照らす太陽のようだった。

二人と二匹は浜辺に打ち上げられたナマコブシを驚異的なスピードで放り投げていく。

そのあまりの速さに観光客はスマホを構え、ホテルの従業員は顎が外れそうなほど大きく口を開けていた。

ビーチにいた黒いポケモンを根こそぎ海へ帰すと、砂浜はすっかり白い姿に元通り。仕事を終えた師弟は受け取った封筒の中身を数えてご満悦だ。

「お師匠さま見て見て！ 今回のバイト代、今までで一番高かったわ！」

「ふふふ、それもこれもボクのおかげだろ？ 知ってる知ってる」

「ううんと、そうね。そうに違いないわ、お師匠さま！」

「うんうん。物分かりのいい弟子は嫌いじゃないよ、リジー。もう一人の弟子にもよく言っただけだよさあ」

弟子に褒められて調子付くオボロはダーテングのように高々と鼻を伸ばしている。

彼が始めるのは自慢話。例のごとく弟子の話に始まり、コンテスト時代の武勇伝を語り始めた。

弟子はとにかくおだてる。おだてる。おだてまくる。

それから彼をちらりと見ると、念を押すようにリジーは言った。

「それでね、たっぷりお金もかせいだもの。あたし達、やっぱりココ食堂じゃなくてハノハリゾートで」

「ハイハイ行こうねニコシテイに。プルメリちゃんが待ってるん

だから」

上司と部下は似るとはよく言うものだが、ネチネチしつこいところまで我らがボスと似ないでほしい、とオボロは思った。

というより、そこは師匠である自分の潔さを見習うところだろう。

弟子の言葉をさえぎると、彼は歩くスピードを若干早めた。少女の手を無理やり取ると半ば強引に引きずっていく。

実兄に会うたびケチを付けられた、ゆつくり歩くことこそが良いものだという主張を彼は一生曲げる気はない。

ただ律儀に弟子の相手をしていたら面倒くさいのもわかりきっている。

オボロは自分の信条を脇に置いてプルメリを優先した。案外、彼はしつかり現実を見ていた。

ポケモンセンターの手前を南へ。デイグダトンネルを通ってコニコシテイへ。

どんよりと暗くてじめじめとした洞穴を二人は歩く。

諦めがついたのだろうか。隣で歩く彼の弟子は黙りこくっていた。

あたりは静まり返っている。

二人とも “かいりき” を使えるポケモンは持っていないので、ショートカットもできやしない。長い長い道のりを歩くばかりだ。

夜の帳が下りたアローラは昼とは全く違う景色を映し出す。それが洞窟の中だとしたらなおさらだ。

ぼんやりと地面を照らすのは “あやしいひかり” 。リジーのゴーストが出したものだ。

妖しげな光を頼りに二人は進む。

しばらく歩くとオボロはびたりと立ち止まった。

彼は何かを肌で感じ取ったのだ。その何かは以前嫌というほど味

わったものだ。つい最近も、彼はそれとよく似たものに会っていた。彼は冷や汗を流した。瞳孔を開いた。口を少し開けて、閉じた。横でリジーが不思議そうに彼を見つめている。彼はボールに手をかけながら、じつとその時を待っていた。

ふいに大気が揺れた気がした。目の前が光り輝いて、フラッシュでも焚かれたかのようなうだ。

反射的に二人は目をつむる。チカチカとまぶたの裏に光が焼きつく中、特徴的な声が聞こえてきた。

じえるるつぶ！

どうしてコイツがこんなところに、とオボロは呟いた。

だがその言葉に反して彼の口元は歪んでいる。このポケモンの登場を待ちわびていたかのように。

彼はマリルリとラグラージを出すと、横にいる弟子に声をかけた。その声は明らかにうわずつている。

「あいつはボクがやる。いいかいリジー、あのメノクラゲもどきには絶対に近づいちゃいけないよ。声を出してもダメだ。毒を刺されても知らないからね」

彼は知っていた。このポケモンに刺されたらどうなるかを。

おそらくアローラでは数少ない被害者の一人だったからだ。

ただ、彼は少女に釘をさす必要は全くなかった。

少女もまた知っていたからだ。あのポケモンが一体どういう存在であるかを。

「――あれが、ウツロイド」

少女の口からこぼれた言葉は、  
“あやしいひかり”  
と共にひっそりと消えていく。



それは地面に落ちた雫のように、誰の耳にも留まることはなかった。

## 第十一話【カイナシテイ】

目鼻がなく、ただ白くて白くて真っ白で、ぽっかりと宙に浮かぶそれ。目の前で虚ろげに揺れている何か。

ポケモンとはいえポケモンと認めがたいもの、ウルトラビースト。どちらかという和他们の姿はポケモンというより『動物』に近いのかもしれない。

弟子のポケモンが怯んでいる。

気圧されてしまったのだろうか。彼が出していた　“あやしいひかり”　は消えてしまった。

それにも関わらず、洞窟内は岩肌までもくつきりと見えていた。白いウルトラビーストが炎のように紅く強烈な光のつぶてを放つていたからだ。

でいぐだぐ！　でいぐだぐ！　だぐ・だぐ・だぐ！

異様な雰囲気を感じたのだろう。地面に潜るデイグダの大群が一斉に逃げていく。巻き込まれてはかなわぬと、ズバット達もギイギイ鳴きながらどこかへ消えてしまった。

その場に残されたのは彼とその弟子、オボロトリジー。加えて彼らのポケモンだけだった。

白いウルトラビーストは甲高い声で高らかに叫ぶと、ぐつと体を仰け反らせた。

きらきらと輝く光がポケモンに集まっていく。洞窟内に響き渡る音は興奮のあまり泣き出す女のような音だ。

オボロは血走った瞳でじつとそれを見つめながら、ぱちんと指を鳴らす。

洞窟内を急速に満たしていく泡。マリルリの　“バブルこうせん”　だ。

この技は少し前にも使った。かつてメガやすのあった場所で、島キ

ングから逃げるために。

ただ以前と違うのは、彼が逃げる気はさらさらないということだった。

収束された光が放たれる。暖かい。

泡を通された光は威力が弱まり、オボロとリジীর肌を柔らかく照らした。

威力が低く、コンテストでもポケモンより技が目立ってしまうため使いにくい。『バブルこうせん』。それをオボロのマリルリが覚えていて理由。

それは彼が必死になって考えた。『パワージェム』。封じのたまものだった。

「目論見通りつてね。マリルリは。『てだすけ』。！ ラグラージは泡を隠れ蓑にあいつに近づくのさー！」

マリルリが自分の耳を二回打ち鳴らすと、ラグラージのボルテージが高まっていく。

大小の泡をくぐり、軽やかに駆け抜ける彼女の姿はボンヤリと視界を覆う泡越しに見ても鮮烈だ。

邪魔だとばかりに白いポケモンは目の前の泡々に毒液を浴びせかける。

ぱちんぱちんと割れていく泡。無防備に現れるラグラージ。

はるか後ろにはオボロとマリルリ。さらに少し離れたところにはリジীরゴースト。

目的を見つけたそれは触手を尖らせた。びくびくとヒクつく触手は膨れ上がり、先からぼたぼたと毒液が垂れ始める。

その時真っ白なポケモンは無我夢中だった。本能のままに行動した。彼以外のことは頭になかったのだ。

目の前のラグラージすら忘れてしまうほどに。

「いいよラグラージ、そのまま。『たきのぼり』。！」

指示を受けた彼女は足場に水を作り上げる。ごおごおとうなる水を纏い、真つ白な腹に勢いよく突進した。

それは年端もいかぬ少女のような悲鳴をあげた。金切り声のようだった。

尖らせた触手の力も抜け、溜めた毒液がだらりと地面に落ちていく。どうやら『こうかはばつぐん』のようだ。

天に舞い上がったラグラージがそれを足蹴にすると、あっけなく地面とキスをした。泥と砂にまみれたそれはピクリともしない。

「もう大丈夫だよ。リジー、出ておいで」

「お師匠さまなんともない？ だいじょうぶかしら」

「当たり前だろ？ こんなものに遅れはとらないさ」

岩陰からうかがっていたリジーとゴーストがひよこひよここと師匠の方へやつてくる。

白いポケモンを一瞥すると、リジーは心配そうにオボロを見上げた。

彼の様子はいたって普通。いつもと変わらず自信に溢れ、腹が立つほどの薄ら笑いを浮かべている。

「にしてもコイツ、生け捕りにしたいなあ。ルザミーネ女史から貰ったコレ、使っちゃダメかな」

黒いケージを取り出すと、ウツロイドと交互ににらめっこを始めるオボロ。ケージはエーテルパラダイスに呼び出された時、コスモツグ用に貰ったものだ。

彼はルザミーネの言葉を思い出した。

『特別なポケモンだから、逃げないようにするにはこれが必要なの』

コスモッグと同じく目の前にいるポケモンは『特別なポケモン』だ。その共通項はウルトラビーストだということ。なぜデイグダトンネルに白いポケモンがいるのかは分からないが、大方エーテル財団が絡んでいるに違いない。もしかしたらコスモッグと同じように保護をされていて、逃げられたのかもしれない。つまりは野生のポケモンだ。

——だったらボクが貰っても文句は言われないよね。バレた時に知らないふりして差し出せば、きつと大丈夫さ！

オボロは小さく畳まれたケージを組み始めた。すぐ物に当たり、元の面影もなくブツ壊す。

この場にいたのがグズマであれば、一分も経たずしてケージは地面に投げ捨てられたことだろう。

だが手先が器用なオボロには造作もないことだった。

平べったかったケージはたちまち立方体になり、淡く淡く光りだす。どうやらちゃんと完成したようだ。

ただ青く光るケージの大きさは、目の前のポケモンにはかなり小さい。い。

「ううん、困ったなあ。メノクラゲもどきを無理やり押し込むってのも品がないし」

「品がないよりまず入らないと思うわ、お師匠さま。だってこの子、頭が大きいんだもの」

「うるさいなあ。そんなの見れば分かるよ。ボクだってさ」

「あきらめるのが吉って、きつと神さまが言ってるのよ」

「イヤだね。絶対こいつを手に入れてみせる」

「お師匠さまのいけず。わからずや」

「神に仇なすならず者集団のスカル団が、カブ<sup>カブ</sup>の言うことなんか聞いてどうするのさ」

イラついているようで、オボロは弟子に向かって舌打ちを重ねる。さてどうやってこのポケモンを捕まえるか。

気分は目の前に人参をぶら下げられたバンバドロ。彼の心はひとカケラも余すことなく白いそれに囚われていたのだ。

だから彼は気がつかなかった。地面に転がるポケモンの触手が一瞬、動きを取り戻したことを。

「——お師匠さま！」

焦りに満ちた弟子の声。はっとしたオボロが振り返ると、触手は間近に迫っていた。

彼のポケモンでも弟子のポケモンでもなく、また近くにいる弟子でもなく、ただただ彼に向かって一直線に。

目を丸くするオボロ。迫るウルトラビースト。

そんな両者に異議を唱えたのはマリルリだった。指示を待たずにオボロの前に滑り込むと、透明の盾を展開させる。

盾はオボロの目の前で毒液を撒き散らす触手を受け止めた。

派手な色をした液体は透明な壁を滑っていく。

マリルリの顔にほんの少し紫色の粒がかかったが、ちつとも堪えているそぶりを彼女は見せなかった。

あの毒、ポケモンには害がないのか、とオボロは胸をなでおろす。それから、

「ボクのために　　『まもる』　　を出すなんて、キミはポケモンの鑑だよ！」

と言って、きらきら瞳を輝かせた。

彼は自分のポケモンにうっとり見惚れている。

トレーナーの期待に応えようとマリルリはすっかり張り切っている。

“まもる”を展開させたまま、白いポケモンの猛攻を上手くさばき続ける彼女。耳をぴよこぴよこ動かすその姿はオボロの兄のポケモンを彷彿とさせる。

横のラグラージも食い入るように水玉模様のポケモンを見つめていた。

自分の主の関心を根こそぎ奪っていった仲間。

加勢をするのも忘れて、思わず睨みつけるようにマリルリの方を見る。

女の心に人間もポケモンも違いはない。彼女の胸底にはめらめらと嫉妬の炎が渦巻いていた。

手持ちは恋人も同然だと公言して止まないオボロだったが、そんな彼にも六股管理はなかなか難しいようだ。

「ありがとう、マイ・スウィーティー。次は “まもる” をしたまま突っ込んじゃうのさ！」

頼られていることを感じているのか、マリルリは誇らしげに耳を動かしている。

今日の彼女は絶好調だ。透明の盾を維持しつつ、純粋な力でウルトラビーストを押しやり地面に叩きつける。

もはや技でもなんでもないが、白いポケモンには効いたらしい。柔らかな体がミンチになっていく様をオボロとリジーは面白そうに眺めていた。

技は特殊技しか覚えていないが、マリルリの真骨頂は脂肪に隠れた鋼の身体。つまるところは筋肉だ。

『ちからもち』な彼女は魅せるバトル以外の方が皮肉なことに魅せられる。

だからコンテストで彼女が上手く活かされた試しはなかった。むしろ負ける要員ですらあった。

だがアローラでは違う。アローラにはコンテストなどないのだから。

相手の鳴き声が止んだのを認識すると、くるりと翻ってマリルリは教科書に載るお手本のように着地した。

それから “まもる” を解除して主人の元に歩み寄る。

彼女はトレーナーに褒めて貰いたかったのだ。そしてしてはならない油断をした。

だからミンチになったはずのそれが、ぐじゅぐじゅと音を立てて体を再生させているのも気がつかなかった。

ばしやん。

ふいにある音を長い耳が拾った。それはこの洞窟で聴こえるはずのないものだ。マリルリの大好きな大好きな水の音。

不思議に思う間もなく彼女は異変を感じ取った。

背中が燃えるように、熱い。

マリルリが叫び声をあげると、白い白いポケモンは宙にゆつくりと浮かび上がった。

マリルリの背中は溶けたのか、一部が露出していた。その様はひどくグロテスクで痛々しい。

見ると、その触手には先ほどとは違う色の毒液が付いている。

“アシッドボム” か、とオボロが睨みつけるもウルトラビーストは気にする様子もない。

むしろやる気に満ち溢れているように見える。すっかり回復したようで、威勢良く空を飛び回っていた。

「もう元気になるって、もしかしてさ。キミ、前より強くなってないかい？」

「なかなかしぶといわね。お師匠さま、あたしも手伝うわ！」

「いや、キミは黙って見守ってるといい。何度復活しようがその度に、ボク達が華麗に倒していく様をね」

洞窟の天井あたりまで高く高く飛び上がるポケモンは、海の中にいるかのように変幻自在に移ろいでいる。

それから一気に急降下。オボロめがけてなりふり構わず飛びかか



る。

「さあいくよマリルリ！　　“ふぶき”　　でもう一度やつつけちゃうのさー！」

一気に洞窟内は冷え込み、アローラとは思えない冬の様相が現れた。

“バブルこうせん”　　で濡れていたからだろうか。そこら中に転がる岩々はたちまち凍りつき、ヒビまで入る有様だ。

その威力はかなりのもの。だが、目の前のポケモンは平気そうにしている。

少し触手の先が凍って硬くなっているのが分かるが、あまり効いていないようだ。“ふぶき”　　が猛威を振るう中、速度を落としたものこちらへ向かうのをやめない。

その姿は自信に溢れているように見える。まるで勝算でもあるかのように。

嫌な予感がするな、とオボロは冷や汗をかいた。

洞窟中に吹き荒れる　　“ふぶき”　　でよく見えないが、あれは光を纏っている？

だとすると、もしかしたら。あれは、あれが発動しているのは――

「避ける！　　“ミラーコート”　　だー！」

白い体は光る。光り輝く。そしてパツと瞬いたかと思うと、そこら中にエネルギーを解き放った。

大きな塊がマリルリに当たる。残りが散らばる。彼と弟子は伏せた。

あたりに飛び交う。断末魔が聞こえる。その声は慣れ親しんだものだ。すぐ近くには向かってきたポケモン。

「ラグラージ、メガトンキック！」

脚を振り上げたラグラージは思いきりそれを蹴飛ばした。白いポケモンは綺麗に吹っ飛んで壁にぶち当たる。

だが戦いに終わりは見えなかった。ちぎれた手足が、ちぎれた触手が、音を立てて再生するのが見えたからだ。

白いそれは赤い輝きを一層増して、ぽつんと不気味に浮かんでいた。

マリルリは倒れて動けそうにもない。オボロは黙ってボールに戻すと、ぎりぎり奥の歯を噛みしめる。

彼の瞳は目の前のポケモンに吸い込まれていた。眉間のしわを深く深く刻み込んで、じいっと。

それから視線が外れることはない。外せない、と言った方が正しかった。

歯噛みする彼の頭を包んでいたのは焦燥の念。

何としてもあれを手に入れたい。何としても手に入れたいんだ。

元の世界への貴重な手がかり。ウルトラスペースにいるはずの、忌々しいポケモン。

故郷に戻るのが第一だ。他に優先するものなどない。

少なくとも今まではそうだった。これからもそうだ。そのはずだ。だから捕まえる。

毒なんかどうでもいい。どうせたいしたことはない。

むしろ感謝してくらいだ。おかげで今のボクがいる。

弟子のことなんか知るか。もし言いつけを破って勝手に毒を喰らったとしても、いつかは縁の切れる人間だ。

だけど今のままだとジリ貧だ。あのポケモンはいくらでも復活する上に、なぜか昔より強さも上がっている気がする。

本当は撤退するべきなんだ。

ケージは小さいし、捕まえられる保証もない。

手持ちが無駄に傷つくだけだ。またの機会を伺うべきなんだ。

分かってる。そこまで馬鹿じゃない。

だけど、けど、ああでも。なんで。

ああ手に入れたい。手に入れたいなあ。手に入れたいよ。手に入れたいんだ。手に入れたい。手に入れたい。手に入れたい。手に入れたい。手に入れたい。手に入れたい。

「オボロー！」

ふと我に返った。

幻聴かと思った。そうであって欲しかった。

洞窟に響く声が耳に入って、オボローは初めて白いポケモンを視線から外した。

洞窟の出口は存外、すぐ近くにあつたらしい。

オボローの方へと近寄る女は異変に気がついた様子はなかった。いつもの調子で歩いている。

赤い光もオボローカリジーの手持ちが出しているものだと思っっているのだろう。

——プルメリちゃん！

「こんなところにいたのかい。全く、いつまで待たす気だったのさ。もうハッピーアワーは終わっちゃまって」

「来るな！」

血相を変えて叫ぶオボローに、思わずプルメリはぎよつとした。鬼気迫るものを感じた彼女は反射的にひるんでしまったのだ。

その姿はなんとも無防備だった。そして不幸なことに、白いポケモンはオボローの相手に疲れていた。

誰だって、何度も好きこのんでミンチになりたがる奴はいない。得体の知れないポケモンだって同じだ。

宙に浮かぶポケモンはプルメリの方をくるりと向いた。触手の先

を尖らせて、地表に向かって空の間をスイスイ泳ぐ。それは絶望の速さだった。

白いポケモンは妥協したのだ。彼にとつては最悪のタイミングで。彼は駆けた。全力で走った。無我夢中だった。

自分のポリシーをかなぐり捨てて、仲間のためになりふり構わず。ラグラージへの指示も忘れて、ただひたすらに。

迫りくるポケモンをぼかんと見つめるプルメリ。

急なことにあっけにとられる彼女の腕を掴むと、彼は力尽くで引き寄せた。

プルメリの状況は先ほどのオボロと似ている。

ウルトラビーストに気づかぬ彼の身を守ったマリルリ。

ウルトラビーストに気づかぬ彼女の身を守ろうとするオボロ。

ただ一つ違うのは、彼自身を “まもる” 術がないこと。

正真正銘の生身。少し付け足すならば、彼は上裸族でもある。

さあ来い！ 存分に毒を刺してくれ！ と言っているようなものだった。

白いポケモンは怪しい色の毒液を垂らし、触手を尖らし押しかける。もうポケモンは二人の目と鼻の先にたどり着いていた。

オボロはぎゅつと目を瞑った。来るべき苦痛に備えるためだ。

暗闇の中でじつとその時を待つ。

ただ待てど待てども何も起こる気配はない。おそろおそろゆっくりと彼は目を開いた。

ぱちぱち瞬きすると、目の前には例のポケモン。

ただあっちへふらふら、こっちへふらふら。 “ふらふらダンス” を踊るようにユラユラと揺れ動き触手がたなびいている。

白い奴よりもっと近くにあったのは、見覚えのある小さな輝き。宙に漂う怪しげな光。

それは文字通りの意味で “あやしいひかり” だった。

「今のうちなんだから！」

“シャドーボール” “！”

興奮した様子のリジーが人差し指を突き立てている。

その顔は歓喜で満ち溢れていた。頬はりんごのように紅く熟れ、瞳を潤ませ笑っている。

フラフラ動くのもゴーストにかかればお手の物。

“シャドーボール” は見事相手の腹に直撃し、うめき声を少女、ならぬそれは苦しそうにあげている。

よろめくウルトラビースト。それを見て笑う一人と一匹。

喜び勇んで飛び跳ねながらハイタッチをする弟子達に緊張感は全くない。

そんな二人を見て「つたく。黙って見てろって言ったのに」とオボロは呟いた。弟子に邪魔立てされたことに心底腹を立てているような声だ。

けれど彼は笑っていた。眉間にしわを寄せたまま、口角を上げて。ウルトラビーストは不安定に揺れ動いている。それを捉える彼の瞳に焦りの色はない。

彼は腹をくくったのだ。地面に置かれた黒いケージがオボロの関心と呼ぶことはもうなかった。

「リジーに負けちゃいけないね！ ボクらも派手にいこうよ、ラグラージ。とびっきりの “じしん” でさあ！」

だん、だん、だんとラグラージが地面を踏み鳴らすと小刻みに揺れ大刻みに揺れ。

亀裂が入っていた岩々はトドメとばかりに砕け散り、地表は轟音とともに割れていく。

砂埃が大量に舞い上がった。まるで “すなあらし” でも起きているように。

リジーはゴホゴホと咳をした。

視界を埋め尽くす粉塵に目も鼻もすっかりやられてしまい、涙と咳が止まらない。

そんな弟子を抱き上げると、オボロはラグラージの背に乗せた。

咳き込みむりじーには何が起きているのか分からなかったが、前方に人がいる。それだけは分かった。

柔らかな体、何より上半身の服の感触。きつとプルメリだ。砂埃はさらに酷くなった。

洞窟の中の砂、砂、砂。密閉空間のそれは呼吸さえも難しくさせる。オボロはラグラージに飛び乗ると彼女を走らせた。目指すはコニコシテイ。洞窟の外へ、外へ！

「ボクの言うことも聞いてくれよ。ゴースト、あいつの近くに  
おにび” を出すんだ！」

走るラグラージを追いかけながら、ゴーストはオボロの指示を聞いた。

ゴーストタイプのゴーストにとって砂煙なんて関係ない。白いポケモンの位置把握など赤子の手をひねるよりも簡単だ。

ゴーストは “おにび” を出した。それも例のポケモンがいる場所とほぼ同じ位置に。

爆発音が轟いた。衝撃が彼らを貫いた。

ラグラージごと吹っ飛ばされた彼らは、彼女にしがみつくのに必死だった。というより、しがみつくことしかできなかった。

ただ全員、目の前が徐々に徐々に明るくなっていくのだけは感じた。それは希望の灯りだった。

「ディグダトンネル、やっぱり崩れちゃったね。後でコニコシテイの住人に怒られそうだ」

「しょうがないわ。爆発が起きたんだもの」

「それにしても粉塵爆発なんてき。よくもまあしようと思ったものだよ」

岩と砂ですっかりふさがったトンネルだったものを見て、三人は好

き勝手に言い合っている。

運も彼らの味方なのか、側の交番はもぬけの殻。

泣く子も泣かすスカル団だが、ただ灯りをともしているだけの空き家なんて恐れるに足りなかった。

島の要の交通をブツ壊した元凶である彼らだが、反省している様子は全くない。

いざとなれば9番道路の海を渡ればいい。そう思っていたからだ。

「お師匠さまザンネンだったわね。ゲットできなくて」

「仕方がないよ。そういう時もあるさ」

とつてつけたような棒読みセリフに、オボロはやれやれと肩をすくめた。それから弟子に向き合って「だけどねりジー」とため息をつきながら彼は言った。

「あいつには手を出さなつて何度も言っただろ？ 助けられたのは事実だけど、ボクはあいつの毒に刺されても別に問題なかったんだから」

つまりは小さな親切、大きなお世話つてことだよ。と言う師匠にリジーは首をかしげている。

不思議そうにする弟子。少女を見て少し笑うと、彼は解答を差し出した。

「あのメノクラゲもどきは前にも会ったことがあってね。けど素晴らしいくスゴいボクだからさ、毒に刺されたところでなんの問題もなかったよ！」

その言葉を聞いて、少女はギョツとしたように目を見開いた。ぽかんと口を大きく開け、まじまじとオボロを見つめる少女はコイルのよくな目をしている。

びつくりしてるのかな、とオボロは思った。

まあ無理もない。あんな奇抜なポケモンと関わりがある者なんてそうそういないだろう。

そう心の中で片付けると、「まあいいや、早く食べに行こうよ。もうボクのお腹はぺこぺこさ」と彼はスタスタ歩き始めた。

「今日もオボロは野菜定食かい？」とプルメリ。

コニコ食堂では野菜定食しか頼まない。彼がカロリー計算を怠らないのはスカル団では有名な話だった。

「そうしようと思ってたけど、やっぱり魚定食にしようかな。今日は懐かしい気分に浸りたくてね」

「へえ。珍しいことでもあるもんだね」

「ほんの気まぐれさ。ボクは港町で生まれたんだ。だからたまにはこういうのも悪くない。そうだろ？」

そうオボロが言うと、彼女は「初めて知ったよ。アンタが故郷のことを話すなんて、本当に珍しい」と驚いたように言った。

彼は故郷のことをめったに話さない。これもスカル団では有名な話だ。

有名すぎて、彼に故郷の話振ることがタブー視されていたほどだった。

「港町？ だから持ってるのが全員、みずタイプのポケモンなの？」

「お師匠さま」

「うん。そうだよ」

よく口が滑る日だ、とオボロは思った。

これもウルトラビーストに会ったせいだろうか。あいつを見逃したり故郷のことを喋ったり、今日は本当にらしくない。

「カイナシティ。ボクはハウエンのカイナシティで育ったんだ」



赤い門をくぐりながら、彼は故郷についてつらつら語る。博物館があつて、幼い頃はよく通つたこと。人が集まる暮らしやすい街だったこと。

大きなコンテスト会場があつて、兄と二人でコーデイネーターになろうと将来の夢を語り合つたこと。

肝心の兄さんは気が強いオカマになつてき、結局ボクと反りが合わなくなつちやつたんだけどね、と最後に言つて二人の笑いを誘つた。

よどみなく口から出る故郷の話にオボロ自身驚いていた。

まるで自分とは関係ない、ただの昔話を語っているかのようだ。

そういう日もある。きつとただの気まぐれだ。

そう結論づけると彼は空を見上げた。

月がなんとも美しく光っている。いつもと変わらない雲ひとつない空だ。

ふと風が吹いた。

オボロのサラサラとした髪がたなびいている。縮毛矯正のたまものだ。

アローラの風が吹けばなにが起こるかわからない。

オボロは親友の口癖の一つを思い出した。鼻腔をくすぐる風はほのかに潮の香りがした。

## 第十一話【カイナシテイ】

8番道路のモーターで金髪の少年が机に向かっている。

小さなノートを広げその上に顔を付けている。まぶたは伏せられ、手にはペンが握り締められたままだ。

どうやら書きものをしている途中に眠り込んでしまったらしい。

ノートには流暢なカロス文字が書かれている。

『〇月×日 天気は晴れ』

……どうやら日記のようだ。少し読んでみよう。

なにになに？ ワタシのチカラなら大丈夫。この少年が日記の上に寝ていようが、そこによだれを垂らそうが、中身を見るなんて造作もないことなんだ。

ほうれ、そら！

うんうん。分かる、分かるぞ。この少年の秘密の記録！

よしよし、せっかくだから読んでみようか。なあに、ワタシはケチじゃないからね。あの親子とは違うんだ。そりゃだてに長く生きちゃいないよ。

『○月×日 天気は晴れ

オレはかねてから気になっていた連中を調べることにした。

スカル団の幹部。アローラきつての変人。オボロのことを。

スカル団の奴らが怪しい動きをしているからだ。

その中でもオボロという男は怪しさの塊だ。

貴重な休みを投げ打って調べに調べたオレ。

ただ、アイツについて分かったことはひとつもなかった。なにひとつもだ。

結論から言うと、奴は怪しいどころか得体の知れない人間だった。

戸籍がない。

ホウエン地方出身だと聞いたが、ホウエンのどこにもいた形跡はなかった。

ミシロタウン、トウカシテイ、カナズミシテイ、ムロタウン、カイナシテイ……。そのどこにもだ。

存在しなかったオボロと名乗る人物。

アイツは突如としてアローラに現れた。そしてスカル団に加入した。なんのために？

弟子についてもそうだ。

マリエシテイにリジーなんて人間は存在しなかった。周りの連中に聞いても、誰一人としてあのチビを知る者はいなかった。

あの二人はなんだ？ 一体奴らは何者なんだ？

今後オレは細心の注意を奴らに払うことに決めた。もしかしたら、あの二人はエーテル財団の差し金なのかもしれない。

そういえばリーリエはどうしているのだろう。元気だろうか。心配だ。

もしオレの予想が当たっていたら、リーリエは、妹は危ないかもしれない。

早くミヅキとハウにもう一度会わなければ』

日記はここで途切れている。

ワタシは窓から出ることにした。バイバイ少年。

あーあ、つまんないや。もう少しアローラを観光していよつと。

今度は守<sup>カ</sup>り神<sup>ブ</sup>を従えた太陽<sup>ル</sup>を喰<sup>ナ</sup>らいし獣<sup>ア</sup>とやらに会ってみるつても、ちよつとは悪くないかもね。

## 第十二話【マルチバトル】

いつまでたつても見つからないコスモツグにグズマは業を煮やしていた。

ルザミーネ 代表に威勢良く啖呵を切ったはいいものの、一向に見つかる気配はない。

珍しいポケモンを持つてこい。そう指示しても、珍しいポケモンⅡアローラでは見かけないポケモンだと思ってしまうのが地域密着型のスカル団。

したつば連中が持つてくるのは、観光客が持ちこんできたポケモンばかり。しかもせいぜい色違いがいればいい方だ。

——オカシイ。確かにバカばかりのスカル団だが、それでもこんなに情報が入らねえなんてよ。

グズマは焦っていた。

最近、代表からの目が冷たい気がする。

いや気のせいではない。あれは心の芯という芯まで底冷えするよ  
うな目だ。そう思う。

自分を認めてくれた人  
ルザミーネが頼ってくれて嬉しくて、大口を叩いて引き受けて。それなのに未だに手がかりもなく。肝心な時に役にも立たないなんて。見捨てられたくない。見捨てられたくなかった。

——きなくせえ。

グズマは舌打ちするとエネココアを煽った。

オツムはよろしくないグズマだったが、彼には “かぎわける”

も顔負けの野生の嗅覚が備わっていた。

そもそもアローラ中のはぐれ者が属するスカル団のネットワーク。そこに引つかからないのがまずおかしい。

食堂の期間限定メニューから、近所の奥さんの床事情まで！

新聞顔負けのうたい文句が付くほどに、豊富な品揃えを誇るのが我がらがスカル団の情報網だ。

ちなみにいうと不都合な真実をスピーカーでたれ流すスカル団印の情報は、アローラでは割と重宝されている。もっぱら主婦のおばさま方から。

グズマは椅子を殴りつけた。

どん、と大きな音が部屋に響く。ひじかけはすっかり凹んでべこべこだ。

それから再度、彼は舌打ちすると目の前の三人を睨みつけた。

冷や汗を流す三人。プルメリは口をつぐみ、オボロは笑みを引きつけ、リジーは師匠のズボン握っている。

「グ、グズマくん。確かにプルメリちゃんはその子に負けちゃったみたいだけどさ」

と震える声で物申したのはオボロだった。

今日のボスは機嫌の悪さが突き抜けている。

戦々恐々としながらも、怒りの矛先を自分へ変えようとする彼の姿は珍しく男らしいな、とプルメリは感謝した。

彼の膝が盛大に笑っていることに目をつぶれば、だが。まくし立てるようにオボロは舌を回し続ける。

「プルメリちゃん本気出してなかったらしいし。次菌向かってきたら、ブツ壊せばいいだけの話じゃないか！ だからそんな怒ってないで、モーモーミルクでも飲もうよ！」

「んなことあどうでもいいんだよ。空気読めや」

「え、そのことじゃなかったんだ。怒ってるの」

取り越し苦労だったのが分かったオボロは、なんだよ紛らわしいなあ、と肩を落としている。三白眼でじつとりグズマを見つめるも、彼

はフンと鼻を鳴らして再度エネココアをすすった。

マグカップの底には茶色い粉がこびりついていた。溶けかけのそれはベトベトとしていて、いやに汚らしく見える。

グズマは顔をしかめるとオボロの方を向いた。

ボスの関心が自分に向いたことに彼は気がついていないようだ。空気読めやっって言われても急に読めるわけないだろ、とネチつくく愚痴をこぼしている。

それはいつもグズマが見下ろしている光景。

どこも変わりなく、おかしいところもない。そのはずだ。

「お前、本当に仕事してるのか？ コスモッグの件でよお」

「まあね。華麗なるボクだからね」

「それで、なにか分かってんのかよ」

「まさか！ 分かってたら言ってるよ！」

あつけらかんと言つてのけるオボロ。全く悪びれずにスカした顔を浮かべる男はなんとも憎たらしい。

ただ苛立ちを彼にぶつけるのは筋じゃないと分かっていた。コスモッグが見つからないのはしたっぱ達のせいではない。オボロとブルメリのせいでもない。

全部。そう全部、無力で不甲斐ない自分のせいだ。

グズマはまたもや腕を振り落ろした。

どん、と響き渡る音に誰もが思わず背筋を伸ばす。幹部も見習いもしたっぱ達も。

握り締められた拳は骨と血管が浮き立ち、血走った眼は赤く。トリードマークの白い髪を逆だたせた彼はまるでルガルガンのよう。

今のグズマはまさしく破壊という文字が人の形をしていた。

「したっぱ達が連れてきたポケモンをただただ座って見ていたグズマ様だが、どうにも性に合いやしねえ。もうコソコソ動くのはヤメだ」

「ごき、ごき、と首を鳴らしながらゆっくりと立ち上がる。

猫背だが図体のでかいグズマは異様なプレッシャーを放っていた。それは主ポケモンにもウルトラビーストにも劣らない。

スカル団の面々は彼の一举一動を、固唾を飲んで見守っている。

「オボロ、プルメリ。スカル団の名にかけて、したつば連中総動員してしらみ潰しに探すぞ。コスモッグのやつを、アローラ中よお」

にたりとボスが笑った瞬間、その部屋にいた者はみな全身が粟立つのを感じた。スカル団総出の大規模作戦。それは本当に久しぶりだったからだ。

どこからともなく歓声が湧き上がり、「コスモッグってなんだ?」「例のポケモンか?」「グズマさんのためならウチらホンキ出すんだったら!」「スカしたオレらのゼンリョク見せてやりませう!」と堰が切れたように騒がしくなった。

やんややんやと盛り上がるしたつば達に、ホントにバカばかりだねえとプルメリは呟いた。本当にね、とオボロも目配せした。ただ二人とも心地良さそうに笑っている。

オボロはぐっと伸びをした。息のつまる雰囲気から解放された喜びに打ち震える彼は、ビールを飲んだ後のおっさんのような声を漏らしている。

横の弟子も疲れたようで、ふうと息をついていた。

そんな時、ぽん、と肩を叩かれた。グズマだ。

オボロはくると振り向くと、「作戦頑張ろうね」と気さくに話しかけた。「けどき、ボンボンくんのことはいいいのかい? 彼にバレないように動いてきたのに」とオボロはへらへら笑っている。

ただグズマは笑っていないかった。いつもの薄笑いも浮かべずに、じっとオボロを見つめている。

「なあオボロ」

「ん？ なんだい真面目くさった顔してさ」  
「お前、本当になにも知らないんだよな？」

きよとんとした顔を浮かべてから数秒後、オボロは笑みを消した。  
真剣そのものな彼に笑って返すのは失礼だと思ったからだ。

グズマの瞳を見つめ返し、「うん。知らないよ」と言う。  
その声に迷いはない。ただ瞳を揺らさずにいた自信がオボロには  
なかった。

瞳孔が開いたグズマの目に、全てを見透かされた気がしたからだ。

「ならいい。疑って悪かったな」

グズマはため息をついてからオボロの頭を軽く叩いた。不思議そ  
うにする彼の頭を無造作に撫でる。

髪が乱れるじゃないか、というナルシストの抗議も無視してわしゃ  
わしゃと頭皮を弄んだ後、おもむろにグズマは部屋を出ていった。  
ひらひらと手を振りながら振り返らずに。

グズマくんってばなんだったんだろうね、と困り顔をしてみせるオ  
ボロに、さあねとプルメリは返した。情緒不安定でキレやすいボスの  
いつもの気まぐれだと考えていたからだ。

それから幹部達も、見習いも、したつぱ達もグズマの後を追いか  
け  
た。

破壊という文字が人の形をしているグズマ。

ただ、暴君ではあつても彼は人を惹きつける才能というものに溢れ  
ていた。彼に魅せられない者はスカル団の中にはいない。

グズマは夢を失い逃げてきた者にとってヒーローのようなもの  
だった。



手始めにまずウラウラ島。

コスモツグの特徴を全員に教え、総動員！ 総力！ ゼンリヨク捜索！

浮き足立つ彼らはとてもよく働いた。草の根の間までも調べに調べた。リアル草の根活動というやつだ。

ただ、まあ例外はどこにでもいるもの。

例えばマリエ庭園を見てみよう。この物語の主人公の自己中ナルシスト。

「オボロさん、珍しいポケモン見ましたよ！ ウラウラの花園で、羽がついてる」

「コスモツグは羽なんかついてないよ」

「ううん、けど見たことなかったんですよ。アタシ」

「色は？」

「ピンクか緑か……なんかアブリボンとチョー似てる感じの」

「それ、アブリボンの色違いじゃないかい？」

「うう、そうかもしれないっす」

「宙に浮いてる青いポケモンだからね！ キラキラしてるんだ……ぷはぁ美味しい。割と小さめだと思うから頑張つて！ んぐ、新作もイけるな。このあんクリーム」

優雅に団子と茶を嗜みながらメガホンで指示を出していた。しかも自分だけサンバイザーを完備というくつろぎスタイルで。

「お前さつき仕事してるとか言ってたか？ このオレ様の幻聴だったのかよ」

「まあまあグズマくん。良い仕事っぷりには適切な糖分補充ってね！ グズマくんもどう？」

「一本よこせ。……ゲテモノかと思ったがよ。確かにウメエなこれ」

「だろ？ みたらしには敵わないけどね」

ひとときの安らぎを味わっていると、庭園の入り口が少し騒がしくなった。どうやらもめ事が起きているらしい。

人（というか大体したつぱ達だ。邪魔な一般客を締め出していたのだ）が橋の近くに集まってなにかを言い争っている。

この庭園の風情を理解できないなんてかわいそうに、とオボロが茶をすすりながら言うと、様子を見てくるか、とグズマが立ち上がった。その後ろをひよこひよこことリジーがついていく。

今日の少女はスカル団仕様。スカル団タンクトップ、ならぬワンピースに大きなペンダント、加えてドクロ印の帽子をかぶった彼女はどこからどう見てもスカル団の一員だ。

といっても合うサイズがないらしく、覆面だけはしていないようだったが。

いってらっしやいと二人を見送ると、オボロはもうひとつ団子を注文した。今度は大好物のみたらしだ。

団子をかじりながら通信機を取り出すと、彼はメールチェックを始めた。相手はもちろん、例のニヤヒート使いの女の子。

『オボロさん！ 無事ウラウラ島ひとつ目の試練突破しましたよー！

☒・?・☒・☒・?・☒・?・☒・☒

これからマリエ庭園に行くので、よかったらお茶しませんか？

ごちそうして貰いたいです笑（（・x・））♡♡♡』

げ、と思わず声が漏れた。それから入り口の方を見る。

野次馬が集まっていてよく見えない。

オボロは団子を全て口の中に突っ込んだ。

噛んで噛んで頬張りながらものすごい勢いでタイピング。

内容は今のマリエ庭園はオススメしない、だとかマリエシティで買い物をしていてくれ、だとかそんな内容だ。

顔文字を使う余裕はない。優しく言い換える余裕もない。即決・即

断の必要しかない。

「お師匠さまタイヘンよタイヘン！ メールなんか打ってる場合じゃないわー！」

「ふあんだよはしってひへふあ……んぐ。こつちふあつて、もぐもぐ。せつぱつまつへ」

「ククイはかせがきてるの！ グズマさんと言争ってタイヘンなのよー！」

オボロはポトリと通信機を落とした。まじまじと弟子を見つめるも、ふざけている様子は少しもなかった。

——マズイ。マズイぞ。あの二人が出くわしちやうなんて最低最悪の事態じゃないか！

グイツとグラスを乾かしてから急いでお金を置くと、オボロは少し早歩きで入り口に向かった。

グズマの機嫌を頼むから損ねないでくれ、頼むから口を滑らせないでくれ、とククイ博士いけすかない男に願うばかり。歩く速度は遅く、けれど気持ちだけは急いで。

遠くでカラン、と飲み干したグラスの氷が音を立てた気がした。

ただの杞憂であってほしいものほど杞憂で終わらないのが世の中というものだ。

ああ無情。レミゼラブル。

世間に泣きついてても泣きついててもけんもほろろに突っぱねられるのがスカル団の醍醐味といえはそうなのだが、よそ者のオボロは特にそうなのかもしれない。

あんクリーム団子を食べていた時とは打って変わって、目の前のボスはピリピリとした雰囲気をつけている。

だが向かい側にいる男——もちろんククイ博士のことだ——はど  
こ吹く風だ。

恐れられてなんぼのスカル団ボスがケンカ腰だというのに何も気  
にしていない。まるで取るに足らない出来事だと認識しているかの  
ようだ。

それが余計に彼の神経を逆なでするらしい。

薄笑いを浮かべてはいるものの、グズマの目は全く笑っていないかつ  
た。というより彼はブチ切れていた。

舞台役者のように大げさに、芝居染みた大きな声で。それでいて鏡  
に映った自分を納得させるかのように彼は朗々と語っている。

「島巡りなんかしてなんになるんだよ？　なにもねえよ。くだら  
ねえよ」

「ハイハイどいてね、したつぱくん達。ちよつとボクも混ぜても  
らつていいかい？」

したつぱ達をかき分けて割り込んだのは彼の右腕。傍にその弟子  
を置いて、オボロは彼の横に立った。

演説ショーに横槍を入れられて不快にならない者はいない。

グズマは大きく舌打ちをした。それから邪魔すんじやねえよと呟  
くと、ギロリとオボロを睨みつける。

全く困ったもんだ、とオボロは両手を挙げた。ため息をついた彼は  
諭すように優しく、それでいてどこか投げやりに言葉を紡いでいく。

「あのさあ。グズマくん、なに熱くなってるんだよ。落ち着いてよ。  
ボク達はククイ博士と遣り合うために、ここに来たんじゃないんだか  
らさ」

ここでケンカを売っても得することはないし、ククイ博士の思う壺  
だよ！　とオボロはウインクをした。そのウインクにはやけくそ感  
がぶんぷんと漂っている。

それでも説得の甲斐はあったようで、グズマの頭も冷えたらしい。もう一度舌打ち。跳ねたような音がした後、それもそうだなと我がボスは呟いた。

持ち前の凶暴性を内に秘め、相手の出方を伺っているようだ。

オボロはほっとひと息つくくと、ククイ博士へ向き直る。

咳払いをひとつ。呼吸を整えて、得意の舌先三寸をご披露致——そうとして待ってくれないのがMr. マイペースの名を持つ彼、ククイ博士である。

「おや？ 横にいるのは最近見かけた覚えがあるぜ！ この間ぼくの奥さんの研究所に忍びこんでたコソ泥そっくりだ！」

「うげっバレてる」

「しかもその上、ぼくに気づいた瞬間そそくさと逃げてたよね。外に」

沈黙。静寂。

どうやら彼は怒りの矛先の向きを仲間に変えたらしい。

グズマはオボロの方へ歩み寄った。もちろん、なにかを譲ったというわけではなく、文字通りの意味での歩み寄りだ。

せつかく冷やした頭は瞬間湯沸かし器のごとく沸き立ち、彼の目は血に飢えた獣のようにギラついている。

いつもはべらべらと言葉が止まらないオボロの口だが、ああ無力。今はむなしく乾いた笑みが漏れるばかりだ。

「お前よお。なに勝手にスカル団の恥さらしてんだよ」

「待った待った待ってちよつと待とうか。ここは和を尊ぶマリエ庭園なんだからさ。平和的に行こうよグズマくん！」

にじり寄るグズマに後ずさるオボロ。年下相手に凄まれ冷や汗をたらだら流すその様は御歳二十六歳とは思えない。はつきり言って、情けない。

加えて言うなら不幸は続けてやってくる。

弱り目に祟り目。一難去つてまた一難。泣きつ面にスピーアー。これもまた世の常というものだ。

ククイ博士のそばにいた少女が「あ、オボロさん！」と彼を指さした。「しいー！　しいー！」と彼が口に指を当てても、もう遅い。

マリエ庭園にいたスカル団全員にヒミツの関係情報をお届け！

これにはさすがのグズマも耳をピクリと動かし、オボロを一層問い詰める。

「あ？　なんだよ知り合いかよ。噂のガキと付き合いがあるなんて、さっぱり聞いてないんだがなあ。オボロさんよ」

「なによ悪い？　オボロさんは私のメル友で、一緒にバトルをしたりする仲なの！　そんじよそこのスカル団とは違うんです！　べえーっだー！」

『そんじよそこのスカル団とは』ねえ。まあ彼は一応幹部だからなあ」

「ちよ、ミツキ頼むから黙って」

「はあ？　前に言ってたメル友はコイツのことだったのかよ」

前のめりになつてずずいと迫るグズマにオボロは思わずたじろいだ。

普段から崩さないうさんくさい微笑みは跡形もなく剥がれ、そこにあるのはどこにでもいそうな青年の姿。大人しく気弱そうな男の姿だ。

弟子は彼のズボンを掴むと、お師匠さまやっぱ正直に言った方が、と小さな声でささやいた。

師匠を見上げるリジー。少女の瞳は揺れている。

ハツとしたオボロは自分のほおを叩くと、もう一度笑い直してみせた。

同じくやけくそ感は隠しきれていない。だが本人はこれ以上なくふてぶてしく笑ったつもりだった。

「いやあ、コレには海よりも谷よりも深い深い事情があつてさ！  
かくかくメブキジカつてわけなんだよ！ あははは」

「うるせえ」

グズマはオボロに拳骨を落とした。

思い切り舌を噛んだようで、オボロは頭を押さえてうんうん唸っている。彼の苦しすぎる言い訳に弟子も頭を抱えていた。

「オボロ。あとでその辺の話はきっちり聞かせて貰うからよ。覚えとけや」

グズマが痛みにあえぐオボロを見下ろしていると、ぱちぱちぱちと拍手が起こる。もちろん出どころはマイペースという言葉が人の形をしている男、ククイ博士である。

「スカル団による愉快的ショーは終わったかな？ それじゃあ本題に戻ろうか！」

「見世物じゃねえよ。とつとと失せろやククイさんよお」

「まあまあ、オボロくんの言う通り落ち着きなつて！ きみ達はここを使いたい。ぼくは君たちにここから出て行って貰いたい。リーグがどうこうで絡んできたけどさ、要はそういうことだろ？」

そう言うと彼は歯を見せて笑った。

白い歯をキラリと輝かせ、ぐつと親指を立てる彼はこの状況を心の底から楽しんでいるようだ。

「じゃあさ。ぼく達全員が納得いく方法で決めようぜ！」

「私も手伝うね、ククイ博士！」

バトルジャンキーで技マニアな彼にとって待ちに待った実践場。

しかも相手はスカル団のボスと幹部。相手にとって不足はない。

少年の心を忘れないククイ博士はドキドキとワクワクが止まらなかった。

それはミヅキにも伝わったようで、二人ともノリノリでモンスターボールを構えている。

「ほお。バトルロイヤルってわけか」

「いや。2vs2ならマルチバトルなんじゃ、痛っ！」

「……マルチバトルってわけだな。イイじゃねえか。遊んでやるぜ、オレ達スカル団がなあ！」

親友を軽く小突くと、グズマは気を取り直してニヤリと笑った。とはいっても破壊という言葉が人の形をしている彼だ。

馬鹿力は今日も絶好調。恨めしそうにオボロが見るも、彼は素知らぬふりを続けている。

どうやら言い間違いをしたことに触れていかないスタイルのようだ。

グズマはボールを手にとった。それに合わせてオボロも腰に手をかける。

その様子をリジーは興味深そうに眺めていた。この四人のバトルは、今後一切観れない可能性が高い貴重なものだからだ。

他の団員も同じく、余計な茶々を入れずに見守っている。

ステージ・オン！

四人は一斉に天高くボールを放り投げた。

グズマのボールから飛び出したのは相棒のグソクムシヤ、オボロはマリルリ。ミヅキはニヤヒートでククイ博士はルガルガン。

一見普通の組み合わせに見える。

ただグズマは笑みを引っ込めて、対戦者の男を思い切り睨みつけた。それは信用していた相手に手酷く裏切られた時の顔によく似ている。



「オレ様はよお。どんな相手だろうが基本バトルでは手を抜かねえ。それどころか、ブツ壊してもブツ壊しても手を緩めずに嫌われるのがこのオレ様だが、ククイさんよ。お前ナメてんのか?」

「ん? どういうことだい?」

「そのルガルガン、オレ様には分かる。育てきつてねえだろうが」

険しい顔で見つめる男。

だがククイ博士は彼が思っているようなことは全く考えていなかった。ルガルガンを選んだことに他意は全くなかったのだ。本当の本当に。

けれどもお茶目なククイ博士。

彼の中にひとつ、とある考えがむくむくと起き上がった。その思いはアサガオのように、急速に成長していく。

せっかく強い人と戦うんだから本気の本気、ゼンリョクで戦いたい。

遊びなんかじゃなくて、死にものぐるいのゼンリョクで。

「ああ! そういう。なあに、理由は二つあるんだ。ひとつはね、この子は最近ウチに来たぼくのパートナーなんだ。イワンコの時にゲットしたんだけど、そりゃあもう可愛くつてね!」

な、ルガルガン! とククイ博士は自慢の愛ポケにアイコンタクト。目と目を合わせて笑う彼らに、グズマは早く言えやと顎を使って続きを急かした。

「もうひとつはね。ぼくがゼンリョクを出すまでもないからだぜ!」

「ほう。なにが言いてえんだよ」

「この子、ミツキの力だけで足りるってことさ! ぼくが本気を出すまでもなく、ね」

そう言つて、ククイ博士は愉快そうに嗤つた。思いつく限り最大限に悪い顔をしてグズマを煽る。

その顔はどちらが悪人なのかわからない。スカル団顔負けの、殴りたくなるほどにスカした顔を浮かべていた。

「どこまでもナメてくれやがる……!」

あからさまな挑発だったが、グズマに効果は抜群だった。

一気に白い髪を逆立てて目ん玉をかつ開き、歯をむき出しにして激しい怒りに燃えている。

強く強く握られた拳からは血が流れ、ぼたぼたと地面に垂れ下がった。

そんな時、件のルガルガンが真つ先に動いた。

息を深く吸い、遠吠えをしてから打ち出したのは「ストーンエツジ」。いわタイプのルガルガンが打ち出すそれは、強烈な岩の盾となつてグソクムシャに迫り来る。

だがグズマの頭は冷えていた。

怒りで全てをブツ壊したくなる破壊衝動の中で、どこかそれを冷静に見つめる自分が頭の中にいた。彼は岩々を冷静に見ながら「グソクムシャ、やれ」とだけ呟いた。

瞬間、ルガルガンの体が吹き飛ばされる。

創り出した岩は跡形もなく砕け散り、ルガルガンが悲鳴をあげて地に落ちた。先ほどまでルガルガンがいた場所にはグソクムシャが佇んでいる。

「であいがしら」を受けたルガルガンは腹を向けて転がった。うめき声さえ聞こえない。指ひとつ動かない。

たった一撃受けただけ。そう、一撃だ。

「男に二言はない。むしろ一言ですら多いと考えているグズマ様だが、気が変わった」

戦闘不能になったルガルガンを一瞥すると、グズマは落ち着いた声で語りかける。落ち着きすぎている。

それはとてつもなくグズマに似合わなくて、なにか不穏なものを感じさせる声だ。

「オボロ、コイツらをゼンリヨクで叩きのめすぞ。ナメくさったオツさんとこのガキを、見る影もなくブツ壊す！」

オボロは顔を引きつらせていた。

案の定親友の逆鱗に触れたククイ博士に。育てきつていないとはいえ、相手のポケモンを初手で戦闘不能にした彼のえげつなさに。

ただ悔やんでも仕方がない。賽は投げられたのだから。

「教えてやるよ。破壊という言葉が人の形をしているのがこのオレ様、グズマだっことをなあ！」

## 第十三話【ふしぎなおくりもの】

荒れ狂うグズマ。斬り付けられて横たわるルガルガン。

頭に血が上りきった青年と血に塗れた愛ポケの姿を見て、ククイ博士はぴゅうと口笛を吹いた。

悲しんでいる？ いや、違う。男は純粹に喜んでいるのだ。

胸をときめかせ、瞳をきらきらと輝かせていた。新しいおもちゃを手に入れた少年のように。

「そうこなくつちやあー！」

「あもう、博士。もしかして、グズマをワザと怒らせたの？」

「どうだろうね。だけどミツキもゼンリヨクで戦いたかっただろ？」

結果オーライだぜ！」

「まったくもう。博士ってば、本当にしようがないんだからー！」

博士はルガルガンを戻すと新しいボールを手にとった。

現れたのはジバコイル。手持ちの中でも鍛えに鍛え上げられた真正銘のエースである。

自業自得とはいえ、事実上3vs4の不利な戦いにククイ博士はゼンリヨクで抗おうとしていたのだ。

男は自分の実力を理解していたが、対戦相手を過小評価することは全くなかった。むしろ敬意を払っていた。

カプに認められなかっただけ。チンピラスカルに落ちぶれたとはいえ、彼らは間違いなくアローラが誇る立派なトレーナーだと。

といっても、頭の血管が切れに切れているグズマはそのことに気がついていないようだったが。

両者睨み合う中、耳が潰れそうなほど大きく大きく “なきごえ” を放つニヤヒート。

大気を震わせるそれは何人たりとも萎縮させるサイレンのようであり、新たな動きの始まりを告げる天啓のようだった。

第十三話【ふしぎなおくりもの】

グズマはいつもの薄笑いを浮かべながら相手の挙動を見守っていた。

ただ瞳は激情に染まったまま。座り込みもせずに口角をあげている。

「舞」 つとけよ、なあグソクムシャ」というグズマの語りに彼のポケモンは呼応する。

ひらりひらりと華麗に、それでいて雄々しく舞うのは 〴〵つるぎのまい〴〵。

シャーン……シャーン……と外皮がこすれ合う音は場に緊張を与え、グソクムシャの士気も高まっていく。

仲間と敵に見せつけるように彼は舞う。舞い続ける。

「ニヤヒート、今のうちに 〴〵ニトロチャージ〴〵 のチャンスだよ！」

即座にニヤヒートは体を震わせる。高く澄んだ鈴の音が響いたかと思うと、体に纏うは炎の鎧。

ぐつと脚に力を込めるとグソクムシャの方へ駆け抜けた。

ただ少女の敵はグズマだけではない。そして、そう簡単に技が当たるとは限らないのもポケモンバトルの醍醐味だ。

「ボクのことを忘れちゃ困るよ！」とニヤヒートの前に立ちはだかったのはマリルリだった。オボロがパチンと指を鳴らすと、瞬時に彼女は頬を大きく膨らみます。

「飛んで火に入るコフキムシってね。マリルリ、真っ正面から喰らわせちやいな！」

勢いよく泡の大群が飛び出した！

こうかはばつぐんだ。『バブルこうせん』 はニヤヒートの面を殴り飛ばし、纏った炎も弾けて彼に直撃。

彼はリズムよくバックステップを踏むとマリルリから距離を置いた。グソクムシヤを 『まもる』 ように彼女は牽制を続けている。そんな中、一石を投じたのはジバコイルだ。

『ぼくもいるぜ！ ジバコイル、 『10まんボルト』 ！』

紅い目を光らせると両のアームを回転させるジバコイル。

日頃から油が差されているのか嫌に動きはなめらかだ。それは不気味なほどに。

ばちばちと音を立て、光がU字の腕に集まっていく。

『おいオボロ、あれやるぞ』

『了解！ マリルリ、 『てだすけ』 してグソクムシヤに花をもたせてあげるんだ』

マリルリは長い耳を二回叩くと、グソクムシヤの精神がさらに研ぎ澄まされていく。

その間もジバコイルの周りには光が集い、破裂音が増していく。ばち。ばちばち。ばちばちばちばち。

博士のポケモンがカツと眼を見開いて電気の奔流を解き放つ瞬間、グズマはにたりと笑うと高らかに叫んだ。

『行くぞ相棒！ 『シエルブレード』 ！』

真下へ叩き込まれた斬撃は地表を大きく削り取った。切り出された地面の塊は次々宙を舞い、『十万ボルト』 を受け止めていく。

それでも抑えられなかった電撃が二匹に襲いかかっていたが、まあ許容範囲だろう。

いかに相手がククイ博士のジバコイルとはいえ、残りカスが大事になるほどグズマもオボロもやわな育て方はしていないからだ。

「ニヤヒート、岩に飛び乗って！」とミツキが声をかけると少女のポケモンは空を飛び交う岩やら砂の塊やらに駆け上がる。

ホップ・ステップ・ジャンプ！

軽やかに移動をしながら目指すのはやはりグソクムシャ。

やはり相性最悪のマリルリ相手はカウンター攻撃が怖いのだろう。同じみずタイプでもグソクムシャの方がむしタイプも持つだけマシンだと考えたのだろうか。

「いいよニヤヒート。岩に隠れながら、そのまま　　ニトロチャージ”　！”」

二度目の　　ニトロチャージ”　　は伊達ではない。加速に加速を重ねたニヤヒートは軽快に空を飛び跳ねる。

炎を纏い目にも見えない速さで颯爽と。時折炎が視界にちらつくも、彼の姿は見つからない。

「姿が見えねえのは、なにもオレ達だけとは限らない。オボロ！」

「ハイハイ。人使いが荒いなあ」

困った風に言いつつもオボロは嬉しそうに笑っている。

なんだかんだ言いつつも親友と肩を並べて戦うこのバトルをすっかり楽しんでるらしい。

パンパンと手を叩くとマリルリは再び泡を吐き出した。だが先ほどの泡とは少し違う。そこから中に振り撒いた泡々はぷかりぷかりと宙に浮き、場にとどまり続けていた。

太陽に照らされる大量の泡は七色に光り輝いて、その色彩は嫌が応にも突き刺さる。トレーナーはもちろんポケモンにもだ。

「技をただ打つだけじゃ能がないだろ？　　応用しなきゃね」

特別性の泡はどうだ！ 見にくいだろう！ とオボロは自慢げだ。もし泡を消すためにジバコイルが “10まんボルト” を撃つたとしても、泡が立ち込めるこの空間ではニヤヒートにも当たる可能性がある。特にいつニヤヒートが濡れるか分からない状況では。

ククイ博士はむやみに技を乱発する男ではない。好奇心が旺盛な彼とはいえ、当たる可能性のない博打に乗る人間ではないからだ。けれどもナルシストの笑みは一瞬で崩れた。それはなぜか。

「ここはぼくに任せろ！ ジバコイル、グラスターカノン” で泡を潰すんだ！」

三つのユニットに集められた光は、小気味好くいつぺんに放たれた。

しかもその光は単なる光ではなかった。ある程度収束したままの、レーザーのような。

束になった光のひと筋ひと筋が泡を次々割っていく。

ぱあん、ぱあんと音が鳴る。ポケモンも地面も濡れていく。

泡はひとつ残らず消えていき、綺麗さっぱり視界良好。

これにはさすがのオボロの笑みも凍った。

「げっ全部消えた」と喉を押しつぶして、まるでカエルのような声を出している。

「『バブルこうせん” の使い方、斬新だったぜ！ 今度からぼくも活用してみるよ』」

「ああもう！ だからククイ博士とは戦いたくなかったんだけどなあ！」

アローラ地方の変わり者。類い稀見ぬマイペース。だが彼はそれだけの男ではない。

技の活用ならなんでもござれ！



アローラどころか世界が誇る技マニア、それこそがクワイ博士の真骨頂。

初めてみるやり方であったとしても、即座に分析、即対応。ポケモン博士として腕の見せ所だ。

「博士ありがと。いっけえニヤヒート！　“おんがえし”！」  
「ハッ。イイぜえ。グソクムシャ、”たきのぼり”　で迎え撃つてやれ！」

水を纏ったグソクムシャとぐーんと素早くなったニヤヒートが激しくぶつかり合う。

水飛沫が飛び散り、両者ともに吹っ飛ばされた。

高火力・タイプ一致・おまけに調子最高のそろい踏み。

グソクムシャの　”たきのぼり”　はニヤヒートの体力を削りに削る。かろうじて持ち堪えられたのはトレーナーへの愛ゆえだ。

一方、ニヤヒートの　”おんがえし”　ものつぴきならない威力だった。

ミヅキと心を通じ合っているニヤヒートの一撃。それは相手の柔らかない腹を鋭く捉える。

自慢の脚で力任せに振り上げられた攻撃は、彼をボールに戻すのに十分な威力を持っていた。

ききかいひで戦線を離脱したグソクムシャの代わりに飛び出したのはハッサムだ。

赤々とツヤ良く輝く甲殻がキラリ。太陽の下で彼は自由に飛び回る。

ニヤヒートはよろめきながら立ち上がると、ミヅキの方を向いて頷きあつた。

体力がほんのわずかな、もうか持ち。トレーナーの腕に輝くZリング。

その光景は酷く既視感があった。オボロはうつすら、瞳にあの炎がちらついた気がした。

リン……！

首元の鈴を鳴らして、真つ赤な真つ赤な炎に包まれるニヤヒート。それは “ニトロチャージ” よりもはるかに規模が大きかった。ギャラリーも息を飲んでいいる。あまりの衝撃に声を漏らせる者はいなかった。

あれに並大抵の水攻撃は歯が立たない。それはスカル団のしたつぱでも分かることだ。

一瞬、グズマの瞳が揺れた気がした。

彼のハッサムにはこうかばつぐん。受ければ先ほどのルガルガンの二の舞になるのは分かりきっている。

相変わらず喉が焼けそうになる技だな、とオボロは思った。額に汗を流しながら、彼はニヤヒートを見つめている。

だからといって、怖気付いたわけでは決してない。

——同じ手を二度も喰らってたまるか！

彼の心にあつたのは反抗の意。

笑い続けるはるか年下の少女の姿はオボロの敵愾心に火をつけた。

「マリルリ、火球が膨れ上がる前に “まも” って突っ込め！」

ニヤヒートは駆けた。それと同じくしてマリルリも駆けた。彼女は透明な盾を展開しながら、勢いよくニヤヒートの元へ飛び込んだ。ぶつかり合う両者。弾ける炎。堅く “まもる” 壁の中すらも侵食する熱。

マリルリは鳴いた。鳴いて泣いて堪えた。弾丸のように飛び込むニヤヒートを正面から受け止め、脚をすくう。

次の瞬間、ニヤヒートは宙を舞った。ロケットが打ち上げられるように垂直に叩き上げられた熱は上空で膨れ上がり、爆発。

それからすぐに何かが地面に落ちる音がした。

空から転げ落ちたニヤヒートは花火の後の燃えかすのようだった。

「たーまやー！　ってね。いかにZ技が強力だといっても、受けなければいいだけの話さ。そうだろ？」

ミヅキはニヤヒートを戻すとゲッコウガを場に出した。アローラにもカントーにもいないはずのポケモンだ。

誰かと交換でもしたのかな。ミラクル交換なのかも、とふと思った。

まあどうでもいい。そんなことより強敵ジバコイルをさつさとやっつけて、愛しいポケモンを褒めちぎるのが先だ。

オボロは相手への思考を放棄すると、自分の手持ちを称賛した。炎で焦げた尻尾を振るマリルリへひらひら手を振りかえす。

オボロとマリルリは愉快そうに笑った。彼らの鼻は高々だ。

「さあてマリルリ、お次はジバコイルだ！　“ふぶき”を……つて、あれ？」

「さっきの　“10まんボルト”の追加効果、ようやくきたみたいだね。ジバコイル！　トドメの　“10まんボルト”　！」

“10まんボルト”の追加効果。それすなわち、ごく稀に起こるまひである。

ピカツと光ったかと思うと、電撃はまっすぐマリルリに飛んできた。よろめくマリルリの体に電流が走り、転倒。

彼女は真つ黒焦げの消し炭と化している。

もつともジバコイルも手加減していたらしい。治療をすればすっかり元どおりになるけれど、ただ見た目は大惨事というレベルの怪我に抑えたようだ。

とはいえ戦闘不能なことには変わりない。

ククイ博士を恨めしそうに見ながら手持ちをボールに戻すと、オボロは新しくゴージャスボールを手にかけた。

「最近出番がなくて悪かったね。ようやくキミの出番だよ。マイ・スウィーティー、トドゼルガ!」

「手持ちにラグラージやナマズンがいるのにトドゼルガ、ねえ。なんだかますますワクワクが止まらなくなってきたぜ!」

オボロの手持ちにはじめんタイプが二匹もいる。

だからジバコイル対策にどちらかを選ぶとククイ博士は読んでいた。

当たり前だ。普通の人なら迷わずそうする。

にも関わらず、相性最悪のトドゼルガを選んだオボロ。

奇人変人の代表格とも言えるオボロだが、無策で挑むほど馬鹿ではない。

さすがは幹部。したつぱとはひと味違うポイントだ。

わざわざトドゼルガをボールから出し、どこか自信に溢れた表情を浮かべるオボロに博士は興味津々だった。

——きつと彼は、自分を唸らせる技を出してくれるに違いない!

ククイ博士は存外、彼のことを高く評価していた。

元コーディネーター特有の、単なるトレーナーにはない魅せる技。技マニアの血が騒ぐのは必然だ。

だから博士はこの状況を心から嬉しく思っていた。

なにせオボロは彼より強い者を見ると、脱兎のごとく逃げるのだ。彼の技を間近で見る機会はなかなかない。

アローラは狭く、最チンピラ下集層団のスカル団を見下す者は多い。その幹部、自己中ナルシスト野郎なオボロを煙たがる人間はさらに多い。

だがしかし、彼を認める人間もまた多かった。

それをグズマは痛いほど知っていた。その理由もまた、分かっていた。

共に苦しみ共に悲しみ。時に妬んで憎しんで。

彼を拾ってからずっと、ずっとそばで見えてきたからだ。

「おい、オレ様を忘れるんじゃないよ。『つじぎり』！」  
「私のこともね！ ゲッコウガ、『いあいぎり』！」

ハッサムのハサミとゲッコウガのクナイ——彼が出した水で作られたものだ——がぶつかり合う。

キーン、と鋭い音を立ててつばぜり合い。しのぎを削る両の刃は、付かず離れずの攻防を繰り返している。

「やあやあ、忙しいところゴメンね。グズマくん、今度はテンガン山作戦でいくよ！」

「わあったよ。ハッサムよお、目一杯飛ばや！」

ハサミに力を込めてゲッコウガを弾き飛ばすと、ハッサムは太陽を見上げた。

薄く色づいた翅を羽ばたかせ、猛スピードで高く高く昇って行く。目にも留まらぬ速さで急上昇したハッサムを確認すると、オボロはにつこりと手持ちに笑いかけた。

「いくよトドゼルガ。あの人達にキミのコンビネーションを魅せてあげなよ！」

トドゼルガは口を大きく開くと、これまた大きな声をあげた。

するとどうだろう。近くの池がうねりにうねってそこから中を飲み込んでいくではないか！

ジバコイルは慌てることなく空へ舞い上がり、ゲッコウガも水中を泳ぐことなく飛び上がった。

多少の濡れは平気とはいえ機械に水は大敵だし、荒れ狂う水の中を泳ぐのはいかにカエルといえども疲れるからだ。

ざぶんと音を立てて地面を飲み込む水の塊はポケモン達にはカスリもしない。

だがナルシストは気にすることもなく鼻歌を歌っている。

この “なみのり” が当たろうが当たるまいが、彼にとつてはど  
うでもよかった。

攻撃はオプション機能。あくまで “なみのり” は前座にすぎ  
ないからだ。

トドゼルガはふさふさとした白いひげを大きく震わせた。

彼女がふつと息を吐くと、大気的水分という水分が瞬時に凍りつき  
氷の華が咲いた。

うねる水の姿を残したまま池も地面も凍りつき、あたりは氷河の様  
相だ。

「さて、どうだい？　これがボクらのフィールドさ！」

トドゼルガは足を少し動かすと、氷上の上を滑る滑る！

“なみのり” で水を出し “ぜったいれいど” の息を吐きな  
がら、さらに作る足場は氷の橋。上下左右・天地斜めの移動もスイス  
イと。

ゲツコウガの “みずしゆりけん” も難なく避ける上、ジバコイ  
ルに “こおりのキバ” でわざわざ上空まで噛み付きに行くほど  
だ。

ジバコイルが “10まんボルト” を撃つも、ハッサムに漏れ出  
た電気が当たるのみ。重い体を持つとは思えないほどめまぐるしく  
動くトドゼルガに狙いを定めるのは難しい。

新たに作りあげた氷上を滑り、彼と彼女は翻弄する。

氷を生み出して、自慢の牙で破壊し再構築。

変幻自在に氷を操り、颯爽と場を駆け巡る。

長所も短所もひつくるめてポケモンを活かす、魅せるバトルの真髄  
がそこにはあった。

「こんな方法で足の遅さを克服なんて、よく考えたもんだぜ！」

とククイ博士。

これ、かなり使えるポケモンに限られるけど凄いね、とメモを取りながら感嘆の声をあげている。

それからボールペンをノックすると、

「しかも中々なタフボーイだなあ、その子」

と余計な一言を呟くまでがワンセット。

さすがはマイペースという言葉が人の形をしている男、ククイ博士である。

「はあ!? こんなに可憐なトドゼルガを男の子だと間違えるなんて! どこからどう見てもガールだよ! おのれククイ博士め既婚者め! 許すまじいいいい!」

青いハンカチを取り出すとそれを噛み締めて金切り声を叫ぶオボロは一周回って様式美を感じさせる。その顔はさながら鬼の形相。

ハンカチに刺繍された赤い炎と相まって笑いを誘うのか、ククイ博士はゲラゲラと声を出して笑っている。

目を大きく見開いたオボロは人差し指を突き立てて、「見てなよ! その顔、ぎやふんと言わせてやるからな!」と大々的に宣言。それからグズマの方を向くと、

「さあグズマくん、やっちゃって!」

親友に丸投げした。

ククイ博士の笑いはおさまらず、せつかくカツコよかったのにあの人やっぱり情けねえ……とギヤララーしたっば達が落胆の声を漏らしている。

「オレ様がやるのかよ。まあいいぜ。ハッサム、そのまま真下に落ちて アイアンヘッド!」

急旋回！

派手な羽音を立てて一直線に落下するハッサムは赤さも相まって隕石のよう。

威力を高めるため余計な動きはしない。まっすぐジバコイルを狙って、ただひたすらに。

空気抵抗を極限まで除いたハッサムは轟音とともに落ちていく。ただククイ博士は余裕そうな態度を崩さない。

「そんな単純な動きじゃぼくのジバコイルには当たらないぜ？」と博士。

当然だ。威力だけがあっても当たらなければ意味がない。

この “アイアンヘッド” は左右に避ければ簡単に片がつく。先ほどの “ダイナミックフルフレーム” のとおり一目瞭然だった。

ただ、もちろんそれは無事に避けられればの話である。

「ジバコイル、動けないだろ？ ようく濡れていたからね」

ギギギ、と鈍い音を立てるジバコイル。

怪訝そうな顔をするククイ博士とは対照的に、オボロは清々しいほどの笑みで溢れている。見るもの全てを苛立たせるようなドヤ顔でもったいぶって人差し指を三回振り振り。

待つてましたとばかりに彼は答え合わせをハキハキと語り始めた。

「キミはジバコイルの手入れをきちんとしていたようで、オイルをちゃんと差しているね。それが仇になったね。オイルって、金属をよく冷やすんだよ！」

音速を超えて衝突するハッサムの頭。ジバコイルは氷の床に勢いよく叩きつけられる。

それだけではない。あまりの衝撃に響き渡る轟音。崩れ落ちる床。



そう、床が割れているのだ。

おさらいするとバトルフィールドはマリエ庭園。整えられた緑と美しい池が広がる庭園である。

とどのつまりその下は池。水の塊が広がっていた。

ジバコイルは落ちる。水の中に落ちていく。体の内部まで染み渡る水分に機械の回路はイカれていく。

しばらく経って再び浮かび上がるも、彼にほとんど体力が残されていないのは明らかだった。

「よし！ ザマアみろ！」

オボロはガッツポーズをした。自称優雅な言葉遣いを崩して喜びを表す彼に、グズマは軽くため息を吐く。

スカル団の天敵、ククイ博士のジバコイル。

彼らをやっつけたことで張り詰めていた糸がプツンと切れたのだ。それは大きな隙だった。

「ゲッコウガ、たくさんたくさん　　みずしゆりけん　　！」

池から　　みずしゆりけん　　が一つ二つ、三つ四つ数え切れないほど飛んでくる。

水中に潜っていたゲッコウガ。彼は池の水を利用して無尽蔵に技を出し続けた。

対応が遅れた二匹は何発もあたっている。前者に至っては倒れてしまうほど。

ハッサムを戻したグズマは舌打ちを一つすると、見覚えあるボールに手をかけた。

「もう一度出番だ、相棒よお！」

容赦はしなかった。

ボールから飛び出したグソクムシャは池へと一直線。投げつけられる。 “みずしゅりけん” ごと “であいがしら” で斬りつけた。

むしタイプの技のこうかはぼつぐん。さすがは泣く子も泣かすスカル団、対戦相手が子供だとしても手加減しないのがグズマ流だ。

「これでボクらの勝ちほぼ確定、かな？」

「そう思っても言うもんじゃねえ。バトルの最中は目の前に集中しろ」

「だってさあグズマくん、そうだろう？ ジバコイルは死に体。ゲツコウガもフラフラ。ボクの愛しの女の子はまだまだ元気だし、グソクムシャだっている。負ける要素がないじゃないか」

スカル団二人がのんきに談笑をしていると、クスクスと笑い声が聞こえてきた。その声は相手側から聞こえてくる。

相変わらずイヤミなおじさんだな、とオボロがククイ博士を見るも、彼は笑い声なんて出してはいなかった。いつもの薄い笑みを浮かべているだけだ。

笑っていたのは少女。カントー地方からやってきたトレーナー、ミヅキだった。

泣きながら笑うのでもなく、投げやりに笑うのでもなく、スカル団をあざ笑うのでもない。ただただ歓喜に打ち震えているようだ。

その様子にオボロはもちろん、グズマもとことん引いていた。得体のしれないものを見ている気分だった。

負けず嫌いな彼には、彼女の心境がこれっぽっちも理解できなかつたからだ。

「変なガキだなテメエはよお。普通は泣いて悔しがるモンだが、こんな場面で笑う奴がいるとは思わなかったぜ」

「悔しがることなんてないよ。私、嬉しいの。すつごく、とっても。ようやくこの子の本気を出してあげられる」

ね、ゲッコウガ。と彼女は池から上がったポケモンに笑いかけた。ゲッコウガはコウガ、と呟くとミツキの話を静かに聞いている。

その関係は少しいびつなもののように見えた。少なくともスカル団二人はそう感じた。

単なるトレーナーとポケモンの間柄ではない。

「この子は知らない男の子に、夢の中で預けられたの。ウソじゃない。本当なんです。夢で男の子と一緒に喋って、美味しいものいっぱい食べて、モンスターボールを渡されて。それで目が覚めたら、手のひらにゲッコウガのボールがあっただんです」

ミツキはそつとボールを撫でた。

傷がついた赤いモンスターボールは、長い間使われているようにも見える。ミツキは駆け出しのトレーナーでもあるにも関わらず。

このガキ頭がおかしいんじゃないかねえの、としたつぱ達がこぼした。その声は少し震えている。

ただ少女の言葉を真っ向から否定する者は出ない。その場にいた全員、少女の声になにか鬼気迫るものを感じとったからだ。

「それからずっと、パーティを引っ張ってくれた。けれどこの子は強すぎて」

そつとミツキは目を伏せた。相手の二人は少女が動く時をじいつと待ち構えている。

「強すぎて、今までゼンリヨクを出し切れなかった。けどオボロさんとグズマが相手なら、シヤクに触るけどゼンリヨクを出せる、私もゲッコウガと一緒に戦える！」

ミツキは前を見据えた。ゲッコウガもそれに倣った。

するとどこからともなく水がやってくる。ゲッコウガの体が水に覆われ、覆われ、覆われて彼の体をひた隠しにした。

“たきのぼり” か？ と推測した二人はポケモン達に避けるよう指示を出す。

そんな二人を気にも留めないで、ミツキは言葉を紡ぎ続けた。

「行くよゲッコウガ！ 見せてあげよう、私達のチカラを！」

纏った水はさらに巨大になっていく。ぐるぐると回転する渦の中で、ゲッコウガは動いた。

彼がしたのは “いあいぎり”。水のクナイを出して、トドゼルガに襲いかかる。

その速度は異様だった。滑るトドゼルガよりも早く走り、彼女の姿を適確に捉えて一撃を放つ。

加速に加速を重ねたニヤヒートよりも、速い。

「もっとだよ、もっと強く！」

目立つ赤の頭の相貌。耳元についた黒い髪。前を見据えた鋭い眼差し。

その姿はゲッコウガとは違う。あまりにも違いすぎる。

トドゼルガにダメージを与えたゲッコウガはトレーナーの元へ跳ね戻った。もう彼は水を纏っていない。 “いあいぎり” をした時に全ての水が動き、背中に集約されたのだ。

—— 彼が背負った大きな大きな “みずしゆりけん” に。

「なんだよ、アレは。アレは、ゲッコウガなのか？」

「さあな。ただコレだけは分かる」

グズマは少女を睨みつけた。初めて彼はクワイ博士ではなく少女

をちゃんと見つめた。グソクムシヤもそうだった。彼らは見た。ジバコイルではなくゲツコウガを。

「気張っていくぞオボロ。この勝負、どう転ぶかオレ様にも分かんねえからよ」

相手との間に圧倒的実力差があると信じていたグズマが、挑戦者に回った瞬間だった。

## 第十四話【きずなへんげ】

オボロは目を丸くしていた。唇を震わせながらじいっと相手を見つめていた。

グズマの声で我にかえった彼は取り急ぎ笑みを貼り付ける。

もちろんただの虚勢にすぎない。目線は定まらず、せわしくなくキョロキョロと動かしている。

オボロは腰につけたコンテストリボンをひとつ取り外した。それからリボンを掲げると、

「もちろん分かってるさ！ バトルに関して、ボクの辞書には『完全勝利』の四文字しか載っていないからね。特にアローラに来てからは！」

とにっこり笑った。まるで自分自身に言い聞かせるように。

実は言葉どおり、アローラの地で彼はバトルに負けたことがほとんどなかった。真剣勝負ならなおさらだ。

勝てないバトルは挑まず、負けそうなバトルは上手く逃れて雲隠れ。

彼は自分の実力を正確に把握していたし、相手を過大評価はすれど過小評価はしなかった。

だからこの野良試合は彼にとって未知数だった。

その上ゲッコウガというイレギュラーが飛び込んできたもので、オボロはちよつとしたパニック状態。

見せつけるようにリボンにキスを落とすと、どうにでもなれとオボロは声を張り上げる。

「あのゲッコウガを成敗してあげるよ、グズマくん。美しさを極めたこのボクが、華麗に！ 雄々しく！ ゼンリョクで！」

「そういう茶番がいらねえつつてんだよ。空気読めや」

グズマは低い声でうなった。

から元気を出す彼にも、相手に気圧されている自分にも腹が立つて仕方がなかったからだ。

けれども肩の荷がストーンと降りたように、張りつめすぎた心はどこかへ消えてしまった。

きつとオボロのせいだ。このしようもなく情けない男のおかげだ。

多分この男は自分のことなど考えていなかったに違いない。それでも彼にほんの少し、助けられたのは事実だった。

「だがよ。あんがとな」と呟くと、グズマはオボロの肩を叩いて一呼吸。

彼はにたりと笑うと相棒を　　“舞”　　わせた。本日二度目の剣舞は手馴れたものだ。

シャーン……シャーン……と辺り一面にグソクムシヤの外皮がこすれる音が響き渡る。

その姿は素人目、たとえばスカル団のしたっぱ達や見習いから見ても隙だらけだ。

もちろん、だからといってそう簡単にいくものではない。

彼の側にはトドゼルガ。白く鋭い牙を光らせて、ゲツコウガを今か今かと待ち構えている。

「ゼンリヨク出すよ、ゲツコウガ！　　“かげぶんしん”　　！」

ミツキが一声かけるとゲツコウガは地を蹴り跳ねた。

そして無数の残像が空に浮かび上がりトドゼルガ達を惑わせる。バケモノ級の分身だな、とオボロは冷や汗をかいた。

普通はよくても二、三できれば大成功なのが　　“かげぶんしん”。

それなのに創り出されたゲツコウガの影は両手でも足りないほど。

しかも鼻に付くほど完璧で、ホンモノと見分けが全くつかないとき

たものだ。

「トドゼルガ、〃ごおりのキバ〃 で地面を崩せ！」

勢いよく白い牙を地に立てた！

池、土、橋。全てのものの上の氷に亀裂が走り、轟音。

たちまち氷は崩れ落ち、トドゼルガの白い体躯は青い水の中へ溶け込んでいく。舞を終えたグソクムシャも池の中へ潜りこむ。

ゲッコウガは後を追った。水かきを使ってスイスイ泳ぐ。

見ればトドゼルガは池の奥深くに。グソクムシャは浮かび上がり、所々浮かんでいる氷の上へと移動している。

彼はグソクムシャの方をターゲットに決めたようで、上へ上へと水を蹴った。

おそらくミツキとゲッコウガはの考えはこうだ。『体力が少ない方を叩いて、早い所1vs1に持ち込もう』。

迷いを見せずに水上を指すその魂胆は丸見えで、余計にグズマを苛立たせた。

「ゲッコウガ、回り込んで！」

ゲッコウガは空に飛び上がると、持ち前の素早さで氷の上を思うがままに駆けていく。大量の分身もついてきていて、相変わらずどれが本物か分からないという有様だ。

上下左右・四方八方、青い影があたり一面取り囲む！

彼が脚を光らせるのと、ミツキが意気揚々と叫ぶタイミングはほぼ同じ。

「いっけえ 〃つばめがえし〃 ！」

「お前も廻れよ、なあグソクムシャ。〃シエルブレード〃 ！」

攻撃は最大の防御とは上手く言ったものだ。



グソクムシヤは廻るとゲツコウガを弾き飛ばす。斬りつけるための外皮を盾にして、高速回転。

攻撃を受けた分身達は消え、残された本体もバックステップを踏んで距離を取る。

グソクムシヤから二、三離れた氷の上にストーンと着地。

脚が痛むのだろうか。一人と一匹は顔をしかめて自分の足を押しさえている。

ゲツコウガだけではない。ミツキもだ。

それはまるで感覚でも共有しているかのよう。

一方、オボロのパートナーはというと相変わらず水の奥深くでじっとしていた。

戦線をグソクムシヤに明け渡し、彼女はじいっと空を見上げている。

「さあ良く狙うんだよ、ボクのカワイコちゃん」とオボロはささやいた。

クスクスと笑う彼が見つめているものはグズマとは違う。ミツキでもゲツコウガでもない、別のなにかだ。

もう一度ゲツコウガが跳ねた。「まだまだもう一回！」と歯を見せ笑い、相手はがむしやらに向かってくる。

ただ、少女が浮かべているのは何か企んでいそうな顔。

グズマはひとつため息をついた。

随分と自分もナメられたものだ、と怒りを通り越してあきれれている。

「アレ、なんとかかしとけ」と呟くと隣の仲間が肩をすくめた。了解、という返事代わりのいつものサインだ。

グズマは満足そうに前を向いた。

彼の頭には『目の前のクソガキをどのようにブツ壊し、どのように世間の厳しさを教えてやろうか』ということしか残っていない。

彼は少女を壊したかった。見ていただけで苛ついた。

かつての自分のようにまっすぐで、かつての自分よりもはるかに強い。

その上すんなりと周りに受け入れられた少女が憎たらしくて憎たらしくて仕方がなかったからだ。

「たきのぼり」でも喰らつとけってんだよお！」

グソクムシヤは水を纏うと、ただただ蒼いポケモンへとひたすらに。

「残念でした！ 相手は私じゃないんです！」というはしやぎ声も「ぼくも忘れちゃ困るぜ？」「10まんボルト」！という因縁の相手の声も切り捨てて、ゲッコウガに向かって飛び上がった。

勇猛果敢？ それとも無謀？ いや、そのどちらでもない。

グズマは「10まんボルト」が自分のポケモンに当たるなんて微塵も思っていない。避けられるとも思っていない。

水の中に潜む仲間がなんとかしてくる。そう彼は信じていたからだ。

「ふふふ、今だよ。マイ・スイーティー、はかいこうせん」！

水の奥底がピカツと光ったかと思うと、真っ白い光の塊が氷ごと突き抜けて飛び出した。

それは一直線にジバコイルへ！

「10まんボルト」を打つために動きを止めていた彼は隙の隙だらけ。おまけに体力もほとんどないとききたものだ。

水中からと距離があるとはいえ、サツと避けれるほどの力は残っていない。

結果はもちろん戦闘不能。ククイ博士はジバコイルをボールに戻すと、清々しいまでの笑顔を見せた。

後はミツキの腕の見せ所。

彼女がどうあがくのか。未来のチャンピオンの勇姿をククイ博士は微笑ましそうに見守っていた。

「ゲッコウガ、 つばめがえし」！

ゲッコウガとグソクムシヤが正面からぶつかり合う。鈍い音が走り水飛沫が飛び散った。

双方威力はかなりのもの。グソクムシヤに至っては、力強い攻撃技の「たきのぼり」のタイプ一致、さらにはぐーんと力が上がっている状態だ。

それでも決着はつかなかった。

互いを跳ね除け、両者は氷の上に着地する。

「グソクムシヤの「たきのぼり」と「つばめがえし」がイーブンってよお。バケモノかよ、そいつ」

グズマは吐き捨てるように呟いた。

本来相容れないはずのひこうタイプの技。火力も低い「つばめがえし」。

それなのに育てに育てた自分のポケモンと互角に渡り合うゲッコウガに、少女に恐れを抱いていた。

「でやあつ！「みずしゆりけん」！」

「同じことだぜ。「シエルブレード」！」

グソクムシヤは回転し相手の攻撃を弾き飛ばす。それにもへこたれず、ゲッコウガは瞬時に氷を蹴ると今度はクナイを作り出し、「そのまま「いあいぎり」！」と踏み込んだ。

グソクムシヤは地面に倒れこむ。これ幸いと、少女と一匹は腕に力を入れた。「つばめがえし」をする気のようにだ。

畳み掛けんとばかりに彼は水上を走る。そしてグソクムシヤを追撃しよう、と彼らが思ったその瞬間。

指をくわえて見ていたナルシスト、オボロが動き出した。

「巻き込んだらゴメンよ、グズマくん。トドゼルガ、思いつきり  
ぜったいれいど”！」

瞬く間に水面が凍り、池はスケートリンクのよう。

水と少しの氷が散らばる崩れ切った様はもうどこにもない。あたりの木々も少し霜が降りてちらちらと白く輝いている。

気づけば、端から端まで均整のとれた銀世界が見渡す限り広がっていた。

素早さに素早さを磨いたミツキ達。とはいえトドゼルガの存在をすっかり頭の片隅に追いやっていたようで、反応に遅れをとってしまつたらしい。

彼らの脚は触れた水面ごと凍りつき、もがけども、もがけども、むなしく手は空を切るばかりだ。

よくやったとトドゼルガにキスを投げると、オボロは味方のポケモンの様子を見た。

全身が氷に触れていた彼はゲッコウガよりもさらに酷い。頭からつま先までが凍りつき、ピクリとも動かない。体に色もやどさない。

「ぜったいれいど” は巻き添え、というより彼にクリーンヒットしたようだ。どこからどう見ても戦闘不能の有様だった。

「あれま。けど及第点かな。ゲッコウガの動きは封じ込められたし」と呟くと、オボロは彼のボスに手の平を合わせた。

グズマはなにも言わずに鼻を鳴らすと、グソクムシャをボールへ戻す。早くしろ、と言わんばかりに彼は隣の男にあごで指図した。

オボロはそれに少し笑うと、同じく笑えばなしのミツキの方を見据えた。「ボクのポケモンの体力もなかなか削られちゃったし、早く決着つけなくちゃさあ」とミツキへ語りかける。

——この長つたらしいバトルの幕を、鮮やかに、自分の手で、下ろす。

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら、これ見よがしに言い放つ。

「てなわけで、トドゼルガからとっておきのプレゼントだよ！」

彼と彼女がこのスペシャルマッチの締めを選んだのは　「はかい  
こうせん」。

二匹が乳繰り合っている間に地面へ上がり　「ぜったいれいど」  
を打ち出した彼女は、今回も悠々とエネルギーを溜め始めた。二本  
の白い牙の間に白い光が徐々に集められていく。

それなのにミツキは焦っていなかった。むしろ落ち着き払ってい  
た。ゲッコウガもだ。

少女はオボロへにつこり笑いかけると、当たり前のことのように  
ゲッコウガへと指示を出す。

少女は自分のポケモンを信頼しきっているようだ。彼は脚を氷漬  
けにされて、一步も動けないにもかかわらず。

その一人と一匹の様子はどこか気狂いじみている。

「ゲッコウガ、　「かげぶんしん」　だよ」

ミツキが静かに言葉をこぼすと無数の分身が現れた。

「え？　本体はそこにあるって分かりきってるのに、なんでわざわ  
ざ」とオボロはきよんとしている。

それもそうだ。ホンモノは脚が氷漬けにされているのだから、水面  
だったものに張り付いているポケモンに決まっている。

なのにミツキとゲッコウガは　「かげぶんしん」　を出した。そ  
のどれもが赤い頭、黒い髪の毛、鋭い目つき。

そして後ろに大きな水手裏剣を背負っていた。

分身達が水手裏剣を背中から抜くと、それを本体へ投げっていく。み  
るみるうちに膨れ上がる本体の水手裏剣。まるで分身達のを吸収し  
ているかのよう。

そんなバカな、ありえない。とオボロは呟いた。

分身はあくまでも分身。ホンモノの幻影に過ぎず、実体にはなりえ

ないからだ。

その認識は合っていて、そしてある意味で間違っていた。オボロがそのように考えたのは無理もない。

全てにおいてイレギュラー。特性にきずなへんげを持つポケモンなど、この世に少女のゲッコウガを除いていないからだ。

膨れ上がった水手裏剣を本体が抜いた。

それは　「みずしゅりけん」　と呼べるほど可愛いものではない。もっとおぞましいにかだ。

赤く紅く真つ赤に輝く水手裏剣は神々しく、まるでカプ・コケコの化身のようだ、とオボロは思った。

——笑えないね。まるでボク達を断罪する刃みたいだ。ジョークにしては、本当に笑えない！

「トドゼルガ、　「はかいこうせん」　だ！　早く！」

「これが私のゼンリョクです！　「みずしゅりけん」　！」

白い光の奔流と紅く輝く塊がぶつかり合う。大気が震え、大地が轟いた。

紅の水は光をも飲み込まんばかりにうごめいている。光は必死にその動きをとどめていた。

したつぱ達、見習い、そしてグズマ。スカル団の面々は固唾を飲んでその様を見守っている。

だがその幕切れはあつけないものだった。

突然、ふらりとミヅキの身体が傾いた。まぶたを伏せて地面に倒れこもうとした。

するとその瞬間、　「みずしゅりけん」　は通常の青々とした色に戻り、大きさも小さく小さくなった。ゲッコウガも同様で、赤い頭など、黒い髪など、もうどこにもない。

これ幸いと光は水を打ち消した。邪魔なものは何一つとしてなかった。一直線にゲッコウガへと向かっていく。

衝撃。轟音。静寂。

場に残っていたのは転がる全身真っ青のゲッコウガ。それと、オボロのポケモンだけだった。

歓声が沸き起こった。周りのギャラリー達は拳を突き上げ、彼らの兄貴分の勝利を喜んでいる。

弟子も拍手を送っていた。リジーは感動のあまり涙ぐんでいる。色あせた青いハンカチで目元を押さえながら、師匠に賛辞の言葉を投げかけた。

もつともはしゃぐ周りとは違い、バトルをしていた三人（気力を使い果たしたのか、ミヅキはククイ博士の腕で気絶していた）は呆然としている。オボロもグズマも、勝者が浮かべる顔とはほど遠い。

「勝った、のか？」

ぽかん、と口を開けてオボロは呟いた。グズマもククイ博士も目を丸くしている。

三人が三人とも目の前の結果が信じられないようだった。

ククイ博士はミヅキの勝利を。スカル団二人は自らの負けを。あの「みずしゆりけん」を見た時に、それぞれ確信していたからだ。

そんな彼らの気も知らないで、オボロさん、一言くださいよ！としたりば達は声をかけていく。

なんだかんだ頼れる兄貴分だとオボロをひとしきり見直して、やんややんやと騒ぎ立てるしたりば達。さながらヒーローインタビューだ。

彼らの声で我にかえると、オボロはバカで可愛いスカル団員に笑いかけた。自らの勝利を受け止め、彼らの興奮を盛り立てる。

「ううん。危ういところだったけど、まあ勝ちちは勝ちだよな！やっぱりボクってすごいや！」

観客に向かってVサインをすると、さらに声は大きくなった。どれ

もこれもオボロとグズマを褒め称えるものばかりだ。彼は笑って手を振ると、ククイ博士へ向き直った。少女を抱える博士に向かって、

「まあそういうわけだからさ。ククイ博士も倒れてる彼女を運んで、どこかへ行ってくれないかい？」

とオボロ。

それに「しようがないね。ミヅキもボロボロだし、ぼく達はおとなしく退散するとするぜ」と博士も応えた。

ポケモンバトルは結果が全て。運も実力のうち。

それをオボロもククイ博士も十分理解していたからだ。

ただし、それを認めたがらない者もいる。

努力してきた過程こそ大切なのだ。結果などおまけに過ぎないのだ。努力を裏切る結果など、無意味なのだ。

「その必要はねえよ。ククイさんよ」

その時、自室に輝く銅のトロフィーをグズマは思い出していた。

「なあオボロ。お前のトドゼルガの “はかいこうせん” は “みずしゅりけん” に押し負けていた。だが、あの変身が解けたからなんとか勝てた」

「何が言いたいんだい？」

「トレーナーに、あのガキに異変が起きていなければ、オレ達はどうかあがいても負けていた。なあ、そうだろう？」

「そうだね、その通りだよ。けど勝利は勝利だ」

なにを言ってるんだ、と言いたそうな顔でオボロはグズマを見た。したっぱ達も不思議そうにボスを見つめている。

グズマは眉間のシワを一層深く刻むと「そんなまぐれは勝ちでもな



んでもねえよ。胸くそ悪りい」と吐き捨てた。彼は心の底から嫌悪しているようだった。

オボロの様子にも、したつぱ達にも、自分にも。

「おいお前ら！　ここは一旦引き上げるぞ！　このガキに免じてよ」

スカル団の面々は絶句した。というより訳が分からなかった。

なぜ勝ったのにこちらが引き上げるのだろう、と頭にクエスチョンマークを浮かべている。

言葉を詰まらすオボロやしたつぱ達に、ククイ博士はあちやーとため息をついた。

昔なじみのグズマは相変わらずこじらせている。それも自分の勝利を認めないほど、とことん悪い方向に。

彼のためにも早くリーグを作らなきゃな、とククイ博士は慌てふためくスカル団を観察しながらぼんやり思った。

アローラの闇は根が深い。彼にとって、その象徴ともいえる存在がグズマだった。

「早くしろ。オレ様の顔に泥を塗りてえのかよ」

「へ、へい！」

庭園にいたスカル団が続々と引き上げていく。

黒アリのようじやうじやいた彼らがいなくなり、マリエ庭園は元の静けさを取り戻していった。

最後にグズマとオボロが去ろうとした時だ。グズマはククイ博士に声をかけた。

彼は少女を抱えながら青年の方を見た。男はぶつきらぼうに、ガキは大丈夫か、と小さな声で呟いた。寝てるだけだぜ、と博士が答える

とグズマは少しホツとしたようだった。  
にこやかに笑う博士に、バツが悪そうに彼はこうも続ける。

「そのガキ、一体なんて名前だよ」

「ああ、ミツキって言うんだ。カントーから来たトレーナーだぜ！  
どうだ、きみもビックリしたろー！」

「……ミツキか、グレイトな奴だったぜ。壊しがいのある奴として  
胸に刻んでおくぞー！」

焦り。怒り。悲しみ。羨望——それらに彼の心は覆われていた。  
きびすを返すと彼は仲間の元へ向かう。

ひとまずアジト、いかかわしき屋敷へと戻る。そしてエネココアを  
飲めばこの心はおさまるはずだ。おさめなければならない。そうグ  
ズマは思った。

けれども簡単におさまる性質のものではないことは、心の底では分  
かっていた。

#### 第十四話【きずなへんげ】

「だけどいいのかい？ マリエ庭園、まだ調べ終えてなかったじゃ  
ないか」

「どうせあの庭園にはいねえよ。オレ様のココがそう言ってる」

「そ、そんな動物じゃないんだから……。まあ、けどグズマくんの勘  
は当たるからなあ」

自分の頭を指差すグズマに、オボロは顔を引きつらせたままほおを  
かいた。

それからカバンからポットを取り出すと、オボロはマグカップにエ  
ネココアを注ぐ。アジトへ帰る途中で寄ったカフェスペースで購入

したものだ。

バトルお疲れ様、と差し出すとグズマはすぐに手に取り一気飲み。相当鬱憤が溜まっていたらしい。お代わりに次ぐお代わりで気つけ薬はみるみるうちに消えていき、ポットが空になるまでそう時間がかからなかった。

「足りなかった？　ゴメンね」とオボロ。側にいたしたっぱを呼びつけると次のエネココアを買いに走らせる。

すると部屋にはグズマとオボロ、そしてその弟子だけになった。

プルメリはちょうど料理中でキッチンに。さすがはみんなの頼れる姐さんだ。

「それでオボロ。お前、あのガキ——ミツキのことをなんでオレ様に言わなかったんだよ。お前は普段、スカル団以外の連中とは交流を絶ってやがるのによお。どうにもこうにも腑に落ちねえ」

あごを肘につけながら彼は言った。眉間にしわ寄せ笑みも浮かべず、つま先を小刻みに動かしている。

椅子に座る彼は見るからに不機嫌そうだ。

「メル友でバトルをする仲、だったか？」

「別に。この間たまたま会って仲良くなった子がミツキだったただだよ」

ほら、この間メレメレ島で賞金稼ぎをした時だよ！　とオボロは彼に笑った。

スカル団経理担当の彼は時折金を稼ぎに島を巡る。なぜならパトロンからの援助金だけでは到底回っていかないほどスカル団は大所帯だからだ。

それはグズマも預かり知るところ。

けれども彼はオボロの言い分に納得していないようだった。

「それだったら隠す必要はないはずだ」

じっと自分を見つめ続けるグズマにオボロは面倒くさそうにため息をついた。そんな疑われるほどボクって信用ないわけ？ とグチグチ文句を言っている。

だがグズマの無言の追求が止まることはない。いつもなら弁がたつナルシストに諦めて、なにも言わなくなるグズマがだ。

オボロは折れた。

どうやらグズマは潔く引き下がる気はないらしい。根負けした彼はため息をひとつ。それから心底気が重そうに口を開いた。

「隠してなんかないよ。言わなかっただけさ。ボクが誰と友達であろうと関係ないじゃないか。キミだってルザミエーテル財団代表ネ女史と仲良しだし、人のことは言えないよ」

「それとこれとは違うだろうが」

「同じことだよ。親しき仲にも礼儀ありつて言うだろ？ あまり人のプライベートを詮索するもんじゃないよ、グズマくん」

彼の口から吐かれた言葉は全て詭弁。

困ったもんだよねえキミにもさ、と盛大に自分を棚に上げてオボロは言った。

それから彼はグランブルマウンテンをすすると、ハイハイこの話はコレで終わりね！ と無理やり打ち切ろうとした。

しかしそう甘くはないのがこのポケモン時代というものだ。いつもならこのまま煙に巻いて楽しく食事を待つだけだっただろう。もしかしたら二人仲良くティータイムの続きと洒落込んでいたかもしれない。

彼の誤算。それは気まずそうにしている弟子の存在をすっかり忘れていたことだ。

「コスモツグのせいなんです」

「どういふことだよ」

「ミツキはコスモツグをぬすんだ子と友だちな。お師匠さまは、だからミツキとれんらくを取っていたんです」

「リジー…」と咎めるようにオボロは言った。

怒りをあらわにする師匠に「ごめんねお師匠さま。けど、お師匠さまのために言った方がいいと思ったのよ」と弟子は悪びれない。謝罪を口にはしているものの、反省している様子は全くなかった。

弟子を詰め寄ろうとオボロはさらに口を開こうとする。それに待ったをかけたのは、もちろん我らがボス、グズマだった。

「やめろ。弟子の言葉は素直に聞き入れるべきだ。お前がそいつの師匠だってんならな」

グズマは鋭い目で仲間をひと睨みすると、愛用しているマグカップを手に持った。それから口をつけようとして、やめた。

中は空だ。茶色いエネココアの残骸がそこにこびりついているだけ。

グズマは舌打ちをするとリジーの方を向いた。

自分とどこか似たものを感じると常々グズマが考えていた少女。その瞳は今、ただただ自分を映している。

「遮って悪かったな。リジー、続けるといいぜ」

「ドロボウの名前はリーリエ。おとなしくってかわいらしい子よ。ミツキと一緒に島めぐりをしていて、ククイはかせのじよしゆをしているの」

「アイツの助手なあ？」

「そうよ。リーリエはミツキと仲が良くて、ククイはかせのじよしゆなんです」

グズマは自分の頭がスツと冷えていくのを感じた。そして、なぜオ

ボロが彼に言わなかったのかをも理解した。

視界がクリアになるのを感じた。たとえば言うなら、全身の力が抜けて、心がどこか遠いところに行ってしまったような気分だ。

ぱりんとなにかが割れる音が聞こえる。それはなにひとつとして現実味がないものだ。

足元を見ると、愛用のマグカップが粉々になっていた。薄明かりに照らされて細かいカケラがキラキラと光っている。

けれども彼は気にも留めない。

眉間にしわを寄せるのも忘れて。笑いもせずに。

「だから言いたくなかったんだ！」

オボロはつま先から頭のテツペンまで嫌そうに叫んだ。

ビードルでも嘔み潰したような顔。喉を潰すように出した声。

にこやかに微笑む普段の彼とは同一人物と思えないほど、負の感情がこもったものだ。

オボロは存外、友人を大切にした。

元々の性格に難がある上に、そもそもアローラではあまり人と交流していないため絶対数が少ないからだ。

それが命の恩人ならなおのこと。

口ではアレコレ言いつつも、彼はグズマをとことん重んじていた。敬愛し自分の弟のように慈しんでいた。

そんな彼がグズマの心を案じたのは当然のことだった。

なにせ彼のメンタルは安定して不安定で、些細なことでぐらぐらと揺れ動き、傷つき、悩む。

「ククイ博士絡みだとキミはおかしくなる。それに、ミツキと戦って分かっただろ？ 彼ら二人がリーリエちゃんについてるんだ。闇雲に動いちゃあ……」

けれどもそれは絶対に知られてはいけないことだった。

「どういうことはよお。つまり、こういうことか？」

目の前にいる男の言葉を強引に遮るとグズマは立ち上がった。それから彼の前まで歩み、止まる。

脳天が震えるほどの情動に反しその足取りは静かで大人しい。

グズマはいっぺんに頭に血が上っていくのを感じた。プライドをのこづちで砕かれてから惨めな様子を衆目の下にさらされているような気がした。

彼は悔しかった。そして悲しかったのだ。

けれどもそれが分からなくなるほど、彼の心は真っ赤な感情で塗りつぶされていった。それは純粹な怒りだった。

「オレ様が真正面から挑んだら、コスモツグを取り戻せないとう、お前は思ってたのかよ。『どうせグズマくんはあの男に負けるんだろ』ってか？ あのガキにも負けると、そう思ってたのかよ！ なあオボロさんよお！」

「そんなこと言っていないだろ！」

「オレ様を誰だと思ってるやがる。アローラ中から恐れられるスカル団のボス、グズマ様だぞ！ ああ!？」

「ククイ博士との間になにがあつたか、ボクは全然知らないけどさあ。被害妄想も大概にしたらどうだい！ だからスカル団は、キミは彼らに負けるんだ！」

感情のまま口走った瞬間、頬に鈍い痛みがはしるのをオボロは感じた。天地がひっくり返り背中を思い切り打ち付けた。

口の中が鉄の匂いであふれかえる。唾液混じりの生臭いそれを吐き出すと、彼はゆっくり目を開けた。

ぼたり、ぼたりと唇の端から垂れた血が床を紅く飾り付けている。

ぼやけた視界をなんとかしようとする焦点を合わせながら、彼は自分を殴りつけた男を見上げた。

大きな身体。ギラつく瞳。歯を食いしばり、肩で息をする彼は泣いている。

「どいつもこいつもナメやがって……!」

グズマはオボロの胸ぐらを掴むともう一度彼を殴った。うめき声をあげると、またもう一発。

「歯あ食いしばれや」とグズマがうなった。

食いしばるもクソももう何回も殴ってるだろ。だいたい殴るなら、ボクの美しい顔じゃなくてみぞおちを殴ってくれよ。とオボロは思ったが、黙って彼に殴られ続けていた。

彼のプライドを傷つけてしまった自覚はあつたし、特に反抗する気力もなかったし、ここで口出しするのは自らの美学に反するからだ。いかかわしき屋敷の二階。一方的なリンチが繰り広げられる最中、勢いよく扉が開いた。

飛び込んできたのは二人。血相を変えたプルメリと、真つ青な顔をしたリジーだった。どうやら弟子は助けを求めに行っていたらしい。

「二人ともなにやってるんだい! グズマ、落ち着くんだよ!」

グズマはオボロから手を離すと、忌々しそうにプルメリを見た。それからほんのひと言も口に出さず、荒々しく部屋を立ち去った。

しんと静かになった部屋に残されたのは三人。スカル団の幹部とその弟子だけだ。

立てるか? とプルメリ。そこまで酷くないから、と立ち上がって、オボロは自嘲気味に笑った。

「グズマはアタイがなんかするから、オボロは部屋に戻って少し休んでな。後で声かけに行くからさ。頼むよ」

「……ああ。プルメリちゃん、なにかあつたらすぐボクを呼んでくれるかい?」



「アンタの怪我の痛みがおさまったらね」

そう言ってプルメリも部屋を出ていった。心配そうな声色を隠しきれない彼女が、なにかあってもオボロに知らせる気がないのは明らかだ。

はあ、とため息をつくとき、弟子の肩がびくついた。

「ご、ごめんね、お師匠さま。ごめんなさい」

うっとおしそうに彼を見ると、少女は涙をぼろぼろとこぼし始める。大粒の雫が床に落ち、点々とした赤い跡が色あせていった。

「あたし、まさかあんなにグズマさんが怒るなんて思ってたなくて。ぶつきらぼうだけど、いつも優しいから。なのに、それなのに。お師匠さま、だいじょうぶ？ しんじやったりしない？」

「あのさあ。勝手に人を殺さないでくれよ……」

少女は涙を流し続けている。嗚咽を漏らす少女の熱は、なかなかおさまりそうにもない。

ボクの葬式を勝手に脳内で開かないでほしい。というより、グズマくんは別にいつも優しくないだろう。と彼は弟子に突っ込んだ。

近頃の子はどうにも妄想が激しいらしい。我らがボスも含めて。

「心配してくれてありがとう、リジー。奥歯が折れちゃっただけだよ。あそこまで遠慮なく殴られたのは初めてだったけど、ボクも言いすぎたから仕方がないね」

泣きじやくる弟子にすっかり毒気を抜かれたらしい。手のひらを少女の頭の上にそっと置くと、オボロはぎこちなくなで始めた。

後でグズマくんに謝らないとなあ、と彼はひとりごちながら、手を動かす。

「あんまり落ちこまないでくれよ。最初はキミを嫌々弟子にしたけど、せっかくなので拾い物をしたかもなって思えてきたところなんだから」

少女をあやすようにオボロは語りかけた。そつけない言葉とは裏腹に口調は優しく丁寧に。

それはそれは、落ち込む子供をあやす家族のように。

「ボクはあそこで、ウラウラの花園で、リジーと偶然出会えてよかったと思ってるんだ。ホントだよ」

そう言つて彼は青いハンカチを取り出すと、リジーの涙を拭いた。頬をつたう雫も鼻水も全て吸いこんだせいか、ハンカチの赤い刺繍が少しよれた。

彼はハンカチをたたむと、再び少女の頭に手を置いた。それから少女の瞳をじつと見つめる。

「ボクが褒めるなんて、なかなかないよ。誇りに思つてくれていいくらいさー」

「もしあたしと会ったのが、ぐうぜんじゃなかったら。そしたら、お師匠さまはどう思う？」

「なにを言ってるのさ。この世は全て偶然でできているんだよ！」

オボロは弟子の言葉を笑い飛ばした。

この世の中は運や偶然でできている。例外はなにひとつとしてない。そのことを彼はよくよく知っていたからだ。

それでも彼は一拍置くと「けどそうだね。ボク達はある意味、カプの手のひらの上にいるのかもしれない」と笑った。その笑みは彼にしては珍しいニヒルなものだった。

「ボク達を操るものがいたとしたら、守り神や月の使者、時空の神だったり——それは人間じゃなくてポケモンだ。きつとね」

ポータウンのとある屋敷。暗がりの中、それぞれの意思が交錯し人の絆が変質する。

彼らの変わりゆく絆の果てがどうなるのか。それを知るのは、未だ一人と一匹だけだった。

## 第十五話【アローラ】

突然だが、スカル団幹部の部屋はそれぞれ別の階に置かれている。ここはいかがわしき屋敷一階。廊下の奥の一室。落書きひとつない、キラキラ光る白い白い部屋だ。

狭くはないが広くもないオボロの部屋に四人と一匹が集まっている。

そのうちの二人が誰かは言うまでもない。

オボロは真っ白なソファアに座ってグラブルマウンテンをすすっている。弟子も横でエネココアをちびちび飲んでいた。

側に立っているのはしたっぱ二人。そしてもう一匹。毛を逆立てて、黒いズボンにガブリと噛み付く茶色いポケモン。

「やあヤングースくん。もしかしたら『ちゃん』かな？ まあどっちでもいいけど、ボクの足を噛むのをやめておくれよ」

とオボロは眉根を寄せてカップをソーサーに置いた。ズボンを引っ張るヤングースを足蹴にするも、なかなか離れようとはしない。

むしろ逆効果。ヤングースの噛む力はどんどん増すばかりで、穴は余計に広がりダメージジーンズも真っ青な有様だ。

お気に入りのズボンをダメにされ嫌そうな顔を隠さないオボロ。それとは正反対なのが、バカばっかりのスカル団の代表とも言えるこのしたっぱだ。

ソファアに座らず突っ立ったまま、ニコニコと彼と一匹を見守っている。

「可愛いっスよねえ。この子、オボロさんにすっかり懐いたみたいっスよ！」

「これが懐いたように見えるんだったら、キミはそろそろコンタクトを変えた方がいいよ」

「自分、コンタクトしてないっスから。三百六十度・二十四時間三百

六十五日！ 遠くまでしつかり裸眼で見渡せませスカら！」

「相棒。オボロさんが言いたいのは、多分そういうことじゃないぜ」

古今東西、皮肉が通じない相手ほどやりにくいものはないというのが不変の真理である。

幹部のオボロが思い切り顔を歪めても、常識人の相方があきれ顔を浮かべても、誇らしそうに胸を張るのがこの男。

最近左遷に次ぐ左遷を経てきた彼は、ある意味スカル団で一番有名なしたつぱなのかもしれない。

「ボクのズボンに穴を開けないでくれよ。全く」とヤングースの首根っこを掴むと、オボロは自分のズボンから無理やり剥がして放り投げた。

ナイスキャッチ！ したつぱ二人はホツと胸をなでおろす。

「危ないじゃないでスカ！」と文句を言うと、彼らは赤ん坊をあやすように抱き抱えた。ポケモンに優しく声をかける男は幸せそうに腕をかじられている。

「あのさあ。ヤングースなんか捕まえても、はした金にもなりやしないよ。それにプルメリちゃんから聞いてなかったのかい？ 今ボクは休んでるんだ」

そう言つてオボロは干したきのみをつまんだ。

甘みが増したドライフルーツはお茶受けに最適である。

隣の弟子もひっきりなしにきのみを胃に流し込んでいる。

ミルタンクの食事風景としては一般的だとしても、年頃のレディとしては見るに耐えない。少なくとも師匠の彼はそう思う。

全く親の顔が見てみたいよ、とオボロはため息をついた。なぜ甘いものと甘いものを一緒に食べられるのかだとか、美容によくないだとか、糖尿病になるぞだとか、彼は弟子に言いたいことが山ほどあったが口をつぐんでいた。

——そんなことよりも。ボクの優雅な午後を邪魔しに突然やってきた、したつぱ達の相手を済ますのが先だよね。

ぐちやりぐちやり、とドライフルーツを噛みながら彼はしたつぱ達を見上げた。自分よりはるかに年下相手に思い切りガンを飛ばしながら、彼は返事を急かしている。

ボスにはこっぴどく殴られ、お気に入りの女の子ブルメリの食事をしんみり自室で取り、トレードマークのハンカチをわざわざ自分で洗濯し、ティータイムと洒落込んでいたらしたつぱ達に邪魔され、あまつさえヤングースにいつものズボンをボロボロにされ。

正直、今の彼は不機嫌という文字が人の形をしていた。

「金にならないのも分かってますし、もちろん姐さんからも話は聞いてるっすよ！ だけど、それもこれもグズマさんの指示なものですから」

「グズマくんの？」

「そうなんですよ、相棒の言うとおりに。それからオボロさんにこいつを渡せって言われましてね」

したつぱはズボンのポケットの中をゴソゴソ漁ると一枚のメモを手渡した。

畳まれた紙はしわくちゃで、インクが滲んでいる。いかにも走り書きといった乱雑な字で、簡潔にことが書かれていた。

『エーテルハウスへ向かえ。詳しいことはブルメリに』

「ふうん。わざわざこんなのをよこしてくるってことは、グズマくんは今外に出かけてるのかい？」

と小さな紙切れを眺めるオボロは不思議そうだ。横の弟子も紙を

じつと見つめている。

そんな彼らの様子を見て「あー。えーっと。それはですねえ」と口を開けては閉じ、また開けてはまた閉じを繰り返したつば。それと空気を読むことを未だ知らないもう一人。

「グズマさんならばつちり部屋にいますよ！ さつきも、しかめっ面してエネココア飲んでたつスカらー！」

「あ、こらバカー！」

「……………」

無邪気なしたつば。焦る相棒。そして乾いた笑みを浮かべる師弟二人。噛み続けるポケモン。

部屋の中はさながら地獄絵図だった。

## 第十五話【アローラ】

「オボロ。こつちだよ、こつち」

「ああ、プルメリちゃん。それにみんなも」

アズマオウに乗ってぶかぶかと。オボロ達が15番水道をスイスイ進んでいくと、草むらの陰からプルメリが手を振った。

エーテルハウスの脇の草むらにスカル団が集まる様は少し場違いで面白い。それも一人や二人ではなく、複数人でとくれば尚更だ。

アズマオウから降りながら「結構な大人数だね。何をおっ始めるんだい？」と彼は笑って声をかけた。ほおに付いた絆創膏がその笑顔にはびっくりするほど似合わない。

「ボクはなにをやるのか、サツパリ聞いてないんだけどさ」

「コスモツグを盗んだ子がいるだろ。リーリエって言うんだっけ？」

その子がこのエーテルハウスの中にいるのさ。後はもう、分かるだろ？」

「へえ。よく分かったね、居場所」

「したっぱのひとりが見つけたのさ。ゴソゴソ動くあやしいカバンを持った、あやしい金髪の女の子があそこにいるってね」

「俺が見つめましたY-O-O」としたっぱのひとりがラッパ―顔負けの手さばきをしながら進みでた。

華麗に韻を踏みながら動かす手は激しく、最後に例のポーズをバツチリ決める。その一連の流れはキレがあり巧みである。

確実にダンサーかラッパ―、はたまたランナーにでもなった方がまっとうな道を歩めそうなものだが、なんの因果か彼がいるのはスカル団だ。

「なーるほど！ それで、あのヤングースはなんだったんだい？」

「あれはエーテルハウスのガキのだよ」

「だからあんなに弱そうだったんだ。けどそれ、必要だった？」

そのせいでボクのズボンがさあ、とオボロは唇を尖らせた。空いた大きな穴からは少し血が出た肌がよく見える。

こだわってるだけあって女顔負けの足をしているな、とプルメリは思った。

むだ毛の一本もなくつるつるで、したっぱ達よりもなめらかな足。そこに残る赤い歯型はいやに映えて痛々しい。

「なんでもあの子供——ミツキがお姫様リーリエに引っ付いてるってウワサじゃないか。だからあのヤングースを人質にして、あの子をアジトにおびき寄せてる隙にアタイ達がお姫様をさらうって寸法だよ」

ほうほうと頷きながら、オボロはポンつと手のひらを叩いた。芝居掛かったわざとらしい口調で瞳をキラキラと輝かせている。



「なるほどね。グレイトな作戦だ！　これ、プルメリちゃんが考えたのかい？」

「アタイじゃないよ」

プルメリの声を聞いた途端、オボロは微妙そうな顔を浮かべた。プルメリを精一杯持ち上げようと準備万端だったのに、実は担ぐ神輿がなかったってくらいにズッコケっぷりだ。

肩透かしを食らった彼は、そっかあと呟くと眉間にしわを寄せる。少し、というよりかなり不満そうだ。

プルメリならともかく、今さっき派手にケンカした男の作戦を持ち上げるほど彼の心は広くない。

むしろどちらかと言わなくても自己中な彼は、腹がたつからなにかケチでも付けてやろうと思っていた。

「けど、もしだよ。もしミツキがきちんと言うことを聞かなかったら、どうする気だったのさ」

「なんだい。失敗して欲しかったのかい？」

「そうじゃないけどさあ。けど、そういうこともあり得るじゃないか」

「グズマが来るって言ったんだ。アイツの勘の良さはアンタも知ってるだろ？」

「ぐっ。確かにね」

グズマの野生の勘はスカル団誰しもが知るところ。オボロは口への字に曲げつつも、おし黙ることしかできなかった。

まぶたをピクピク動かしながら心の中で両手をバンザイ。片手には白旗を持ち、パタパタと振っている。

きつと今頃、ミツキはアジトに乗り込んでいるのだろう。大勢のスカル団がのんきに草むらでたむろしているのがその証拠。

これはグズマのお膳立てだ。バトルの決着を今度こそ白黒はつきりつけるための。

オツムの弱いグズマがこんなことを考え出したのも。自分が直接リーリエを迎えに行つてルザミーネに差し出そうとしないのも。

全部彼が強情で、スカル団ボスにあるまじきスカしてない奴だからに違いない。

そう彼は結論づけると「合言葉のふくろだたきを一番守つてないのがボスつてどうなのさ」とブツブツ文句を言いはじめる。完全に負け惜しみである。

「まあいいや。楽しいことを考えようかな。それにしても、プルメリちゃんと作戦だなんて！ 夢のようなひと時だなあ。ボクは幸せ者だよ！」

「いちいち大げさなんだよ。恥ずかしいからやめとくれ」

「お師匠さま、すつごくうれしそうね。なんていうか。やたらと」

「そりゃあね！ グズマくん むさい男とやるよりも、やっぱり美しい女性の方が嬉しいに決まつてるじゃないか！ そう、キミはさながら月の使者、ルナアーラだね。ハニー」

そう言つてオボロはウインクをした。

につこり笑う師匠とツンケンする姉貴分。しかし後者は耳を赤く染め、気まずいのか照れ臭そうにしている。

ふうん、と二人をジロジロ全身くまなく見てから幼い弟子は口を開いた。

「ねえお師匠さま」

「なんだい？」

「今さらだけど。あねさんはお師匠さまのコレだつたりするのかしら」

「こ、コレつて。どこでそんな言葉覚えてきたのさ。キミ、まだ九歳だ

ろ？」

小さな指をピョコンと立てて尋ねる少女に、オボロは顔を引きつらせた。けれどもリジーは気にせず澄まし顔。

「あたしのパパよ」

「へ、へえ。親御さんかあ。キミのパパとは教育方針が合わなさそう  
だ」

きつと我が弟子の親はスカル団以上にロクでもない奴に違いない  
な、と彼は思った。

アローラのあぶれ者とは言え、スカル団には案外常識的な者が多い  
のだ。いや、常識を持っているからこそ社会からあぶれるのかもしれない。

例外は自分を棚上げしているナルシストくらいのもだった。

「もうそんな言葉使っちゃダメだよ、リジー。キミには今以上にこの  
華麗なるボクの弟子だという自覚を持って欲しいね」

「はあ」

少女は小さな手を上げて返事をした。気が抜けるようなスカした  
声だ。

「ついでに言っておくけど、アタイとオボロはそんな関係じゃない  
よ」とプルメリはため息をついた。

この歳にしてスカル団に染まっていく少女にこれでいいのか、と彼  
女は頭を抱えている。

ヤマンバギャルとはほど遠い。みんなの姉御は誰よりも気真面目  
だった。

プルメリが答えたところで少女の疑問は止まらない。

「でもそんなにあねさんが好きなんだったら、あねさんとケツコン  
したいなあって思わないのかしら」とリジー。

ただ、オボロがその言葉を聞いた瞬間。  
ふと面食らった顔をした後、彼のツボにはまったようでワライダケでも食べたようにゲラゲラと笑い始めた。

「あつはは！ まさか！ ないない」

「そうなの？ だって、お師匠さまはあねさんのこと好きなんですよ？」

「確かにボクはプルメリちゃんのことを大好きだし、彼女は愛すべき女の子だけどきあー！」

ヒイヒイ笑う彼の目元には涙がたまっている。

愉快そうに苦しそうに腹を抱える彼に、周りの団員は目が点になっていた。

毎日毎時間プルメリへ好き好きアピールを続けるオボロは、したっぱ達からシタゴコロの塊だと思われていたらしい。当然の結果である。

「たとえば言うなら『立てばルージュラ、座ればプリン。歩く姿はナゾノクサ』ってくらい、プルメリちゃんはステキだよ。そりゃあ」

と笑いをこらえながらオボロは言った。分かりづらい言い回しをしているが、つまるところ彼はプルメリのことを美人だと言いたいらしい。

「それだったら、あたしはいいと思うのだけど」

「ううん、そうだね。それ以前にボクらは仲間なんだ。大切な仲間に手を出すほど、ボクも馬鹿じゃない」

「ほんとに？」

こてんと首をかしげる弟子に、「もちろんさ！」とオボロは親指を立てて言った。なんなら指切りをしてもいいよと小指を絡ませる始末。

「もし仮にボクとプルメリちゃんが結婚なんかしたら、とんでもなく大変な天災が起きちゃうよ。それこそ、この世の光がゼーンぶ消えちゃうほどのね」

「光が？ うーんと、あねさんがルナアーラみたいだから？」

「そうそう。そのとおり！」

弟子と戯れる仲間を見て、プルメリは頭が痛くなるのを感じた。

別に告つてもいない男（しかも相手は自己中ナルシスト野郎である）に一方的にフラれた気分を味わう彼女の心はブルーハワイ。冷たくて真つ青で、甘ったるくて気持ち悪い。

冷たく吹くアローラの風がそよそよと草むらを揺らしている。

彼女はまたもやため息をつくと、リジーを諭すように話し始めた。

「だいたいさ。そういうことは、二人の間に愛アローラがなくちゃしちやダメなんだよ。分かるかい？」

プルメリの声はおとぎ話を語って小さい子を寝かしつける時のように優しい。分かりやすい言葉を紡ぎながら彼女は少女に言い聞かせていく。

「それもただの愛アローラじゃない。もっともっと特別なキズナさ」

「たとえば？」

「例えば……そうだね。どんな友達よりもお互い分かりあえて、どんな時でも味方になってくれるとか。どんな小さなことでも一緒に楽しめるような感じかねえ」

黙ってプルメリの話聞きながら、なんかその言い方だと、プルメリちゃんにもボクにも愛アローラがないみたいだな、とオボロはムツとした。

——例えばの後の部分は全部ボクに当てはまってるじゃないか！

ちやんと愛あるだろ！<sup>アローラ</sup> ないの!?

たとえ心の中だとしても、先ほどまでプルメリに手を出す気はないと豪語して爆笑した人間が言えるセリフでは決してない。

さらにいえば、全ての繋がりを絶ち、アローラからさよならバイバイして故郷に戻る気満々の人間が言えることでもやはりない。

ただ彼は都合の悪いことは忘れ、都合の良いことはいつまでも脳に刻みこむ人間だ。

プルメリが続きを話す間も、彼はくちびるを尖らせブスけていた。

「家族仲良く川の字でなあって寝たり、一緒にご飯を食べたり、どこかに出かけたりしてさ。そういう何気ないことでも幸せを感じるのが愛ってやつじゃないかい？ アンタも、アンタのお父さんとお母さんを見れば分かるだろうけどさ」

プルメリはとろんとした目でウツトリと。ほおを紅く染めた彼女はまるで酔っ払い。

さもあらん。いつぞやしたつば達が言った、夢見がちだという評価もあながち間違っていないのかもしれない。

「しかし子供は正直だ。理想を語るプルメリを「ううんと、ちつともわからないです」と斬り捨て御免。

「パパとママはいつしよにねないし、ずっとオシゴトしてるからいつしよにゴハンを食べたりもしないわ。そういえば自分達のことを『かめんふーふ』って言ってたわね。それにパパなんて、休みの日はのんだくれてねてばかりなんだもの」

「仮面夫婦」

「しかもパパもママも、あたしの顔を見ると少しビミョーな顔をするのよね」

別にそんなの気にしなくていいのに、と彼女は呟いた。

見事凍りついた大人達とは違い、両親に疎ましがられていることをなんとも思っていないようだ。どこまでも平然としている。

対照的なのがプルメリ。まだまだ若い彼女は結婚に壮大な夢を抱いていた。

自分よりはるか年下の少女の言葉に夢を打ち砕かれたのか、彼女は少し呆然としている。

間違いなくスカル団で一番初心で純情なのは姐御だった。

「そ、そうかい。そういえばさ、オボロはこの子の親に連絡しなくていいのかい？ 泣く子も泣かすスカル団とはいえ、年端もいかない子供を連れまわしてアジトに住ますなんてさ。誘拐もいいところじゃないか」

それから「そういうの、アタイは好きじゃないね」とプルメリは続けた。師匠の彼も頭をかいて、「ボクもそう思ったんだけどさあ」と言う。

そんな彼らの気も知らず、弟子はひとりVサイン。

「その点はだいじょうぶです！ あたしの家は『じゆうほーにんしゆぎ』だってパパが」

「自由放任主義」

「家にお金がないからあたしも働いてるんだけど、ある程度のお金をパパにわたしたらおこづかいにしているの。そのお金でこの間、ジョウト旅行に行ってきました！」

稼いだお金で家族にリップサービスをするのは娘の役割じゃないだろう。

したつば達は内心一同総ツツコミを入れていたが、嬉しそうに語る少女の姿になにか言えるわけもなく。ひたすらにいたたまれない空気が流れていく。

横でオボロはいつぞやのビーチでの出来事を思い出し出していた。なるほど、ナマコブシ投げのプロになったのも頷ける。

「マリエシテイに住んでるから、ジョウトって行ってみたかったのよね。だんごにほうじ茶！ 本場のを一回食べてみたかったのよ」

「確かにマリエ庭園の茶屋は良い店だ。美味しいからね。そう思うのも分かるよボクも」

「けどあたしのお金だけじゃぜんぜん足りなくて、ほとんどパパに出してもらったの」

眉を下げて言うリジーに「まあそりやそうだろうさ」とオボロは言った。

いかにナマコブシ投げが高時給とはいえ、子供が稼ぐには限界があるし、海外旅行の資金とまで貯めるのは難しい。家に金を納めていたならなおさらのこと。

案外ちゃんとした親なのかもな、とオボロは弟子の親への評価を上方修正した。

そうでなければ、この子は性根がひん曲がっていたはずだ。たとえばの話、グズマみたいに。

「ジョウト旅行、楽しかったかい？」

「とびきり楽しかったわ、お師匠さま。結局すぐにアローラにもどってしまったけれど」

「旅行なんてそんなものさ。家族みんなで行けてよかったね、リジー」

「いや。ひとり旅よ、お師匠さま」  
「え」

沈黙が彼らを覆い尽くした。

——小卒大人法はどうしたんだよ。この子はまだ成人してないだ



ろ！

オボロは弟子の親への評価がバブルのように弾け飛んでいくのを感じていた。というより、マイナスまで突き抜けていった。少しのことで評価のアップダウンが激しくなるのも彼がなせる技である。

ただ彼はこうも思った。

ここはアローラ。常夏の国。元々住んでいた場所と常識が違うのは当たり前。

——いや、こつちの世界では小さな子でもポケモンを持っているし。キープポケモンなんてのもないし。成人前のひとり旅も案外普通のことなのかもしれない。

やっぱりボクにはアローラ人の感性は理解しがたいね、とオボロはひとりごちた。

普通のことなのかとホツと一息ついて彼があたりを見渡すも、どうやらそんなことはなかったらしい。

したつぱ達は上下左右ひっきりなしに目玉を動かし、プルメリは幻想を木っ端みじんに爆破されたらしく、もはや無の表情を浮かべている。

その中できよとんとしている少女の様子ははつきり言って浮いていた。

「……リジーのパパとママは今どこにいるんだい？ 今度よくよく話してみたいんだ」

「そうだね。その時はアタイもついて行くよ」

必死で笑みを浮かべる二人。ただヤケクソなのが丸わかり。口の中は乾きカラカラと声がすっきりかすれている。

したつぱ達も喉がなります牡蠣殻と。

そんな中、不思議そうにしているのは少女ただひとり。

「今はパパもママも遠いところにいるわ」

「は？」

「すぐには会えないんです。けど、きっとまた会えるから」

そう言って笑う弟子にオボロは少し恐怖を覚えた。彼の頭の中ではネグレクトだとか親戚たらいい回しだとか、そういうゲスの勘繰りが高速スピンドで飛び回っている。

オボロはカバンから甘味を取り出すと、そつと少女の手に握らせた。自己中な彼も弟子のことをさすがに哀れに思ったらしい。

プルメリもそうで、少女の頭をぽんとさわると優しくなで始めた。

御涙頂戴。しみりとしたムードが漂う草むらで、唯一不満そうにするのは当の本人。ナルシストの弟子、リジーだけ。

「なんかカンチガイされてそうだけど、パパもママもやさしいのよ。お師匠さま達とおんなじくらい。あたしはね、いつもそっけないけどやさしくしてくれる二人が大好きなの」

作戦前の草むら。エーテルハウスの横で、新たな幕が切って落とされる。

ミヅキとグズマが戦う屋敷。スカル団が潜む草むら。憩いの孤児院。

カントーから来たトレーナーとスカル団。島キングの孫にコスモッグを連れた少女。加えてキャプテン。

それともうひとり。建物の陰で話すスカル団をじっと見る少年――グラジオ。

役者は出揃った。物語は終わりへと廻り始める。世界で一番、長い夜が始まる。

それはスカル団にとって悪夢の始まりとも言えるものだった。

## 第十六話【フラフラダンス】

カチ。コチ。カチ。コチ。

静かな部屋に降り注ぐのは時計の針が刻む音。

ちびっ子達は奥に引きこもり、みんなしてマングースの帰りを待っている。

ぐずっているのはポケモンを奪われた子ども。「あのおねえちゃんなら大丈夫だよ」と寝かしつけるのはアセロラだ。

リーリエは皿の上に乗ったマラサダをつまんだ。小さくちぎってから口の中へ。よくよく噛んでからそれを飲みこむ。

苦い。

ウラウラの名物であるニガサダ。

その苦さが心の中にも染みこんでいく気がした。なにやら嫌な予感がする。

「ミヅキさん大丈夫でしょうか。わたし、心配です……」

リーリエの言葉は真っ白い部屋に溶けていった。だが胸の中ではじわり、じわりと広がっていく。

ぼんやりとニガサダを見つめるリーリエとは正反対。ニガサダをほおいっばいにつめながら、

「確かにスカル団のところに一人で乗り込むなんてさー。おれも心配だけどー」

と心配なんてひとつもしていない顔でハウは言った。

一度区切ると、エネココアを飲む。それからいつもの笑顔でにっこり。

「けどきつとさー。ミヅキなら大丈夫だよー！ 無茶なんかじゃなあってねー、おれ思うんだー！」

ね！ と歯を見せ笑う少年に、少女の心は解けたようだった。不安がみるみるうちに消えていくのを彼女は感じた。

ハウの言葉にウソはない。もちろん根拠もなかったが、それでも彼は心の底から言いきった。

それは友達であり仲間であり、ライバルでもあるミツキのことを彼が信じているからだ。

「ふふ、確かにそうですね。ミツキさんはあの人達と違って立派なトレーナーですから！」

この場合、あの人達というのは無論スカル団のことである。

オボロはキレていた。

常夏の地アローラとはいえ夜は冷える。極寒の中、ドアの前で今か今かと突入機会をうかがっていたナルシスト。

扉に耳をつけてじいっと聞いていた彼には、二人の話し声がばっちり聞こえていた。

自慢ではないが、オボロは自分のことをたいそう立派なトレーナーだと思っていた。

コーディネーターの中のコーディネーター。全てのトレーナーの鑑に違いないと。……やっぱり自慢なのかもしれない。

とにかく彼には彼なりの信条があったということだ。そしてそれを誇りに思っている節もあった。自分大好きなナルシストには当然のことかもしれない。

それをへし折られたような気がした彼はこめかみをひくつかせた。ただでさえ不機嫌な最中。しかもこのクソ寒い外で待機しているなかでのこと。

端的に言うと、彼は怒り心頭だった。

「どこの誰が立派なトレーナーじゃないだつて？」

ハデな音を立てて扉が開いたかと思うと、飛び込んできたのはスカ  
ル団。

したつぱ達があつと言う間に少年少女を取り囲む。その後「大人し  
くしててね」と二人に歩み寄るのは幹部とその弟子だ。

「やあ。この間ぶりだね二人とも。元気にしてたかい？」

「楽しくすごしているところゴメンなさい。けどこれ、スカル団のシ  
ゴトなのよ」

張り詰める空気。子供の声がぴたりと止んだ。したつぱ達もプル  
メリも口を閉ざしている。

そんな中、ニヤニヤ笑うオボロとリジーはどこからどう見ても悪役  
だった。

結局、悪役の弟は悪役だし、悪役の子供は悪役なのだ。ああ、どこ  
までも血は争えない。

## 第十六話【フラフラダンス】

ぐるりと室内を見渡すとオボロはふうと息をついた。

悪趣味なくらい白い部屋は無機質だ。子供達だけでなく空間も彼  
らを拒んでいるようで、針のむしろであぐらをかいている気分だな、  
と彼は思った。

自由奔放という文字が人の形をした彼にとって、あまり好きな空気  
ではない。

「やれやれ。どうも歓迎ムードじゃないみたいだね」

「そりゃアタイらスカル団が押しかけてきて、喜ぶ奴なんていない  
だろ。そんな奴、いたとしたらスカル団よりバカだね」

とプルメリ。てきとうに言葉を投げる彼女は気だるげだ。今回の作戦、どうやらあまりやる気がないらしい。

真面目なプルメリちゃんにしては珍しいな、とオボロは首をかしげたが、思考を頭から弾き飛ばすとすぐにリーリエと向き合った。

スカル団の仕事は筋を通す。

なにがあるうと今も昔も変わらない。それは命の恩人に対しての不器用な彼なりのケジメだった。

……顔をキズモノにしてくれたグズマには、正直殴り飛ばしたいほど腹を立てていたようではあるが。

「あのさありーリエちゃん。前にも言ったろ？ 『悪いことは言わないから、そのショルダーバッグの中身を持ち主に返した方がいいよ。でなきやひどい目にあっちゃうかも、ね！』てき」

後ずさるリーリエは守るようにしてカバンを抱きしめる。

ひと足、ふた足。

三步目を踏み出そうとして、彼女はそつと足を戻した。それからカバンを抱く力を強めて、周りの男達を必死で睨む。

後ろにはもうなにもない。あるのは壁だけだ。

そんなリーリエの姿にオボロは晴れ晴れとした気持ちになった。ヤングースのように弱っちい少女があがく姿は小気味よかった。

気分よく鼻歌を歌いながら意気揚々と少女に迫る。

「コスモッグを返してもらおうか。正当なる持ち主にさあ！」

「なにもこっちも手荒な真似をしようっていうんじやない。ただ命令どおり連れて行くだけ。まあ、アンタが素直に返してくれたらつてのが付くけど」

小さな少女はたじろいだ。それから震える声で一言。

「信用、できません」

「気持ち分かるよ。すっごくね」と言った後、プルメリは黙って首を振る。続けて「スカル団なんてロクでもないバカの集まりだからね」と彼女は付け足した。

はあ。

プルメリはため息をついた。しかし、それは少女にあきれているよ  
うなものでもなく、少女を責めるようなものでもない。

まあそりやそうだろうな、という諦めから来るものだった。

「けどね。ホントはアタイも気が乗らないんだよ。アンタがポケモン泥棒なのかってのも、疑わしくなってきちゃあね」

「ドロボウじゃない？ プルメリちゃん、どんな事情があれば『人のポケモンとつたらドロボウ！』だよ。万国共通のルールじゃないか！」

プルメリは オボロを むしした！

きゆうしよに あたった！

こうかは ばつぐんだ！

したっぱ達の空気読めよという視線にも負けず、律儀に反応を待つオボロ。もちろん二人は華麗にスルー。

大げさな身振り手振りを披露する男に目もくれないで、プルメリは少女のカバンをじっと見た。

「けど驚いたね。今回は消えないのかい」

「あの時は、このコも絶体絶命のピンチでした。ですから能力を使つて、けれど、このコには負担が大きくて」

「まさかそいつ、 “テレポート” もロクにできないのかい？  
なんでこのポケモンに執着してるんだか」

「この子には不思議な力があって……。ウルトラビーストを呼び出すのに必要なのだそうです」

リーリエが暗い顔を見せるとしやしやつてきたのはナルシスト。女性陣に露骨に無視され心に深めのキズを負ったらしい。

とにかく構ってもらいたいスカル団幹部の男は「へえ。おかしな話だね。ウルトラビーストは異空間に住んでるんだろ？」と訳知り顔で呟いた。

「その空間との穴——ウルトラホールを創り出せるのは、世界広しといえどもルナアーラだけのはずだ。アローラ地方の常識だよね！」  
「そんな常識初めて聞いたし、なんでよそ者のアンタが知ってるのか謎だけだよ」

とそこまで言つて、プルメリは頭の中によぎったハテナを考えないようにした。

遠いところからやつて来たこの男。

自分達よりはるかに物知りで、頭がキレることは長年の付き合いでよく知っていたからだ。おそらくそれは年の功というやつのためだろう。

ただしその知識が使われるのは彼の美容と手持ちのポケモンに關してだけ。

彼はケチなので、それがスカル団に還元されることはあまりなかった。自己中の極みである。

「まあいいよ」とチラリと時計を見て彼女は言った。

これ以上話をそらせばマズい。ボスの実力を彼女は信じていたが念には念を、だ。

「コスモッグを渡せば周りのコにもなにもしない。ただ渡そうとしなければ……分かるよねえ」

「多勢に無勢。バカでも分かるだろ？ ロクに戦える子がハウくんしかないじゃないか！」

「ふふん。こっちはたくさんいるんだから！」



たたみこむスカル団の面々。したっぱからは野次が飛ぶ。囃す。遊ぶ。楽しむ。嗤う。憐れむ。彼らの姿は多種多様。

そんな中、少年はオボロとのバトルを思い返していた。

もしあの時ミヅキがいなかったら。もし自分とこの男だけのシングルバトルだったなら。

きっと自分はなすすべもなく負けていた。そのはずだ。そうに違いない。

祖父と同じくらいとまではいかないが、やっぱり男と自分の実力は離れていた。それは今も変わらないのだろうか。

……いや、変わっていたとしても。この人数を相手にするのは不可能だ。

「ううー。たしかに言えてるー」

ハウは手に持ったボールを腰に戻した。

中身はシャワーズ。オボロから貰ったみずのいしで進化させたポケモンだった。

絶対絶命。四面楚歌。

たじろぐハウ。口を閉ざすリーリエ。笑うスカル団——の横で、プルプル震える子供がひとり。

「ごうー。さつきからみんな、アセロラをむしするな！　なのー！」

ここで登場、キャプテン・アセロラ。奥の部屋から出てきた彼女は見るまでもなく怒っている。

家主であるにも関わらず、どこまでも蚊帳の外だったのを気にしているらしい。

「ああ、この間会ったウラウラのキャプテンじゃないか！　久しぶりだね。相変わらず小さいな」

「ほんとスカル団って、女の子に対して失礼なの！」

ブンブン怒る少女をオボロはからかった。メガやす跡地で出くわした時より、面白そうに彼は少女で遊んでいる。

理由はひとつ。自分よりも強い彼女の保護者島キング殿がいないから。はあ。

プルメリは再びため息をついた。もちろん、今度はあきれから来るものだ。

気を取り直すと声を低くして彼女は言う。

「アンタもさ。そのチビツコ達になにかされたくないだろ？　いくらキャプテンだからって、どうにかなるなんて思ってないだろうね」

力づくでも別にいい。バトルなら時間はかかるだろうが、物理的になら周りのしたつぱ達を使えば一瞬で片がつく。はつきり言っつそっちの方が楽だ。

それでも彼女は言葉で解決したかった。全てはバカで非道になりきれない、愛たっすべき半グレば共達のため。

「諦めな。勇気と無謀は違うんだ」

それは、優しい姐御としての説得だった。

ぐっとアセロラは言葉に詰まる。聡い子供は分かってしまったからだ。

彼女の言葉は全て正しく、それも善意から来るものなのだと。

カチ。コチ。カチ。コチ。

誰も喋らない。たった二人、例の師弟を除いては皆暗い顔をしている。

少年も少女も別室に隠れている子供も——スカル団でさえ、それは変わらない。

静まり返った部屋の中。響くのは時計の針の音だけだ。

ふいにリーリエが一步踏み出した。先ほどとは違い、今度は前にまっすぐにプルメリを見つめ、少女は口を開く。

「分かりました。けれども、ひとつ。ほんのひとつだけ、お願いがあります」

「なんだい？ 聞いてみようじゃないか」

「もし、あなた達がこのコを連れて行くならば。わたしも一緒についていきたいのです」

プルメリは思わず息を呑んだ。

目の前にいる金髪の少女は懸命に自分を見つめている。翡翠色の瞳は星のように瞬いていた。

代表と同じ色、同じ形をした瞳。けれどもその『色』は似ても似つかない。

圧にのまれたプルメリの横で、オボロは少女をじいつと観察していた。プルメリの姿を映すまん丸の目は、全てを包みこむ太陽のよう。オボロは昔、彼の兄が何気なく言ったことを思い出した。

——どんな悪事もお天道様が見てるんですって。つまらない迷信だと思わなあい？ ほんつとナンセンスなんだから！

オボロの兄は悪人だった。

彼のように法律に触れることをするとまではいかなかったが、限りなくそれに近いことをやっていた。お世辞にも善人とは言いがたいオカマだ。

もはや誰にも信じてもらえないだろうが、どこから見ても当時オボロは善人だった。兄がライバル達を潰し、不正を犯すたびに小言を言って諫めるのは彼の役目だった。

似ていない兄弟だとよく言われた。

ただしそれは故郷での話。今、もし横にいる彼女——プルメリが兄に会えば、アンタにそっくりだとあきれ果てるだろう。ありありと想

像できた。

けれど、兄とは違って迷信だと笑い飛ばせる自信はもうなかった。だからだろうか。プルメリと同じように彼がやすやすと少女の提案に乗ったのも。

「いいき。コスモッグさえ取り戻せば問題ない。アンタは『事の成り行き』で『たまたま』『間違えて』アタイらについてきちまったんだ。だよねえ、オボロ」

「ハイハイ了解。そういうことだからさ。リーリエちゃん、お手を拝借」

オボロはリーリエに手を差し出した。スカル団として色々なものを奪ってきた手のひらだ。

「ボク達が責任持つて、ちゃんとキミをお届けするからね。スカル団の名にかけて！」

リーリエはまじまじと彼の手を見つめた。大きくて細かいしなやかな手だ。

その手の持ち主はにっこりと笑っている。プルメリもムスツとしながら暖かく見守っていた。

友達を奪おうとする、敵のスカル団なのに！

少女は自分を抱きしめた。身体の震えを、止める。

それからおずおずと手を前へ。彼の手の平にそっと重ねようとして――

「その必要はない！」

大きな声に遮られた。直後、オボロから引き剥がされたかと思うとぎゅっと抱きしめられる。

自分より少し大きな身体越しに見えたのは男のしかめっ面。それ

に目を見開く女。ざわつくスカル団の男達。

「にいさま？ にいさまなのですか？」

「間に合ってよかった。リーリエが無事で、本当に……！」

生き別れの兄妹の感動の再会というわけである。

放蕩娘と放蕩息子は二人の世界に入り込み、周りの者は置いてけぼりを喰らっている。

兄の方はその場にいた面々からあまり好かれていなかったのをおのこと。

お騒がせ集団・スカル団の用心棒であり、グズマのお気に入り。近所の奥様からの評判は言うまでもない。

スカル団でもそうだ。したっば達は兄貴分からなぜか可愛がられる後輩にジェラシーを。オボロはプルメリに馴れ馴れしいとご立腹。

厨二病治りたてのハイティーンが多いスカル団にとっては、彼の言動がこっぴどくかしいというのもあったのだろう。

好意的に受け止めているのはハウだけだった。

「えー！ 兄妹だったのー!？」と驚いた後「よかったねー！」と手を鳴らす。感動ムービーへの反応としては百点満点の回答だが、この場には全くそぐわない。思わずアセロラも苦笑い。

乱入者、再び。

しかも今度はばりばりスカル団に関係している人間だ。

身内が持ち込んだ予想外の展開。それを誰よりも面白くないと思う男がいた。

もちろん自己中極まりないナルシスト、オボロである。

「なんでボンボンくんがいるの？ 別に呼んでないしキミの仕事じゃないし。ていうか、スカル団の仕事だからね。来るならせめて手伝ってほしいんだけど」

と紅くなった手を擦っている。どうやらリーリエを引き剥がすつ

いでに手をはたかれたらしい。

地味に痛かったようで、弟子に差し出された軟膏を塗っていた。彼は基本的に打たれ弱かった。

つつけんどんに言い放った後、オボロはリーリエの手を掴もうとするも、空振り。

再び彼の手をはたいたグラジオ。鼻を鳴らすと、彼は目元のシワを深く刻んで男とその弟子を睨みつけた。

もう一人の幹部は少年の眼中にはない。

「コスモツグも、リーリエも渡さない！　それがスカル団なら、特にオマエら二人が絡んでいるのなら！」

「熱くならないでよ。うるさいなあ。鼓膜が破れそうだ」

両手を用い耳を押さえるも彼の声は突き刺さる。耳栓しようかな、とオボロは呟いた。

なにせうるさい。ドゴームどころか、バクオングと同じくらいにはうるさかった。

本当に地震が起こったのかと一瞬疑ってしまったくらい三半規管がイカレる音だ。

バクオングは闘う時しか大声を出さないと。きつと彼にとつては今こそが闘う時なのだろう。

——その相手はボク？　本当にバカバカしいな。

オボロは鼻で笑った。仮にも味方である自分がなぜ彼に齒向かわれているのか、彼には理解できなかった。

「あのさあボンボンくん。コレ、グズマくんの命令なんだよ。『コスモツグを探せ。見つけろ。持ってこい』って。分かる？　ボスの指示なの！」

ざわつくしたつぱ達を手で制すと、彼はグラジオを糾弾する。苛立ちを隠そうともせず声を荒げて。

得意の舌でまくし立てながら、オボロはふと疑問に思った。

そういえば不本意ながら前おごつてやったのに、なんでこんなことを言われなければならないのだろうか。

カネの恨みは怖い。

彼は段々イラつきが増していった。元々腹が立っていたが余計にムカツ腹が立った。

その対象はグズマからグラジオへ。完全に八つ当たりである。

「雇い主の意向に従わない用心棒って、てんでダメじゃないか。契約違反も甚だしいよ。いくら身内のことだからってさあ」

「フツ。確かにグズマの命令ならば、オレも従っていたかもしれないさ」

そう言つてグラジオは言葉を区切ると、物憂げに瞼を伏せた。それから首をゆっくり振ると師弟二人をより激しく睨む。

拒絶。拒絶。拒絶。

得体のしれない敵でも見つめるように。

「だが、これはオマエ達の陰謀だろうか？ オマエ達の魂胆は分かっている。このオレには全て、な」

「インボウってー？ それ、さつきあつた時言つたことと関係あるのー？」

「ああ」

きやつきやと話す少年についていけない大人達。

不思議そうにするオボロに向かって真つ先に疑問を投げたのはブルメリだ。

「……アンタさ。またなにか企んでたのかい？」

「えっ全然。ボクにはなんのことかサツパリ分らないし、心当たりもひとつもないよ」

「あつちはそう思っていないみたいだけどね」

こういうところで日頃の行いが効いてくるのだろう。

普段つるんでいる兄貴分より、少年の言葉の方が信用度は高い。スカル団の総意だった。

けれどオボロは不思議そうに首をひねり続けるばかり。

「うーん。けど、プルメリちゃんだつて知ってるだろ？ ボクがグズマくんを操れる訳ないじゃないか。じゃなかったら歯なんて折つてないし」

「とぼけても無駄だ。オレはオマエらが手を引いているという証拠を握っているんだ。それも決定的なのを！」

少年は叫ぶ。大きな声で弾劾する。

それでもこのナルシストには心当たりが欠片もなかった。なぜグラジオがこんなにも自信満々なのか謎で謎でしょうがなかった。いい迷惑だ。

オボロは横にいる弟子を見た。

自分と同じようにアレコレ言われている小さな少女。にもかかわらず、やけにすました顔して佇んでいる。

怪しい。はつきり言つて、怪しすぎる。

「……リジー、なにかやった？」

「まさか。あたしはお師匠さまじゃないもの」

弟子のつれない回答に顔を引きつらすオボロ。この弟子は師匠をなんだと思つているのだろうか、とほおをピクピク動かしている。



そんな彼らの様子も気にせず、グラジオはとうとうと語り出した。必然的に場のスポットライトは彼に当たる。

「オレはオマエ達に会った時、疑問に思ったんだ。なぜこの男はスカル団にいるのかと。なぜこの子供は弟子をやっているのかと」

「ああ。キミが無銭飲食したあの時ね。ボクが代わりに払ってあげただけど」

「その一点だけはオマエに感謝していなくもない」

このままなあなめにさせるかとオボロ。

「後で返してね百九十八円」と彼は両手を突き出すも、グラジオは金色の頭を二度振ると何事もなかったかのように「話を元に戻すが」と口を開く。誰からも相手にされない両の手が虚しく宙に浮いている。触らぬ神に祟りなし。

金欠で苦しんでいるのは家出少年も同じだった。

「オレはヌルと共に調べた。オマエ達が何者なのかを徹底的に、な」

「へえ。そりゃあ無駄な努力、ご苦労様って感じだね」

「フン。オマエには分かっていたんだろう。オレの試みが水泡に帰すことを！」

「なるほどー。それがさっき言ってたことにつながるのかー」

ポンとハウは手を叩いた。

なるほどなるほどと頷く彼に「にいさまが言っていたこと、ですか？」とリーリエ。少女は未だ合点がいかないらしい。

そんな可愛い妹のために「ああ。さっき道で会ったハウ達には言っていたがな。アイツらは致命的に信用できない人間なんだ」とグラジオは続けた。

「スカル団幹部のオボロ、ハウエン出身の元コーディネーター。その弟子のリジー、マリエシテイ出身の子供……」

自分自身でも内容を確認めるように少年は言葉を紡いでいく。目の前の二人のプロフィール。それはどこにも怪しいところはない。ごくごく普通のありふれたものだ。

ただし、それは正しいものであればの話。

「アイツらはな。このアローラに存在しない人間。それどころか、世界中どこを探したっているはずがないのさ」

「それって、どういうことですか？」

「戸籍がないんだ」

「なんだって？」

プルメリは耳を疑った。だがそれと同時に納得もした。

てきとうなことばかり言っている自分のことをはぐらかす。誰にでも気を許しているようで、自分の殻にこもったまま。

彼は分かりやすいようで、その実謎に塗れていたからだ。

オボロをちらりと見ると、彼は涼しい顔をして突っ立っている。それがなんだい？ とでも言いだしそう顔だ。

彼女の仲間は身をもってグラジオの言葉を証明していた。

彼の様子にグラジオは鼻を鳴らす。焦りもしない彼にひとつ、とても面白くなさそうに。

けれど確信は持てたらしい。グラジオは調子付くと人差し指を真正面に突き立てた！

「あの歪んだ師弟関係はカモフラージュ。アイツらはスカル団にまんまと潜り込んだエーテル財団のスパイなんだ。オレとヌルを監視するための！　そして、リーリエを連れ戻すための！」

「えっ。リジーそうなのかい？」

「お師匠さま、そうだったの!？」

びっくり仰天。

目を見開き叫ぶ師弟二人。彼らの瞳はまん丸だ。

お互いを見てはちぱち瞬きをする二人はひよつとこのように滑稽である。誰が見てもどう見ても、彼らは予想外のことに面食らっていた。

「つて、なんでオマエらが驚いているんだ！」

「そりやおどろくわよ！ そんなこといきなり言われたら！」

「本人が驚くのはおかしいだろう！」

「しようがないじゃない！ そんなこと言われたつて、あたしは本当に知らないんだもの」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ子供らを見て冷静になったのだろう。

オボロの脳裏によぎるのはマセガキ二人と彼らのボスだ。「やれやれ。ボクの周りには妄想たくましい子が多いみたいだ」と彼はため息をついた。

「だいたい監視してもボクにメリットがないよ。キミもタイプ :

ヌルも、悪いけどボクより全然弱いじゃないか」

「それはヌルがタイプ : ヌルだからだろう」

「えー、ぜんぜんわかんないけどー。どういうことー？」とハウは首をひねる。周りの者もみな同じ。

少年の言葉を理解できるのは彼の妹、それと敵の弟子の二人だけだった。

「ヌルはウルトラビーストの天敵として——ビーストキラーとして造られた。エーテル財団の科学力を結集してな」

オボロは感嘆の息を漏らした。ビーストキラーねえ、と呟く彼の瞳は今日一番に輝いている。

彼は紙切れを取り出すと、がむしやらに手を動かし始めた。どうや

らメモを取っているらしい。

彼の頭にはウルトラビーストのことしかなかった。

いつもいつでも手こずってきたポケモン達。その天敵として作られたポケモン。

べらぼうな再生力を誇る白いのも、べらぼうに恐ろしい赤いのも、楽に倒せるのだとしたら。

上手くいけば自分の手持ちを傷つけずに済むのではないだろうか。彼は思った。こいつは使える。

「ねえグラジオー。なんかさー、あの二人グラジオの予想からはずれてそうだよー」

グラジオの話に首ったけ！

書くのに必死なオボロを見てハウは言う。もしビーストキラーのことを知っていたのなら出てはこないだろう反応だ。

「当たり前じゃない！」とリジー。

ぺたんこな胸を張るといきり立ち、少女は声を張り上げた。

「あたしはショウシンショウメイ、生まれも育ちもマリエシテイよ。コセキがないとかなんとか。そんなのデータの方がまちがってるんだわ！」

ムツとする少女に対しスカル団に同情の嵐が吹き荒れた。未届けなのかなんのかは分からないが、戸籍もないなんて相当だ。

したっば達はすっかり凍りつき半笑い。プルメリはしみじみとした瞳で少女を見つめている。

事情を知らない子供達ははてなマークを浮かべていたが、知らぬが仏というやつだろう。

こんな辛気臭い空気はいやだとばかりにオボロはひとつ、咳払い。それから一呼吸置くと「一応言っておくけど。ボクも真正正銘、カイナシテイ出身のコーディネーターだよ」と弟子の言葉に便乗した。

「まあこのリボンを見れば分かると思うけどさ。複製できる類のものじゃないからね」

「……………」

「そもそも。スカル団のボク達とエーテル財団が繋がってる訳ないじゃないか」

もつともらしく言う男。ズボンにはキラリと五つのリボンが光っている。

そのリボンの作りは精巧で、とてもじゃないが量産できるものではない。簡素ではあるが、よくよく見れば細かい細工がなされている。いくら手先が器用でも、個人で作るのは不可能なほどに。

上手な嘘のつき方は本当のことを織り交ぜることにあるという。仲間達をも騙してきた彼の本領発揮というわけだ。

「自信満々だったのにね。ボンボンくんの調査ミスかな？ 恥ずかしいね！」

彼は思いきりグラジオを笑った。

カネの恨みもあつてか、あまり好きではないこの少年。彼を上手くやりこめたことでオボロは胸のドロドロが消えていく感触がした。

——さあ愛する妹の前で恥をかきなよ！ もつともつと、もつと！

この男、大変大人気ない。大人気なさすぎる。故郷でも成人十歳児なのかしてるか怪しまれる思考回路である。

だがしかし。悲しいことに、彼はアラサーだった。

そんな残念極まりないオボロに「……フツ。そういう時もあるさ」とグラジオは顔を赤くする。それを見て調子付くオボロ。

形勢逆転。

彼は調子付いた。満面の笑みを浮かべてグラジオを責め立てる。

それはもう、したつぱ達がドン引きするほどに。  
けれどもすぐ、ピシヤリと冷や水を浴びせかけられた。

「いえ。にいさまは間違っています」

スカル団の面々は一斉に少女の方を向いた。子供達もだ。  
オボロの笑いも止まる。少女は息を吸って、吐いて、続ける。

「オボロさんは言いました。正当な持ち主にコスモツグを返しても  
らう、と。それは、ほしぐもちゃんが今までどこにいたのか知らな  
ければ出ない言葉のはずなのです」

それから少女はオボロの瞳をじっと見て、はつきりと言いきった。

「オボロさんは母さまと繋がっています。もしかしたら、スカル団  
自体が母さまと繋がっているのかもしれないが」

「まいったね。大当たりだよ。オボロ、どうするんだい？」

「どうするもこうするも、ボク達がやることは変わらない。リーリ  
エちゃんをエーテルパラダイスに送り届けるだけだよ。そうだろ？」

そう、やることはなにひとつとして変わらない。

プルメリが彼をやたらと見つめても、乱入者が増えても、身内がい  
くらわめいても、彼の秘密が暴かれても。

賽は投げられたのだ。回り出した歯車はもう止まらない。

「ひとり増えたところで戦えるのは三人だけだ。小さな子をかばい  
ながらだから、実質二人。マグマツグに水だね」

「……はい。分かっています」

とん。

リーリエは兄の手を突き放すと、ゆっくり前へ。オボロの方へ歩み

寄った。

その姿に迷いはない。身体の震えも揺れる目の動きも、とつくのうに収まっていた。

「リーリエー！」

「にいさま、いいのです。わたしは母さまから逃げ続けていました。母さまと向き合わず、家出して。けど、もう一度話し合えば分かってもらえる。そんな気がするのです」

少女は笑った。兄を安心させるように。そして自分を元気づけるように。

胸いっぱい息を吸うと、少女はぐつと拳を握りしめた。

「ミツキさんやハウさんはゼンリヨクで頑張ってる。今度はわたしの番です！」

オボロは少女に感心した。ルザミーネ女史と話したところで分かってもらえないと思うよ、と野暮なことを言う気もなくなるくらいに彼は感動していた。

『毒親』と世間からは呼ばれる類の母親ルザミーネ。それと向き合う少女の姿は太陽のように眩しく、美しい。

だからこそ彼は少年にいつそう嫌悪感を抱いた。

グラジオは未だなお、リーリエを守ろうとスカル団に歯向かってい。それは少女の懸命な姿を台無しにしかねないものだ。

それだけは許せない。そう思った。

「あのね、ボンボンくん。キミが噛みつくことで彼女の勇気は無駄になるんだ」

「それがなんだ、なんだっていうんだ！」

「ボクらとバトルをしてなんになるのさ。マルチバトルなら？ トリップバトルならなんとかなるかもって？」

彼は取り繕いもせず嫌悪をむき出しにしている。  
自分より小さな少年を見下ろして彼は嗤った。

「スカル団の幹部を甘く見ないでもらいたいなあ。ボクもプルメリちゃんも、その二人より強いよ」

オボロはハウとアセロラを交互に指差して言った。  
彼らはぐつと言葉を飲み込んでいる。男が言うことは嘘ではなく、誰の目にも明らかなきれもない事実だったからだ。

「さうらに言えば、ボクはキミがコテンパンに負かされたミツキにもこの間勝ったし。結果は分かりきってる」

効果てきめん。反抗的な顔はほんの少しなりを潜めた。本人は認めながらないだろうが、少年は間違はなく萎縮していた。

まあギリギリだったけどね、とオボロは心の中で舌を出す。  
けれど事実は事実だ。勝者<sup>グズマ</sup>が否定しようがこれも変わらない。

「キミがすべきなのは、勝ち目がないボク達に挑んで無様に負けることでもない。醜くすぎることもない」

オボロはほくそ笑みながら彼へ口撃を浴びせ続ける。

「キミが本当にすべきなのは、エーテルパラダイスに行ってルザミーネ女史と向き合うことだとボクは思うけどね」

それは、それだけは、とグラジオはあえいだ。

ぱくぱくと口を動かす少年に「できないんならすっこんでなよ」とオボロは「ぜったいれいど」の視線を注ぐ。

みつともない姿をさらし続ける少年の気持ち<sup>が</sup>彼は全く分からない



かった。

理解する気もなかったし、理解したくもなかった。

「ああ、リーリエちゃん心配しないで。船の用意はできてるんだ。したつぱ達が手配してる」

オボロは少女の手を繋ぐと、横の仲間目配せした。彼女は少し眉を下げると彼に従う。周りの者も彼の後についていく。

白くて不気味なエーテルハウス。

そこを後にして、これから向かうのはもっと白くて不気味な場所だ。

外へ出ようとドアノブに手をかけたたちようどその時。

どよめきが起きた。全て後ろのしたつぱ達の声だ。

うわ。やめろ。よせ。誰か止めろ。

そんな声の集合体が同時に押し寄せる。どれも焦りを含んでいる。どれも新しい門出にはふさわしくない。

オボロは振り向いた。すると目の端にちらりと黒いものが見えた。焦点を合わせると金色にも見える。肌色の何かが間近に迫っている。

またか、と彼は思った。本日二度目となれば察しがよくなるのも当然である。

とはいえ彼は殴られるのは好きではなかった。一度目は親友だからまだ許せたのであって（それでも怒りに燃えていたが）マセガキ小僧に殴られる気にはとてもならなかった。

ただ不幸なことに、他のスカル団と同じく彼はケンカにめっぽう弱かった。なにかと逃げ続けていたツケだった。

南無三。ギユツと目を閉じてオボロは衝撃を待った。

……。

……。

……。

なにも起こらない。おそるおそる目を開けると、ふらふら踊るグラジオの姿。ブツブツなにかを唱える彼の姿は少し怖くて、滑稽で、笑

えるものだ。

「にいさまー！」

「こんらんにしただけよ。じきにとけるわ」

リジーはモンスターボールをくるくる回した。少女の横にいるのはオドリドリ。なんでグラジオがこうなったのか説明するまでもない。誰が見ても明らかだ。

あのねリジー、と形だけでもオボロは弟子をたしなめようとした。が、やめた。

ふらふら踊るグラジオの姿は愉快だったし、キザったらしい彼の貴重な姿は写真にでもおさめてやりたいとさえ彼は思った。

それになにより自分を殴ろうとしてきた相手である。

あのまま殴られていたら、また歯に直撃していただろう。もしかしたら前歯がなくなっていたかもしれない。

見た目に一番影響を与える愛しい前歯が！

彼は再びグラジオへの苛立ちを感じていた。マグカルゴの体に沸き立つマグマのようにボコボコと煮えくり返っていた。

それと同時に彼は清々しきさをも感じていた。につくきグラジオの滑稽な様に存分に鬱憤が晴れたのだ。

彼は心の中で弟子を褒め称えた。脳内でくす玉を割りクラッカーを鳴らす。どこからかファンファーレが聞こえてくるような気もする。

まさしくオボロは爽快感という文字が人の形をしていた。

「いやあ、愉快愉快！ さあ、ボンボンくんなんか放つといて早く行こう。キミのお母さんのいる——エーテルパラダイスへ！」

男の高笑いが響き渡る。釣られて弟子も思い切り笑った。周りの仲間達の顔が引きつっているにもかかわらず。

あふれんばかりの笑みを浮かべる師弟はどこまでも悪役にしか見

えなかつた。

## 第十七話【がんばりーりエ】

海は闇に染まり、ザブザブと音を立てている。みな甲板に出て、広い海をじつと眺めていた。

二つにまとめた髪をたなびかせて薄笑いを浮かべる男。その肩にしがみつく子供。ぎゅっと服を握りしめる少女。舵を切るしたっば達。

そんな彼らをプルメリは黙って見つめていた。

船内でひとり休む気にはとてもじゃないがなれなかつたからだ。

彼女は長年付き合ってきた仲間に視線を絞った。

髪が口に入ったのか、うっとおしそうにする男。

弟子に髪をのけさせる。また顔にへばりつく。のけさせる。また髪がつく。

ほおを撫でるところではない潮風は時に起こりうるものである。

堂々めぐりのやりとりに苛立ったのか、彼はくるりと海に背を向けた。

彼が海を見ていたのはエーテルパラダイスを見るためでも外の景色が綺麗なためでもけっしてない。

美しい自分は海に映えるし、その方が様になるだろうという安直な理由からだつた。こんな時でもナルシスト魂は健在である。

男は自分を観察している彼女に気がついたようだった。一瞬目を丸くすると、にこやかに手を振る。

そんな彼から目をそらしながら、彼女は口を開いた。  
ずっと不思議に思っていたことを尋ねることに決めたのだ。

「オボロ」

「なんだい？ プルメリちゃん」

「グラジオが言ってた、アンタの戸籍がないってやつ。あれは本当なのかい？」

おそるおそる場に出された彼女の言葉。心配そうにする同僚に、そ

んな大したことじゃないのになあとオボロは唇を尖らせる。

「なんて説明すればいいのか分かんないけどさ」と前置き。それから少し考えこむと、

「うーん、それね。多分だけどね。ボンボンくんは嘘ついてないよ」

と軽い口調で彼は返した。

とはいえごまかしているわけではないらしい。説明に困っているだけのようにも見える。

もちろんただ面倒くさがっていただけというのが正解である。

仲間の心配より自分の都合。自己中界における不変の真理だ。

意味が分からないとでも言いたげなプルメリに「けどね！」とオボロ。

「ボクも嘘なんかついてない。ボクの名前はオボロ。カイナシテイ出身のスカル団幹部で元コーディネーターだ」

彼はにっこり笑って宣言する。

追求される前に仲間をてきとうに丸めこもう。そういう算段だ。

「誰がなんと言おうが、たとえこの地がボクを否定したとしても、ボクはボク！ 戸籍も本当はちゃんとあるし、ないなんてのが間違いなのさ」

大げさに胸を張るオボロ。

さすがは舌先三寸で生きている男。彼の言葉は相変わらず矛盾にあふれている。

けれども自信にまみれた彼の姿は嘘を言っているようには見えなかった。

ただし真実そのままを喋っているわけでもないというのも分かる。いかんせん彼はうさんくさすぎるのだ。

「とりあえず、グラジオの言葉が正しいってことは理解したよ」

「お師匠さまってトンチがすきよね。なにをいいたいのかはよく分からないけど」

「簡単にいうと、ここの政府はポンコツだねってことさ」

ため息をつく女性陣にオボロはやれやれと首を振った。

使い回されたありふれたポーズ。だが世の誠実な青少年と違うのは、彼がすると無性に腹がたつ動作だということだ。

現に温厚極まりないプルメリでも少しムカついたし、弟子のリジーも白い目で彼を見ている。

まるでオオカミ少年のごとく。日頃の行いがいかに大切かを学ぶ場面だ。

少なくとも彼はしたつば達のいい手本にはなっていた。反面教師として。

「アンタってホントにさあ」とプルメリ。

どこまでも揺らがらない男を半眼で見つめると「まあ、一理はあるか。スカル団に好き勝手させてるくらいだからねえ」と眉根を寄せた。ナルシストのナルシストさゆえに彼女はポツキリと折れたのだ。

追求を諦めたプルメリにこれ幸いとナルシスト。

面倒ごとのタネが減ったとにんまり。調子づいた彼の中では紙吹雪が舞い散り太陽が皆さんと昇っている。

「分かってもらえたかな？　じゃあせつかくだから、プルメリちゃんも一緒に！　『ボクの名前はオボロ。カイナシティ出身の』」

「遠慮しておくよ」

舌戦で本日二連勝を果たした彼はいい感じ。先ほどまでやな感じだったとは思えないほど上機嫌だ。

それこそ、歯を折ってくれたグズマのことも少しは許してやってもいいかなと思うくらいには。

時を同じくして、高笑いをするオボロとは対照的に深く底なしに落ちこむ少女がいた。リーリエだ。

小さな弟子に　「バトンタッチ」。

プルメリは仲間の相手を放棄すると、少女に声をかけることに決めた。

なにせ少女は母親そっくりの金色の髪を光らせて、母親そっくりの翡翠色の瞳を潤ませている。

少女の側には黒いケージ。したっぱ達に組み立てさせたものだ。そこから時折ぴゅいと笛のような音が聞こえてくる。

切なそうに、友達リーリエを慰めるように。

少女はもうすぐ友達コスモックを奪われる。

プルメリはそつと腰のボールを撫でた。中にいるのはゴルバット。彼女の相棒だ。

なつき進化こそしていないものの、彼女にとっては大切な二匹といかないパートナーだ。愛情を持って育ててきたポケモンだ。なくてはならない存在だ。

プルメリは自分の手持ちを心の底から愛していた。

だからこそ、彼女はこの歳若い少女が不憫で不憫でならなかった。

「アンタが緊張するのも無理はない。けど、今からそんなんじゃないよ。身がもたないよ」

そう言ってプルメリは少女の手を握った。

白くて冷たい小さな手。どこもかしこも自分とは違う。

「代表を——アンタのお母さんを説得するんだろ？」

プルメリは雪のような手を包みこんだ。

じわじわと熱が伝染していく。雪を溶かすように冷たさが解けていく。

少女の瞳には女の姿がじつと映し出されていた。その目はまるく、

そして澄んでいる。

こくり。

黙って頷いた少女に微笑むと、彼女はポケットから小瓶を二つ出した。

ひとつは焦げついていて不恰好な、もうひとつは白くて綺麗な立方体のものが入ったもの。例の師弟が作ったポロックだ。

「これでも食べな。なにか飲み物出してあげるからさ。エネココアとロズレイティーとグランブルマウンテン、どれがいい?」

「では、プルメリさんのお言葉に甘えて。ロズレイティーをお願いしますね」

「アンタ達にもついでに注いであげるよ。どうする?」

「あたしはエネココア!」

「ボクはグランブルマウンテンかな。プルメリちゃんとお揃いのね」

優雅なひととき。船上のティータイムが幕を開けた。

家庭力という文字が人の形をしているプルメリが淹れる飲み物は安物にもかかわらず美味しい。スカル団の常識だ。

舌鼓……ならぬのだ鼓を打ちながら、彼らはポロックを口に放りこんだ。

黒いポロックは大人衆が。白いポロックは子供達が食べる。

別にリジーが作ったポロックも不味いというわけではなかったが、美味いというわけでもなかったので幹部二人はポイポイ口に入れると噛み砕く。

それは少女への配慮——と見せかけて、ナルシストにとっては承認欲求を満たすための行動だった。

自作のポロックを食べさせて美味しいと褒めてもらう。それも芯の強い美少女に。

もうひとりのお気に入り  
プルメリの関心が少女に向けられている今、彼はターゲットを少女にロックオン。



あわよくば、少女に褒められることでプルメリからも賞賛を得ようと考えていた。彼はどこまでも欲に忠実だった。

「どう？ リーリエちゃん、美味しい？」

「はい。とても美味しいです！ これ、少しカクタイシテイで食べたミアレガレットと似た味がする気がします」

「そうだろうね。これはあのミアレガレットと同じ砂糖醤油味だから」

何度も言うが彼はリーリエをよく思っていた。プルメリがグランブルマウンテンだとすれば、その中に入れる砂糖くらいには気に入っていた。

プルメリは彼の中では特別枠だったので（なにせ自分との間に愛アローラがあると信じているくらいである）これは破格の扱いだった。

ただし、そんな待遇をナルシストにされて嬉しい者がいるのかは永遠のナゾである。

「自慢ってわけじゃないんだけどさ」とオボロは言った。そのほおは赤らんでいて、誇らしそうに鼻を鳴らしている。

言動の不一致。彼はどう見ても自慢げだった。

「それ、ボクが作ったんだよ！ 故郷の味に近づけたんだ」

「故郷の、ですか」

浮かぬ顔をするリーリエに「そうさ！」とオボロはにっこり笑った。

「ボクの故郷は海の外、アローラに負けじ劣らず暖かいハウエンさ！」

「それは何度もお聞きしたのですが……」

「もしかしたら、キミ達を知るハウエンと少しばかり違うのかもしれないね」

面倒なこの男には譲れないものがいくつもある。彼なりの美学もそうだし、彼の外見もそうだ。独特のファッションも。

その中でとりわけ彼が譲れないもの。それはメガ進化があるハウエンとも、ないハウエンとも違う彼の故郷。

リーリエはオボロをまじまじと見つめた。

戸籍がない男。けれども確かにハウエンから来たはずの男。

ぴゅい、と側のケージが揺れた。黒いそれは青い光を放っている。椅子の下を静かに照らしている。

闇夜に浮かぶ青は幻想的だった。それも天地がひっくり返っても、いないはずのポケモンや人間が現れても、おかしくないと思うくらいには。

「まさか、オボロさん。あなたは」

違う空間から来たのですか。

リーリエはそう続けようとしたが叶わなかった。慌てたナルシストが少女の口にポロックを小瓶ごと突っ込んだからだ。

スカル団からは非難轟々。

いたいけな女の子になにするんですかとしたっば達もがブーイング。

それでも周りの目を気にしないのがオボロがオボロ足る所以だ。

「そんなことはどうでもいい。キミはルザミーネ女史とのこと集中するといいよ」とほんの小さな声で言うと、少女の口から小瓶を出した。いつもの青いハンカチで拭きながら「今の話、あいつらにはナイショにしてね」と耳打ちひとつ。

兄貴分への野次が宙を舞う。飛び交うそれにオボロは肩をすくめると、人差し指をそつと口に当てた。

しい。静かに。

と黙って口を動かす彼は面白そうに笑っている。

「ほら。みんな見てらん？　そうこうしてるうちに目的地まで到

着だ！」

見上げるとチカチカと人工的な光が夜を照らしている。

ぼんやり浮かび上がる島はアローラに不釣り合いなほど白くて白くて真っ白で、奇妙で不気味なものだった。

### 第十七話【がんばりーリエ】

エーテル財団でもスカル団でも一部の者しか知らない秘密の入り口。そこに船をそつと着けるルーチンワーク。

見張りの目に留まらないようゆっくり旋回。モーターの音を立てないようにしたつば達が動かすのだ。

口元につけたバンダナをはためかせて、必死に舵をきる。

オボロはぴよんと船から飛び降りた。それも先陣をきつて。後始末という名の雑務をこなしたくはなかったからだ。

彼の視線の先にはひとり、ぽつんと人が立っている。

黒髪で大人しそうな、そんな外見にふさわしくないほど主張が激しい胸を持った女性。エーテル財団幹部のビツケだ。彼らを出迎えようと寂しい白い空間でひとり、待っていたらしい。

プルメリや弟子が働く中、彼は右手を軽く上げると「やあ！　いつも悪いね」と声をかけた。

だがその顔は悪いことをしたとは全く考えていないように見える。彼はどこまでも誠意というものから縁遠い人間だった。

「代表はいるかな？　約束どおりコスモツグを連れてきたって伝えておいてよ。ボク達スカル団がさあ！」

船から降り白の地を続々と踏みあらすスカル団。

ヨワシの群れのような彼らだが見栄えだけはする。

おそろいのタンクトップを身に纏った、一見屈強そうに見える男達。

実際は箱入り育ちの十四歳に負けるほど喧嘩にめっぼう弱かったが、そうは知らないビツケが冷や汗をかくのも無理はない。なにせ全身まっ黒の大群だ。

黒。黒。黒。黒。黒。黒。白。黒。黒。

「あとう、そこにいらっしやるのは」

「アタイ達の連れだ。文句あるかい？」

リーリエを見て驚くビツケ。彼女の言葉をプルメリは素っ気なく切り捨てた。

ビツケは少女になにか言おうとした。けれど少女は彼女に微笑みかけている。なにも言えなかった。

どうやらこの悪党達は少女を無理やり連れきたというわけではないらしい。

なら、きつとそれで十分なはずだ。少女の意思に任せよう。だってエーテル財団どうのではなく、これは親子の問題なのだから。

そう自分に言い聞かせると、ビツケはオボロの方を見た。目の前にいる軽薄そうな男はいつもの薄笑いを浮かべている。

「……分かりました。どうぞ一階へとおあがりください」

エレベーターに乗り込む一同。大人数では案外狭く、寿司詰めパックよりすし詰めだ。

無機質な三角形はこれまた無機質な音を立て、上へ上へと昇っていく。

取引先の建物。それも、お偉いさんに会いに行く真っ最中。

そんなときに遠足気分で騒ぐ大人は世界広しといえどもそういない。

とはいえ何事も例外はある。もちろんバカの集まりことスカル団の面々だ。

「二階かあ！　ボクは一度も行ったことないや」

「アタイもないね。あそこに行くのはグズマに任せきりだったから」

少しばかりウキウキする大人達に「一階の外にはわたし達のお家があるのです」とリーリエ。

それを聞いて「ああ、そういうことか。なるほどね」とポンっとオボロは手を打った。

なぜわざわざ一階に連れて行かれるのか、ようやく合点がいったらしい。

「アンタ、もしかしてそんなことも知らなかったのかい？」

「もちろん！　だってルザミーネ女史に興味なかったし」

「彼女に興味あるのはグズマくんくらいだよ」とオボロ。

アローラ屈指の変人奇人として名を馳せているオボロだが、『女子の好みは同年代。胸があればなお良し』とわりかし一般的なものだった。

たとえどんなナルシストといえども、二十代の男性としてはこんなものなのかもしれない。

「けどあたし、代表さんのおうち見てみたいわ。あんなにきらびやかな人だもの。きつとごうかなシャンデリアがあるのよ！」

「シャンデリアだけで済めばいいけどね。白いエンテイとか、白いカエンジシのデカイ像とかがババーンと飾られてるんじゃないかな」

「そんなホテルじゃないんだからさ。だって三人か四人かの家族だろ？　一軒家だとしても豪華すぎやしないかい」

チン。

雑談している間に一階へ到着。人払いを済ませたのか、誰ひとりいない。職員もだ。

道が分かるリーリエを先頭に。大人達は後ろでゾロゾロと。エントランスをまつすぐ突き進むと現れたのは外への道だ。

意気揚々と進み出た彼らは次の瞬間、ぼかんと口を大きく開けた。彼らの瞳に映ったものがキャパをいとも簡単に超えてきたからだ。

それは白い白いエーテルパラダイスよりもっと白くて、アローラに建てられた家よりもっと大きな『家』だった。

二階にはバルコニーがあり、物語にでも出てきそうな幻想的な雰囲気さえ匂わせている。

とてもじゃないが小家族が住むような家では決してない。マンションと言われたら納得できる。そういうレベルだ。

いや、そもそも代表一家を普通のアローラ人と一緒にするのが間違いなのかもしれないとプルメリは思った。

彼らはエーテル財団の代表だし、並行してスカル団のスポンサーもやれるくらいの金持ちだ。

オマケに彼らは多分カロスの人間。自分達と文化が違うのは当然だろう。きつと。

プルメリが平静を取り戻しつつある時、横にいたリジーは相変わらず口をあぐり開けていた。初めて見る大豪邸の衝撃が抜けないらしい。

対して師匠。普段通りの顔には戻っていたが、先ほどから冷や汗をかきっぱなしだ。

涼しい顔をしていても残念ながらごまかしが効かない。裸族の大きなデメリットである。

「あたしの予想より、ずっと大きくてあごが外れそうだな」

「ボクらが住んでるいかがわしき屋敷より広そうだね。ここって何人住んでるのかな」

「おそらく今は母さまだけです」

「さ、さびしいわね」

たわいもない話をしながら歩くと、そこはもう代表一家の玄関だ。職場から徒歩一分。なかなかいいところにお住まいである。

「アタイ達はこの先入れない。アンタひとりで入るんだよ」

プルメリは歩みを止めると金髪の少女の肩を叩いた。

といつてもワルなヤングによる恫喝の類ではない。少女の肩を持つといった方が正しいかもしれない。

「屋敷の中に入れるのは我らがボスの特権だからね」

ようするに、そっけなく見える姐御なりのはげました。

「ボクも応援してるよ。なにか困ったら屋敷の外に出てくるといい。グズマくんの手前、おおっぴらには手を貸せないけどさ。足しにはなるんじゃないかな」

「頑張りな。代表もきつと分かってくれるって、信じてるよ」

リーリエはケージを片手に駆け出すと、扉のほんの数センチ前でストップ。それからくるりと振り向くとギユツと拳を握りしめた。

花のように笑う姿。それこそが彼らに対する少女の答えだった。

ゼンリヨクで挑むと、感謝していると。

この時リーリエはZ技のポーズをしなかった。それはZ技を憎む彼らへの最大限の敬意の表れだった。

建物の中へ消えていく少女を見守るスカル団。彼らはみな、がんばりリーリエな少女の姿に胸を打たれていた。

弟子は自前のハンカチで鼻をかんでいるし、したっぱ達のバンダナはすっかりシミができている。

スカしたギャングも元はただの悪ガキ。しよせん親とケンカしてグレた者が多いハイティーンの集まりだ。

自分と違って親と向き合おうとする少女に思うところがあつたの

だろう。敵役のはずなのに感情移入しまくりである。

しみみりーリエな雰囲気の中で、少し離れたところからチンとエレベーターの音。

建物の中の音が聞こえるくらい静かな場所、それでこそエーテルパラダイスである。

コツコツと響く靴音。誰かがこちらへ近づいてくる。おそらく、ひとりで。

エーテル財団の一般職員だったらマズイとしたっば達は慌てたが、建物から出てきたシルエツトはとも見覚えのあるものだった。

大柄で猫背。清潔感とは程遠いがに股。柔らかそうな髪。ダボダボのズボンを着こなすあの姿。

「あれ、もしかしてグズマじゃないかい？」

「確かにグズマくんに見えるような見えないような」

「ふうん。グズマさん、ここに来るの早いわね」

「てことは、もしかしてミツキに負けちゃったのかな。グズマくん」

「あのバカが早々負けるかい？ それに前勝ったって話じゃないかい？」

「ううん。勝ったって言っても、試合に勝って勝負に負けたって感じだったし」

「けどグズマさん笑ってるわよ。ニヤニヤしてるわ」

「あ、ホントだ。じゃあ勝ったのかな」

「きつとありや、嬉しくて嬉しくてたまらないのさ」

「なるほど！ さすがは脳筋。グズマくんってなんて分かりやすいんだろ！」

「全くグズマってばホント、バカ！ だよねえ」

盛り上がる幹部達。悪口もどきを言いつつも、我らがボスの勝利は自分のことのように嬉しいらしい。内容に反して顔はすっかり緩んでいる。

周りのしたっば達もそうだ。ガッツポーズをしたり「さすが俺達の



グズマさんだぜ！」と褒め称えたりと様々だが、すっかり浮かれきっている。

「やあグズマくん！ ご機嫌麗しゆう」

真つ先に声をかけたのはナルシスト。殴られた恨みもすっかり忘れ、グズマに景気良く声をかけた。

彼の周りもにこにここと心から嬉しそうに笑っている。

「無事に勝てたようでボクらは嬉しいよ。グズマくんの勝利に祝して、ボクの顔を殴ったのもチャラにしてあげる！」

「アタイもあのコと戦ったけど、生半可じゃ勝てる相手じゃない。アンタはよくやったよ」

「さすがはわれらがスカル団ボス、グズマさんだわ！」

幹部も弟子もしたっぱもボスの勇姿を褒める。讃える。奉る。

なんと優しい世界。もし世界中の人間がスカル団員だったら、きつと島巡りに挫折した後グレる子供はいなくなるに違いない。

……だというのに、当の本人はいつもの薄い笑みを浮かべるだけだ。というよりうわの空と言った方が正しいかもしれない。

彼らの言葉が脳みそにたどり着かず、耳から耳へと通り抜けている。そんな風にも見えた。

「どうしたのさ、グズマくん。ほらキミの言葉をみんな聞きたがって」

「グズマア!! なにやってるんだああ!! 自慢のポケモン達に、もつと破壊させてやれよおお!!」

いきなりグズマの絶叫が闇夜に響き渡る。一瞬でみな笑顔が凍りついた。

察しの悪いバカばかりのスカル団でも、ここまであからさまにさ

れるとさすがに察せるといふものだ。  
やらかした。

この時、全員の思いはひとつだった。  
半笑いを浮かべる一同。冷や汗をだらだらかきながら、お互いチラチライアイコンタクト。

誰だよ最初に勝ったんじゃない？ とか言ったやつ。誰かグズマさんのフォローしろよ。というかこの空気なんとかしろ。

高度の情報戦が繰り広げられる中、グズマはヒステリーを抑え込んだようだった。元の薄笑いに戻ると、部下の彼らをじつと見る。ただし、瞳は全く笑っていない。

こんな時生贄に選ばれるのはお調子者と決まっている。さらに言えば、中間管理職とも決まっている。

つまりは一択だった。最大限に目を泳がせながら、オボロとブルメリが進みでる。

「あー、グズマくん。そういう時もあるよ。けど作戦は成功したからさ」

「コスモッグは代表に届けたよ。まあ、お姫様も付いてるけどね」

「んーっと、えっとね。ほら、今日は空が綺麗だよ。満天の星空だ！ 嫌な気分も吸いこみそうなくらい美しいよ。見なきゃ損だって！」

幹部による雑すぎるフォロー。したっぱ達は笑みを貼りつかせたまま息を飲んだ。

今度こそグズマの地雷の中心を踏んだと思ったからだ。きっと、ボスの大爆発が来る。

けれども彼らの予想は外れた。

グズマは冷静に——少なくとも表向きは極めて冷静に——「お前ら屋敷に戻れ」と二人に向かって吐き捨てた。

「ここはオレ様を守るからよ。だからお前らはいらねえよ。したつぱ達だけ残してとつとと帰れや」

「え、けどさ。一応アタイ達もいた方がいいんじゃないかい？」

「何度も言わすな。帰れ」

取りつく島もない。

破壊の化身というわりに石より頑固な彼の言葉を曲げるのは極めて困難だ。これもスカル団での常識だった。

半ば追い出されるようにして裏口へととんぼ返り。三人仲良く強制送還だ。

またまたこんには地下一階。

エレベーターから降りた後、オボロは周りを見渡した。

職員なし。壁・天井共に防音素材OK。監視カメラなし。いるのは幹部と見習いのみ。

身の安全を確保するとオボロは「ああもう！」と思い切り叫んだ。「毎度毎度、グズマくんの気まぐれには困っちゃうよね！」と大声で続ける。

さすがにボスの悪口を本人にバレてまでする気はなかったらしい。けれども言いたくて言いたくてたまらなかつたようで、堰が切れたように愚痴があふれ出す。

「あれ、ゼーっただいただの八つ当たりだよ。それでミヅキに三度目のリベンジをしたいんだよどうせ。『二度あることはサンドパン』って知らないのかな」

『チャンスは二度キング』とも言うからねえ」

プルメリは船へと乗り込んだ。弟子も船へと飛び乗った。

師匠の彼もその後が続——こうとしてピタリと足を止める。そして自分のポケットを二回叩いて、わざとらしく両目を丸くした。

「あ、プルメリちゃん。悪いけど先に帰っててくれないかい？」

「忘れ物かなにかかい？」

「ああ。どこかで落とし物をしたみたいでさ。船に乗ってた時は持ってたから、多分ここで落とし物したと思うんだよね。ちよっと探してくるよ」

「すぐアジトに戻るから心配しないでね」とオボロ。

グズマにバレたら面倒くさくなるからやめた方がいい。そうプルメリは思ったが、この男もこの男で一度決めたら頑として譲らないことを彼女は十分知っていた。

結局彼はグズマと似た者同士なのだ。

「それじゃあ夜も遅いし、先に戻ってアタイは休んでるよ。本当に船を出発させて大丈夫なのかい」

「もちろん！ アズマオウに乗って帰るからね。リジーも手伝ってくれないかい？」

「言われなくてもそのつもりだったわ。お師匠さま、さっさと見つけてとつとと帰りましょう！」

弟子が降りた後、船はつつがなく出発した。モーターは激しく震え、ざぶざぶと波をかき分けていく。

師弟二人は船に向かって手を振っている。思わずプルメリも笑って手を振った。

どうせ何時間か後には会うのにねと思いつつ、少し大げさに振るのが楽しいと彼女は思った。

その時、彼女の頭の片隅にちらりとよぎったことがあった。

金髪の少女。島から離れる今となつては、約束どおり少女を助けることはできないだろう。

プルメリは横に広がる景色を見た。神聖なる地、ヴェラ火山が煙を上げて紅く煌々と光っている。

願わくば、少女に幸運が訪れますように。少女の母親と和解できますように。

彼女はアローラを見守る母なる大地に祈った。アローラの民ではないリーリエに加護が届くかは謎だったが、彼女は祈った。カブ神に認められずカブ神を憎んだ者もすがる相手は皮肉なことに神だった。

ナルシストの弟子は延々と手を振り続けている。

船が小さく小さく、それも豆粒ほどになるまで少女は振り続けた。ようやく手を下ろすと、くるりと師匠の方を向く。

ただし船へと向けていた笑顔はどこにもない。徹頭徹尾あきれ顔だ。

「で、お師匠さま。落とし物なんてしてなかったじゃない。ホントはなんのためにのこったの？」

「ふふふ、さすがは我が弟子！ 話が早いね」

ニヤニヤと笑うオボロ。その笑顔はしてやったりと言いたげだ。ただ彼は「でも、ものを探すことには変わりないよ。前に言っただろ？ リジーにプレゼントをしたいんだ。とっておきのね！」と続けた。もちろんリジーはなんのことか分からない。心当たりがなさすぎるのだ。

頭にハテナを浮かべる弟子を見て「ボクの素晴らしい考えが分からないのかもしれないね」とオボロは頷いた。

こらえきれない笑いを漏らしながら、ばちんとウイंक。

タイムアップ！ 答えあわせの時間がやってきた。

「注意が屋敷に向いている今のうち！ タイプ：ヌルをゲットするのさー！」

## 第十八話【ヤドン】

白くて無機質で、静かなエーテルパラダイス。

外界から閉ざされた中、聴こえてくるのはエレベーターが動く音だけだ。

その中には例の師弟がいた。けれどもいつもと雰囲気が違う。

ドロバンコにも衣装とはよく言ったもの。姿形が変われば同一人物かと思うほど変貌を遂げるのは、全人類みんなが知っていることだろう。

たとえばの話。

どんな男でもファッションセンスと一流のメイク技術があれば、絶世の美女とまではいなくてもそれなりの女性にはなるものだ。

かくいうナルシストも知り合いにしてやられたことがあった。かつて女装した青い髪のリケット団を口説いたことは彼の中で完全に黒歴史と化している。

チン。

扉が開くと飛び出したのは凸凹コンビ。いつものカバンを持つ彼らは喜色満面、得意げだ。

ただエレベーターから出てきた二人は普段と致命的に違うところがあった。

もしブルメリが今の彼らを見たら、オボロに熱があるのか確認するだろう。グズマだったら大好きなエネココアをこぼすに違いない。

彼の上半身はかっちり白いフォーマルな服に身を包んでいた。白の帽子までかぶっている。全身真っ白だ。

「いやあ、順調順調！ もう最深部にまで入れるなんてね。案外ここがザル警備で助かったよ」

「けどべんりよね。カードをかぎすだけで、どこの部屋でもいけるんだもの」

「無駄に集めちゃったよ。もし食玩だったら、そろそろシークレッツ

トがでてきそうだ」

弟子がパラパラと固そうなカードを数えている。その量は片手では足りないほど。

さすがハイテクなエーテルパラダイス。最新技術のICカードをバッチリ導入しているらしい。

師匠の方はといえば、白い手袋越しに細長いなにかを握っている。透明なそれは冷たいのか、オボロは時折手に息を吹きかけていた。

もちろん手袋に息をかけても無意味。プラセボ効果しかないだろう。

それでも彼は吹きかけた。よっほど凍えているのだろうか、いくらやっても焼け石に水。

口から風がもれるたびに、手のひらから雫がポタリと地面に垂れていた。

どうやら細長い塊は氷のようだ。

表面には水以外のなにかが付いている……が、精神衛生上あまり考えない方がいいだろう。

オボロは鼻歌を歌いながら足を踏み出した。弟子もその後が続く。二人は静寂の世界を練り歩く。

カツン、カツンとヒールの音がリズムよく響いた。陽気で小気味好く。それはそれは、ルンパツパの踊りに合わせて鳴らされる太鼓のよう。

彼はタイプ : ヌルがエーテルパラダイスにいると確信していた。といつても、もちろんグラジオのヌルではない。彼が探していたのは別個体の『タイプ : ヌル』である。

エーテル財団の叡智を結集させて創り上げた人工ポケモンのタイプ : ヌル。

金も時間も労力もかけて、せっかく創ったそれを持ち出されておいて、今の今まで放置？

スカル団の庇護下。もとい事実上の監視下であったとしてもあまりにお粗末な対応だ。

普通ならばなにがあっても連れ戻すだろう。貴重なデータなのだから。

それがたとえ失敗作であったとしても同じこと。けれどもルザミーネはそうしなかった。なぜだろう。

——決まってる。連れ去られたヌルとは別にもう一匹、代替品スベアがいるからだ！

廊下の突き当たりまでくるとオボロは髪を結び直した。普段二つにまとめている髪は、今はひとつに結わえられている。

鼻歌を歌って指で回す。

白がくるくると回り、星のようにちらちら瞬く。その様に目を細めると、彼は帽子を再びかぶり直した。

オボロの心は弾んでいる。彼はこの状況を心の底から楽しんでいった。

「えーっと。ここは……シークレットラボBね。いかにも怪しそうじゃあないか！」

「お師匠さま、なんで手前の部屋からしらべないの？」

「いちいちうるさいなあ。ボクはね、なんでも角から調べる派なの！ 掃除でもなんでも一緒だよ」

弟子をたしなめてから扉に手をかけると、ピシヤリ。

勢いよく開けると部屋の中にいた二人組が振り向いた。もちろんエーテル財団の職員だ。

夜遅くまで仕事熱心な彼らは社会人の、いや社畜の鑑である。

一瞬、部屋に緊張が走った。が、彼らが師弟二人の姿を見た途端にふっと空気が緩む。

白の擬態はこうかばつぐん。おそるべし制服パワー。そういうことだった。



「やあ！ えーつと、キミ達はなにをしてるんですか？」

「見ない顔だけど、新入り？ 随分小さいのねえ。ここには特別な職員しか入っちゃダメなんだから」

ぱたんとファイルを閉じながら女は言った。

小さな子供を連れた男に「あなたの子供？」と尋ねる職員。少女を見つめる彼女の瞳はきらきら輝いている。

生粋の子供好きなのか、母性愛に溢れているのだろうか、はたまたどちらかか。

とりあえずこの職員に全くもって悪気がないことは誰でも分かる。けれども自己愛溢れるアラサー野郎にそんなことは関係なかった。

「いやいや。この子はボクの妹なんですよ。妹！」と笑うこの男。陽気な声に反し、彼の額には青筋がばっちり。

自分のことをまだまだ男盛りで若々しいイケメン……と思っていたるにもかかわらず、なぜか子持ちに見られること。

彼にとって絶賛お悩み中の事案である。

「なあに和んでるんだよ。工作中だったの」

蚊帳の外にいたもうひとり。アローラきつての高給取りはあきれたようにため息をついた。

生粋のエリートマンはなにからなにまで几帳面なようで「子供の相手やめて、とつとと仕事に戻れよな！」と仕事仲間にお怒りだ。

矛先はもちろんオボロにも。苛立ちを隠しもせずに睨みつけるは財団の職員様々だ。

「こいつが言ったとおり、したっぱはここに入っちゃいけないんだ。お前らの業務時間は終わったろ？ 早く家に帰れよ」

したっぱねえ、とオボロは呟いた。

グズマも上司というより親友の要素が強かったし、そもそもスカル

団は馴れ合い・オブ・馴れ合い。ヤンキー集団の上下関係はキツイよ  
うで案外緩い。それに彼は一応幹部でもある。

オボロはますます愉快的気分になった。

泣く子も泣かすスカル団である彼がこうも上から目線で見下され  
ることはあまりなかったからだ。

「いえ、なあに。今日ボクどこかでものを落としたみたいでしてね。  
もしかしたらここにあるんじゃないかと思ひまして」

「こんなところにあるわきゃねーだろ。天然くんかよ」

「そうですね、ボクの勘違いだったみたいです。お二人ともお忙し  
い中、失礼致しました！」

左手を後ろに隠したまま敬礼をするオボロの姿。彼の爽やかな笑  
みは二人を騙すには十分だ。

職員達には『一生懸命なのだけどちよっぴりドジで間抜けな後輩』  
としか映っていない。それが子連れならなおのこと。

「おうよ。出世するまでここに来るんじゃないやねえぞー」

「見つかるといいわね」

職員はひらひらと手を振った。その顔は見るからにほころんでい  
る。

ドアが閉まったのを確認すると、彼らは再び柵と向かい合った。  
ファイル整理との再戦だ。

「まあいい息抜きにはなったよ」と男。横で女が「可愛い二人組だっ  
たわね」と言う。

和やかな雰囲気の流れられるまま女に同意——しようとして、ピタリ  
と男は動きをやめた。ふと彼の頭によぎるものがあつたからだ。

アローラでは見かけない赤い髪をした男。エーテル財団と同じ、外  
の者だと分かる肌の色。青の瞳。

彼はファイルを無造作に置くと、子連れの二人が消えた扉の方を即

座に振り向こうとした。しかしそれは叶わなかった。

どすん。ばこん。

彼の視界に映しだされたのは倒れる仲間。それと満面の笑みでなにかを振り下ろす男だけだったからだ。

その直後、彼は目の前が真つ暗になった。

彼の身になにが起きたのか。

それは改めて言うまでもない。ヤドンにだって分かることだ。

## 第十八話【ヤドン】

「ふう。力加減も手馴れたもんだよ」

オボロは青いハンカチで汗をぬぐった。

それから床をちらりと見る。先ほどまで話していた男女は戦闘不能。目もグルグル回り、すっかりのびているのが分かる。

そんな彼らの胸元をこそこそ漁るのは彼の弟子。

ポケットから出したのは白くて硬いICカード。「ねえ、お師匠さま。この人達の分ももらっておくわね」とちやつかりしまいこんでいる。

使えるものはあるだけあった方がいい。リジীর貧乏性は今日も健在だ。

オボロは氷でできた棍棒を壁に立てかけた。それからすっかり濡れた手袋を外すと、指を鳴らしてほくそ笑む。

「さあ、この部屋を調べようか！」

「そうこなくっちゃ！」

作戦開始。即行動。

ファイルや紙束をひっくり返し、棚を漁り、職員のブログまで盗み

見る。エーテル財団にとつては大変不幸なことに、凸凹師弟の快進撃が止まる気配は未だになかった。

「お師匠さまこれは？ 『モーンはかせが発見したウルトラスペースにはウルトラビーストがいる』ですつて。コスモッグの写真も挟まってるわ」

「そういえばここ、ルザミーネ女史に呼び出されたところじゃないか！ スツカリ忘れてたよ。コスモッグ専用のラボだったのかな」

「こんなにせまいところでジツケンなんてできるのかしら」

「まあ、あんなに小さなポケモンだからね。だからできたんだと思うよ、実験」

「ふうん。コスモッグもかわいそうね。ここじゃいきがつまりそうだもの」

「逆にあえてそうしてるのかもよ、リジー」

「つまりどういふことかしら」

「ここに載ってるのさ。『コスモッグはストレスを与えるとウルトラホールを形成する。だからストレスを与えて維持する装置を開発中』ってね！ まるで夢みたいだ」

そう、彼にとつては夢物語にすぎなかった。

ため息をつくとき、オボロは椅子に思いきり寄りかかる。ギイと背もたれを軋ませて、手を上にあげ伸びをした。

パソコンの画面が虚しく光り続けている。そこに彼の興味はもう、すでにない。

「どうでもいい話ばかりだなあ。タイプ : ヌルの情報はゼロだ。しかもどれもまゆつば物の情報だしさあ！」

「まゆつば物って？」

「真実味にかけるってこと！ まったく、ゴシップじゃないんだからさ。勘弁してほしいよね」

「ああイヤだね、本当エーテルの連中はボクのことをバカにしてるよ」とボヤきながらオボロは目薬を点していた。

ほんの少しのブルーライトにも過剰反応。裸眼であるにもかかわらず、ポーチには目薬が常備されていた。

スカル団員にとって——ナルシストにとってはとりわけ——身体は大事な大事な資本だからだ。

「ううんと、なんでお師匠さまはウソだと思うのかしら」

「そりやもちろん、この世界とウルトラスペースを繋げるメリットがエーテル財団にはないからだよ。むしろデメリットしかない」

そんなことも分からないのかとあきれれる師匠。その言葉に弟子はただ目をぱちくりさせている。

部屋に眠るエーテル財団の極秘情報。

これを嘘だと疑うなんて、そんな発想自体少女にまるでなかったからだ。

いや、少し語弊があるかもしれない。正しくは少女は真実そのものだということを知っていたからとでも言うべきだろうか。

驚く弟子にオボロは続ける。間違いだらけの答えあわせの始まりだ。

「だってウルトラビーストは凶暴だし、アローラの生態系も乱れるだろ？ そんなことエーテル財団がするわけないよ。裏ではボクらと手を組んでるけどさ。それも全部、野生ポケモンの保護本来の目的のためにやってることだからね。ルザミーネ女史はいけ好かないけど、あの熱意だけは本物だよ」

「あの人四十超えてるのにさ。よくやるよね！」とオボロ。グズマが側にいないからと言いたい放題である。

冗談半分、いや冗談二割であれこれ言った後「本当なのはモーン博士のことくらいじゃないかい？ まったく。他のは侵入者用のニセ

情報かな」と彼は吐き捨てた。

アローラの中でエーテル財団に不信感を持つものなどいない。よそ者とはいえ、彼らは街を護り、ポケモンを護り、人を護っているからだ。スカル団とは違って！

それはアローラのぬるま湯にすっかり浸かりきったスカル団幹部であつても例外ではない。

彼らを訝しむものは彼らと同じ、よそから来たものだけである。

たとえばたった今部屋に入ってきた、小さな未来のチャンピオンのように。

「ここにも人がいるよー。またバトルかなー」

「そろそろ疲れてきたけど、そんなこと言つてらんないよね！ さあ、かかつて来なさい！」

力む二人はボールを取り出しやる気満々。敵地に乗りこむハウとミヅキはさながらヒーローだ。

ただ彼らを見つめる師弟二人はあまり敵らしくはない。「あれ、ミヅキじゃないか」と軽く手を振るだけ。戦おうとするそぶりを微塵も見せず、のんきにハンドクリームを塗っている。

「えっとー。ミヅキ、知り合いなのー？」

「ううん全然。ハウは？」

「おれも心当たりがないからさー。聞いてるんだよー」

「なにを言つてるのかしら。二人共ばつちりあたし達の知りあいよー！」

「やれやれ。まあボクの変装スキルって、普通の人は考えもできないほど素晴らしいからさ！ 素人が見破れないのも仕方がないんだけどね」

この場合、彼が指す玄人はドジで間抜けな二人と一匹のことである。

オボロは白い服を掴むと早着替え!

少年少女の視界が白で埋め尽くされたかと思うと、次の瞬間。目の前に立っていたのは黒の二人組。

いつもの上裸にリボンがついたいつものズボン。それと、黒のタンクトップもといワンピースのご存知スカル団員だ。

「これでボクらが誰か分かったかい? やあ二人とも、アローラ! ハウくんはさつきぶりだね」

「えー! エーテル財団かと思ったら、オボロさん達だったー!」  
「変装してたんだよ。変装。ボクがここにいるって、グズマくんやルザミーネ女史にバレたらマズイからね。キミ達もヒミツにしてくれないかい?」

オボロは人差し指に口を当てて茶化して言った。それから「スカル団にも色々あるのさ」とウインク。

どう考えても色々あるのは彼らだけだったが、おそろくつつこんではいけないところなのだろう。

ハウなんかは無邪気なもので「なるほどー」と素直に頷いている。ああ純真。さすがは純粋という言葉が人の形をしている少年だ。

そんな彼を見て、将来悪人のカモにされないか心配だなとオボロは思った。また、ここにいたのが優しさの塊のような自分で運がいいとも。

相変わらず自分のことは全て棚に上げている。付け加えると、彼は自分以外には別に優しくもなかった。

「それはそうとオボロさん。リーリエはどこにいるんですか?」

「リーリエちゃん? 彼女なら外にいるよ」

「えー! 地下じゃないのー!」

「ルザミーネ女史の家で話し合ってる。親子感動の再会! ……とはいかなさそうだけどね」

オボロは苦笑いを浮かべながらブラウザを閉じた。

けれども世の中全員、夫婦円満・家庭安泰というわけではないことを彼は重々承知していた。意外とリアリストというのもそうだが、生まれ故郷のカイナシティではほとんどの子供が母子家庭だったからだ。

それは彼も例外ではなかったし、ニホン国ではそう珍しいことでもなかった。むしろアローラに来て父親の存在の多さに驚いたほどである。

幸せそうな父親に連れられる子供を見るたびに羨ましいとさえ彼は思った。

その後父親に声をかける。バトルでボコボコに負かす。それから金をせびり、小さな子供に「パパってカッコ悪い……」と言われるのを見て鬱憤を晴らす。

ここまでがワンセット。オボロの日課である。

最近賞金額をやたら釣り上げて大人達のへそくりを奪い取る作戦に出ていた。やはりこの男、どこも優しくはない。

「二階のエントランスを抜けたらすぐだ。早く行ってあげるといい」

「敵なのにさー。そんなこと言っちゃっていいのー？」

「そんなの知ったことじゃないよ！ だいたい、ボクは帰れって言われた身だし。アジトにいるはずの人間がキミ達を止めなかったところでなんの問題もない。そうだろ？」

「だいぶグズマさんにおこってるわね、お師匠さま。チャラにするって言ってなかったかしら」

「さつきはさつき、今は今！ 状況が違うじゃないか。グズマくん、ミヅキに負けちゃったしさ。『勝ったらチャラ』って話だからね」

オボロは例の人をイラつかせるポーズをとると、ミヅキの方へと目を向けた。頭の中ではもう、グズマは綺麗さっぱり消えている。

腹がたつ話題は即シュレッダー。気の向くままにどこまでも。



真似できる人は限りなく少ないと思われる彼のストレス解消法だ。

「ああ、そうそうミツキ。正真正銘の勝利おめでとう。うちのボスに勝つなんてやるじゃないか！」

「オボロさん、ありがとう！　グズマの奴、だいぶ手強くて。結構ドロ沼になっちゃいました」

「そりゃあ、まがいなりにも彼はスカル団のボスだからね」

「是非またオボロさんともポケモンバトルさせてください。今度こそゼンリヨクで！」

「ゼンリヨクで遠慮させてもらうよ。そんなことより！」

オボロはひととき大きな声を張り上げると、ミツキに向かってウインクをした。どうやらこの話題も水に流す気満々らしい。

「ここにはコスモッグの情報が集められてるみたいなんだよね」とにっこり笑う。

少年少女の興味が移つたのを確認すると、ホッとひと息。それから彼は満面の笑みでこう言った。

「キミ達の役には立つかもね。まあ、ガセまがいのしかないみたいだけど！」

「そんなはずはない」

軽く音を立てて再び白いドアが開いた。

向こうに広がるのは部屋と同じく一面真っ白な銀世界。

ただ扉の向こうにいるのは黒、黒、黒。全身黒づくめの少年だ。

「ああボンボンくん。結局ここに来たんだね」

「二人の帰りが遅いと思ったから見に来たんだがな。まさかオマエがいるとは思いませんでした」

「まあ安心してよ。今はボク、キミ達と戦う気はないからさ」

胡散くさそうな目で見るグラジオ。本当だつてば、と呟くと、オボロは弟子の頭をぼんぼんと軽く叩く。

「前言ったとおり、タイプ　：　ヌルをぬす……弟子にあげたくてね。リジーがゲットした方が、きつとここにいるより幸せなはずさ！」

側から見ると、自分の弟子をよつぽど可愛がっているように見える。

少なくともグラジオにはそう見えた。自分達親子よりよつぽど通じ合っているそうだと。

それと同時に目に留まったのは男の腰にあるボールの数々。

同じスカル団とはいえあまり絡みがなかったこの男。

変人奇人でろくな人間じゃないのは明らかなのに、下手なトレーナーよりある手持ち愛。そしてポケモンからあふれるトレーナー愛。それを彼はよく知っていた。仕事のたびにいちやつかれては嫌でも目につくというものだ。

グラジオは思いきり笑った。久しぶりに――エーテルパラダイスを出てから初めてお腹が痛くなるほど笑った。

あまりにバカバカしくて、信じられなかったからだ。

彼は気づいたのだ。

自分はこの男のことをずっと羨ましく思っていたことに。

腹筋がつるほど笑った後、またもやグラジオはポーカーフェイスを貫こうとした。

だが無駄な試みだった。唇の端がどうしても上向きにあがってしまふのだ。

「フツ。確かにそうかもしれない。エーテル財団の人間よりも、オマエらにくれてやる方がはるかにマシだ」

「言ったね？ やったよりジーン。御曹司からの許可が下りたよ！」

相手にいきなり爆笑されて不機嫌だったことも当たり前のように  
「ドわすれ」。オボロは手を取り合うと弟子と一緒に回りだす。

気分上々。くるくる回転・即興ダンス。

あきれた目で子供達が見ていると、男は急にピタリと止まり口に手を当てうずくまった。調子に乗って目を回してしまっただけらしい。

吐き気と戦う彼の姿は美しさなんてどこにもない。ただの汚い中年だった。

「うえ。キモチワルイ」

「お師匠さま、大丈夫かしら」

「これが。大丈夫な風に。見えるの、かい？ リジーン！ 頼む。早くおいしい水をくれよ。机にあるやつ！」

弟子が差し出す前にひつたくると、オボロはペットボトルの水を一気に飲み干した。おそらく床に転がっている職員のものだったが、そんなことは気にしない。

他人のものはアタシのもの。アタシのものはアタシのもの。

彼は兄のジャイアニズム宣言に深く感銘を受けていた。人格形成に問題が出たのも納得である。

「ああ生き返った。……そういうわけです。ボクらもタイプ :  
ヌルを探すのに忙しいし、キミ達のことは見なかったことにしてあげる！」

押し付けがましく偉そうにオボロは胸を張る。それからニヤリと「でも、手を貸すつもりはないけどね」と彼が笑うと「充分だ」と黒ずくめの少年は返した。

それから少年は彼に歩み寄ると、眉を少しへの字に曲げた。なにやら言いづらいけれど言いたいことがあるらしい。

「さつきは変な言いがかりをつけてすまなかつたな。その、オマエらがエーテル財団だと」

「まあいいよ別に。気にしてないからさ」

「あたしもいいわ。人からヘンな風にウワサされるの、なれてるのよね」

ついさつきケチヨンケチヨンにされた相手に謝るなんて、さすがはボンボン。律儀なものだな、とオボロは思った。

少なくともナルシストとは正反対だ。なにせグズマへの怒りは時間が経つごとに増している。

「それにしても、オマエはグズマを止めないのか？ オレがスカル団だったらグズマもルザミーネ——オレの母も止めるがな」

「幹部といえども、グズマくんから見たらボクは『したっば』さ。ボスの命令には従うまでだよ」

「分かっているのか。コスモッグで、奴らがなにをしようとしているのか！ ウルトラホールを開けたら、アローラがどうなるのか！」

息を荒げるグラジオにオボロは首をかしげている。「ああね。コスモッグの資料、さつき勝手に読んだんだけどさ。どうにも信じらんないんだよね」とのんきな声で独り言。

なぜ彼は当事者にもかかわらずこうも他人事なのか。

決まっている。彼は——アローラの民は皆、エーテル財団に全幅の信頼を置いていたからだ。

「ストレスを与えるとコスモッグが別の空間を開く？ それを持続させる装置を作る？ エーテル財団が？ 生態系が崩れちゃうよ。彼らの理念と真逆じゃないか」

「だったら。もしこれが本当の話だとしたらオマエはどうするんだ」

「そうだね。もし本当だったとしても、大したことじゃない。少なくともボクの興味はないね」

「なぜそう言える!」

「失敗するに決まってるからさ! だって “テレポート” すら満足にできないポケモンだ。ルナアーラならともかく、コスモッグにそんな力があるとは思えないね」

オボロは鼻で笑うと、横に置いてあったロズレイティーを飲んだ。ストローでちゅうちゅう吸うそれはおそらく職員の女のもの。おいしい水の主と同じく、彼女は床に転がっている。

遠足気分を味わうオボロ。彼はグラジオにろくに目も向けず、てきとうに部屋を漁っている。

余裕が有り余っているのが一目で分かる有様だ。

怒りからか悲しみからか。「オマエがどう思おうが勝手だが。この部屋のコスモッグについて書かれた資料は全て正しい」とグラジオはいつそう眉間にしわを寄せた。

いや、きつと哀れみだ。文句の数々とは裏腹に彼が親友を大切に思っていたのも、少年はよくよく知っていたからだ。

「以前、エーテルパラダイスで騒ぎがあったのを知っているか? 空間に裂け目が入り、見たこともない白いポケモンが出てきたという」

「あ、それ私とハウがいた時のやつじゃん!」

「懐かしいねー。ウルトラビースト見たときー、びっくりしたなー!」

ズズ。

ストローの音がピタリと止んだ。机の中をさぐるのもナルシストはストップ。

白いポケモンの覚えは大いにあった。デマだなんて、見間違いだなんて、彼は嘘でも言えなかった。今でも同僚や弟子とともに食べた魚

定食の味は思い出せた。

彼の青い目はグラジオにだけ、ただひたすらに向けられている。

「なぜいきなり、ウルトラビーストがエーテルパラダイスに現れたのだと思う？ 単なる偶然？ アローラの地でもない、この人工島に！」

「……さあね」

「ここからはオレの推測にすぎないが。母はきつと、ウルトラビーストを捕らえたいのだと思う。だからヌルも造りあげた。全てはウルトラビーストを自らのコレクションに加えるために、な」

オボロはなにも言えなかった。黙って飲みこんだ彼の言葉を反芻していた。

少年の言っていることはおそらく正しい。否定しようとしても、心の底では認めている自分が確かにいた。

「奴らはおそらくウルトラスペースに行くつもりだ。そこで、ウルトラビーストを捕まえる気なんだろう」

その言葉を聞いた途端、彼の瞳から『色』が抜けていった。開ききった瞳孔はグラジオの姿を映している。

「ウルトラスペースにだって？」とオボロ。何度も何度も噛み砕くように、ウルトラスペースに？ と呟いている。

顔に笑みはない。取り繕うための仮面はすでに剥がれていた。

「当たり前だが、あそこが一番ウルトラビーストがいるだろうからな。まあいい。ミヅキ！ ハウ！ 早くコスモッグの元へ」

「待って。待ってよ」

「お師匠さま、あたし達にはかんけないわよ。気にすることないわ。ヌルを見つけて帰りましょう」とリジーが言った。

だがオボロは弟子の言葉を聞きもしない。髪を二つに結び直すと、大きく息をつく。ズボンにしがみつく弟子を振り払い、それからグラジオの目を真摯にじっと見た。

「前言撤回だ。ボクも手伝う」

「えっオボロさんがですか!？」

「スカル団なのにさー。いいのー?」

「簡単な話さ。小さな女の子をいじめるのは性に合わないと思ってね。それにお姫様ヒロインを助けるヒーローが多いに越したことはない。そうだろ?」

オボロはいつものものように茶化して少年少女に笑いかけた。

だがいつもとは少し違う。上っ面だということが誰から見ても明らかなのだ。

いつも明るくて、いつもテンションが高くて、いつも嘘ばかり。

嘘くさいほど人間くさい。そんな彼が、子供達の前で初めて見せた人間くささ。

「急ごう。ウルトラホールが開く前に、早く!」

止めようとする弟子を引きずり走るナルシスト。そんな彼らを少年少女は追いかける。

「フツ。そう来なくてはな。きつとオマエはそう言うど、オレは思っていた」

グラジオは嬉しそうに呟いた。誰のための救出劇か分からないと、心から嬉しそうに。

よそから来た少年の孤独を埋め合うものはヌルだった。そしてその孤独はまだ埋まりきっていない。

同じくよそから来た青年の孤独を埋め合うものは、仲間であり弟子

であり、同じ幹部であり、親友だった。

そして今や、彼の孤独は埋まりつつある。

少年はそのことにも気がついていた。同じよそ者としての勘だった。

世の人は言った。

忘却とは神からの贈り物である。

誰であつても、客人まれびとであつたとしても変わらない。信じる神が違つたとしても変わらない。

それはある意味ナルシストにはとても残酷なことかもしれない。た。た。



## 第十九話【トリプルバトル】

フラッシュユ!

あちこちから照らされる明かりは目に毒だ。白くて単色で光量も強くて、ムードもへったくれもありやしない。

当てられるなら青い光がいいと思うし、なんならスポットライトはビカビカ光る下品なものじゃないほうがいい。淡くてふんわりと、情感のこもった趣深いものもいい。

はつきり言って不躰だ。ボクは刑務所から逃げる囚人なんかじゃあない。

そうオボロはげんなりしながら目の前の男をじつと見た。

他の職員と違ってさすがは支部長。多少なりともオシヤレの心得はあるらしい。

下卑た面をした中年だが、白を基調とした服に色づく緑は彼をようやく引き立てていた。

オボロは彼があと20歳若ければスカル団にスカウトしたのになあと常々考えていた。彼とは趣味が合いそうだし、偏屈で変わり者な彼には、きつとエーテル財団よりスカル団の方が性に合っているに違いない。

類は友を呼ぶ。オボロは奇人変人の類が好きだった。

そんな不本意極まりない評価をされているとはつゆ知らず。カツン、カツンとヒールの音を響かせて、男は少年少女と大人一人に歩み寄った。

もちろん有象無象は彼の眼中にない。男が見つめているのはただ一人!

「フッフッフツ。私のことを忘れられては困るのですよ。坊っちゃんまー!」

と言ってするのはわるいかお。エレベーターから現れた一行を上手くはめることができてご満悦らしい。

彼が考えているのはカネのこと。

グラジオが睨みつけようが今回の特別ボーナスとしか思わない。むしろボーナスだと思えばこそ、散々尻拭いをしてきたクソ生意気な上司の息子でさえも、手持ちのごとく頬ずりしたくなるくらいには愛おしい。

そう結論づけると、ザオボーはグラジオを見てにんまり。それから彼がしたのは研究資金の計算だ。

カネの亡者極まれり。それがザオボー。世界が誇るエーテル財団の支部長だ。

「あのさあ！ ボク達のことでも忘れないでほしいなあ！」

とオボロ。エンターテイナーたる彼的にはすっかり忘れさられていたのが不満らしい。

彼がヤジを飛ばすと、さも今気がついたかのように「ああ。スカル団のみなさんもお揃いだったんですか」とザオボー。いかにも興味なさげである。

そりやそうだ。誰も見るからに面倒臭いナルシストなんて、わざわざ相手にしたがる奴はいない。

「やはり薄汚いドブネズミと手を組むべきではありませんでしたね。会長もなんでまた……」

ザオボーはオボロのことが苦手だった。

ロジカルとはかけ離れた思考回路。知性のかけらもなく、言うことも聞かない自由人。

徒党を組んでいるから付き合いはするものの、はつきり言って理解できない人種である。

人種というか種族から違う気がした。ポケモンの気持ちの方が

よっぽど分かりやすいというものだ。

「だいたい、なんで貴方そちら側についているのですか」

「そんな些細なことは置いておこうよ。今くらいはね！」

「それ、いつも言ってますん？」

暖簾に腕押し。ぬかに釘。

ザオボーはグラジオの方へ向き直った。精神衛生上よろしくないものは蓋をするに限る。

今だって、ナルシストは手を振りながらあふれんばかりの笑みを浮かべている。腹が立つほどに！

アローラに来てからのザオボーは上司とスカル団の相手に手を焼いていた。

話を通じない無茶振り上司に、これまた話を通じないDQN集団。

その悩みのタネがたまーにダブルブッキングする時がある。もちろん両者の組み合わせは最悪だ。

―に―をかけたら＋になるはずだが、それはあくまで机上の空論。悲しいかな、現実是非情である。

彼の不運はとどまることを知らない。

ザオボーは自分の生え際がジワリと後退したような気がした。ストレスで。

彼にとってさらに不幸なことに、単なる気のせいというわけでもなかった。

## 第十九話【トリプルバトル】

時を同じくして子供達。オボロとザオボーの掛け合いについていけない少年少女は作戦会議を開いていた。彼ら四人はヒマだったのだ。

巨大組織の幹部達の押し問答をしり目に「にしてもさあ」とひそひそ声でミツキ。

「どうしようかなあ。私たち、前後左右どころか四方八方囲まれちやつてるし」

ぐるりとあたりを見回すと、少し嫌そうな声で呟く少女。

とはいええ、もちろん少女が浮かべるのはあくまで笑顔。あいも変わらず全く状況にそぐわない、不気味なほどまでに満面の笑みである。

「フツ。決まっているさ」

「お！ さすがグラジオ。なにか秘策でも!？」

「ひとり残らず叩きのめせばいいだけだ!」

「よしきたー。おれもさー、やっちゃうよー!」

——負けられない勝負は楽しくないとかなんとか言っちゃつてさ！  
明らかライバルとの共闘を楽しんでるじゃんかあ！

「ううう。私の友達はみんな脳筋だった」と肩を落とすミツキ。涙目な彼女は彼らを睨みつけているように見えなくもなかった。依然として口角は上がっていたが。

盛り上がる少年二人に落ち込む少女。そんな彼らを尻目にやれやれと首を振るのはナルシストの弟子、リジーだった。

『『ヒコーリツ』の極みだわ。あたしだったらしないわね』

「非効率、だな。そんな発音ではない」

「……お師匠さまもきつとそう言うわよ！ ね、そうよね。お師匠さまあー!」

リジーは師匠に向かって叫んだが、当のオボロは素知らぬ顔だ。興味のあること以外は全てシャットアウト。自らの時間を有効活

用し、ストレスを一切抱えないのがオボロ流の美容法だった。まさに自己中の極みと言えるかもしれない。

「え。なんだい？ キミの師匠はね、支部長くと楽しく優雅にお喋りしてるんだ。邪魔しないでくれないかな」

「私は一向に構いませんがねえ」

ザオボーは大きいため息をついた。

この宇宙人オボロと話さなくて済むならば、まだ良識がありそうなその弟子が茶々を入れるのも大歓迎。時間稼ぎにもなり、一石二ポツポツというものだ。

しかし、そうは上手くいかないのもこの世の常。

オボロが嫌味を気に留めるわけもなく、ザオボーの嫌そうな顔にも負けず「気を遣わなくても結構さー！」といっそう饒舌に捲し立てている。

「フツ。アイツにはまったく相手にされていないようだがな」

「……とにかく、非効率なのー！」

「ああ。覚えたのか、非効率」

「うるさいー！」

「小さい女の子の揚げ足取るのやめなよグラジオ……」

「大人気ないよー」

グラジオはフンと鼻を鳴らした。どうやら以前この少女にフラフラダンスを当てられたフラフラダンスを当てられたしてやられたことに思うところがあつたらしい。

「〴〵ちようおんぱ〴〵 とか 〴〵ねむりごな〴〵 をトレーナーに当ててみたらどう？ 非常事態だし、多少のルール違反も大丈夫だよ。リーリエのためだしね」

と物騒な提案をするミヅキ。それに「おれもいい案だと思うー」と

ハウは乗った。

スポーツマンシップのかけらも無い発想である。彼らは少しスカ  
ル団の二人に毒されていた。

「……オレが言うのもなんだが、ここはあのエーテルパラダイス。  
この島で保護しているのは野生のポケモンだ。暴れたり、脱走するか  
もしれないだろ？ だからそういう手をやつらはよく使う」

「うーん。えつとさー、よくわかんないけどー」

「蛇の道は蛇。熟知しているが故にその手の対策も知り尽くしてい  
る、ということだ」

「てことは、やっぱ正面突破しかないのかあ」

ミヅキは深く息を吐くとボールに手を伸ばし、繰り出したのはガエ  
ガオン！

唸り声をあげていかくする大きな獣。それを見て、ナルシストの関  
心は若者たちの方へようやく向いたようだった。

「まさかこの人数相手バカ正直に戦う気かい？ わざわざ無意味な  
勝負をしてやる義務はこっちにないよ」

オボロは呆れた目で弟子たちを見た。

ちなみにオボロの発言はすでに弟子が指摘している内容なのだが、  
それを彼が知ることはない。自分以外にとことん興味が湧かないの  
が彼がナルシスト足る所以なのである。

「ミヅキ、愛すべきボクのポケモンがこれから出す技に炎をぶつけ  
てくれないかい？ それもデツカい、特別製のを！」

そうやって彼はボールに手をかけた。

「カモン！ マイ・スウィーティー、ミロカロス！」

空中に投げられた紅白の球は華麗に弧を描く。眩いエフェクトと共に現れたのは世界で一番美しいポケモンだ。

「さあ、うずしお」 を撃つラグジュアライナキミの肢体を見せつけるんだ！」

ミロカロスが一声鳴くと大きな渦が巻き起こる。轟々と音を響かせる巨大な奔流を、彼女はミツキの方に向かって投げつけた！

「ううう。これ、ぶつければいいのかな。意味あるのかなあ。とりあえず、やってみるしかないか！ ガエガオン、あの渦に向かって「だいもんじ」！」

室内を埋め尽くすほど大きな渦。それを飲み込むほどに、大きな大きな炎の塊をガエガオンは放ってみせた。

瞬間、大量の蒸気が立ち込めた。もくもくと立ち昇る煙。さながら火事の如く。

ジリリリリリリリリリ！

警報音が鳴り響き、降ってきたのは大量の水。あまごい顔負けの土砂降りに地面は全て濡れ伏した。スプリンクラーだ！

「今だミロカロス、れいとうビーム」！」

白い光はザオボーたち——ではなく彼らが立つ地に放たれた。瞬時に凍りつき、身動きが取れなくなる職員たちを見て思わずオボロは喜色满面。どうやら目論見どおり上手くいったらしい。

「分かる？ キミ達とボクらの格の違いってやつがさ！」

「オボロさん結構上げつないことしますね……」  
「後でちゃんとこおりなおしでもかけとけば治るよ」

とオボロは興味なさげに言った。

彼にとつては自らの美しい作戦こそが大切で、知らない他人の怪我などはどうでも良かった。

「そんなに心配なら、彼らに “だいもんじ” でもお見舞いしてあげるといい。せつかくの氷が溶けて動き出しちゃうけどね」

そう言つてオボロは髪を掻き上げながらミロカロスをボールに戻すと、扉の方を指差した。

「さ、行こうか」

「思いつきり閉まつてるけどさー、だいじょうぶー？」

「物は試しさー」

彼はアズマオウをボールから出して指を鳴らした。

少しの時間力を貯めて彼女が放った技は “メガホーン” ！

鋭く巨大なツノをこれまた大きな扉にぶつけるとけたたましい金属音が鳴り響く。

「ううん頑丈だ。少し凹んだくらいじゃないか」

「お師匠さまアズマオウを出して大丈夫なの？」

「えっなんで？」

「だってアズマオウはその、サカナだもの」

「ああ。ずっと出してたらよくないけどね。この子はちよつとくらいなら大丈夫だよ！ そんなにヤワな育て方はしてないからね。芯の強さを兼ね備えてこそその美しさなのさー」

と自慢げにオボロは言った。調子を良くしたのか、それからアズマ



オウの育成について延々とウンチクを垂れている。

やれ陸地での魅せるバトルの秘訣だの、やれポロツクの与え方だの、コーディネーター……それも彼の故郷にいる者たち以外にとっては呪文に等しい暗号だ。

その間、律儀にアズマオウは彼の指示に従い “メガホン” を何度も扉に放っていた。その数はぴったり十回。しかし、多少は凹んだものの扉が貫通するにはまだまだ程遠い。

——困ったな。これじゃトドゼルガの “はかいこうせん” でも歯が立たないよ。

オボロがウンウン唸っていると、ふと白い物が彼の視界を掠めた。ザオボーだ！

とっしんしてきたザオボーをすんでのところで避けると、今日は厄日だよ、とオボロは零した。

グズマ。グラジオ。そしてザオボー。同じ日に何度も人から殴りかかれるなんて、なんとという運の悪さだろう。

「このエーテル財団幹部たるザオボーが！ あんなので終わるわけがないでしょうが！」

オボロのききかいひにより派手にすっ転んだザオボーは腰を押さえながら叫んでいる。

よろよろと立ち上がる彼の足にはもうブーツはなかった。どうやら一矢報いるために地面ごと凍結した衣服を脱ぎ捨てたらしい。

「ザオボーおじさんもよくやるわね。こし、いたくなったりしないのかしら」

「お子さまと比べたらアレですがね！ 私はまだそんなに年老いてはいないのですよー！」

ザオボーは酷く憤慨すると、やはり蛙の子は蛙だと結論付けた。まだ良識がありそうだななんてとんでもない。宇宙人オボロの弟子は宇宙人と同じく碌でもない。

ザオボーは自らのことをイケてるメンズだと思っていた。

インナーやサングラスでライトグリーンの差し色を作りメリハリを！ 大きな襟がはためく特注の制服は小顔効果もバッチリだ。

若くしてキャリアを積み、支部長にまで成り上がった彼は仕事も容姿もまだまだ現役バリバリだ。少なくとも自分ではそう考えていた。そう、若い頃と比べて少しばかり額が広くなっただけで。

「ザオボー。オレを母上の元へ連れていけ」

「残念ながらそれは無理な話でございます。なんびとたりとも入れるなどのお達しですのでね。あの方がおっしゃることは、ここでは絶対正義なのです。分かるでしょう？ 坊っちゃんともあろうお人なら」

ザオボーは一息つくともったいぶってポケットから何かを取り出した。

「ですからこの鍵は、エーテル財団最高幹部たるザオボーが預からせていただきますよ！ ビツケの奴に泣きついてもムダです。合鍵を持っているのは私だけですのでね！」

鍵を見せつけながら高らかに笑うザオボーに、思わずグラジオは歯噛みした。

多勢に無勢。コートを羽織っていたザオボーお偉いさんとは違い、平職員がズボンごと凍りついて身動きが取れない今、ザオボーから鍵を奪うことは容易だろう。

それでも彼はエーテル財団の支部長だ。野生のポケモンを日々相手にするほとんどの財団職員のバトルの実力は折り紙つき。いわんや最高幹部をや！

時間は刻々と過ぎていく。少年に無駄な時間を過ごす暇は一秒たりともありやしないのだ。

人の不幸は蜜の味。ザオボーは大層嬉しそうに笑うと鍵を再度ポケットに仕舞おうとして——失敗した。

どすん！

大きな音が響いてザオボーは地面に倒れ込んだ。

彼の上に乗っているのは同じく財団職員のビツケだった。体格でザオボーを勝る彼女は大きな胸で押さえ込むと、鍵を奪ってグラジオへ！

「私はトレーナーではないのでポケモンバトルはできませんが、このくらいならお手伝いさせていただきます！ 坊っちゃんま！」

「ビ、ビツケ。アナタという人は、自分がなにをやっているのかわかっているのですかあああ!？」

ザオボーは怒り心頭だ。

それもそのはず。スカル団野郎とその弟子の連中だけならともかく、可愛がっていた部下までもが命令違反をする始末。お気に入りの制服は氷付けにされ、極寒の中着ている服はインナーのみ。おまけに自分より体重がある部下から押し潰されるとききた。

考えうる限り最悪の状況だ。自分はただ平和に研究をしたいだけなのに！

「ビツケ、助かったぞ！」

扉を開けたグラジオは一目散に外へ駆け出した。ハウもミツキもそれに続いて、こうそくいどう！

その様子をザオボーが黙って見ているわけもない。部下に足蹴にされながらも手元のボールを起動させると、即座にポケモンたちへ指示をする。

「お前たち、早く追いかけるのです！」

「ボク達を忘れちゃ困るよね、リジー！」

「ガツテン承知なんだから！」

ポケモンたちとの鬼ごっこなら、ナマコブシ投げのプロにお任せあれ！

リジーは空高くボールを投げると、現れたのはげに恐ろしき悪霊だ。空から舞い降りたゲンガーはケタケタと笑いながら　”くろいまなざし”　でザオボーたちを見つめている。

「これでキミ達は逃げられない。だよねえ」

オボロはこれ見よがしにわるいかおをした。それからグラジオの方を向いて「先に行ってなよ。あと貸しひとつだからね。これ」と恩を売るのも忘れない。

「すまないオボロ」

「見返りはタイプ　：　ヌルでいいよ。ここにいるもう一匹のさ」

と少し茶化して言うナルシスト。それから小さな声で男は少年に心からのエールを送る。

「頑張つてグズマくん達を止めてくれよ。キミのボスでもあるんだから」

グラジオは笑いながら頷くと、屋敷の方へ駆けて行った。

これにて若者たちとの心あふれる交流は一旦終わり。後に残されたのは汚い大人たちによる総決算だ。

「行っちゃったね、ボンボンくん」

「ぐぐぐぐぐつ……！　こうなったらアナタだけでもふん縛って、

目に物見せてやりますよ！」

「参ったなあ。こう見えて、ボクも結構急いでるんだけどね」

ザオボーは力づくでビツケを押し退けると、ギロリとオボロを睨みつけた。彼の手持ちのハギギシリも今にも飛びかかりそうな顔をしている。どうやら彼もオボロと同じく手持ちにヤワな育て方はしていないらしい。

彼のスリーパーは振り子を振りながらじつと師弟を見定めており、状況を知ってか知らでかヤドランも間抜けな顔をしながらこちらを見ている。

「この私、エーテルパラダイス最後の砦！ ザオボーが！ アナタ方を完膚なきまでに！ ぶっ潰して差し上げましょう！」

ザオボーが叫ぶと、それに呼応して三匹のポケモンは思い思いになり声をあげた。

室内に反響する鳴き声は彼らのレベルの高さを知らしめている。臨戦態勢はバツチリというわけだ。

「トリプルバトルか。面白い」

「お師匠さまはやったことあるの？」

「まさか！ コンテストはダブルバトルが基本だし」

もちろん、これは彼の故郷での場合である。

「けどね。コンビネーションでボクに挑むなんてのは超絶怒濤のバカしかない」

オボロはやれやれと首を振ると「リジー、楽しい遊びをしよう」と弟子に向かって手を伸ばした。

「この美しくない男を完膚なきまでにブツ壊す！ スカル団の名にかけて！」

リジーがおずおずと手を差し出すとオボロは少女の手を握った。それから何かを無理やり握り込ませると、「危ないからさ。キミたちは後ろに下がってるんだよ」と満足そうに微笑む男。

リジーがこっそり手のひらを開けると、クシヤクシヤの紙が中にはあった。そこには走り書きで『?←??』と書かれている。

正攻法を好むグズマやプルメリが例外なのだ。

スカした奴らが集まるスカル団が、スカした戦法を使うのは当たり前。緊急時ならなおさらだ。きっとこの指示もそういう意味で。

つまりはこの男、この場で真剣勝負をする気などさらさらないのだ。

顔をにやけさせる少女を見て、意図が伝わったようだと分かりオボロはにつこり。アズマオウに加勢すべくボールを二つ取り出してから、何も知らないザオボー相手に声を張り上げてこう言った。

「さあ、この男に見せつけてやろうか。ボクらの美しさってやつを、存分に！」